
遠すぎる距離 ~ 約束の意味 ~

GAN

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

遠すぎる距離 〈約束の意味〉

【Nコード】

N8816D

【作者名】

G A N

【あらすじ】

主人公満春はある事件をキツカケにあまり感情を表に出さない高校生…。昔は明るくて慕われやすい彼女だった。皆そんな彼女から離れて行った中一人だけ満春の側にいる親友マコ…。マコは満春とは正反対の性格。そんなマコが持ってきた一枚のチケットそれは他愛もないあるミュージシャンのライブチケットだった…。彼女はどうしても感情を表に出さなくなつたのか。親友マコが持ってきたライブチケットそれから繰り広げられる純愛ストーリーそして見え隠れする主人公の夢に出てくる幼い男の子と女の子…。どう繋ぎあっていくの

か。

1・見えない自分

ふっと視界が広がった…ここ何処？

昔、何処かで感じたことがあるような気がする

広がったといっても四方からの光が眩しくて目が痛い

幼い男の子と女の子が遊んでいる

そんな夢を最近頻繁に見ては目が覚める

きつと今日もそんな夢なんだろう

すごく楽しい夢それだけはよく覚えている

『今日は何して遊ぶ？…』

明るく元気な声が視界がはつきりしない中間こえた

この声からしてきつと女の子

『おうた！お歌うたおう』

今度は男の子の声が聞こえた

お歌？…？ってことは幼稚園児かな…？

思いだそうとすると頭にもやがかかる

思い出す？…何で、私は何を？

『お歌好きだね…あつ、でももうすぐアンパンマン始まっちゃう

よ…！』

『ほんとほんと！？見よう見よう…！』

『でも…分からない。いつもママが』

リモコンを手に取り、首を落とす女の子

声のトーンはいきなり落ちた

『いいよ…僕がつけてあげる…！』

男の子がいじってる間にテレビはめでたく付いた

そして再び声のトーンは上がる

『どうして…！どうして分かったの？！』

一つ一つの出来事の驚き

テレビのつけ方も分からない幼い頃

当初の目的を忘れてしまっただけで、程両手あげて喜んでしまっ
私にもそんな時期あったのかな

ついそんなこと思ってしまうような情景が映し出される

『やったやった！！すごいよ！！アハハハハッ』

『あれ…でも違うのが写ってるよ。』

感激に浸る女の子をよそにテレビを見る

咄嗟に男の子の向いてる方へと顔を向ける

『僕、知ってる…歌手って言うんだよ』

『か…しゅっ？』

マイクを持ちながら気持ちよさそうに歌ってるブラウン管を通して
言う

『お歌をうたう人…』

「えっ、お歌うたうの！！いいなあ。でも一緒だね」

と、突然女の子はとびつきりの笑顔を見せる

それは今まで見てきたことのない最高の笑顔だった

ん…何か声が聞こえる？

振動と一緒に声が聞こえる

いきなり夢の中で騒音が起きた

「…満春！！」

誰か私のこと呼んでる…

そう感じた瞬間目の前にいる男の子達は私の中から消えた
ガタガタガタガタ…

現実私の身体を揺さぶっている音だと気付いた瞬間

「おいっ！！満春、いつまで寝てんだよ！！」

容赦なくカタカタと椅子は左右に音を立てる

「なあ、授業もう終わってるってば！！」

震動2ぐらいの地震が私の机を襲う

私はうつすらと静かに目を開ける

「授業…ここ何処？」

顔を起き上げたと同時に瞼をこする

「はあ？何寝ぼけてんだよ！！ここは教室・・・あなたは居眠り常習犯、分かった？」

嫌みつたらしく丁寧に言葉を重ねる

「ふああ~~~~うふん…」

全く聞いていなかった

「眠い」

マコの言葉は空に舞い私は一言で返してしまった

ますます呆れ顔になるマコ

「起きて言うことはそれかい…。まったく、あなたのお陰で先公がカンカンになってただけどなあー。起きないから最後らへん諦めてたけど」

マコの声は耳には届いてなかった

それよりもさつきまでの夢が気になる

最近この手の夢をよく見る

いつも同じ女の子と男の子

何かにつけては仲良く私の夢ではしゃぎちらかしてる

「何て言うのか…満春は冷静って言うか冷めてるっていつか普通びっくりしたりとか跳ね起きたりとか」

そう言いながら頭をポリポリと掻く

マコのこっぴつのは慣れた

私は喜怒哀楽が乏しい…それはよく言われること

気が付けば必要最低限の何かが欠けた

自分でも分かる何かが欠け落ちてるって

「…」

「まあ、いいんだけど」

と、そう言ったマコはばつが悪そうな表情を浮かべた
余計だと思ったのかそんなマコもよく目にする

気が落ちたマコの脇で黙っていた別に話すことがなかった…

眠いからじゃない普段からこんな感じだフツと周りを見ると目立つ

周りが騒いでる中自分たちがどれだけ静まり返ってるか…何で私と友達でいるのかわかってつまないだろうに今までマコ以外の人は嫌な顔して去っていったのに

「でも、どうしてそんな大人しいのにもてるんだか…しかもクラスで一番厄介な女を相手にしてまで」

マコはそんなの気にしないらしい私あまりしゃべらないのは知ってる

だけどそれを無理に荒立てたりとかしない

「んで、奈津実なんだけど…あいつまた男にフラれたらしいぜ。

しかも満春！あんな狙いの奴にまた！！」

目の前で指を突き出され僅かにビククリする

厄介女って言えばやっぱり奈津実のことか…

何かしら私に文句をつけてくる

マコが言うには「好きな相手を私が取るから」だって

見に覚えのないことを言われる

「こりゃ、またやっちゃいましたねえ…満春さん」

わざとらしくさん付けをする

「関係ない…」

寝ていたから分らなかったけど今は昼休み

気付いた私は着々とお弁当を広げる作業に取りかかる

「ああ…来ちゃったよ。厚身ちゃん」

言われなくても分かる

この独特の足音は興味がなくても自然に耳に入ってくる

きつと奈津実が通った後の床は泣いてるだろう

「うっさいよ！！あんたはちょっとポツチャリしてるだけじゃん

「！！それに誤解しないで…これは着膨れよ！中身は、んもう…スレンダーなんだから」

モデルポーズを決める

と、隣でお腹を抱えて笑ってる人物がいる

「決まんねえ！…しかもスレンダーって…あんたの場合は胸と尻がなんじゃないの」

笑いを殺しながら言葉を続ける

奈津実の顔が一気に赤くなっていくのが見えた

「きいー！ー！ー！違っわよ！！…お胸さんもお尻さんはお山のようにボーンと」

よほど悔しかつたのかオーバーリアクションで力説する

私は考えることなく2人の言い合いを聞いていた

「気持ち悪い体してるねえ…厚身ちゃん」

と、わざとげんなりとした顔をする

「何でそこだけ真面目のとなってるのよ！！それと奈津実っていうプリチーな名前があるんだからねっ！！分かっててそんなことばかりいってんの知ってたんだからね」

だったらほっとけばいいのに

2人は気付いてるのだろうか

私の机を自分のと言わんばかりに占領しているのを押し合いへし合いだったらどっか他でやってほしい

今日は人一倍うるさい…やっぱり原因は一つか

そう思った瞬間何故か奈津実は私の方へと視線を向けた

「何関係ないみたいいな顔してるのよ！！私があんたに用事あんだからねえ！！」

言い争いごときで息を切らしている奈津実

この万年パワー全開女に悲しみに暮れるということがあるのだろうか

「あんたまた私の愛おしい人を横取りしてくれたわね！！」

思った通りのことを思った通りの言葉で言われる

多少気味が悪い気さえした

「んで、今回は何て言われたんだよ」

私の机を占領していた姿は消えた

そしてマコは一つ前にある自分の席へと腰を落ち着かせる
少し間があつて奈津実の力説ならず熱弁をしだす

「昨日、私：坂下 奈津実は体育館の裏で告白をしました。」

語り始めると奈津実は胸元へ手を当て乙女ポーズを取る

それを冷めた目でマコは見ていた

「私はドキドキしながらその時を心待ちにしていました…。風が
優しく舞う木の葉の中で愛しい人を待ち焦がれていました。チュン
チュンとさえずる小鳥達、私の心をそつと後押ししてくれるそよ風
達は優しく『大丈夫』と囁きかけてくれたのです」

そつと頬に流れる涙を拭う

「そして念願の彼！！！山口太郎君17歳」

いきなりの大声に適当に聞いていたマコは驚いた

奈津実のいつになく真剣な眼差しに動揺をしている様子

鋭く瞳から閃光が放たれていた

そして奈津実の息を吸う音が3人の間に響きわたった

一緒につられて息をしようくらいに

「彼は…来ませんでした」

10秒程時が過ぎていった

何が起こったのか目の前は真っ白になった

やっとの思いで視界が晴れた途端

隣から声を必死で押さえ肩を震わせている奴がいた

言わずと知れてマコになる

「プツ！？…ハハハハハッ！！！？」

とうとう堪えきれずに一気に吹き出してしまった

絶好調の笑いをするマコを隣で何故か黙って聞いている奈津実がいた
横目で見ると死んだかの様に静まり返っていた

時刻は昼過ぎなのに奈津実にはもう太陽さえ昇らないかもしれない
…んなわけないのだけどキャラ的に

「ハハハハッ！！あり得ねえ！？…来ないだなんて！それはそよ
風さんも小鳥さんはお前のことあざけわらってたんだよ」
腹を抱えて笑う

時にはそれでは押さえがきかず机をバンバンと叩いていた

「い、今までの奴は『俺、野獣趣味じゃないから』とか『団子よ
り花が好きだから』とかいっばいいいたけどさっ…それってそれ以前
の話じゃん！！」

笑い泣きすぎて息が出来ず途切れ途切れで話す

あまりの小馬鹿にした言い方に地獄の底から這い上がったようだ
底といつても足が楽々に着くほど浅いのだろうけど

「そんなに笑うなっ！！…今回はふられたけどもう新しい人見
つけたもん！こう森林の中で一羽佇んで水を飲んでる白鳥みたいな
人う」

懲りたかと思いきや瞳にハートマークを宿す

そんな姿を見てマコは呆れていた

「みんなよく知ってる人！！…だけどあんた達には届かぬ人」

きつと白昼の空に思い焦がれる人を浮かべているのだろう

瞳のハートは健在のまま何処か違う場所へと行ってしまった

私は見送りをせずまだ半分残っているお弁当を突っついた

そんな私を見ながらマコも静かに戦地を後にし席へ着く

「本当…何だろうね、あいつ。満春もなんか言ってるやいやよかつ
たのに」

「…別に。」

残りあと僅かな昼休みを惜しむかのように

私より半分も食べてないお弁当を引つかき回しながら言う

「あっ…そういえば言いたいことあったんだ」

顔の前に箸を突き出すと

急に自分の鞆をあさりだした

「明日さっ！放課後空いてるか？…ほらこれ！！ライブのチケット
トなんだけどさかなり急だけど」

目の前にチケットらしきものを差し出す

その時私はご飯を食べ終わってしまう作業へと変わっていた

「行かないかってこと…？」

「そう！その通りい！！物分り早いじゃん」

声は倍になって返ってきた

瞳は期待&真剣な眼差しを向ける

それにビツクリする感じもなく私は

「興味ない…」

いつも通りの返事を返した

だが、そこで引き下がるマコでないことも重々承知

「そんなこと言うなって！…一人じゃ行きづらいんだよ。なっ！

頼む！！」

食べ終わってないのに箸を置き、私をお地蔵様と勘違いしてるのか
顔の前に手を合わせお辞儀をする

「行かなければいいじゃない…」

「何だよ…冷たい奴だなあー。そうだ！！帰りマツクつけるから
さ、な？」

「別に食べたくない」

怒ってるのだろうか私

マコがご機嫌を取ってる様に見えた

気が付けばお弁当が手つかずになっている

そんなに行きたいのかとつい疑問に思ってしまう

だからこんな言葉が出てしまうんだ

「行かないとは言っていないけど…」

そして次の瞬間目の前が真っ暗になって

フツと見るとマコが私に抱きついてる

マコらしい最高の笑顔

見てて分かるけどマコは男っ気があって全然女らしくない

だから物事とかもサバサバしていて今回みたいなことは珍しい
というか…初めて『一人が嫌だ』って言うなんて

「マジ、ありがとっ！！…んで、ライブのことなんだけど彼方」
っというアーティスト知って　る？今、超人気なんだぜ！！」
一瞬にして頭が真っ白になった

「…か、なた…？」

酷く息が詰まった気がした

何かが頭の中が疼いた

「そう！！…彼方！！若干21歳で頂点まで登りつめた今、話題の
ミュージシャン！なんとただ今ニューシングル連続5週第一位！！
これがまだまだ記録更新中なんだよねえ…だからいつもいつも売り
切れだっただけだけどそれがまた昨日友達から譲ってもらってよう！
！」

マコは詰まることなく熱く語っていた

けど、私にはどうでも良かった

息が詰まった瞬間私は何を思ったんだろう

2・歌が好きな女の子

私の頭の上でまた、モヤがかかる

全体的に真っ白で何も感じない

深い深い霧の中に逃げ場を見失っているような様な感覚

また自分の体も濃い霧で見えなくなっていた

この感覚：また

いつもの夢、別に怖くないから冷静に物事をとらえていた

「ママあ…ねえママママ？この人達って歌うたうの大好きな人たちなのお？」

今日は男の子はいない…代わりに女の子の母親と思われる人が姿を現す

「そうなんだあ！やっぱり奏汰くんと一緒なんだ！！…ねえ、ママ？この人達この前も見た…どうしていつも歌ってるの？」

女の子は消えたり現れたりを繰り返していた
まるで瞬間移動をしているかのように

私の視界を遮ってうるちよると…

「お仕事？お仕事でお歌うたえるの！！…すごいすごい！！だつてお歌は人を幸せにする力があるんだよ！！…あたし奏汰君が歌うと嬉しいもん。」

そしてまた消えた…

「あつ！！この人…この前も出た！いつも歌うたえて、テレビであたし達を幸せにしてくれるんだあ」

うつすらと見える女の子は屈託なく笑い飛び跳ねていた
すると、いつも夢で出てくる男の子が姿を現した

「あつ！奏汰君！！」

女の子は迷うことなく男の子の方へと駆け寄った
そして手を取りジャンプしてみせる

「ねえねえ！奏汰君さっきテレビ見てたの！！…それでねそれで

ね考えたんだ！奏汰君、将来 絶対歌手にだよ！！…あたし奏汰君のお歌好きだし、それにテレビに出ると会えないときでも会える…」

フツと見た女の子の顔がかげった

その途端溢れんばかりの涙が男の子の頬を伝った

「うっ、うっ…うわああああー…んっ…！！」

耳が壊れるんじゃないかと思うほどの泣き声が辺りをこだました堰を切りながらしゃべる

「ぼ、僕のおうち…お引越するんだ…。」

視線はいつまでも下を向き、一直線に零れる涙は留まることを知らない

でも、その一言だけで十分理解できる

「えっ…何それ、お引越するの？お引越して遠くに行くこと？嫌だ…そんなのやだ、嫌だ！！やだやだやだあ…」

次から次へと涙が落ちては落ちては

真っ白な空間はなにもなかったかのように涙を吸い込んでいくはち切れんばかりの女の子の表情は悲しさで歪んでいた

「やだ…やだよう！！やだやだ…」

涙は白い空間で無と化す

「いやっやだもん！…いやだあああーっ…！！！」

姿もない少女の声だけが空間をこだました

……………。

「…はっ！！？」

な、何…今の

いつの間にか寝ていたベットから跳ね起きていた

夢の中だけ何故か鮮明に思い出せる

声はすぐそこまで届いていた気がする

だけど、泣き出した女の子が目の前にいるようなそんな錯覚が起きた
私は目が覚めたばかりの瞼を動かさずにいた

瞬きするのを忘れ現実か夢かただ一点を凝視する

しばらくしてベットから腰を上げカーテンへと手をかけた

少し光が漏れているところに手を伸ばし一気に開ける

外はすつかりおはよう体制が整われていた

何の夢だったか思い出せない…

そのせいなのか重くなった頭を軽く振り制服に着替え階段を下りる

「あら、お早う…」

「おはよう」

お母さんと心地いい匂いが私を迎えてくれた

フライパンにはオムレツらしきものが見え隠れする

テーブルにはサラダとヨーグルトが規則正しく置かれていた

だけど私は見送るだけで玄関へと直進した

「満春、ご飯は？」

「いらない」

それだけいうとドアノブを回した

「そう…いつてらっしゃい」

大抵これが日常茶飯事

これ以上の会話があまりない

私の家は気のせいしか冷めてる

例えばさっきの場合お母さんというのはきつとうるさく言うものだ
と思う

だけど我が家はそれをすんなりと受け入れてくれる

私の我が儘や考えを簡単に承知してくれる

別に学校に間に合わない訳じゃないって知ってるのに

さびしいとは思わないけど昔からこんなだったのかと時々思う

3・何気ない日常

硬くなつた身体を左右に動かす

また私は眠りに入っていたらしい

目を開けた向こう側は橙色の世界を映していた

今日の授業最後のチャイムが学校中に響きだす

ボーとした視線を正面に向けていたら前にいるマコが急に振り返る

「うわあああ〜〜っ!? こんな時に限って!」

目先で雄叫びを上げていた

だが、そんなことじゃ私の頭は起きなかった

「…見てくれ、テスト…」

悲しい表情を私に向けながら言う

その姿はちよつとした風で吹き飛んでいきそうな感じ

フツと渡されたテスト用紙に目を移す

「さつき返ってきたテスト…3点」

それだけ言うとマコが砂となって消えてつた様な気がした

「何だよ、3点って…0点の方がまだ恥ずかしくないよ…なんかこの3つて言うのが何故か私的にも空しさを感じるんだよね…しかもしかも!! 聞いてくれよ!?! このおかげで今日補習になっちまったんだよおお!!」

今度は溶けてつたような気がした

この上ないぐらいの落ち込んだ顔をする

肩はしようがないくらい下がっていた

「何で落ち込むの?」

私は思わず聞いてしまう

途端マコは勢いよく顔を上げた

「なっ! お前忘れたのか?!…今日はライブの日だぜ!!…楽しみにしてたのに…今日っ」

テストを握りしめうなだれていた

その声の隙間から聞き慣れた足音が聞こえてきた
やたらとすごい効果音で歩いてくる主

「おーっほほほっつっ!!」

途中からはこれまた聞き慣れた高笑いが耳をつんざく
今日のは増して自信満々の足音をしている

その足はやっぱり私たちへと向けられていた

視線はためらいもなくマコのテスト用紙へと

足音の主、奈津実の顔は紙相手にほくそ笑んでいた

「何その点数!・・・すうあ、すうあ、すうあ」

「何だこいつ!呼吸困難にでもなったのか?!」

と、マコとお互い見合わせていると

奈津実の顔の筋肉が面白くコミカルに動いていた

途端、世にも恐ろしい顔が私たちと対面することになる

「すう、3点ですつてーえ!!!!?」

別にそうでもなかった

言うならばギャグだ

「あははははははっ!!さんてん!!3点3点!!」

思いつきり顔を歪め一番近い机をバンバン叩く

それを見たマコの頬が赤くなっっていく

ほっとけばいいのに…奈津美の思うつぼだ

「そんなに連呼すんじゃねーよ!この体脂肪女!!」

いきりだつて奈津実のところへと向かう

「だつて…さ、3点つて…こんなの犬だつて50点は…取れるよ

…私だつて逆立ちで70点は取れるって絶対!!」

いつもいじめられっぱなしの奈津実

ここぞとばかりに反撃を開始してる

「なのになのに3点つて!!…ぶっはははは!!」

答案を奪い取りバシバシと掌で叩く

マコの手は怒りで震えている

それに気付かずまだ奈津実は笑い転げていた

もう笑いすぎて引きつってる様子

「何だよ…だったらお前点数いくつなんだよ!!」
と、悔し紛れに言う

しかし迷わず持つ手は差し出されていた

「ま、ま、負けた…。95点だなんて」

マコの眼球は今にも飛び出しそう

テスト用紙を掴んだ手は硬直して離さなかった

「ふふっ!!…負けた?負けたと言ったわね?それは違うわ!!…
私のとつてはあなたは対象!!あなたと勝負するぐらいならミニミズ
と勝負した方がまだ私が負ける気がするわっ!!」

用紙を内輪がわりにヒラヒラと仰ぐ

もう大威張りな感じ

奈津実の心はご満悦と見える

その瞳がいきなり私の方へと向けられた

「で、あなたは何点なの?」

と、テスト用紙に視線は向けられる

私まで被害が来るとは

実は自分自身点数は知らない

今まで寝てたから

「私は95点…あなたが100点じゃなきゃ勝ち目はないわね」

奈津実の手が置いてあった用紙をめくる

途端、マコと同じ様な表情をした

そう、豆砲玉をくらったような顔である

そのまま5秒程立ち止まった状態になった

豆鉄砲でもくらったかのように目が点

マコは不思議そうに見つめる

私は気ままに時を待っていた

そして5秒が過ぎると

「く、悔しい!!覚えてらっしゃい!!」

テスト用紙を投げ捨てたかと思うと足早に去っていった

錆れた捨て台詞もついでに

私は何事もなかったかの様に床に落ちたテストを拾い上げると、すぐそばにマコの顔があった

「おい！あの様子じゃお前100点取ったのか！？…」

興味津々の瞳で手元を覗き込む

「違う…」

「えっ？」

同時にマコへとテスト用紙を翻すと、今度はマコの目が点になった

「…98点」

2人の間に私の声が静かに響きわたった

何か言いたそうにテスト用紙に向かって指を指す

「何て微妙且つ嫌がらせ的点数を！！そりゃ奈津実悔しいわなあ…年中寝てるような奴に…。だけど私の仕返しをしてくれてありがと！やっぱお前は私の親友だ！」

身に覚えのないことでマコは必死に頭を下げている

ただ勝手にそっちが争ってただけなのに

目を輝かせながら手を握ってくる

「あのさ…今日、どうするの？」

「一つ気になることがある」

マコは多分奈津実の件で忘れてるだろうから

「へっ？どうすんのって何が??」

やっぱり忘れている

何言ってるのか分からないと言う顔をされる

だから私は単刀直入に言った

「ライブ」

途端に輝く瞳は消え、肩を落とす

まさに天国から地獄に落とされた人

私の手を掴んでいた手は地獄に引き寄せられる様に落ちた

「ああ〜っそんなんだよなあ…ここは一発ふける？いやっ！それはまずい！！補習出なきゃ留年って言ってたもんなあ…うぐう！
！どうしよう…。」

百面相の様にコロコロと顔が変わる

これに関しては妙に真面目なマコ

一人頭を抱えて考えていた

「……………」

私は結論が出るのをひたすら待っていた

一段落着いた様

マコの一人芝居は終わったようだ

「ごめん！！…今回マジやべえーんだ…。親の方にも連絡行くかもしんねーから！！だから辞退する。」

と、必死に頭を冷める

私は何も言わずその様子を見ていたらいきなり顔を上げた

その顔は何か違う真剣そのものだった

「だけど、お前は行けっ！！…何故って勿体無いからだっ。これ

は約束だ！！…必ず！！」

そんなに好きになつて欲しいのか行つて欲しいのか

何か違う感じのも見える

そう私に告げると半泣き状態で教室を出ていった

いつの間にか私以外の生徒は帰つてしまっていた

でも外にはちらほらと生徒が下校する様子が見える

人は夕日に照らされてシルエットになる

情景は黒とオレンジ色で彩られていた

そんな風景を眺めていた

ちらつと窓越しに見えるチケットを見る

無意識にチケットを手に取る

「かなた…」

『彼方』と書いてある文字をなぞる

何だろう…気になる、けど分からない

そんな想いが堂々巡りしている

私は脇にあるバツクを拾い上げ

気付けばチケットを握りしめ教室を後にしていた

4・初めての動悸

だんだんと姿を隠していく街並み

それに逆らうように賑わっていく人並み

目的の場所に近づくにつれ人が多くなっていく

当たり前だ…例えいつもは夜になるにつれ少なくなっていく人並みも今日はきつとお祭り以上に大騒ぎだろう

電車は今、私を降ろし発車していった

深く溜息を吸って一気に吐いた

酷くむせ返ってる

電車が巻き起こしていった風にも心なしが熱気が混じってる気がする

まだ甘い今の時間似つかわしくない人混みはまだまだ勢力を増していく様子

「……………」

当たり前か…コンサートなんだから

見渡せば見たくなくても露店ばかり

同じ格好をしてる人もいっぱい

と思うと一人目立った異色を着込んでる人もいる

そのなか私は場違いなのか通常通りの服装をしていた

本当は来るつもりはなかった

マコがあんな真剣に言ったからなのだろうか

何故か気付けば電車に乗ってたという感じ

会場に入ると来たことない私でも分かるすごい活気

思わずもう始まっているのかと思った

する事がなく私はまっすぐ座席へと向かう

マコがないから話し相手もない

というか、一方的にマコがしゃべるだけだけど

幾度と思うマコはこんな私といて楽しいのかと…

何の反応も示せない私と一緒にいて
どうして友達でいてくれるんだろう

不思議に思わずにいられない

思いにふけつてると思いもよらない奴が近寄ってきた

「な、なんであんだがこんな所いるのよ!!」

いきなりけたたましい声が目の前でこだます

声のする方へと頭を向けると奈津実がいた

私の反応と違い奈津実はずいぶんと驚いた顔をしている

まあ、なんとというか派手な衣装が表情に拍車をかけて

驚いてる顔がこつちからしてみたら恐ろしい顔に見える

「あたたなんで私の彼方君コンサートにいんの!!まさかまた奈津実ちゃんの想い人を取ろうとしてるの!?!」

恒例の勝手なことを言い出す

「それは残念ね…。こればかりは同情するわ!あの艶やかな髪も、潤んだ瞳も…引き締まった身体も全て、す・べ・て!!私のも…何より!!この坂下奈津実18歳全身全霊をかけて私自身貴方のもの!!!!!!」

決まったと言わんばかりのポーズをする

本人は気付いてないだろう

今、この場で何人もファンを敵にしたかということ

奈津実の嫌われる要因である

「ライブ始まる…」

当然のことながら無視

その後見向きもしないでいたらいつの間にか何処かへ行ってしまっていた

私に知ったことではないけど…

辺りを見回すと客席が満席に近いくらい埋まっていた

時刻を見ると5時55分

会場の温度が上昇する

ライブ開始はそろそろのようだ

ビクッ！！さすがの私でも身体が脈を打った

突然の爆発音で客席をヒートアップへと持ち込む

まだ主役が現れてないのにこの歓声

一人が叫ぶとそれはみんなに伝染する

このドーム満杯なのに心は一つになっている

こんなことがあり得るのか

私の頭は真っ白もなっていた

何がこんな熱気を生み出しているのだろうか

彼方と言うミュージシャンだというなら

たった一人の人間のためにここまで一喜一憂する姿

『彼方』そんなミュージシャンをこんなにもたくさんの人を呼んでる

いったいどんな人なんだろうか

「……ッ！！！！？」

爆発音の後暗闇を貫いていた会場のステージがライトアップされる

一瞬にして目がくらんだ

ただ聞こえるのはますます盛り上がるファンの歓声だけ

夢の中に入るときはこんな感じなんだろうか

自分から白い空間へと足を踏みいれるという感覚

結して悪くない気がした

時間が経つにつれ目が慣れてきてる

うつすらと見えはじめるステージ

私のいる席は前から3列目

ここからが一番見えるんだとマコが教えてくれた

慣れない私にとっては眩しいだけ

はつきりと見えるまで時間がかかった

始まって5分、ステージから影が見えた

「！！！！？」

私の瞳に鮮明に映し出された瞬間

ドクンツツ！！？

壊れるほどの動機を覚えた

し…：心臓がはちきれそう！！？バクバク口から出てきそう

何、一体…：何が起きたっていうの！！

痛み能耐えきれずしゃがみ込んだ

あ、頭が痛い…：ギシギシ軋むっ！！割れ…

そのまま倒れ込み気を失ってしまった

5・歌をつたう男の子

「本当にお引越し…しちゃうの?」

もう聞き慣れた声が頭に響いた

今度の夢は姿が見あたらな

「…うん。」

「やっぱりママ…パパのところにお引越しするって」

「……………」

「だから、ごめんね」

声だけでも分かる

いつも見る幼い男の子達の夢だ

「そうなんだ…本当にお引越し…するんだね」

「うん…」

何か寂しげな印象を受ける

「ずっと…ずっとバイバイじゃないよね…いつもせんせえ言ってたよ!!」
『バイバイ明日はまたオハヨーと元気にあいましょう』
つて

「……………」

「あたしだつて分かる明日じゃないけど…またオハヨーって言える…よ、ねえ?」

所々沈黙が走る

男の子は力無い返事をする

「…うん」

「じゃ今!!…じゃ今笑ってなきゃオハヨーできないよね!!…約束!あたし頑張る!!泣かないよっ」

女の子の声は今にも崩れそう

笑っているはずの少女の声は震えていた

「だから笑って?…奏汰くん」

「…うん」

さつきより声が力強くなった

「遊園地また行こうねお化け屋敷怖いって言わないから！！動物園もこの間いなかったタヌキさんにまた会いに行こう？約束した海にも…この間食べたケーキとっても美味しかったね！！ブランコ横取りしてごめんね…それからまた今度会った時お歌聞かせてね…奏汰くんのお歌あたし大好きだから」

女の子の明るい声一色になる

それを聞きながら男の子は声を整える

「歌って欲しいお歌たくさんあるから必ず！！」

「じ、じゃ…僕、行くね！！」

あつ…姿が見えた

何も見えない空間に見える姿

2人共向かい合ってる状態になっていた

元気な声が混ざり合う

そして静かに少女に背を向ける

「この間！！奏汰君が教えてくれた歌もう覚えたよ！！」

一瞬動きが止まったが

少しずつ少しずつ歩き出す

「あ…あたし今度、聞かせてあげる…から！！だから、絶対に」

少年は背を向けた

小さな足で着実に少女から遠ざかっていく

歩く足はかすかに震えていた

「ママに怒られたとき…ひっく！！一緒にごめんなさいしてくれてありがとう！！かくれんぼしてた時一番にあたしを見つけてくれてありがとう…っ。嫌いな人参食べてくれてありがとう」

一歩、二歩、三歩…四歩

その足音が響く鳴り度に女の子の目から雫が落ちる

「それから…それからあゝ！！大好きなお歌聞かせてくれてあり

がとう

それ以上声にならなかった

「…つく、ひつつく…ふえーん！！ありがとなんて言いたくないよお〜奏汰くん」

一雫、二雫、三雫…四雫

そして男の子の耳には遠のいていくすすり泣く音が響いていた
遠くなつていく距離と違い…

男の子の耳ですすり泣く少女の声はどんどん大きくなっていく
切なさと一緒に涙を一生懸命堪える

耐えきれず精一杯の力で振り返る

「僕！！僕…お歌うたう！！」

「…か、奏汰く…ん？」

泣きじゃくつた顔を向ける

だけど少女には涙で霞んで見えなかった

でも少女の大好きな声は霞む視界の中鮮明に聞こえる

「僕たちの大好きなお歌で…僕歌手になる！！望みをかなえよう？僕…頑張つて頑張つて！」

「……つく！」

「頑張るから！！約束する…」

少しずつ少しずつ

遠ざかつていた距離を縮めていく

「だから…泣かないで？…泣かないでよ」

静かに足を速めていく

決して早くはないが懸命に距離を縮めていく

そして幼い手で少女を抱きしめる

今にも不確かな約束でも幼い2人には十分だった

とても確かなものに見える

必死に抱きしめながら言う

「だから…泣かないで！！満春ちゃん…」

えっ……！！

…ここは何処？

真新しい蛍光灯が見える

辺りは全体的に白く彩られていた

ん…？この匂いは、消毒液の匂い？

私はそつと瞼を開いた

「…あ」

ここは…保健室

というか医務室つといった感じかな？

確か私は会場にいたはず

どうしてこんなところに…

あつ、頭が…でも痛みは引いてる

そうか…私、会場で倒れたのか

思い出すと再び頭痛が起きた

あの時ほどの割れる様な痛みはない

言うならば後遺症みたいなもの

誰かが運んでくれたのかな？

フツとうつすらと感じていた消毒液の匂いが鼻につく

額に乗せてあるタオルを取りゆつくりと身体を起こす

「…つた！」

何処からともなく声が聞こえた

声が出た方向へと顔を向けるとますます消毒液が強くなった気がした

怪我をしている男性とそれを手当してる女性…

「それは痛いのは当たり前だわ」

「そんなに怒らなくてもいいんじゃないの…ったくいっつもピリピ

リしてんだから

速瀬さんは…」

速瀬と呼ばれる女性はイライラした表情をみせる

今、男性が言った言葉通り

あの女性は見た目通りのきつい性格をしてるようだし、さつきから容赦なく攻撃的な言動をしている

「怒らないでって…前もそう言ってたでしょ！！貴方は彼方…自覚があるの?!」

今、彼方って言った?

思わず彼方と呼ばれる人を凝視してしまっていた

「今回は人助けだよ…速瀬さんだって見ただろう?目の前で人が倒れたんだぜ…ほっとけるかつつーの」

男の方も負けじと反論していた

「いい!?それは貴方のする仕事じゃないわ!!!…警備員のする仕事よつ…貴方がステージから降りたことよって混乱は招くし彼方は彼方でファンの子にもみくしやにされる始末!!!意味がないじゃないの!!!…より状況を悪化に導いただけ。貴方の場合声と身体と顔は大事な商品なの!!!軽はずみな行動は控えてってあれほど!!!ちよつと…彼方何処行くの!!!」

欠伸をしながら男性がこつちへと向かってきていた

一部始終を聞いていた私はただ見ることしか出来ずにいた
きつとやんちゃであろう男性が私の顔を覗きこむ

6・あなたは…？

目の前がこの男の人一色になった

「君…もう大丈夫なの？」

少し焦った…ここまで顔近づけてくるとは思わなかったからさっきまであの後ろの女性と一緒に口論してたとは思えないくらい優しい口調で私の体調を心配してくれる
って本当にそうなのだろうか？
アップになりすぎて分からない

「何してるのっ！彼方…！！」

顔は見えないが後ろの方から怒鳴り声がする

まあ、当てつけみたいなものだろう…

私を巻き込まないで欲しい

仕方ないという感じで男の人は両手を挙げ振り向く

「はいはい…今度は何？」

面倒くさそうに受け答えをする

その様子は先生に叱られてる問題児みたいな図

「…いい！！彼方…貴方は芸能人なのよ！！もつと節度と自覚をもって行動しなさい！！？」

またこっちも教師みたいな説教を繰り返す

「それはいつも聞いている。それともなあに？…もしかして俺がいかがわしいことしてると思つた訳？やきもちとか？」

ここまで来たら売り言葉に買い言葉つて感じだ

「彼方…！！ふざけないで…！！…そうやって軽く1人のファンに近づかないでちょうだい…！！これは貴方のマナージャーとして言ってるの。いつ何処で噂の波風がたつかなんて分からないのよ」

そんな発言に終止符を打つように低い声が間を割り込む

「ねえ、そうやって言つてんの…ファンの子聞いてんだけど。」
なっ…！！と私に顔を向ける

気のせいか…いや違う

…確実に私、ここにいない方がいいかも知れない
っていうか巻き込まないで欲しい

思い立ったら即行動：私はベットから降りた

「あれ、まだ寝てなくて大丈夫なの？」

「平気です。」

しれっとした表情で振り向く

「私は気にしないから大丈夫です…芸能人である貴方がなんだろうとどう考えてようと…気にせず続けてください。」

それだけ言つと帰るための身支度をする

速瀬という女の人と視線を交わすようにドアへと向かう

気付かないようなお辞儀をすると

「お大事に」

甲高い冷たい言葉が返ってきた

それを無視するかのようにドアノブに手をかける

その時私の後ろ、遠くの方から声がした

「あつ！…ねえ君！！」

さほど遠くない所から聞こえた声はいつの間にか間近にいた
ザワツツ！！

私の身体が何故か震え始める

…えっ、何！

咄嗟のことだからか心臓が灼けるように熱くなった

「これっ…」

呼び止めると同時に肩を掴んだ

ドクンツツ！！

「さ、さわらないでっつ！！」

気付いたときには今までに出したことがないような大声
そして彼の手をはたいていた

さすがに驚いたのか瞳を大きく見開いていた
それに負けないほど私も動揺してる

「はあはあ……」

今日の自分は変だ……何処がおかしい

「あ、すみません……用件は？」

頑張つて自然を装つた

啞然としてたつていた彼を我に返らせる

「えっ、あつ……こ、これ忘れ物」

そう言つと携帯を私に差し出す

見た感じまださっきのショックが抜け切れてないみたいだ

一度あいた瞳孔がまだ閉じてない感じ

当たり前なんだけど……

「あ……りがとうございます。それじゃ」

渡された携帯を受け取ると医務室を後にした

その後ろで女性の声があった

きつと速瀬さんって人だろう

「どうしたのかしら……？あの子。仮にも貴方を拒絶するなんて」

「……。」

「それはともかくとして彼方……！……今後の行動を改めなさい……！」

この怪我といいデビューー当時から付き添っているけど」

「ああ、俺……ライブで疲れてるんだわっ。じゃあ」

速瀬に背を向け歩き出す

それを見つめながら速瀬は心なしか肩を落とした

そして深いため息をもらす

その先はもう私のは分からなかった

正直私もかなり動揺してたから……

早足だったのがしだいにゆっくりとした歩調になった

さっきなんで振り払っちゃったんだろう

別に嫌だった訳じゃない

それは芸能人だからとかじゃなく一人の人間として
そりゃ当然初めてあった人だもの嫌う理由がない
以上にそんな嫌うほど人との接触は深くない
だから振り払いたくて振り払った訳でもない

今日はなんだかおかしい

さっきのこともだけど…あのライブが始まった時
何で私、頭が痛くなっただろう

不意に額に当てる

別に熱があるわけでも頭痛持ちな訳でもなかった
ライブが始まった瞬間頭が割れるようだった

意識が遠くなつてその後は分からない

そつとこめかみに手を当てる

…もう頭は痛くない

心臓もばくばくと暴れたりはしなかった

そう思うとますます不思議に感じられる

気が付くと帰りの電車はすぐそばまで来ていた…

7・前触れ

朝8時30分だんだん教室に生徒が集まっていく
士、日を挟んだ学校というのはいつにも増して賑やか
ほんの2日間友達に会えなかったただけなのに
なにをそんなに話すことがあるのだろうか
理解できない眼差しで窓の外を見つめた
そんな冷めた考えも空しく周りは騒々しくなっていくのだが
中で一際うるさく近寄ってくる人がいた
奈津実かな？

「おいっ！満春！！」

あ、違うか…

血相を変えてマコは私の前に立った

もう息はとぎれとぎれって感じ

「おはよ…」

振り向き際軽く挨拶をする

「ああ、お早う…んで、ライブどうだったよ？！電話入れようか
と思ったんだけどよお…バイトあるは先公やらウチのババアやら…
って！そんなことはどうでもいいんだよ！？」

私が言うのもなんだけど

お早うというのは朝の大事な挨拶なのにそれを簡単に言い捨てる
自分自身に突っ込みをいれる

マコ一人でしどろもどろになっていた

「んでんで！！…ライブどうだった？」

鞆も置かずにもものすごい身を乗り出して私を見る

気のせいが私には興味津々とは違う別の感情がマコには見えた
何か違う必死さがそこには見えた気がした

「おい、勿体ぶんで教えてよ…」

顔に焦りが見え始めた

本当に聞きたいらしい…

別に勿体ぶってる訳じゃない

マコが話し終わってくれないだけだ

「カバン…」

冷静に私は答えた

「あ…ああ、んでどうだったんだ??！」

素直に従うマコ

「別に…」

バランスを崩すマコ

別に話すことなんてなかった

再び乗り出した机からマコが落っこちそうになってた

「たったのそれだけ!!ライブ見にいったって…いくら興味ないからって冷めすぎじゃないか??！」

と、呆れた顔をする

少し間をおいて私は言った

「…倒れた。」

ためらいもせずサラッと言い放った

きつとこの後もこのことを言わなきゃ質問責めだ

面倒だから私が先手を打った

「…は？」

「から、分からない」

呆れてた顔に一気にはてなマークが付く

目を丸くさせていた

「た、倒れたってあれか？」

当然の解釈なのにマコの頭はついていかない

だか動作は倒れた真似をする

私はそんなマコをよそに頷くだけ頷く

「なんでそれを早く言わないんだよ!ばっか?!…大丈夫なのか?!」

マコはこういう奴だ…

いつも私のことを考えてくれる

きつとマコの中から『彼方』という言葉は瞬間消えたのだろう

…多分、私が普段話さない分気を使わせている

別に頭痛持ちや病弱なわけでもない

なのにこうして心配してくれる

私は小さく頷く

「大丈夫なのか…なら良かった。ライブの熱さでやられたのか？」

それ以上は話さなかった…倒れた以上は

話しちゃいけないような気がしたから

いきなり教室全体に響きわたる高笑いが聞こえた

思わずあまりにもけたたましい声に耳を伏せた

だが、当の本人は気付いてないようだ

「ハハハハ！！…見てご覧なさい！このポスター！！」

義理と人情で振り向くと当の本人は立ちつくしていた

言葉通りの自信満々の仁王立ちで

「なっ！！お前それ…！！」

マコの目先には奈津実ではなく手元に釘付けになっていた

「そ、それは！！…先着五百名様限り…しかもドームツアーでし

か売ってない幻の！！前に彼方タオルが千名様で販売されたとき開

始5分で完売！！そして今回は等身大…」

私のは聞こえない独り言を言いながら

奈津実へと歩み寄る

何処で売ってるんだそんなもの

きつとスポンサー関係なく露天で勝手に販売されていたものだろう

なあ

フツと奈津実の手元を見てみるとポスターが握られていた

「なんでお前が持つてんだよ…」

引き寄せられてるかのようにポスターに振れようとした

やっぱり奈津実がそれをさせなかった

「誰が貴方なんかに触らせるもんですか！…彼方は私のものよ。」
「サツとポスターを引っ込める

そして不気味な笑いを浮かべ始めた

「ほほほほっ！！…もつと見なさいっ！！…」

有頂天、そのままの笑みを見せる

「ふふっ…それだけじゃないのよ！！見てごらんなさい!？」

そういうとちよこまかと首だけ動き始める

「ほら見て！！」

「はあ?…見てっつて！！お前が首振ってるだけじゃなーか…」
めんどくさそうに答える

確かその通り…奈津実は首を振ってるだけだった

私たちが呆れてみると発声練習みたいな声か耳をつんざいた

「分かんない人ねえ…いい!?!分かりやすく説明するわよ!!ほ
らっ、右!左!上!下!右斜め!!左斜め!!!右斜め!!!左上
斜め!!!!はあはあっ」

発音の良い奈津実の声は教室中に響きわたった

息絶え絶えなのが玉にきずだけど

だけどそう言う問題ではないマコの顔はそんな顔をしていた

端から見れば目を合わせたくもないただの変人

「お前…何してんだよ」

そう言いたくもなる

そんなマコを後目に話を繰り出す

「本当!!分からない人ね…。彼方君が私のことを離してくれな
いの」

「はあ???!」

いきなり脈略のないことを言葉にする

そう言いながらもポスターの彼方君に首っ丈っつという感じである

「だつて…え…彼方君が私を見つめたまま離してくんないんだも
んほら…右、左…ねえ上からだつて。私のことを…お」

語尾にハートマークをつけた奈津実の顔は気持ち悪いくらいにニヤけていた

確かにポスターとはいえ見つめ合ってる状態になっているが、間髪入れずにマコの怒鳴り声が隣から飛び出した

「阿呆かつつ！！それはカメラ目線だからだ！！…何を言い出すかと思えば」

深くため息をつく

何を言い出すかと緊張していたんだろう

「ふふっ…嫉妬は醜いものよ」

どっかのサスペンスドラマの台詞のような…

「何言ってるんだよ。この前お前新しい奴見つけたって…あっ！ま、ま、まさか…もしかして芸能人って言うんじゃない」

話が終わらないうちに奈津実の顔は再びほころんだ
言うまでもない大正解と言ったところだろう

「おいおいっ！所詮芸能人でなんだぞ！！」

……。

何故か今の矛盾というか違和感を感じた

マコの言う台詞とは思えない

「結構冷めたことをいうんだ…自分だってこの等身大ポスター知ってるほどの追っかけのくせして…」

当然の質問をする奈津実

私は柄にもなくマコ次の言葉が気になっていた

「……………」

ちよつとした沈黙が走った

何故かその質問には聞こえてなかったのか言い返さなかった

「まっ！！そう言いたくなる気持ちも分かるけどあー…うっふふふふ！結果は決まってるようなものだしーい！！どお？満春もこのポスター欲しい？」

自慢げにポスターを私の前に突き出す

「別に…」

正直な答えを口にする

奈津実はその態度が気に入らなかつたのか口をへの字に曲げた
まったくギャグと言つていいほどの怒りの表し方だ

「また、そんな落ち着いて…キーーーーーッッ!!?!?」
もう面倒くさい…去つていった奈津実の姿を目で追わなかつた
目でおえるほどのトロさじゃないけど

ポスターを忘れたのを気付いたのか戻つてきた

けど、私の顔をフツと見たかと思うと自分の席へと帰つていった
一部始終見終わつたマコが口を開く

「つたく、爆弾女だなあ」

独り言のように言いながら体勢を立て直す

「ねえ、マコ…」

自分でも珍しい…話を切りだした

それに少々マコも驚いた顔をする

気にはなつていた前から

「マコって芸能界に興味あつた？」

さっきの言葉がどうにも気になつて仕方ない

自分でも信じられないくらい

「あ?何で…」

不思議そうに私の顔を見る

「空手とか柔道とかスポーツ関係には興味あつた気するけど」

「…今まで話してなかつただけだよ」

言い終わらないうちにマコの答えが返つてきた

「……………」

キーンコーンカーンコーン

間を遮るように一時間目のチャイムが鳴る

先生がドアを開け教室へと入ってきた

中途半端な会話で終了しマコは黒板の方へと身体を向けた

いつも先生が来ても叱られるまで前を向かないマコが

まるで私を避けるかのように規律正しく先生に従う

いつになくマコが分からなくなった

8・誰も知らない再会

多分足が随分疲れてる

これで何件目なんだろう…。

溜息は出てこない…だって出したってこの流れは止められない

「おっ！！ちょっと待ってくれよ。なあ？この服良いんじゃないの？」

まだ太陽が真上にあるこの時間

昼間だからみんな学校人並みは緩やかだと思つたら

今日は紛れもない日曜日である

顔にこそ出さないけど私は人混みが嫌い

ただど何故かマコはつまんだろうに私を連れて買い物に来てる何が面白いんだろう自分と一緒に来て

「この色といいこのデザイン！！やばいマジで私好みじゃん」

「……………」

端から見たらガラスにへばりついてる様な形になっている

分かりやすい欲しがり方だ

そしてこうなるとマコはうるさくなる

「これマジ欲しい！惚れた！！値段は…1万円！！？とんで2千円だよ。キーーーーッ！！何でこんなに高いんだよ！！あり得ねえって」

マコは本当にガラスにへばりつき始めた

もうここまでくれば奈津実化イコール誰にも止められない

周りで見てる人たちの事なんてお構いなし

「うしっ！！こうなつたら店員に直接交渉だ！！それで聞かなかつたら暴動だ！！」

怠慢と言う言葉で周りに歩いてる人たちが振り返つた

止まらないだろうな…こうなると

あまり重大なことにとらえていない私は呑気に壁に背中を預ける

様子をうかがうと鼻息が地面に届く位の迫力でお店へと入っていく
早くて10分…店員が恐れをなして値下げする場合
遅くて2時間…店長を呼んでお互い融通がきかなくなり暴動を起す場合

…今のところお店の方は静かだ…

視線だけで様子をうかがっているのと気のせいかわ
違う方向から悲鳴らしき絶叫が聞こえてくる

この雑踏の中一つや二つ絶叫あっても不思議じゃないか
昼下がりの開放的な時間だから

「きゃー！ー！ー！ー！ー！ー！」

「ちよつと待って！！マジそれ本当！！！！？何処に？？？」

目の前で3人組女の子が通り過ぎる
きつとこれが原因だったのだろう

時計を見てもう15分

答えは…『暴動』だな

店内を覗き込もう

と思った矢先に遠くの方から色んな絶叫が飛び交う

一緒に地響きもしている気がする

どうやら原因はこれだけじゃないらしい

目の前を通り過ぎた女の子達は声のする方へと走っていく

「えっ！！…まさか本当に！？」

「あつ、ち、ちよつと待ってよ！！私も見たあー！！！」

遠くから聞こえる声いわゆる黄色い声で駆けていった

えっ…会話の節々に聞こえる『カナタ』という言葉

「ああ…今日は散々だなあー」

考えに更けていると今度は怪しい姿の男の人が目に入った

いかにも変質者と言わんばかりの全身黒ずくめ

黒い帽子を深くかぶりサングラスをかけ長めのコートを着ていた

「事務所の帰りにこんな…」

何か独り言をしゃべっていた

聞こえてこないから分からないけど

これからのことを私は一部始終まるで観客のように見ていた
だってマコを待ってなきゃいけない長くなるだろうけど

背中を預けた壁に頭も預ける

「ねえ！こつちの方に行つたつて噂だけど」

声が出た方へと視線を向けると女子高生が叫んでる

あまりの大きな声にビックリしたのだが男は気付いてないらしい
まだ怪しい独り言をつぶやいている

「まつたくこれからどうやって…」

「噂によればさ、黒いサングラスに帽子と長めのコート」

さつきより2、3人増えこつちへと向かってきていた

「ちくしょう…まいったなあ」

自分の世界に入っている黒ずくめ男

私の前をちよつと過ぎたところで再び耳をつんざくような叫び声が
聞こえる

「きゃー！ー！ー！ー！つ！！見つけた彼方いたあ！！」

私の目の前で黒ずくめの男は声にビクツと過剰に反応した

と、同時に歩行中の人がザワザワと騒ぎ立て始める

一種のお祭り騒ぎへと一変

なんの騒ぎだと次々とお店から覗かせる客

気付くと私から見えて左の方から地響きが聞こえ始めていた

まばたきをするたびにどんどん増えていく人の固まり

それは群をなして徐々に徐々に加速していた

そして私の目の前で何故か慌てふためく男

一つのコメディを見ているみたいだ

「うわっ…やべっ…！！」

そう言うや否や思いつきり私の方に突進してきた

「うわっっ！！！！」

「えっ ……………!!」
ドゥシューシュー……ン!!

周り一体に派手な音が流れる

傍観者としてみていた私に避ける余裕はなかった

一瞬頭が真っ白な状態におちいった

見事に2人とも地面に激突

幸いバツクが命を守ってくれたらしい

というか何が起きたのかまったく分からない状態になっていた

目に浮かぶ星のマークは消え去り

フツと我に返ると黒ずくめの男は私に覆い被さっている

「……たたたたあ」

男も我に返ったのか身体を動かし始めた

男が動いたたびに埃が鼻につく

きつと今の一件で埃が舞っているのだろう

「……いつてえ……。今度は一体なんなんだあ？」

動かれると……

「ゴホツゴホツ!!ゴホツゴホツ!!」

気付いていない男の下

我慢できないほどの砂埃を吸ってむせていた

「ケホッ…ゴホ!!ゴホゴホゴホッ!!」

「……………うわっ!!?ご、ごめん!!」

やっと状況を把握できたらしく私は解放された

息を落ち着かせてゆっくりと身体を起こす

と、すぐそこに帽子とサングラスを外したさっきの男が顔を覗いてきた

彼方……この人だ。

ちらほら聞こえてきていた『カナタ』って言葉やっぱり

「ほ、本当マジゴメン!!」

こんなとこいるわけないって思ったけど

「…いえ」

その場で土下座するんじゃないかという勢いで頭を下げる

「本当に大丈夫です…」

「大丈夫って…所々擦りむいてるし…ってあれ？君…」

何か言いかけた途端また女子高生の声があがる

男はっていうか彼方は早く危険を察知した

「わっ！…こんなことやってる場合じゃ…」

声が聞こえたと同時にまた焦り始めた

「確か、ここら辺から声が聞こえたような…」

不意をつかれ女子高生はすぐ側まで来ていた

男は今までにないくらいの驚きを見せる

「つつつ…！！！！」

…っえ????!何…

どっかに引つ張られたかのような感じがした

「ここかなっ!?あれいないなあ…こっちはいないよ…!」

私にはチラッと女子高生の顔が見えた

しばらく経つと何人かの黄色い声が表通りを横切った

やがてちいさくなり聞こえなくなる

「…行つたか?信じらんねえーよ…こんなとこまで」

独り言が癖なのか一人呟く

なるほど…ああ、やっと飲み込めた

今、この人が私を包み込むように抱えてる

引つ張られるような感覚だったけど

引つ張られたんだ…店と店との空いてる空間に

気付けば知りもしない段ボールの影いる

そしてさっきと一緒にこの人は気付いてないだろう

「はあ…こりゃ命がけ…ってうわっつ…!!?!?」

やっぱり…お約束だ

「ごめん!…つい君も一緒に連れて来ちゃった」
あり得ないくらいのボケ

私から手を離す

ついでに足や手についた土をはたき落としてくれた

「な、なんか本当ごめん…さっきから」

肩身狭いというか心なしか彼が小さく見えた

必死に私に頭を下げている

「いえ…」

それ以外の言葉が見当たらなかった

「……………」

「……………何ですか？」

沈黙を不審に思い顔を上げると不思議そうな顔で考え込んでいた

「ねえ、俺見てなんにも思わないの？」

いきなりな質問を口に出す

「何故？」

私は表情を変えず言い返す

するとまた不思議そうな顔をして見せた

「それじゃ、私はこれで…」

でもそんなこと私には関係ない

そう思い表通りに出ようと足を向けた

「あつ!…ちよつと待つて…」

出ていこうとする私を足止めされた

無理矢理行こうにも彼は腕を掴んでいた

「…何か？」

無理に手を離そうともせず成り行きに任せた

その強引な行動とは裏腹に彼方君は笑みを見せる

「お詫びもかねて…お茶、しない？」

さっきのことがあったばかりなのにこんな事をして良いのか
芸能人でもこんなことをするのだろうか

と、思っながらも私はあっさりとその申し出を忘れてしまった

9・気になる君

何処からどう見ても普通の喫茶店

有名人全員がお洒落な訳じゃないくらい知ってるけど
そのカケラさえも匂わせないこのお店

周りを見渡すと家族づれや友達同士でくる気軽な場所
やっぱりさっきの行動が身にしみてないと見える
見つかるって…こういう場所にいると…

「こういうところが良いでしょ？…堅苦しくなくて」
い私に気を使ってくれているのか

初めライブで見たときはチャラチャラしてる人と思ったら
今度は真剣に謝って礼儀正しい人と思えば

『お茶飲まない？』って…だけど気を使ってくれるし
どれが一体目の前の人なのか訳分らない

「ねえ…」

でも何だかついてきてしまった気持ち的に
だから私はこの誘い断らなかつたのかな…

気付けば私、テーブルに置かれたティーカップを凝視していた
「あのさ…聞いてる？」

下ばかり見てる私を不信に思ったのか顔色をうかがっていた
「え、…何ですか？」

「あつ…珍しいなって思ってた」
目の前の彼は何故か戸惑っていた
戸惑うことって一つしかない

「貴方がテレビに出るほどの有名人なのに…何故、私が平然とし
ているのか。ですよね？」

彼の飲み物と一緒に息を飲む声も聞こえた

「申し訳ないんですけど…興味ないんです。テレビに出てようが
何万人の人が貴方のファンであつても…人気であるう背格好が良く

ても…キヤーキヤーワーワー気分悪い」

何故か今日はよく口がまわる

なんでこんなに聞かれてもないことをしゃべってるんだろう

「君、やっぱ分かってないよ…」

その態度に少し嫌気がさした

この前医務室であつた時私に対する接し方といい

さつきあれだけの目にあつたのに学習しないのかこんな喫茶店に来て

拳句の果てに今はサングラスも帽子も取っている

いい加減で軽い人…そう考えざる得ない

「試しに言つてごらん?…俺のこと」

半笑いで私の顔を見る

馬鹿にしてる…。

帰ろうとすることも出来た…それが出来ない私もやっぱどうかしてる

「女子高生に人気のアーティスト、今メディアが騒ぎ立てる程音

楽界の柱…彼方0型の牡羊座…4月生まれ…そう友達に聞きました」

意味もなくプロフィールまで言ってしまった

「そうだよ…女子高生に人気の!!まあ、騒ぎ立ててればそれく

らいは知ってるよね」

もつと何か言えつていうの?

「分かつてる?!本当に!!」

身を最大限に乗り出したかと思うと急に引つ込む

不愉快なさつきからの態度に

不意に口にした言葉

「あと1つ…知ってます」

「…?」

あと1つ思い出した彼方君のプロフィール

「アーティスト名では『彼方』だけど確か本名は『仲宮 奏汰』

…」

「えっ…」

彼の顔が強ばつたような気がした

さつきとは違う不信な顔

そして堰を切ったかのように口を開く

「ど、どうして…?」

「えっ?」

言われた意味が分からなかった

「どうして、君知ってるの…?」

頭の隅っこが痛んだ

まるでこれから言われる言葉を予測してたかのように

「俺：本名、公にしてない」

ズキッ!?

一瞬にして目の前が真っ白になった

また頭の隅が痛んだ、さつきより痛みが増す

キリキリと頭の中で音がなる

継続的な頭痛が続く

だってマコに教えてもらっ…違う

なんで私知ってるの?

「って…ハハッ!!そんな顔しなくても大丈夫!!…別に知ってるからって何か起きたりする訳じゃないから…ビツクリしただけ」

と、私を安心させる言葉をかけてくれる

けど心の中のざわめきは収まらなかった

むしろ酷くなっていつてる気がする

まるでここにいちやいけなにかのように頭と身体がそわそわしだす

「私これで失礼します…」

一目散に喫茶店の扉へと駆け出す

「あっ!…ちよつと…!!」

呼び止めようとする声は空しく私はお店の扉を開けた

掴もうとした手は静かにテーブルの上へと置かれた

「どうして俺のこと知ってるんだ?…やたら滅多な事じゃなければ知らないはず…」

バツッ!?!?!?

咄嗟に喫茶店を出ていた

「ま、まさか…な」

喫茶店を出た彼方は左右を何度も見渡す前に進んだり後ろを見渡したりついでさつき会った子だ…覚えてるはずがないなのに彼女の顔は鮮明に浮かんでいた歩いたり走ったり止まったり

人並みをかき分け捜す

「ハアハア…」

必死に捜す彼方は

自分でも行動と考えの矛盾を感じていた

「似すぎてるんだよ…」

ちようど人並みをかきわけたところで彼方は目的に向かって走り出した

「待つて!!…!!」

声をかけるのと同時に腕を捕まれた

私は正直にビツクリするしかなかった

「えっ…!!」

私は驚きと一緒に振り返る

「っはあ!!…はあはあ」

そして目の先には彼方君がいた

見たところすごく息切れてる…走ってきたのだろう

「はあはあ…」

息が整うのを何故か私は待っていた

待ってって言われたからとかそんなんじゃないやなくて

言っただけならば自然とただ待っていた

「あの、何ですか？」

整ったのを見計らって声をかける

無事頭痛は治まっていた

「あ、あのさ…君」

「……………」

何故か口ごもっている

言いにくいことなのだろうか…

「君、さっ！…じゃなくて。あ、あのさ…えっと、君の名…まえ」

何が言いたいのか分からない

以外と彼の低い声は聞き取りにくい

口ごもっていると尚更だ

「……………」

「……………。こ、今度！！今度スタジオ来ない？案内、そうそう

案内するよっ！」

いきなり聞き取りやすい声になりちよつと耳に軽いダメージを受けた
さっきの軽いノリに戻っていた

「まあ、少しくらいは俺に興味もって欲しいからねえ！！…だから。そんな怪しいって顔しないでよ…気が向いたらでいいから暇なときでも何でも良いから」

そんな事を言いながら聞いてるこっちは
一種のスカウトをされてる気分になった

「はいっ…これ連絡先！」

何処から取り出したのか自前の紙に書き出す

そして半ば強引に私の手にねじ込む

思考が追いつかないままされるがまま素直にメモを受け取った

「それだけ…ですか？」

「えっ！…あ、ああ。」

やっと自分のしていることが分かったのか一歩足を引いた
きつとここまで来ることだけに必死だったのだろう

「じゃあ…。」

挨拶をすると彼の元から離れた

頭の中はとにかく真っ白

何を考えて良いのか分からなくなっていた

「あつ！！…ちょっと待って」

彼の呼ぶ声は私のところまで届いてなかった
それほど違うことで脳は支配されて余裕がない

何でこんな連絡先を伝えたのか

そのためにあんな必死に走ってきたのかそれもすごい剣幕で
そんなどうでも良いことを伝えたくて

女子高生は喜ぶんだろうけど私にはだたの紙切れにしか見えない
何考えてるんだろ？馬鹿馬鹿しい

興味ないって言ったのに…

俺に興味持つて欲しいからって馬鹿にしてる

別にどうでも良いことじゃない

私には関係ない…普段の自分なら気にしない

さっきからおかしくなってる。そう、彼の名前を言ったときから

このメモにだっていつもの私ならなんの感慨もわかない

そっだよ別に連絡したいわけじゃないし…家に帰ったら捨てる
分かりきったことだった

だけど彼の触れた左手

『ただの紙切れ』を持つ手はまだ震えて止まらなかった

呼び止める手は空しく地面へと下ろされた

「…名前。」

さつきから彼方の頭の中で何度も繰り返されている言葉がある
それは幼い少女の声

何度も彼方の名前を呼んでいる幸せ満ちあふれている声

そして屈託もない笑顔が目の前にあった

『え？ほ、本当ですか！！速瀬さん！本当に僕……！！』
そこにいるのは幼い彼方

『ええ！事実よ！！歌唱力、リズム感を一番に社長はかつてくれたわ！！同期で熱心にレッスン取り組んでいたのは貴方だもの……これだけ早くこの事務所に入っただけのデビューは初めてよ！！社長はその可愛らしい顔でロックを歌いこなすそのギャップを最大の売りにしたらしいのよ』

今よりちよつと若い速瀬も姿を見せる
髪は今より長くストレートを保っているという感じ

『まあ、これから成長していくに過程でスタンスは変わるだろうけど……何よりも若干16歳なのうちの社長も思い切ったことをしてくれたわ』

最近見たこともない笑顔

この時は希にしか見ない笑顔をよく見せていた気がする

『速瀬さん！！僕、いつになるんですか！？』

『予定では2ヶ月後……貴方にソロ活動をしてもらうわ！！そしてそのカバーを今週……。あらもういいない。またかあ』

呆れた顔を見せる

『カリスマ性、歌唱力、リズム感……人を惹き付ける魅力、若干16にして貴方には数えられないくらいあるわ。だけど貴方にとって邪魔なものがとても多すぎるわ……』

それを言い捨てた速瀬

冷たい空気を漂わせていた

だけど彼方の目にはそんな状況知るはずもなかった
勢いよく台風のように事務所を駆け出す

周りにはあるものしか考えてなかった
俺にはあるものしか考えてなかった

『……あつ、もしもし？うん僕だよ僕！でね！！……僕、デビューする事になったんだあ！！』

廊下に響きわたるくらいの大声で話していた

でも、あの時の俺はただただ嬉しくて周りのことはどうでも良かった
とにかくこのことをあの子に伝えたくて
若干16って本当に若干だったなあ…って思う
本当に子供だったなあ…って

視界から昔の彼方は消えいつもの街並みへと戻っていた
彼方のことをジロジロと見ながらも通り過ぎていく人達の姿が視界
に入る

少し時間が経ち彼方は深いため息

「そっだよ…。あの子じゃないそんな訳ないじゃん。全然違うじ
ゃんか…よく見たら顔…性格も、…性格は」
それから彼方は少しの間動けずにいた

10・憧れの彼女

週明けの月曜日：やっぱり教室はそれぞれの話題で盛り上がっていた
2、3人のグループで固まり些細なことで話題の花を咲かせている
ここまでではつきりと表面に出していれば

グループの個性も出てくるものだ…

その中変わらずテンションの上がない私達

細かく言えば『私』なのだが

「んで、結局のとこ1万の服を8千にまけてもらった訳！！まあ、
本当はよ…5千円位にと思ったんだけど言葉でかわされちまったん
だなあ…」

この前のことを淡々としゃべる

その時周りで何が起きてたかも知らずに

「つて聞いているか?!…あ、てか満春、何であの時先に帰っちゃ
ったんだよ」

なんのリアクションもなかった私に質問が下る

「いつ気付いたの？」

逆に簡潔に質問を仕返した

その会話の流れに気にとめることもなくマコは答えを言った

「何時つて…確か5時位」

あれから2時間か…

「あのだ…」

私には気になったことが1つ
それをマコに聞くことにした

「彼方つてどんな人？」

やっぱりあれからあの人の顔が頭から離れなかった

気のせいか…頭の中に彼がいること自然に受け止めている自分がある
この短期間で私の脳は更に調子が悪くなってる

「え…なんでそんなこと聞くんのだ？」

一瞬笑顔が曇った気が…

瞬間だったから思わず見逃してしまう

「ま、まあ…いいけどよ！私もファンだし、こういうこと言うのもなんだけど…彼方の事は私じゃなくて奈津実の方がよく知ってると思う」

やっぱりどこかおかしい

言葉も途切れ途切れでどこかおぼつかない

「まっ、そういうことだなっ！！」

そのまま先生も来てないのに黒板へと身体を向ける

それからマコはH・Rが始まるまで顔を向けることはなかった

以降先生が来るまで話すことはなかった

『あっ…ごめん！今日これから用事があるんだ。悪いけど掃除当番変わってくれないかな？』

『まったく仕様がないなあ！！…今回だけだよ！！』

聞き慣れた声がマコの頭によみがえる

とても明るい声の持ち主

『あ、またあの子だ…。』

休み時間移動中偶然通りかかったクラスから見える

あの時誰だか名前を知らなかったただ

いつも元気で可愛い子とクラス中広まっていた

周りの人を明るくさせる

周りの雰囲気やわらかくしてくれる

そんな噂をいつも耳にしていた

私は隣のクラスなのにだ

隣のクラスの人気者『彼女』を私自身いつしか目で追ってしまっていた

『なあーんて言うと思う！??…ははははっ』

悪戯じみた笑顔を浮かべながら友達とじゃれあっている

屈託なく微笑んで相手に罪悪感を持たせない

どちらかというところは私は背が高いし、男子にも負けない力持ちだし
女っぽくもないし、言葉遣いだって男らしい

私の家は男所帯できてる母親は私がちっちゃいときに死んでるから
父親が兄貴、弟、私を育ててきたことになる

まあ、自分のことはどうでもいいんだ

『彼女』のわたしとは正反対なところに惹かれてるのだろうと思う
あの子のようにになりたい…違う

なれないのは分かっている容姿や雰囲気共に私じゃ無理

気が付けば兄と喧嘩して
言うことを聞かない弟を箒振り回して追いかけているようじゃ…

ただ単に…

自分自身にないものを持つてるあの娘が単純にうらやましい
それでも決まって寂しい顔をするときがあつた

『あ、お母さん?…』

決まってその娘は放課後電話をしていた

もちろん学校の所有物だ

お母さんって…

親となら家に帰れば幾らでも話せるのに…

しかもほぼ毎日のだ

家に掛けてるんじゃない…のか?

そんなに急ぎの用があるのかその時は疑問だった

『ああ…そうか、うん…じゃね。』

ガ、チャン…

ピピイ!!ピピイ!!ピピイ!!

その時は中学生今の子は持っているだろうけど

私もそうだけど『彼女』も携帯なんて持ってなかった

更に音はなり続ける

テレホンカードが持ち主を呼んでるのにも関わらず

満春は手を伸ばさなかった

そのまま消えてしまうんじゃないかというくらい悲しい顔をしていた
鳴っている音に気が付いてないのか

カードを忘れているのにも関わらず電話ボックスを後にする

『あつ、…お、おいっ！！テレカ忘れてれるぞ！！』

『えっ…！！』

駆け寄りテレカを差し出す

私は悪いとは思ったんだけど顔色をうかがう

『あつ！忘れてた…ごめんね、ありがとう』

…一瞬泣いてるかと思っただけ、いつもの笑顔に戻っていた
見ていたこっちは痛々しかった信じらんないくらい泣きたい笑顔

『あ、あのさ…大丈夫か？』

何かあったのか？…なんて聞く勇氣は出なかった
でも思わず声かけずにはいられない

『あ、ゴメン…余計なこと…』

『いいのいいの！！そんな私気分悪い顔してた？』

表情を整えるかのように顔に手を乗せる

『彼女』はそう言っただけで茶化していたがどこか寂しげ

そう言いながらいつもの笑顔に戻った

聞きたくても聞けなかった笑ってる印象が強かっただけに
この質問はどうしても出来なかった

彼女の作った笑顔さえ壊れてしまうような気がしたから

『どうしてさっきあんな悲しい顔してたんだ？』って

それは後…結果知ることになるけど

これが初めて『彼女』満春と話した言葉だった

マコが言うとおりで後で奈津実に聞いてみた

何故か疑いの目を向けられたが…

本人も彼の話がしたかったのだろう

なんだかんだ言って最後は一人で盛り上がってしまった始末

アーティスト『彼方』本名不明

若干16歳でデビューが決まる

主にロックをが中心、最近歌番組にも出始めた

ひととき芸能界引退報道が流れたがそれも原因不明

引退騒動のとき一時活動停止

ただ今ツアー中、来月ニューシングル発売予定

そのシングルも入れて通算18枚

最近海外進出もあるっていう噂があるらしい

声、顔、奈津実がひいき目で見てるのもあるけど

悪いとこないらしい…

でもこの前ライブに行ったときに思った

お客さんが一人の男性に寄せる想い

『彼方』という人物だから一人一人をあんなにも夢中にさせる

それは生半可な気持ちじゃあそこまでにはならない

少なくとも私はそう思った

11・異常な程の執着

今、彼方は雑誌の撮影をしていた

撮影はスムーズに進んでいき和気あいあい間に終了

「はい、お疲れさま彼方…すごく良かったわ!!」

「……ああ」

タオルを手渡し挨拶まがいな言葉を並び立てる

いつも言われなれてる人からの言われなれた言葉

別に嬉しいとも思わない

きつと速瀬さんだつて仕事として言ってる

そして毎度のことながら仕事の話になる

「さて!! シングルは来月に迫ってるから…忙しくなるわよ! あ、この後一つ取材入ってるからボヤボヤしてる暇ないわよ!! 相手の方、年期入ってる先輩なんだから」

嫌に速瀬は張り切って話し出す

仕事の際はこんなテンションなのだ

気にもとめず置いてあつた水をがぶ飲みしていた

「速瀬さん、俺の上着は…?」

「え? ああ…あそこ、椅子のとこよ」

不意に言われ速瀬の話は中断

人知れず彼方は上着が置いてある方に足を向けた

その行動に速瀬の顔が陰る

「また携帯?…最近携帯に目を通すの多くなってきたわね」

上着にたどり着いてないのに先のことが分かってしまったらしい

「別にそんなことないけど…?」

気にする事なく上着をとる

「そう、なら何も言わないけど…いい? 何回も念を押すけどアーティストにゴシップは御法度よ!! 貴方は今、大事な時なんだから、いいえ!! これからも…。一回引退報道出したのにまたこんな仕事

が入ってくるなんてあり得ない事よ！そこをもつと理解しなさい！！だいたい報道だって勝手に生で貴方が軽はずみなこといったから流れてしまつて…少しは自分の立場を気にしなさい！！」

何も言わないと言つた割にはよくしゃべる

そう思いながら速瀬に聞こえない程度の声で反抗する

「別に軽はずみじゃなかつたよ…ただの自暴自棄」

再度念押し of 言葉をはいた

それに少しカチンときたものがあつたのか強い口調で言い返す

「はいはい分かりました！！…携帯見ただけなのにそこまで言われるとは思わなかつたよ…話はそれだけ？」

それだけ言い捨てる速瀬の横を通り過ぎる

2人の間にただならぬ空気が流れた

「待ちなさいっ！！」

彼方の行動を一喝した

それはさっきまで和気あいあいとしていたスタジオを凍らせる

通り過ぎた彼方の元へと歩みよる

冷たく鳴り響くハイヒールと共に

「もう一度言つておくわ…恋愛は禁止よ！！何度も言わせないで

…それにまた前みたいに見放されるに決まつているわ！テレビでお洒落な洋服を着て綺麗な言葉を並び立て眩しい位のライトに照らされて歌つて成功してつて皆、煌びやかな世界へと期待を馳せる」

つらつらと速瀬は話す

「初め一緒に頑張つてきた友人も次々に仕事が飛び込んでくる姿を見ていつしか妬みに変わつていく…励ましてくれる彼女も…初めは応援してくれる。でも、近くにいた相手がいきなり遠くへと。距離ではない…成長という意味で…自分より先へと行つてしまうのが焦りとなつて憎悪を生む。それが幼い頃の話なら尚更。多感な時期確実に上り詰める貴方は彼女にとって疎ましいかった。彼女だけの問題じゃない…。有名になる人気になるっていうのは貴方も仕事の

ために大事なものを捨てなくては手に入らない……」

「……………」
見たこともない速瀬の瞳に黙っていることしかできない彼方
ふつとそんな瞳が現実へと返っていた

「いい！？…だから」

「いいよ、もう分かっているって…飲み物買ってくる」

吐き出した声は心なしか寂しげ

重い足取りでスタジオを後にする

何回その話を聞かされたことだろう

通路に出て2、3歩進んだところで無意識に足を止めた

力無く壁に背中を預ける

「……………」

聞こえないため息をつく

そしてもう一度携帯を取りだし場面を開く

『着信0件』

なんの連絡もない空しい携帯を見続けていた

『何で！何でだよ！！…何で会っちゃいけないんだよ！！』

彼方の脳裏に幼い頃の自分がよみがえる

机の上で強く自分の手を握りしめる彼方

『何でって…分かっているの！？貴方はこれから世界に出るの！！』

それがどんな意味が分かる？これからたくさんの言葉を届けるの！

！たくさんのメディアに『彼方』のことを知ってもらおうの…それが

どれだけ大変なことか分かる？』

『…だけ』

『社長も貴方を認めてるわ…だからこそその期待に応える意味がある！！生半可な努力では応えられない。それには彼方、貴方は大事なものを捨てなちゃいけない…これから渡っていく中で必ず邪魔になるわ…はつきり言うわ。そんな甘い一時の感情なんて捨てなさ

い：貴方はこの道を選んだの。貴方自身で契約書にサインをしたの
…そんな薄い夢物語と契約書どっちが重いかなんて一目瞭然…考え
るに値しないわ』

『速瀬さん：僕が何故、歌手になりたいか知ってますか？』

『……。』

頭の中少し沈黙が続いた

『…小さい僕らにはあまりにも広すぎるんです…』

そう言い放つと

走って脳裏から消えようとするとき速瀬の声が呼び止めた

『…一つ言っておくわ。貴方はその子に会いたくて会いたくて仕
方ないでしょうけど…彼女もそんな気持ちでいるとは限らないわ…
夢を見ているのは貴方だけかもしれない』

『…でも、電話越しで喜んでくれた…』

『言葉では何とでも言えるわ…冷静に考えると色々と見えてくる
ものよ。眠ろうと目を閉じた時、一人家にいる時…食事をしている
時…ふっと沸く自分の本当の気持ち、醜いもの。…それは貴方が信
じ続けている幻想。待ちわびてると思ってるその子も一緒…果たし
て貴方が必死に頑張るほど彼女は必死に貴方のことを思っているか
しら？以上とは言わないわ…同じくらいに。覚えておきなさい。こ
れは大切なことよ』

幼い彼方は速瀬に言い返すことが出来なかった

そんな自分が悔しかったのか力任せに構わず飛び出す

『信じられないって顔ねえ…開花するだろうけれどまだまだ子供

…何が起こっているのかも知らずに、嘘と思うのなら行きなさい。』

そう言い終わる前に彼方は駆け出していた

何に対して不安になってきているのなも分からずに

不安になる理由なんてなかった

幼い頃抱きしめた彼女の顔は笑顔だった

だから頑張れるって思った…

幼い彼方は雨の降る中約束の場所へと向かっていった

人並みをかき分けまだ見えてもいない目的地に場所へと気を走らせている

まるでもう目的も場所が見えてるかのようになら…

土砂降りの中何度も何度も転びそうになりながら

大雨の中見え隠れする自分では見えない不安な表情
幾度となく生まれてくる最悪な状況と戦いながら

「ハアハアハア…」

服の所々に泥が跳ねながらたどり着いた約束の場所
息つく暇もなく左右を見渡す

隙間なく髪からこぼれ落ちていく雫に視界を奪われる
目に染みる

それでも辺りを見渡そうと顔を拭う

「ハア、…ハア」

もうとつくにたどり着いた

彼女が、いない…

彼方の心をますます不安定にさせた

そんな気持ちを無理矢理消し去り今かと彼女を待つ

余計な考えに首を降る

次瞬きしたとき…次目を閉じた時

左へ向き直った時…右へ振り向いた時

…彼女はいる…

何度行きかう女の子を彼女だと思っただろう

彼女なら髪を伸ばしてるはず…

彼女ならあんな素振りで僕を迎えてくれる

仲良さそうに歩く恋人達を見送っただろう

人並みに彼方の心を痛めつけていく
フツと目にした柱に身体を預ける
気持ちを落ち着かせようととった行動だから
すぐ居たたまれなくなり外に出ると絶え間ない雨が彼方の身体をぬ
らす

外で待つことにしたちよつとした雨宿りの場所を見つけ
水たまりを蹴りながら、手のひらに雨の滴を弾かせながら
通り過ぎる人と人の隙間に希望を抱きながら

最初は必ず僕が見つける

最初に久々に名前を呼ぶのは僕だ…

気付かない彼女に笑いかけるのは僕だ…

『大丈夫・・・きつと来る。今に人の間から顔を出して』

大丈夫なんて思っているようじゃもう大丈夫じゃない

雨の中寒さで震えながら

両手で身体を温めながら

まだ見えない一人の少女を待っていた

.....

『来ない...』

.....つ!

『ど、どろしてこないんだよ・・・』

それから数時間経った

雨は霧雨になり止む気配がする

掌に乗せる雨は雫になんてならなかった

それからは覚えてない

それからどうやって帰ったのか

俺は歩いてさえたのだろうか

後で速瀬さんから聞いた

自分は雨の中高熱を出して倒れたのだと
それからパタリと彼女の連絡は途絶えた

12・気になる彼

少し急な坂を徒歩で昇っていく

満春の住んでいる街は人並みが多いといってもここは論外

ちよつと曲がれば人通りが多いのだけどここは町外れを感じさせる

田舎くさいとまではいかない…『街』外れ

時々夕御飯の買い物を終えた主婦らしき人が通り過ぎるくらい

そんなゆるい坂道の頂上を目指したところに私の家がある

ポストを確認し家の扉を開けた

「……………はあ」

誰に挨拶するまでのなく開けた扉を静かに閉めた

なんとも淡々とした帰り

途端に鼻に香る柔らかく包み込む優しい匂い

無意識に頭の中でリサーチする

「…お帰りなさい、満春」

スリッパを慣らしながら母親がお迎え

そして答え合わせへと勝手に頭を進める

「今日はシチューよ…あとちよつとで出来上がり」

シチュー…当たっていた

それだけ言つと再び台所へと向かつていった

クツクツといい音をたててる鍋を横目で見ながら冷蔵庫に手をやる

「着替えてくる…」

片手にボルヴィックを持ち2階、自分の部屋へと行く

部屋の扉を開けペットボトルをベットに投げる

カーテンを閉め制服のリボンを外しながら机に向かう

自分で言うのも何だが綺麗に部屋は片づいてるほう

もちろん趣味なんてなく部屋は自分で言うのも変だけど生活感がない

そのなかで無造作に置かれた白い紙切れが目に入った

「……………」

リボンを机に置き代わりに紙切れを手取る

この紙に書いているものは紛れもないあの時にもらったやつだ
そこには男の人らしい角ばった字で電話番号がかかれていた
ベットに投げたボトルの蓋を開けながら紙切れを見る

『今度さ…スタジオ来ない？案内するよ!!』

不意に彼の言葉が脳裏によみがえる

そうあれから捨てなかった

捨てられなかった？…そう自分に問いかけるのも躊躇われる

自分ではよく分からない行動

そして不意に携帯を手に持つ

私の中で説明しがたく理由がない

それが自然と言わんばかりに

音のない部屋に確認音が響きわたる

ピッ、ポツ パツ ポツ…

ゆっくりと押していく

…090…3…

「満春!…出来たわよ」

ドキンっ!!

バシャー…ーン!!?

「あ……」

突然、部屋への訪問に水をこぼした

「な、何やってるのよ…!」

何をやってたわけでもない

我に返った時には零していた

……我に返った?

私それまで無意識だったってこと?

「あ…。ごめん…」

謝ってはいるが何処か気持ちの入ってない言葉

せかせかと手際のいい片づけをしている側で呆然としたままの私
記憶がないわけじゃない…ちゃんと記憶はある

自分のした脈略のない行動に頭がついていけないでいる

「ほら、そこどいて…っ！先に下降りて待ってて？」

その姿を見かねて私をお母さんが誘導する

私は何も言わずに部屋を出る

それを見送ったお母さんはそそくさと残った片づけを始めた

「…よししょ」

台所から持ってきた布巾で床を拭く

絨毯、ベット…思った以上に被害は大きかった

ただど作業するお母さんのペースは衰えない

そのままにしていた落としたペットボトルを机に置く

「…ん？」

ベットに向かうとペットボトルと一緒に落とした被害を受けた紙を
目にする

またもや落ちていたメモ用紙はよく目立った

ベットの色は全体的に深い青…白い紙は色がよく映える

不思議に思ってお母さんは手に取った

「…何かしら？」

ゴミかと思ひ捨てようとした矢先

何か書いてあることに気付く

ゆっくりとくしゃくしゃになった紙を開けていく

「数字、電話番号…？」

と、言った途端表情が見る見るうちに変わった

まるで恐ろしいものでの見るかのように…

まさか下に降りた瞬間に見られてるなんて思わなかった

私と母親だけだけど

食卓を囲い静かな晩御飯を食べていた

いつもご飯を食べるときは静まり返っている

私から強いて喋ることはもちろんお母さんから喋ることはなかった
優しいは優しいが見ようによつては放任

前もこんな感じだったのか覚えてない

お母さんはもつと滲刺と明るかった気がしなくてもない

「ごちそうさま…」

やっぱりいつもの静まり方じゃない

分からないけど黙々となか考えているような表情

お母さんは何か言いたいようだけど言えないという感じ

私は食卓を立ち上がり2階へと足を向ける

「あ、満春」

と、久しぶりに聞いた気がする声が背中から聞こえる
でもやっぱり声のトーンは低かった

「…何？」

足の向きを変えず背中と言葉を返す

少し間があつてまた言葉が返ってきた

「貴方…昔のこと…」

「…む、かし？」

「昔…いいえ、何でもないわ！」

そついうとさつさと片づけを仕始めた

言った言葉に誤魔化しを入れるかのように手際のいい片付け
私はその行動をしばし不思議そうに見てるしかできなかった

母は何を言おうとしていたのか

2階へと足を運ばせながら考えていた

…昔のこと。

聞こえた数少ない言葉

昔々…小さい頃のこと？

思え出そうとしたけど思い出せない
思考回路が途絶えてしまう
私って昔、どんな子だったんだっけ？
また頭が一瞬割れるような痛みが走った
最近の私は柄にもなく考えすぎた
何にも興味を持たないでそれを嫌とも思わなかった
きつと昔からこんなつまらない娘だったんだろう
いつもの自分だったらこんな事なんとも思わない
そうなるとおかしいのは私なのかも…
お風呂にでも入って全て流すか

気にしなければお母さんの言った事だって何でもない
他愛ない話かもしれない
何か近所で揉め事があって落ち込んでるだけかもしれない
ノブに手を伸ばし部屋に入る
入ったままドアに背を任せボーっとしていた
「……………」

もうすっかり日が落ちていた
カーテンを閉めないと…
私は窓の方に向かって歩き出した
ゆっくりと半分空いてたカーテンを閉めると机にあるあるものに手を伸ばす

どうしてこんなに気になるんだろう…
数秒紙を持ったまま考えにふけた後
携帯を取りだしダイヤルを押す
見た目ごく普通にあるシチュエーション
このダイヤルを押していく感じが
だけどとても懐かしい気持ちにさせる
昔に何度かこんな光景があったような

心の内を正直に話すと

ワクワク…ソワソワ、ドキドキ

どれが当てはまるのか決められない

ワクワクでもソワソワでもドキドキでもある

すごく心が安定してる、けど切なくなってる

矛盾しすぎて笑えてくる

複雑な感情に戸惑いながらも呼び出し音を耳で聞いていた

プルルルルッ　プルルルルッ　プルルルルッ

一定の呼び出し音に緊張の拍車がかかる

どうしてこんな気持ちになるんだろう…

早く携帯に気付いて！早くとって！！

何度かこんな思いをした…

なかなか出ないで鳴ってるコール音を

自分でも気付かない特別な思いを寄せながら聞いていた

13・握る手

この前と同じ喫茶店

今日は朝からちよつと曇りがちの空

にも関わらず絶える様子がない人並み

まあ、洗濯物とか気にするような年代の人は通ってないけど

喫茶の窓際に写る街を見ながらふけていた

この前話したマコに…

今日会うことも知ってる

正直に言ったらマコが言うには

『目玉が飛び出しそうなほど驚いた！』だそうだ

だけどすんなり私のこと理解してくれた

はつきり言って最近のマコはおかしい

この件もそうだし

だけでももう無駄な詮索はしたくない無理矢理そう思うことにした

最近、頭痛の回数が多くなってきた

風邪かな？？？って思っではいるけど

原因はきつと考えすぎ

今日は珍しくそんな症状がなく普段の私を満喫してる

喫茶店でミルクティーをかき混ぜてる私

まだ来ない彼方君を待っていた

あの部屋で電話を掛けた時この約束をした

あれから彼方君と呼ぶことにした

別にそんな親しい仲じゃないけど彼のことをイチイチなんて呼べば

いいのか

なんてそんな漫画じゃあるまいし…

これって決めてしまえばもうそれで決定なのだ

ただ彼方君の電話を取った時の反応が忘れられない
テレビで写ってるとおりの営業で出ればいいのに

焦って取ったのか声がうわずっていた

余程、電話なんて来ないって思ってたのか

するわけないと判断されていたのか…

それともどの女からなのか分からない位教えていたのか…

とりあえずは

初対面医務室での出会いと先日偶然出会ったのひっくり返るめて
あれから随分印象が変わった…

待ち合わせ時間から20分過ぎ

周りの声に敏感になり始める

時計の針が気になる、人が歩く足音も気になる

待った？…って言う声にもいちいち反応する

「ゴメン！！…遅れた」

フツと視線を向けると怪しい男が立っていた

…ますます怪しい格好になったと言うべきか

変装するなら彼はもっと美的センスを学ぶべき

普段着は普通なのに…

それとも遊んでいるのか？

通行人は怪しさ2倍男を見ては足早に去っていく

一瞬警察に突き出そうかと思った

それほど疑わしい装いをしている

きつとこの前の騒動を学習したからだろうけど
けど、この格好あんまりだ

というか…サングラスに帽子に髭なんて古い

今、渋谷でも変装しないで出かける芸能人が多い中

「あれ？…聞こえてる？」

「あつ、はい…」

なんて言っても前一回この姿見てるからあまり驚かない

ジロジロと見て行く人達はこの黒い物体が『彼方』だと知ったらど
うなるのだろう

こんなカラスみたいな格好でも抱きついてきたりするのだろうか
キヤーキヤーするのだろうか

私にはあまり感情が顔に出ないから

きつとこんなこと思われてるのを微塵も感じてないだろう

「あ、やつと返事した…」

反応が返ってきて安心したらしい

「こんにちわ」

挨拶をする

「えつと、確か約束したよね…」

なぜか今更な事を言う彼方

私はミルクティーを口に含ませながら頷く

「…あの」

「……ん？何」

軽く営業スマイルで顔を眺めてくる

「一般人がお邪魔して良いんですか？」

率直に思った疑問をぶつける

「いいのいいの！！…今日速瀬さ…マネージャーいないから」

少し戸惑うかと思っただらサラッと答える

要はうるさいやつがいらないと言いたいのか…

なるほど…っわ！？

「やべっ！もう時間がないんだ…だから早くいこっ！…！」

と、急に私の手を掴み席を立つ
そそくさと会計を済ませ外に出る
一人勝手に私の手を引っ張って歩いてると言う感じ

私より頭1、5個分大きい彼方君が目の前で歩いてる
太陽の見えなかった空はすっかり晴れ渡っていた
でも丁度良い位置で彼方君が光を遮ってくれる
眩しさから私を守っていた
光を独り占めにしながら私を引っ張る
透き通る色素の薄い髪
不意に掴まれた手のひらに力が入る

それは私の方からか彼の方からか分からない
時々振り返る彼方君の顔が懐かしい
とても懐かしい感じがして
私の凍ってしまった部分を溶かし始めていた
わざと今度は意識して彼の手を強く握る
握り返してくれるかドキドキした
…けど、分からない。
応えてくれたのか

心臓が暖かくなって優しい血液が流れ出す
それとは逆に彼の背中で
最近ずっと心の何処かで引っかかっていたもの
まだ拭い去れない不安と共に重みを増して崩れ始めていた
予感とも言いがたい運命みたいなざわめきを

14・動き出す…。

和気あいあいとした雰囲気ではない

声が聞こえるのは被写体を見つめるカメラマンだけ

耳には緊迫感を表すシャッターを切る音

カメラの奥とその被写体を交互に睨み付けている

見渡せば誰もが堅い表情をしてその行く末を見つめている

誰もカメラマン近づこうとも

お互いに他愛ない言葉を掛け合うこともない

プロと言わんばかりに…

これが玄人の醸し出す空気

空気を感じる……怖いっていう気持ち

彼が言うにはアルバム、写真集撮影

雑誌の取材、告知関連で回らなくてはならないらしい

今は2番目に言った写真集撮影

こんな忙しいのに私なんか誘ってよかったのだろうか

撮影風景を見る

カメラマンの注文に全身全霊で答える

慣れも入っているのかアレンジを加えながら

だから彼の時はスムーズに事が進むらしい

やっぱりプロなんだと思う

目の前でスタツフが通る

何でここにいるの？…と言わんばかりの視線を向ける

数々の視線を浴びながら椅子に座っていた

当たり前である、どう見ても普通の女子高生がいていいわけない

何度も確認したし断った

大丈夫というからは関係ない

…気にも留める気ないから堂々としてるけど…。

飲み物でも買ってこよう、のど乾いた

緊迫した空気から抜け出す

通路を見渡して明らかに分かる場所に自販機は置かれていた
炭酸を選びジュースを片手に戻る

「…こんなとこにいたのか」

不意に私の視界に入る

タオルを背負いどうやら撮影が終わったらしい

「ごめんごめん・・・退屈にさせちゃった？」

身体の熱気を冷ますため服をぱたぱたさせる

そんな彼を見て持っていたジュースを差し出した

「えっ…いいの？」

突然のことで驚いた顔

「…また買うから」

それだけ言うとさつき歩いた道に戻る

「せんきゅー」

後ろの方から缶を開ける音

彼方君は自販機近くの椅子に腰掛けた

また炭酸を選んで振り返る

すると綺麗な女の人が彼に近づいていた

「あら？…撮影終わったの？」

よく見ると彼のマネージャーだった

一度しか見たことないけどあんなキツイ美人一人しか見たことない
確か医務室いた…

「速瀬さん…！？何、今日用事あるからって言ってなかったっ
け！？」

そう、速瀬さん…

彼は焦り始めた様子

気のせいかな私の方をチラと見る

「用事？ああ…社長からいつつけられた件？早めに片づいたから様子見に来たわ」

ああ…私がいるからか

この人がいないから私を連れてきたんだもんね

と、考えにたどり着くと同時に彼方君の向けた視線に速瀬さんが気付いた

考える間もなく食ってかかる

「また彼方！！いつも部外者を入れないでと言ってるでしょう！？」

「……………」

「もつと自覚と節度をもつてちょうだい！！」

なんか何処かで聞いた言葉口癖なんだろうか

言葉で彼を叩きつけると速瀬さんは私の方へとやってきた

私はただ黙って速瀬さんの瞳を見返す

怖いとか恐れとかそんなの微塵も出てこない

ただ威圧感は最大限に伝わってくる

「あら？貴方確か…ドーム入りの時医務室にいた……」

遅いながらも気付いたようだ

変なものでも見るかのように私の顔を見回す

一通り終わったのか今度は微笑む

「そう、貴方の目的はこれだったの…医務室にいたとき興味ないふりしてこんなこと企んでたなんて…彼の性格理解済みってことかしら？」

「何言ってるんだよ…速瀬さん」

椅子から立ち上がり言葉を遮る

私はただ速瀬さんを見つめ黙っていた

「こつやつて庇ってもらつのも計算の内なんでしょう…？最近の女子高生はこんなこともするのね…頭に入れておきましょう。まあ、いいわ。貴方にも言っておくわ彼は業界人貴方は普通の高校生！そ

このとこちゃんど理解してもらいたいわ。相手に出来るわけもないの……」

わざと強い口調で私にぶつかってくる

「速瀬さん!!」

もはや彼方君の声は聞こえていない様

「別にやましい関係じゃない……」

言葉でねじ伏せている間に本当に頭にきてしまったみたい

「いいから彼方は黙っててちょうだいっ!!……ちよっと貴方この子
追い出して!」

通路で歩いてるスタッフを捕まえる

「速瀬さんつつっ!!!!!!!!」

通路の端の方まで怒鳴り声が響いた

いきなりの声にさすがの私も目をつむる

私も心なしか驚いた

誰の声だか一瞬見当がつかなかったけど

目を開けたとき速瀬さんを睨み付ける彼を見て悟った

今までの雰囲気じゃ考えられない程の形相

そして当然のごとく私達の間で沈黙が走った

「……………」

彼方君は睨むだけで言葉は発さない

速瀬さんは彼の行動に戸惑っている様

「これ以上調子に乗らないでちょうだい貴方も……。早く追い返しなさい」

根気負けをしたのか視線を外す

私の方をチラッとみる

その時の表情はもう敵以外なんとも思っていない瞳

酷く冷え切ったハイヒールの音を鳴らし去っていった

「……ごめんね、何か嫌な思いさせちゃったけどいつもあんな感じ

だから気にしないで…」

軽くフォローを入れる彼方君

「……………」

「あ、そういえば！まだ名前聞いてないよねえ？名前なんていうの？」

「桐谷…桐谷満春です」

去っていく足音が止まった

振り向くと何故か速瀬さんは立ち止まっていた

そして彼方君の表情も強ばっていく

またもや変な空気が流れる

何も理解できない私はこの空気を吸ってることしか出来なかった

「きりや…み、みはるって言うの…？」

途切れ途切れに私の名前を口にする

どンドン彼の笑顔は固まっていった

私から見て速瀬さんも後ろ姿だけど立ち止まったまま

「…あの、何か？」

いたって冷静な装い

反応を待っていたがいつこうに返ってこない

「あの…」

もう一回問いかけることにする

「あつ！いやっ…何でもないよ」

そう言った彼方君はどこか心あらず

気がつくとも速瀬さんの姿はなかった

「あ、ごめん！俺これからまた撮影なんだ…よかったらまだここにいていいよ！…じゃあ」

そそくさと席を立つ彼方

私の名前を聞いてから何を言っ
て良いのかわからないって感
じだ
そんな彼の後ろ姿が消えるま
で見つめていた

15・忘れたはずの約束

彼女から離れスタジオへと歩き出すと同時に思い出すそれは自分の人生を変えることになった2回目のこと

1回目は幼い頃一人の少女と約束を交わした時

あの出来事だけは何年経っても忘れることが出来ない

『今』の自分へと変えていった出来事

それは彼方が熱を出して倒れたその後の事だった

意識を取り戻すのに2日過ぎた頃

傘も持たず走って無茶して待ち続けたことが祟ってのことだと思っ

『やっと起きたわね…』

『あ、う！？…速瀬さん？…ここは』

脳裏に浮かんできたのは事務所の医務室

『あつ！…そうだ満春ちゃんは！！？僕駅まで迎えに行ってそれで』

勢いよく立ち上がる

のを、言葉で速瀬は呼び止める

『どんな子？』

『え…？』

いきなりの質問に戸惑う

『どんな子って…』

小さい頃別れたきりで容姿なんか分からない

多分変わっていないと思うけど

そんな言葉で納得するような相手じゃない

『そんな忘れてしまうくらい会ってない子なんて忘れてしまいな

さい…2日目寝込むほどの熱出して追いかけるようなものじゃない
でしょう？』

『それは！！！だけど…！！約束したんだ』

駆け出そうとベットから飛び起きる

『それで…来たの？』

彼方の心臓が硬直した

『分からない…けど、今待っているかもしれないっ
ベットから降り床に足をつける』

『待ちなさい！…まだ気付かないの！？貴方は駅前で倒れたのよ
！！熱出してるもの気付かず待ち続けて愚かさにもほどがあるわ…
結局来なかった彼女にこれ以上貴方が追いかけることってあるの？』

『……………！！！！』

『…始めからな訳じゃないけど…スタッフが後、つけさせてもら
ったわ』

『何の権利…！！』

くつてかかるうとする彼方を言葉で制した

『言つたはずよ。契約書に判子を押しした時点でこれは遊びじゃな
いの…よってそんな絵空事を並べてるような暇はないわ。遊びなら
他を選べばよかったわね…残念ながら貴方は立派な売り出す商品な
の』

痛い言葉を淡々とつづっていく

『遊び、絵空事ってなんで…』

『何でって…そんな悲しい顔して私に聞かないで。彼女が本当に
想い出にしていなかったのなら貴方はこんな所にいないでしょう？』

『……………』

『昔、彼女とどんな約束をしたのか知らない…何を理由でこの世
界に入ったのか知らない。ここからは大人として言うわ…確かに知
らないけど、これはね約束がどうかじゃないのこの世界に関わつ
た以上人生がかかっているの！貴方一人のために色んな人がもう動い
てる…。今だつて貴方をこんなベットから引きずり出して駆けずり
回らせた気分よ！！貴方はたった一人の彼女のためなのかもしれ
ない…では、貴方は一人のために何人犠牲にするの？』

『……………っ』

『だけど…もう貴方一人の問題じゃない。貴方のために多くの人

が『彼方』を応援してて、貴方を立派な舞台に送り出そうと必死になってる…それを視野に入れてちょうだい！！それが現実…自分ばかり見つめてちゃ駄目なのよ？一緒に夢見てた幼い頃の話はもう卒業！！』

『知らないくせに…』

分かっている…分かっていた

考えられないほど子供じゃないし

だけどそれを考えるほど大人でもない…

止められないものってある！！

『えっ…』

『僕たちのこと何も知らないくせにつっ！！』

思いつきり怒鳴り声をあげると

だって…僕たちは約束したんだ！！

泣きながら誓ったんだ！！

『遠くても会えるように』って

そしたら満春ちゃんは笑ってくれた…

大好きなああの満面の笑顔で！！そんなはずがない

『あ、そくだ！！でんわ…電話だっ！！』

そくだよ…何でこんな事に気付かなかったんだろう

彼方は足早に公衆電話へと駆け寄る

ガチャッ…！ピッ、ポッ、ピッピッ…

そくだよそんなわけない！！

この電話の向こうには元気な満春ちゃんがいる

昨日はゴメンっていつもの声で…

……………えっ？

ガチャッ…………。ピッ、ポッ、ピッピッ…………

ガチャツ…。ピツ、ポツ、ピツピツ…

『ははっ。そんな…きつと間違えたんだ』

ガチャツ…。ピッピーピッピー!!

カードが送り返される

『……………な、何で』

ガチャツ…。ピツ、ポツ、ピツピツ…

震える手でもう一度ボタンを押す

『何で…う、嘘だろう…』

手に力を無くし強く握っていた受話器を落とす

彼方の目は信じられなくらい見開かれ何も写そうとはしなかった

足の力も無くし泣き崩れる彼方

泣き声以外何も聞こえない静かな空間から

耳を澄ますとかすかな音が聞こえる

だらしなく落ちた受話器から漏れる何の感情も表さない機械音

『(今、お掛けになった電話番号は現在使われておりません…

)』

その冷酷な音はいつまで経っても彼方の耳から離れなかった

「聞いてるかい？彼方君」

フツと現実へと返される

雑誌の取材は始まっていた

咄嗟に彼方は最高の営業スマイルをつくる

「あ、ごめんなさい!!…何でしたっけ？」

当たり障りのないように恐縮しながら聞く

今は、雑誌の取材…ファンからの質問を答えてるところ

彼方とはにかく営業スマイルを保っていた
顔が引きつっている彼方本人にも分かつている
でも、それが今の彼方に出来る精一杯の事

「あ、もう一度聞き直しても良いですか？」
なんとか立て直そうとする記者

「はい、では…もう一度お伺いします。」
悪い顔ひとつせずに再度繰り返す出版社の人
と、同時にカメラのシャッター音が響く

「ズバリ！！彼方君…貴方の初恋はいつですか？…？またはいる
んですか？出来ればなるべく詳しくお答えください…」
彼方はかすかに硬直した

「い、今時間聞くんですね…まだそんな質問…」
場を繋ぐための言葉を笑顔で冷静さを装った
いつもだったら上手い言葉の一つや二つ
タイミングが悪かったさういうしかない…

「ははっ！！確かにそうですね…でもこの質問が一番多かった
かな？」

それだけ言つと取材人は彼方の言葉を待った
その空気が焦らせる

「そ、そうですね…今時だったのかな。忘れちゃいました！！そ
して今はいません。仕事で忙しいんですから！！」
そう言つて雰囲気のを和らげる彼方
でもその瞳は暗く、どこか宙を舞っているような様子
誰も彼方が嘘ついてるなんて知る由もなかった

16・些細な変化

学校の帰り途中：私とマコは家の前

緩いんだかきついんだか恒例の坂道を歩いていた

目に染みる夕日は今、丁度この坂道に隠れて見えない

真つ赤な夕日が姿を現している時刻

人通りは多くないが買い忘れたのか遅いで主婦らしき人が坂を下る

呑気な私達は今日発売された彼方君が出てる雑誌を見て雑談

雑談してるのはマコだけだけど

しかし歩きながら雑誌の字が読めるなんてすごい

「んーっ！初恋話は聞きたかったなあ！！へえ…今…彼女いない

つてよ！！」

「……………」

そんな叔母さんみたいな顔で突っ込む

なにを言わせたいのかこのおばさん

読み終わったのかマコは雑誌を閉じる

「つてか、珍しいな…お泊まりなんてしかも満春からの誘い」

「…そう？」

「ああ…それにここ最近」

と、いいながらマコは意味なく含み笑いをした

そして私に向けてニヤツつと笑う

「…何？」

私がそう問いかけるとますます口の端が歪む

いつになく気持ち悪い

気がつくと家の前に着いていた

玄関を開け先にマコを2階の私の部屋へと行かせる

私はというと冷蔵庫にあったオレンジジュースを片手に2階へ上がる

マコはベットの上でグダーとしていた

そして私があるとバツと跳ね起きる

「しつかし！！久々だな…桐谷家！！そして満春の部屋、匂い」
「…そう？」

匂い…突っ込むのは止めとこう

オレンジジュースとグラスを机に置く

「お前……変わったな」

いきなりの言葉にジュースをつぐ手を止める

何故かマコの眼差しは真剣そのものになっていた

一気に空気が変わる

「…変わった？」

意味不明なことを言われ聞き返す

変わった？何が…私が？

不思議に思う私をただただ見つめる

「嬉しい時とか顔は崩れないけど雰囲気が変わる…嬉しいって」

「……え」

またまた理解不能なことで頭は空回りする

でも、やっぱりマコは冗談を言ってる様には見えない

冗談ならもつとおちやらけてみせるだろうマコは

真面目そのものに見える

見られているこの状況に

「……」

私は単純にジュースを再度つぐことしか出来なかった

「ほらなっ！……雰囲気変わった…」

「……雰囲気…」

少しはにかみながらのマコ

「前なんて行動すら読みにくかったんだぜっ！！」

変わった？…私が？

マコの言ってることがいまいち分からない

最近心の奥にある霧が少しずつほんの少しずつ晴れていってる感じ

それを感じ始めたのが丁度喫茶店で…

『彼方』君と彼をそう呼ぶことにした。

それから何度か会ってる

「最近会ってる？彼方とは…」

「…んまあ」

やっぱり違和感を感じる

どうしてそんな冷静でいられるんだろう

ありえない話なんだ…

面識もないはずの私と彼方君が知り合いになったっていつもの

友達が芸能人と会ってるって事を普通に受け止めてる

マコの表情見ても私に対する焦りや悔しさとかが見えない

普通、憧れでも自分の好きな人なら…

まるでこうなることを望んでいたみたいに

さつきから興味津々

それともテレビの中の人間だから別物なのだろうか

だって、あんなにも始めは彼方彼方って

「ふーん…やっぱりそのせい？」

「…そのせいって？」

何故かその言葉にドキツとした

「マコ、前から聞こうと思ってたんだけど…」

「あん？…なんだ？」

飲もうとくわえたコップ越しにマコの声がエコーする

「何でもない…。」

そう言っただけ私もジュースつられて飲む

私の持っている漠然とした疑問

本当に彼方君のファンなの？

オレンジの酸っぱさが喉から出そうない気持ちを抑え付けたのか

私はこの疑問について口に出さなかった

「…？…？…まあ、いいならいいけど話戻って良い？」

「あ、会ってるよ…けど『そのせい』って言われても分かんない」

そう言いながら膝においたコップの方ばかり見ていた

「そうか…」

その一言だけ返された

色んな事を考える…わざとじゃなくて

なんで今、マコは『そうか』としか返さなかったのかとか

今、マコは何を考えてるのだろうか…

余計なことを考える事が癖になり始めていた

今、自分は何を思っているのかとか…

全部ひっくるめてそんな思考を受け止めちゃってる自分にビククリしてる

こんなことを考えてるのを知ってか知らずか

マコはさっきと変わらない表情で私を見ていた

「本当に変わったなあーっと思ってる…親友としては嬉しいぜ!!」

本当に」

そう言って冗談っぽく笑ってみせるマコだけど

そんなマコの言葉を聞いて心なしか微笑んでいた

『親友』言われた時のこの喜び

それが変わった部分っていうのであれば嬉しい

確かに素直に笑える…

…マコの言うとおり嬉しい事なのに

どうしてこんなに気持ち、心がざわついているんだろう

感情が一つ一つ植えつけられる度に不安が増していくよう

そう考えるとまた心の奥に潜む霧が濃くなっていった

まるで余計なことを重大なことをひた隠すかのように

17・ワタシの背景

夜はいつの間にか深まっていった

いつ夜になって、いつ深まっていったのか覚えてない

お泊まりの基本は夜中、一晩中語り明かすこと

枕の上に肘乗せて他愛ない話をするでしょう

深まっていくにつれ他愛ない話から愛ある話になるでしょう

でもマコのやってることは随分違った

…容赦なく『倒れた』

お酒を飲んで酔い倒れる

だけど私はお酒に弱く、マコはそこら辺は強者

一方的に私だけ酔って倒れた

その有様がいまここにいる私

「……………うっ！」

あまりの頭の痛さに起きる

ここ何処？…ああ、そうか…

お酒臭い、変な匂いがする

重い腰を上げ窓ガラスを開ける

深いため息をつきながら酔いを覚ます

月がこんなにもはつきりと見える…深夜つてところ

気になり時計を見るとやっぱり3時と示している

「……………？」

フツと振り返ると隣にいたマコの姿が見えない

何処行ったんだらう、寝てると思ったのに

トイレかな？…

案外トイレ行ってそのまま寝てたりして

下に行くついでに酔い覚まし水を持ってこよう

そう決め軽く上着を羽織り階段へ差し掛かる

深夜、階段を下りる度に軋む音が響いた
音をなるべくたてないように静かに歩く
昼はそんなに気にならないのに
どうして夜になるとこの軋む音はやけに大きく聞こえるんだろう…
暗い中潜在された『恐怖』っていうものが耳を敏感にさせてるのか
な？

とりあえずは

眠ってるであろうお母さんを起こさないように

「…？」

誰かの話してる声が聞こえる

あ、リビング：暗い中でフロアの光が廊下へ漏れている
ドアが空いていたので隙間から覗く

マコとあれ？お母さん…こんな夜遅くに

誰か分かり安心しドアを開けようとノブに手を掛けたとき

「…満春が」

突然マコが私の名前を呼んだ

ノブを引くのをためらった

一瞬私に気付いたのかと思った…違う私の話？

「満春がさっ…最近笑うようになったんだ」

マコはそう微笑みながらお母さんに告げる
まるでいつも会話をするかのように親しく

「そう…あれから6年経つものねえ」

6年経つって？

「最近…よく顔にも出てくる様になった」

今度はお母さんの表情が変わった

心なしか顔が陰ったような

「やっぱあまり、嬉しそうじゃないんだな…」

私の心を見透かしたようにマコが問いかける
気のせいかな声のトーンが下がった気がする

でも、どうしてこんな夜中にヒソヒソと2人で話なんか

「自分の娘が今、前の進もうとしてるのに…相変わらずそんな表情するんだな。」

クイズを出されてる時みたいにむずがゆい思いが充満した
相変わらず…気のせいじゃない

マコとお母さんは随分前からこうやって話してたんだ

2人が何に対してこんな口論をしているのか見当がつかない
でも入っていけるような空気じゃないのは分かった

「嬉しいわよ…嬉しくないわけがない」

言葉が詰まりながらもはつきりしない籠った声

話せば話すほど醸し出す雰囲気が重くなる

そして2人の口調がどんどんと強くなっていく

マコ一人がムキになって言葉を重ねる

「……理由、知ってたんだな?……」

「…ええ、奏汰君の電話番号が記してあった紙切れを偶然満春の
部屋から」

!!!!?

え?…なんで彼の名が?

何故かそこで彼方君の名前が出てきた

2人の会話の意図が見えない

「まだ怖いのか…?」

いつも大笑いしていて大雑把なマコ

希にも見ない顔をマコはお母さんの目の前で露わにしている

「マコちゃん、貴方には分かりません…母親として妻としてのこ
の複雑気持ちは。どれだけこれまで辛い思いをしてきたか…知らない
いんから」

いつも私にさえ関心のないお母さんが感情をむき出しにしている
私の心は正直に動揺していた

「はっ、まるで私は部外者の発言だな…」

お母さんの言葉にあきれ返る

「っ！分かったたまるかよっ！…そんな自分ばかり苦しいみたいな言い方して同情なんてするか！心を閉ざしてるからって顔に出さないからって平気な訳じゃないんだ！？何度本人さえ分からないところで満春が泣いてると思ってるんだ！！」

マコの声も張り上がってきた

見たこともない光景に身体が震える

どうしてこんなに不安で孤独な気持ちになってるんだろう

「分かってます…！！変えていくことは悪いことだとは思ってません…ただ彼と会って何時あの事件のことを思い出すかって思うだけで何もできないのよ！！現状維持と言われても…だからこれでいいんです。何もしないほうが満春のためなの！」

頭を抱え込むお母さん

押さえきれない苦しみが今にも爆発しそう

「何だよそれ…前から彼方に会わせるのは気が進まなかったのは知ってるけど…あいつの記憶は一体どうすんだよ！！」

私の記憶…笑顔？

「私はこれ以上あの子の泣くところは見たくないの！！きつと記憶が戻れば走り出すわ。あの子のことですもの…なりふり構わず駆け出してその後ポロポロになった満春をマコちゃんはどう受け止めるつもりなの？」

「私は私のやり方で受け止める。もともとそうやって日々逃げて行くのが嫌になったんだ…そう言い続けて満春の記憶なくなっから何年経ってるんだよ…らしくないんだ私もあいつも」

私の記憶がなくなっから…！
何言ってるの？

「今まであいつが記憶失ってから一度も笑ったことがないんだ。辛いんだよ…あの事件から！！感情が欠落してるあいつは何にでも無関心で昔と違いすぎて悲しくなってくる。そんな事実をおいといてこのままで良いって言えるのかよ！！」

たまらなくなり腰を上げるマコ

「マコちゃんには私の気持ちは分かりません！他人だからそんなことが言えるんです…大事に育ててきた娘を…っ！そんな知らせを聞いた私の気持ちも、出来れば私が変わってあげたかった気持ちも…どんな思いで消えない手術ランプ眺めていたかつ。現実逃避そうかもしれない。でも何がいけないの？これは私と満春の問題親としての決断です」

「私と満春の問題…他人事、一番ムカつくいい訳だな」
居たたまれなくなつて涙を流す

だけでもう…マコ達の話聞いてるので精一杯だった
頭が鈍器で殴られたように痛い
そう心の中で叫んでいた

6年前・・・記憶、彼方君・・・事件

脳裏にその言葉だけが回つては消えていく
潜んでいた傷が生々しく蘇ってくる
事実だと知らせてくる

それを私は必死に飛び出さないように抑えていた
一度気を許してしまうと自分が壊れていく
私が私でいられなくなるそんな気がする
そんなことを余所に会話は続いていく

「その事件がある前は家族皆、幸せだったんです。あの成長した彼方君に会うまでは6年前再会するまでは何事もなく幸せだった」
昔話を途中で打ち切る

「今回、また彼方に会ったお陰で…また心を開き始めてる。殺していた感情を…また昔の満春に戻るような気がするんだ…確かに他人だし、人ごと…満春の事ばかり言ってるのは私自身分かるよ。だけどただ思うことは昔の笑顔を戻してあげたい」

「……。」

「悪いけど叔母さんが言ってることって身の保身にしか聞こえない

い…はつきり言って現実逃避だ」

言葉を選ばず思ったとおり口にするマコ

怒りと情けなさに顔を背ける

それと同時に入り口に黒い影がのびてることに気付く

「みつ…満春…!!!?」

誰かの呼ぶ声が聞こえる

「……………!!!」

あ、2人が駆け寄ってくる…

マコが私の名前を呼ぶ

もう…駄目。意識が…

頭が宙を舞ってる

バタンツツツ!!!?

「み、満春…!!!」

朦朧とした意識は容赦なく白い世界へと私を連れ去った

何も考えられない

記憶の迷路には待っている中

何度も見た幼い少女が元気に騒いでいた

18・笑顔そして頼れる人

…気付いたらベットのの中にいた

太陽も空高くまで昇ってカーテンに透けて部屋を写しだしていた

マコは気まずそうに無駄口を交わした後さり気なく昨日の事を持ち出した

ようは探りを入れたって所だろう

その時嘘をついた…

あまりにも真剣に思い詰めたような眼差しにためらいを憶えたからそう答えた後のマコは息をしていなかったかのように深く息を吐いた

「いらっしやいませ！何名様ですか？」

明るいウエイトレスの声が聞こえる

午後2時を回る時計はランチラツシユの名残がある

ドリンク片手に雑談してる人

仕事が始まるまでの時間を利用して読書してる人

私は何をしてるかというと

フツと顔を上げる…あ。

「よっ！！お待たせ…今人気彼方君でえす！」

ピースサインでふざけた口調で登場する

今日はカラスでもホームレスでもない服装

変に飾り立てないほうが目立たないことに気付いたのか

だけどころな登場したらどんなでも目立ってしまう

まんま自己紹介ってねえ…

…まあ、それは置いといて

見ての通り待ち合わせをしていた

なんかもう誰かと話してないと色々と考えてしまう

あれから一週間

私は言うなら無理矢理

何も分からず痛くないよって言われて無理矢理注射された気分

そんなとき彼方君から連絡があつた

「おー！いつ！大丈夫？…起きてるかい？？」

目の前で手を振っていた

私がボーっとしてたことに気付いたらしい

「あ、ごめんなさい…」

今度は彼方君がボーっとしている

端から見れば怪しく見えるんだろうな…私達

そう頭によぎると起こしにかかる

「あの…どうしたんですか？何か」

「あつ、ごめんごめん」

まったくさっきの逆になつてるこれじゃ…

「あ、いやっ…最初にあつたときの満春ちゃんと印象が違うなあ

ーって」

思わずはてなマークが頭に浮かんだ

なにか納得した感じの様子

「初め会つたときは何か冷たい感じがしたからさ…何事にも無関

心みたいな。だって貴方に興味ありません！！人気だろうと有名だ

ろうとなんだっていうんですか？…ってさあ」

「……………」

そついいながら頼んだコーヒを口に運ぶ

何の考えることなくその行動を見ていた

「あ、ごめん…冗談になんないね…本人の前で。ただそんな気が

して…よく言えば冷静なんだよっ！て俺はまた余計なことを」

怒つたと思つたのか弁解の言葉を並べる

詰まりながらも一生懸命に

「ふっ！…くすくすくす」

彼を見ていたら思わず笑つてしまった

何故何故と慌てふためく彼方君を見ていたらますますおかしくなった

今までにないんじゃないかと言つてくらの笑い声

それは自分の耳にまで聞こえる

自分の心もちやんと理解して落ち着いてる
笑っちゃえって

うるたえる姿が面白くて…

トップを争うような人がこんな事で焦るなんて

私の知らないところで彼の姿がもう一人の満春をくすぐっていた

「えっ？え…俺、可笑しいこと言った??？」

もう悪いと思つて事情を説明する

笑いを堪えながら…

「フフツ…あの、冷静沈着つて書いてあつたんですけど」

「…えっ」

「それつて本当のことなのかと思つて…今の言葉聞いて」

まだ笑い終えないまま話をする

そしてやつと理解したのか身を乗り出して力説する

「あのさあ…！！あれはノリというかそれが売りなんだって！！
しかもそんな昔言つたか言わなかつたか分かんない雑誌何処で見つ
けてきたの？…俺は焦りもするしうるたえもする。れっきとした血
の持ち主」

もちろん奈津美情報に決まつてる

「ふっ…！」

「つて思つてる…よね？」

また思いつきり笑っていた

もうなにが面白いのか分からない

ただただ面白い…それだけ

自分がそんな感覚を味わえるなんて夢にも思わなかつた

気付いたら笑つてない自分がいて

顔に触れるといつも笑つてない鏡に映し出される自分も無感情

なにも心動かされる時なんてないって思つてた

「はい…れっきとした」

そんな人形みたいな自分が壊されていく

確かにどこかわだかまりあるけど心地いい

さすがにここまで笑って罪悪感がわいてきた

彼方君にとつては馬鹿にしているようにしか見えないだろう
だけど彼は意外な表情をして私を見ていた

「やつぱりそっくり…その笑顔…」

「…っえ？」

不意に言われた言葉

そっいいながらその微笑みは崩さなかった

「あ、いや…それより話しない？…そうだな。満春ちゃんのこと
なんか聞かせてよ！俺のことばかり話してたってつまらないでし
よ？」

確かに会う度彼方君は自分の話ばかりしてた

それは私が無口で話したからなかったからなんだけど

「それに俺のことは知ってるみたいだし！別に何でも良いよ…小
さい頃とか家族のこととか友達のこととか…」

硬直する私

多分…今一番触れられたくない部分

次々と案を加えていく彼方君を余所にうつむく

小さい頃、家族、友達…

何を話せば良いんだろう

お母さんが作ったご飯変わらず美味しい

マコは変わらず私と友達でいてくれる

けど、なんだかそれはウソのような気がして…

『知らない振り』して誤魔化される

どんどん深みにはまっていく自分がいる

さっきまで晴れてた頭が一気に雲がかかっていく

何もかも信じられなくなっていく

私にはあの夜のこと全然理解できてない

自分の記憶、お母さん、マコ…

私自身が疑わしくなっていく

周りで一体何が起きてるのかな？

ただ確かなのはどんどん厚みを増していく不安
なにか良くないことが起きようとしてる前兆

「どうした…？悲しい、寂しそうな顔してるけど」
完全に不意をつかれていた

心配そうに私の顔を覗き込む

「なんか俺、変なことでも言った？…」

「あ、違うんです」

「じゃあ、なんか悩み事でもあるの…」

そついいながらより心配そうな顔をする

「いえ、違うんです！…本当、ごめんなさい…ごめんな…」

「み、はる…ちゃん？」

ポタツ　ポタツ　ポタツ

漠然とした不安が涙となつてあふれ出した

この頃限りなく情緒不安定に近い状態だった

誰かに話を聞いて欲しいのかもしれない

何もかもがバランスを崩して壊れていく

なんか心の拠り所をなくした様な

だけど、どんなアンバランスでもこの1週間涙流れることなんてな
かった

それは自分の性格であるからそう思ってた

嘘はつき通せるって思ってた自身にも

それがどうしてこの人の前でこんなに泣いてるんだらう

自分の中で制御がつかなくなってる

何より…泣いたり笑ったりする自分を彼の前だと受け入れられる
気付かぬ間に彼方君は私の心の拠り所 becoming のかもしれない

「…どうしたの?!大丈夫?」

「…つく!!ひくつ」

正直涙なんて止まらなくても良いと思ってる

泣いてる反面、複雑な気分

でも、やっぱり自然と涙は止まっていくもの
しだいに涙は流れなくなっていく

彼方君は心配はしてくれただけと私が泣き止むまで待っていてくれた

「本当にどうしたの…何か俺気に障ること言ったのかな？」

落ち着きを取り戻した私に問いかける

「あ、いえ…そんなじゃないんです」

泣いたせいで声が裏返る

だけど精一杯そこははつきりと答えた

「じゃあ、悩み事？…不安なことでもあるとか」

私は口をつぐんでしまった

これじゃ…そうですって言うてるようなもの

多分この様子だと感じている気がする

そして彼方君が口を出そうとしたその時

プルルルルプルルルルプルルルル

「……………」

突然彼方君の携帯が鳴り出した

この空気にはそぐわない軽快な音楽で

余りにも場に合わない音の携帯で一瞬分からなかった

重い間を切り裂くかのように飛び出した音に私達は止まる

「あ、ごめん…」

そっぴいながら慌てて携帯を取り出す

もう一度私に軽く謝ると席を外し携帯を耳に当てる

「はい、もしも？…あ、なんだ速瀬さんかよ。間が悪い」

マネージャーさんかあ…

「いやこつちの話だよ」

速瀬さんと話し始めてしまった

手持ちぶさたに私は何分か前に頼んだままのカフェオレを

静かにかき混ぜながら窓越しに外を見る

外にはたくさんの人達で溢れ返っていた
見ているうちに落ち着いた私

相変わらず彼方君は電話で話をしていた

3時過ぎの街並みは余裕満々の主婦でごった返している

まだ時間があるのか世間話に花を咲かせてる主婦

ここまで楽しそうな声が聞こえてきそう

母親に買って買ってと駄々をこねている子供

ベビーカーをゆっくりとあやす様に押して歩く母親

赤ちゃんはすやすやと眠りに入っていた

そんなゆったりな時間が流れていた

ここのんびりな風景が覗けるって事は意外と穴場なのかも

そう思いにふけていた時電話している彼方君が後ろから窓越しに

視界に入ってきた

オーバーリアクションで指を刺す

電話片手に苦笑しながら『見る！』と窓の外を指す

きつとマネージャーさんの話なんか聞いていない

指している方向を目でなぞっていく

「あ……」

間拔けな声を上げる

多忙に行き交う中彼の指は一人の男の子を指していた

6・7歳位の男の子が重たそうにスーパールの袋を持っていた

中には見える限り大根やら人参やらが見える

きつとお母さんに頼まれたんだらうなあ…

相当重いのか持つてるはずの袋は引きずってる

もう大根らしきものはおろしにになりかけている

人参はコロコロ落ちては必死に拾って歩く

私はその一部始終を見て思わず吹き出してしまった

初めてのお遣いなんだろう

なんだかとてもぎこちない

窓越しに写っている彼方君も危なかしげな男の子を見て笑う
それに気付くと笑ってしまった

隣で彼方君も大笑いしている

その視線に気付いた彼方君と今度は顔を見合わせて笑ってしまった

「……………あ!!?!?!?!」

あ、あれ?…何か聞こえるけど

っていうか誰か忘れてる気が

今度ははつきりとした声で耳につく

「もしもしっ!!彼方、聞いているの!!」

速瀬さんだ

携帯を耳から離している

それでも通る甲高い声は聞こえていた

「彼方返事しなさいっ!!?!」

今にも飛び出しそうな剣幕

彼も気付いたらしく慌てて携帯に耳を傾ける

「はいはい!もしもし聞こえてるよ!!そんな声張り上げなくて

も…」

いつもの面倒くさそうな対応している

さっきまで男の子を見ていた瞳は窓越しに彼方君を見ていた

誰に悟られるわけでもなくそっと

そっと彼に気付かれないうちに…

なんだろう、さっきから…

こんな何気ないことで

とても楽しい…心がウキウキする

たとえば、例えばそう

昔のアルバムを久しぶりに開いたような感じ

さっきから懐かしいが続いてる…

出会った時不思議に思ったモヤモヤしてた正体ってこれだったのかな？

窓越しでもこれだけ見ていれば気付かれる

「まだ？」って催促しているように見えたのか

彼方君は苦笑いをながら『ゴメン』と合図を送る

私はぜんぜん迷惑じゃなかったというかこの時間が好き

だからすぐ私は『大丈夫です』と首を振る

どうしてこの人に前だと笑えるんだろう

どうしてこの人の前だと泣けたんだろう

どうしてこの人の前だと素直になれるんだろう

硬く凍り付いていたものが溶かされていく感じ

知らない自分が顔を出す

いつも私の頭の中は空っぽで真つ白だったはずなのに

喜怒哀楽をどこかに置いてきたんだろうって

私はそう思っていた…

私が知らぬ間に隠していた？

前から不思議に思っていた

分からない…でも一つだけ分かる

私のこの気持ち、彼の前だと安心する

『お前最近、変わったな。』

前、マコにそう言われた

マコに言ったことがあながち間違いじゃないとすればきっとそれは…

私はカフェオレを一口のみ決心を固めた

彼に話をしてみよう

この前の夜の話、もしかしたら啞然とするかもしれない

記憶がないなんて知られたら引かれるかもしれない

私自身もあやふやでうまく説明できるか分からない、不安

だけど、信じたいと思った

そう決意した鏡に映る私が微笑んでいる気がした・・・

19・戸惑う怒り

足取りはとても単調なものだった

規則正しく尚、冷ややかに足音を残す

通路を淡々とした足取りで通行者を容赦なく追い越す

それは普段からは考えられない表情の彼だった

手当たり次第にドアというドアを開ける

すごい剣幕で扉を開け同じ様な調子で次々と確かめていく

そんな彼方を見てスタッフはどうして良いのか分からず戸惑っている

いつもなら笑顔の彼が…

女性スタッフを見つけてた一つ言葉を残していく彼が

初めから見えてないかのようにすり抜けていく

ただ一人の女性を抜かして

彼方の目は大きく見開かれた目的の誰かが見つかった
と同時に力の限り腕を引つ張った

「…ちよつと来て」

「なつ！…何ツ！？」

速瀬は引つ張る力に後ろへと倒れ込みそうになる

抵抗しない訳がない…彼方は平常心のカケラも見えない

「彼方…離しなさい！！話ならここで聞いわ」

負けじと腕を戻そうとする

「いいんだな？…ここで話して。いいんだな！！！！」

驚いた声も彼方の耳には届いていない

あまりの豹変振りに腕の力を失った

そしてたどり着いた先、それは空いている会議室

バタンツツ！！？

「ち、ちよつと！！彼方！！？」

会議室に入った途端速瀬は乱暴に腕を振りほどく

「放しなさい!!」

「……………」

乱れた長い黒髪を整えながら言葉を繋げる

「どうしたの…用があるから引つ張ってきたんじゃないのかしら？」

そう言う速瀬の言葉を遮る

「速瀬さん…俺の言った事だけを答えてくれ」

いつもと違う彼方の声に何かを感じたようだ

「え?ええ…」

返事した速瀬の言葉から少し沈黙が流れる

静かな会議室に彼方の息を吸った音が広がる

「一つ聞きたいことがある…速瀬さんは6年前の事何か知ってるの？」

そのわずかな反応を見逃さなかった彼方

「6年前つていきなりそんなこと言われても見当がつかないわ」

「…知ってるんだな?そう6年前、おれがある女の子に会いに行こうとしたとき」

表情を変えないいつもの速瀬

「何を言ってるのか分からないわ…順を追って話しなさい!」

主導権を譲らない速瀬

それに食って掛かるように言葉をかぶせていく

「あんたはも十分理解しているはずだ…そうだろ?彼女の名前を聞いて動揺を隠せなかった速瀬マネージャー?」

ちゃんと見ていたと言いたげに上から見下ろす

「なんのことを言ってるのか彼方の一方的な話に」

さらに言葉を重ねる彼方

「じゃあ、6年前は覚えてるよね?俺が雨の中駆け出して言った時のこと」

「……………」

速瀬は髪を誤魔化すようにかきあげる

「知ってるも説明するほどのものじゃ…私の忠告も聞かずに駆け出して…」

「その話じゃないんだよ…」

決して大きな声ではないその余りにも低い声に速瀬は言葉をのんだ

「6年前…俺が待ち合わせをしてて熱を出したとき…」

「……………」

「彼女の身に何があった…？あんた何か知ってたんだろ？」

明らかに知っているとにらんだ彼方は脅迫じみた瞳をする

さすがの速瀬もたじろいだ

「彼女の身について私になにか知っているとでも？」

一瞬で速瀬は自分のペースを取りもどす

おぼつかない足取りでドアへと足を向ける

「……………」

「こんな下らない話はもうお終い！！っほら！！移動でしょ…？」

さっさと用意しなきゃ」

「…そうだね」

返ってきた言葉からいつもの彼方と感じ取る速瀬

気付いてないのか聞こえるような安堵の息をもらす

「どうしたの？早く…」

「桐谷満春」

「だから！！…その話はやめなさ……………」

振り返った速瀬は一気に顔が強ばる

そう言った彼方に視線をあわせない速瀬

空気は増して重くなっていった

まるでこの室内だけ時間に見捨てられたかのような

1秒足らずの発言は思った以上に有利な立場へとさせた

「俺は名前を出したただけだ…なんで『その話』と繋がるの？説明

してもらえる」

単なるカマカケ

それにまんまとはめられる

「やっぱり何か知ってるんだね…おかしいと思ったんだ。速瀬さんの満春ちゃんに対する態度ははつきり言って異常だから。あれから必要に俺のこと気にかけるし、あんたは気付いてないだろうけど」
「なんで黙ってた？『事件』についてもあんた何か知ってたんだな？」

「……………」
速瀬は言葉を詰まらせる

「6年前から知ってて話さなかったんだな…？」
もう、速瀬の顔色を探る必要なんてなかった
顔を見てしまうとぶつけようがない怒りが増してしまう

「俺、速瀬さんのその態度で確信したよ。この前彼女にあって話してもらったけど」

「…な、にを」
恐る恐る質問をする

「偶然聞いたんだって…話をしているのそれが記憶だの6年前とか俺の名前とか断片的に出てきたらしいそして当時の『マネージャー』の話も」

「……………」
「断言は出来ない…。でも可能性はあるって思った。あの子だけ俺の名前知ってたのも、同じ名前なのも、あの子にあって懐かしい気持ちになるのも。面影を感じるのも長年満春ちゃんが逢いたかった待ち焦がれていた女の子『みはる』ちゃんだから」

「引き合わせてくれた。運命とか馬鹿げてるって思う…可能性は限りなく低いんだから」

思い出さずにはいられない
昔、別れた彼女の涙を思い起こす
速瀬は沈黙を突き通す

「でも俺には分からない…なんで6年前に来なかったのか。どうして、どうして記憶をなくしてるのか」

かたくなに口を閉ざしたままの速瀬に問いかける

「もう一度聞くよ…あんた一体何隠してる」

「…知らないと言ったはずよ。ロケバス表に出して置くわ」
言い終わる前に会議室を飛び出す

去ってしまった速瀬を目で辿りながら声を出せずにいた

抑えられない怒りを壁にぶつける

大きな打撃音は空しく会議室に響いた

20・知りたい

奇怪な足音聞こえ慣れてしまえば気付かないものだろうか
だが、あえて私達は顔を合わさない

「ふふふつふふつ!!」

背後から不気味な笑い声がする

「ハハハハハハハッ!!」

倍に大きくなる気付いて欲しいオーラ

あまりにも二人して無視してるから声を張り上げたのだろう

「マコ、話しかけてあげなよ。なんか言いたそう」

「何言ってるんだよ…後ろには何もいないって!!」

「……………」

このままだとレベルアップすると思うけど
どんだん調子にのって

「ちゃんと気配ぐらい分かるんだから心配すんな!!…まあ未確認飛行物体とか幽霊とかは感じねえけどな!!」

「…奈津実は？」

「問題外飛行物体。それ以前に、物体なのか!!?」

驚きを隠せない様子のマコ

後ろの外野は涙を流していた

「ジャジャジャーーン!!私、坂本奈津実は本日大変なものを手に入れてしまいました!!」

それでもめげない奈津実に舌打ちをするマコ

「なあ、満春これてさあ…」

わざとらしく無視を続ける

「あのさあ…別に液体でも良いから会話しようよう…シクシクマコ様」

な、情けない…。認めてしまった

まさにスライムやアメーバーの様にマコにすがりつく

「でも、液体の女王は私ね……」

「いきなり勢力争いかよ！てか、うちらも入れてんな！！アホ」
思わずつつこみを入れる

マコの性分ばけられたらほっとけないだろう

「だってだって……私の話い〜」

猫なで声でいじける

思わず背筋が凍る

「ぐひい〜っ！！分かった……聞く！聞くからしゃべんな！！」

「ふっ！……荒木マコ、破れたり」

何処を向いてるのか分からない奈津実はとにかく遠くにVサインをする

一気に復活ってご様子

気付いてないのだろうか……矛盾に

まあ、それ以前にマコが言ったことなんて1mmも気にしてないだろうけど

まだ遠く彼方に憂いの涙を流してる人は放っておく

「聞いたって自慢話だろ？つまんねえ……」

「……。」

「そんなんあいつ一人勝手に言わせておけば良いんだって……！」
そうばやくと私の机に広げてあった雑誌無造作にひったくる

最近思うことがある

芸能人の話はいままでまったくしてこなかったマコ

それがいきなり慌てたかのように持ち出してきた

と思ったら、今度はあの夜から一切してこない

それはどんな意味だったのか漠然として分かり始めてる

きつと『実は興味がない』とあからさまに態度に出し始めたのも
マコ自身感づいているんだろう……

私が気付いてるってこと

時間が経てば冷静に答えは浮かんでくる

最初から嘘や騙すというのが嫌い

自分が正しいって思ったことは真っ向から突き進んでいく

そんなまっすぐなマコには似合わない

でも一つ分らない事がある

いつも直球勝負のマコがどうしてこんな回りくどいことをするんだ
ろう

はつきり言つてマコらしくない

必死に隠して、嘘までついて彼に会わせて

私がない間にコソコソ話までして

彼方君つて私と何か関係があるの？

皆が知ってる通り誰もが知ってる有名人

生まれながらにしてテレビで活躍してそんな人と

自分自身を繋げるものなんて

普通こんなこと考えてたらたくさんの方々に怒られそう

あの日聞いた…事件、記憶喪失

考え始めるとゴールのない迷路に迷い込んだみたいになる

だけど同時に思う

全ては私の知らない6年前なんだ

いつも思いたそうとすると落とす穴に落ちてスタートへと戻される

まるでゴールにはたどり着かせる気はないみたい

でも、穴に落ちても落ちても落とせない言葉がある

不意に喫茶店で口にした言葉

『本名は仲宮 …… 奏汰』

私は…仲宮奏汰を、前から『彼方』知っている

知りたい。彼のことを…

いつも通る坂道を昇った先の住宅街
軽い坂だけどやたら長いので疲れる

その先にある赤い屋根の一軒家

周りにはお昼を食べ終わった後の呑気な雑談会

主婦の笑い声が微かに聞こえる

袖をまくり腕時計に目を通す

だいたい2時過ぎと言ったところ

黒づくめの男は密やかに電柱の陰に隠れていた

かくれんぼと冗談でも言えるような感じではない

熱く太陽が照らす中数分後

軽快に心地いいヒールの音をならす来客が男の視線の先に現れた

「やつぱりなあ……」

来客は赤い屋根の家のインターホンを押す

家の中から奥さんらしい人が顔を出した

昼の後片づけだろう…エプロンをしている

何を話してるのは聞こえないがまた数分後

ヒールの女性は丁寧にお辞儀をし、赤いヒールを鳴らしながら後に

した

「……はあ」

影がなくなつたのを確かめた黒男はため息をもらす

女性は車で走り去って行った

「やつぱ来ると思ってたよ」

男は電柱に隠れるのをやめた

隠れる理由がなくなつたからだ…

暑さに我慢できず黒い帽子を取る

サングラスも邪魔なのか外す

黒に隠された正体は彼方だった

センスの悪さで分かったかもしれないが

「絶対速瀬さんここかぎつけると思ったからからね!!まったく
そう言うところ鋭いから隠れといて正解だったよ...どうやって調べ
たんだか」

なぜこんな事をしたかというところ

ズバリと言えば一言サボったから...今日の仕事を

今頃事務所は大騒ぎだろうと思いつての行動だったようだ

それは大騒ぎって問題ではないのだろうけど

彼方の頭もそんな問題ではない

考えた末だった

あとで速瀬さんに怒られるだのクビかも問題ではない

ただ彼方は事実を知りたいだけ

それ以外何も頭の中にはなかった

彼方はさつき速瀬が訪ねた家に歩み寄る

標識には立派な文字で『桐谷』と書かれていた

この前、満春に教えてもらった住所

6年前やっぱり引越していたのだ

だから電話も繋がらなかった訳

今はもう痛まないが受け取ったとき落胆した

「.....」

何故かインターホンを押せずにいた

一瞬押す手が硬直する

『家族とか友達とか私、話さないんじゃないんで.....話せないんで
す』

『えっ?』

『昔の記憶がないんです...』

『それって記憶…』

『喪失です。…やっぱり驚き、ますよね』

この前待ち合わせした喫茶店での会話だった

『本当は言うつもりなかったんですけど…』

『じゃあ、どうして?』

『ごめんなさい、迷惑ですか?』

『いやっ!違う違う。疑問に思っ…』

『よかった。でも何となくですよ…彼方さんには話したくなって力になってくれそうで』

『そうなんだ、それで』

何気ない言葉に自分は嬉しく思ったの覚えてる

『はい、記憶と言っても最近までは記憶喪失ってこと自分でも知らなくて…そんな自分の事なんて気にもとめなかった。でも最近お母さんと友達が話してる聞いてちゃって』

『親と友達?…変な組み合わせだね…で、その原因は?』

『でも、聞いた途端頭が真っ白になってその後は…』

『そりゃそうだよね…』

『でも、言葉のはしはしは憶えてる』

『それは…?』

『確か、6年前』

不意に彼女の面影を重ねていたせいで身体がこわばる

最近それが癖になってきていた矢先彼女じゃないって分かってるだけ

あまりにも表情も何もかも似すぎていて6年前といわれると傷をえくり返されたかのように心が痛む

『6年前、何かが起きて…記憶喪失になって感情を表に出さなくなった…あ、後、ここよく分かんないんですけど違う人かもしれないけど』カナタ』って名前をよく出してた。まったく分からないですよね。でも違う』カナタ』かもしれないし…私が考えようとするところ最近では貴方としか会ってないんでそう思ってしまうのもす

ごく失礼なんですけど…。でも誰かを待っていたような気がするんです。それがお母さん達が言っていた『カナタ』って人なのか』
しどろもどろになっていく会話
それを彼方がゆっくりと制す

『あの…』

返って来ない言葉に不安の色を隠せない表情

この時まだ違うって思ってた

彼女なはずないって

目の前の違う女の子が6年前似た境遇を体験したんだって

『あつ、ごめん…いいよ。詳しく説明してくれるかな？』

彼方の視線はインターホンをドアを見つめていた

あの時速瀬の前ではああ言ってしまったけど

今からやろうとしていることは恥さらしかもしれないとか

無駄なことに気を巻き散らかしてる余裕がないくらい

確信を得ている気がする

彼女の話聞く限り…満春、6年前、記憶喪失、本名を知ってた

「俺も知らない6年前…」

うわごとのような小さな声で呟く

そして意を決して鳴らす

ピンポン…

数秒経つと懐かしいともいえる声が聞こえる

「…どなた？」

一般的にいう営業スマイルならず主婦スマイルでドアを開ける
そしてますます想い出へと返る顔が彼方を出迎えた

「こんにちは」

軽く一礼をする

顔を上げた先にはただ固まっている主婦、満春の母親がいた

「わかりますか？」

沈黙が2人の間を通り過ぎる

この沈黙で勘違いは過ぎ去る

面影がある小さい頃よくしてくれた優しい叔母さん
彼方も少なからず緊張をしている

「憶えて、ますか？」

次々と質問を投げかけるが不発で終わる

ここに彼方が来るのが信じられないと言いたげな顔

「かな、たくん…なの？」

「はい…そうです。」

そう告げた時の叔母さんの顔

幼い頃優しくしてくれた面影がなかった

21・開かれたドア

いきなりの訪問に啞然とするばかり

さつきまでの雰囲気が消え去っていた

我に返えると途端笑顔を浮かべる

「あ、ごめんなさいね。いきなりでボーっとしちゃって…」

そう告げると家の中へ招き入れる

「失礼します」

ヒンヤリとした床を歩いた先にダイニングについた

よく家族で楽しく食事をする部屋

違和感が増すこの感覚

目の前にいる女性はもつと和ませる雰囲気を持っていた気がする

紅茶を入れる落ち着く音がしばし続く

「こんな物しかなくて…ごめんなさい」

「あ、そんなお構いなく」

カチャ…

椅子に座った彼方の目の前にカップが規律よく置かれる

何もすることがなくなつた母親を目の前に

先立つてる沈黙を抑えるように紅茶を一口

「良い香り、おいしいですね…この紅茶」

「ありがとうございます」

「引越し、したんですね。ビックリしました。」

「ええ、ちよつと」

あまりにも簡潔的な答え方に戸惑いを憶える

早く本題に入つて欲しいのか

それとも早く帰つて欲しいのか

何故彼方がここに来たのか気になっている

視線は何処に向かうことなく泳いでいる

そう察した彼方は急かされたかの様に用件へ入る

「突然ですみません。今日、俺がここに来た理由は……」
急かしたことは裏腹に瞬時に母親の表情が強ばる
が、彼方は構わず続ける

「回りくどく言うのも何なんで率直に言いますけど」
「……………」

知らず知らずの内に緊張のあまり息をのむ

「実は6年前、一体何があったのかを知りたくて」
目の前で入れたばかりの紅茶を飲もうとしていた手が止まる
言うならば飲もうとする行為ではなく
心を落ち着かせるための行為に見えた

「な、何かというത്？」

「…身に覚えとかありませんか？満春ちゃ…満春さんに聞いたんですけど」

「ごめんなさい」

何に対してか分からない怯えた顔をちらつかせる
明らかに身に覚えがある様な顔に追求をしない彼方
そしてまた沈黙の波が2人を襲った

「じゃあ…俺が最近満春ちゃんと逢ってることは？」

「……………」

「そうですね」

答えないのは肯定と同じ

しかしうまく会話が続かない

「じゃあ、俺の独り言として」

「え…？」

突拍子のない言葉に穏やかな空気が流れた
母親の顔も緊張の糸が一瞬解けた

「俺、今じゃそれなりのミュージシャンやってますけど昔は落ちこぼれだったんです。だけど何よりも誰よりも早く人一倍努力してここまで来ました。…その道のりは厳しくてうちの社長は俺のこと天才ってはやし立てるけど、そうじゃないはじめは何もスムーズに

こなせなくて一人泣いてたりもした…。俺泣き虫だったから。知ってますよね？よく俺、満春さんと一緒に歌うたってたの…。近所中聞こえるくらいの大声で」

「…ええ」

「笑って楽しくてただ歌ってでも、それは子供の世界だけで、世間ではそう簡単に通用しなかった…。この自身の力は言ったら凡人もしかしたら人並み以下かもしれない。でも上に行きたい気持ちだけはだんだん膨らんで上手いかわからない自分が悔しくて涙流しながらも俺は人の100倍練習したそれを見ていない大人が勝手に天才って連呼してるだけで…」

昔話に続けていく

「どうしてそこまで？」

ここでやつと母親が口を挟んだ

その質問を予測してたかのように簡潔に答える

「ある子と約束、してたから」

「えっ？」

「……………」

答えは心の中で理解し話に戻る

「もう11、2年位前の話です…。まあ、今これでも22なんですけど。小さい頃俺とその子思い出すことはいつても下らない思い出で…。だけどいい思い出より鮮明に覚えてる。体中泥だらけになって帰ったときはいつも親に怒られて」

「……………」

「食べ物も取り合って喧嘩したり…。家出したこともあります…。でも、一番その子と一緒にいて残ってる想い出と言えば俺は歌を歌ってるときいつも満面の笑みで聞いてくれてたことかな？…。歌を聞いているときにしか見せない特別な笑顔、本当に歌が好きなんだなって心の底から思いました。これが歌手選んだ動機でもあります…。もっと楽しませてあげたいって」

「…!？」

彼方の真意に気付いたのか動揺を隠せずにした
そんな変化を目にしたが無視し話を続ける

「小さかった俺達は疑いもせずこんな日がずっと続くんだなって
ただ単に胸を弾ませてました。現実が訪れるまでは…そう、俺は父
親の都合で引越すことになった。当日、必死に泣き叫びそう
になるのを我慢してサヨナラを言おうとする彼女そんな彼女を見て
られなかった。何処に行くのか意味さえ分からないままただ悲しい
ことなんだと悟って」

手元にあったティーカップを力の限り握る

彼方の中で意志とは関係なく昔の記憶が蘇っていく

それが昨日のことのように鮮明に脳裏の映し出されていく

目の前に彼女が現れる…彼方にしか見えない彼女

「俺を見て、泣きたいのを必死に我慢して笑うんだ…何度も涙拭
きながら『泣いてない』って大好きだった笑顔でまた会えるのを信
じて…」

彼方の瞳手を伸ばせば女の子に届きそうな距離

だけど彼方は唇をかんでいるだけだった

高ぶった気持ちを落ち着かせようと紅茶をのどに通す

我に返ると母親の顔から余裕が消えた

「その時、俺はその子とよく歌った事を思い出したんです。歌な
らその子の涙を拭えるんじゃないかって子供心に…。彼女がいつだ
って何処でだって笑顔でいられるんじゃないかって…俺がいなくて
も遠くに行っても悔しかった何もしてあげられない…。泣きながら
笑う彼女を俺自身で守りたかったから俺はこう言ったんだ」

いつの間にか強い眼差しをしていた

行き場所のない彼方の高ぶった気持ちは

「俺、僕は歌手になる』って」

僕は歌手になるッ…!!!

幼い頃の彼方を呼び起こしていた

昔の自分と重なって紅茶に反射していた

「……めてく、ださい。」

思いも寄らない言葉に

声は小さく発されたが

奥で籠ってる煮えたぎった感情が彼方に向けられる

と同時に現実へ戻ってしまった

「やめてくださいっつっ!!!」

ガッシャーーン!!?

勢いよく机を叩くとティーカップが床へ落ちた

彼方の表情は固まった

それは今までの雰囲気をぶちこわす彼女の心からの叫びだった

床を見るとカップは無惨な姿

破片はあちらこちらに散らかってしまった

何故かその時この家に入ってきたときの違和感分かったような気がした

なにか思いつめてる?…怯えている?

そう感じた彼方

「昔話はもういいのっ!!もうたくさんよ!!?貴方は何も分かってない!!!犯してしまったこの意味を!!!」

声を張り上げる

「その貴方の軽はずみな行動で!!!どれだけっつっ!!!?」

このまま壊れてしまうのではないかというほど言葉を浴びせる目の前のことが整理できずにいる彼方

「あなたのその何気ない言葉がっ!!!満春のためにと思った行動が」

彼方は言葉を詰まらせた

「私達家族を…満春を苦しめてるんですっつっ!!!!!!」

「え…っ」

思いも寄らない言葉が投げかけられた
頭が真つ白になっていく

彼方はただ呆然と立ちつくしていた
何故それが自分に言われたのか

脳裏では自問自答が交わされている

「貴方がどれだけ満春のことを知ってるんです！？貴方が華やかな舞台を歩いているとき満春はどんな気持ちで…。何もかも知っているような言い方をしないで！！？貴方に何が分かるんですか！！どうして満春は笑顔を見せなくなつたのか。全て知ってここにきたの！！？貴方にはここに来て欲しくなかつた…っ。どうして今になつて来たんですか！！もう平穩そのものだったんです」

「……………」

「貴方のやつていたことは自己満足よ！！…娘を守る…軽々しいことを言わないでっっ！！貴方なんかは何が守れるっていうんですか！！…うわあ…」

母親はヒステリーになりかけていた

自分が今、何をしているのか

自分が今、何を言っているのか

分からない状況に今混乱しさえしている

「…って下さい。帰って下さい！！！」

「……………」

「何してるんですか…早く、さっさと帰って下さいっ！！…！！
帰って帰って帰ってもうかえって…！！…！！えっ！！…！！…！！」
目の前で頭を抱える満春の母親
もう一つ置かれていたカップをひっくり返しそうになったとき

インターホンも押さずにマコが入ってきた

片手に2つのカバン、きつと自分のと満春のだらう

「……っ!!」

思わず声にならない声を上げるマコ

部屋にこもる異様な空気

床に散らばる粉々に割れたティーカップ

今、入ってきたばかりのマコにもおかしな光景と容易に把握できる嘘でも楽しい一時を過ごしているようには見えなかった

そこにダイニングの隅にいる彼方に目がいった

「……!!?!?!?か、なた……」

状況負けしそうなマコは微かに彼の名前を呼ぶ

こんな修羅場の中立ちすくんでる二人

それに見かねた母親はますます顔を歪ませる

「どうして!!?!?!?どうして帰らないのっ!!?!?!?…帰ってって言うてるでしょ!?!?もう貴方の来る場所じゃないの!!?!?二度とこないでっ!!?!?出てっってください」

咄嗟に手元にあつた受け皿を投げようとする

行動に気付いたマコは母親に駆け寄る

「な、何してんだ!!?!?!?くっ、ちよっ!!?!?おばさん!!?!?!?!?!」

後ろから回り込み受け皿を奪い取るうとする

マコも真っ正面から見ていられなかったのだ

何故ここまでの状態に陥ってしまったのか

何となく察しがついている様子のマコ

だからこそ真っ正面から母親を見れなかった

だが、錯乱している者の力に完全に圧倒される

床に払われるがすぐ体勢を立て直す

理性の切れてしまっている人が相手力の加減を忘れてしまっているマコをなぎ倒す極めて簡単だ

「早く!!?!?!?帰って!!?!?!?うわあああああ……!!?!?!?!?!」

「!!?!?!」

「お、おばさん!!?!?!?!?!」

床に膝をついたがためらわず母親にまた駆け寄る

とにかく押さえつけなくてはならない

今の母親では話にならない

そう、考えたのは羽交い締め状態

「離して……！！！！？はあはあ」

がんじがらめにされてるにも関わらず張り上げた声を出す

もう、声はかれ声にならない声を発していた

それでも一心不乱に叫び続ける母親を目の当たりにし

マコより彼方の方がショックを受けていた

ただただ目の前のことに動揺を隠せない

「落ち付けて言ってるんだろっつっ！！！！」

そんな彼方を後目にマコは声を倍にして張り上げる

外まで怒鳴り声は響いたんだろう

ずっと鳴いていた鳥達が一斉に飛び立っていく

途端時が止まったかのように静まり返った

「……………あ」

冷静になったのか脱力した声が母親の時を動かした

力を失った母親から静かにマコは掴んでいた手を離す

枯れていく花のように床にへたり込む

「お、おばさん……」

なんと声を掛けて良いのか分からない感じのマコ

とにかく無事なのかどうか確かめていた

「あ……まこちゃ」

自分が何をやってしまったのが辺りも見回す

すぎる物がなくマコの制服の袖を必死に掴む

力の宿っていない瞳

きつと今は何を言っても受け入れられないだろう

気持ちひしひしと痛いほど伝わってくる

そんな表情がマコを不安にさせる

「ご、ごめんなさつ… 1人に、… 1人にさせて」
何も言っておげられないマコは言うとおりにここを去るしかなかった
ゆっくりと席を立った

張りつめた空気から解放されると
もうすっかり夕日が顔を出していた
辺りは夕日に身を任せオレンジ色に染まっている
雑談をしていた主婦達は夕飯の支度へと場を移したようだ

「……………」

何も話すことがなく無言が続いていた
そのマコの後ろ姿を彼方は意味ありげに見つめる

「あのさ…」

沈黙はマコの言葉で破られた

「あんた、もう帰った方がいいぜ。それと… ここにはもう来ない
方がいい」

「え… こない方がって」

何故そう言われるのか分からないらしい

理解できてない彼方に構わず背中を見せる

「あ、ちよつと待って!!」

改めて思う冷静になつたから分かるけど

さっきの様子から見て言い方は可笑しいけど何度見ている

一度や二度の出来事じゃないって事

この子は6年前の何か知ってる

彼方がここに来た理由を知っている

だから来ない方がいいと言ったと思うし

そう解釈した彼方はマコに腕を引っ張っていた

「事情知ってるなら知りたいんだ…! 頼むつ… 教えてくれ!!」

「…話？」

「ああ、何でも良いんだ。君は知ってるんだろ？」
マコは遠くの風景を見つめる

「勝手に感じてるだけなのかもしれないけど…俺の知ってる6年前とまったくかみ合っていないんだ！！一体どういうことなんだ！？」

景色のまた向こう側を見ていた瞳が足元へ落ちる
何か思うところがあるのだろうか

「……………」

「分かった」

そう言いながらマコは歩き始めた
ついてこいと合図かのように

淡々と歩き話の出来る場を捜す

時刻は沈み始めていた夕日が知らせてくれた

22・6年前の真実（前編）

満春の家から坂を下りた数分の公園に場所を決めた
夕日が沈み始めた今

周囲は見渡さなければ見つけれないほどの人の少なさ
きつと子供は遊び疲れ帰った後なのだろう

遊び散らかした後があるシャベル、ジョウロ、作りかけの砂の城
ただいないのは遊んでいる子供達

その中で1人寂しげにブランコに乗っている少女がいた
きつとまだ来ないママの迎えを健気に待っているのだろう

ここからでもはつきりと瞳でキョロキョロと捜していた
その時夕飯の作り途中なのかエプロン姿のママ

ママを見つけるとブランコから飛び降り懸命に走る
小走りで駆け寄りながら少女へ近づくと母親

少女は自然と満面の笑顔を浮かべて抱きつき夕闇の中に姿を消して
いく

……とても楽しい団欒が待っている家に……

「ごめん、待たせたね」

その光景を眺めながらベンチに座っているマコにジューズを渡す
次第に少女とお母さんの姿は見えなくなる

そして辺りには2人以外一人としていなくなった

「あ、どおもっ……」

渡された缶ジューズを受け取る

思った以上に冷たかったのか真つ先に太股の上に着地させる

「昔はあんな感じだったのか？…満春んちは」

「…えっ何故？」

「あ！私はさっ、中1からのあいつしか知らないから……」

消えていった少女の影を見つめながら言う

「…ああ、あんな感じだったかな」

そう答えが返つてくると同時にマコは顔を曇らせた

「んで、どこから話せばいいんだ？」

「なんかゴメン…勢いでここまで連れて来ちゃって、
ずっと謝るきつかけを捜していたのか突然謝る

チラツと彼方に視線を写すマコ

視線は下を向き缶を見つめていた

「ハハツ！何落ちてんだよ…全然気にしてないって…！」

いつものおちゃらけた性格

「んまあ、気にしてないってこともないけど…」

「……」

「満春の母親さ、…精神不安定なんだよ。」

彼方の顔が一瞬曇る

「6年前…」

まだ開けてもいないコーヒーを彼方は見つめていた

「なんか解せないって顔だな」

マコはさつき貰ったコーラーを開ける

シュコツ！…シュッ

誰もいなくなつた公園に缶の蓋を開ける音が響く

目立つた音をたてるとコーラーを一口飲む

何気ない仕草なのに缶を持ち上げる腕が重く感じる

まるでこれからの話が長引くと言うことを予告しているかのように

「ああ正直…俺には何がなんなのかまったく」

と、頭を抱える

顔を伏せ額を隠した指の隙間から瞳を覗かせる

「さつき言われた。貴方にはここに來て欲しくなかった、どうして
きたんですかって」

マコは黙って彼方を見つめていた

その表情は今まで見てきたマコとは別人のもの

「…俺は満春に負担を掛けていたのかな…。」

顔を上げた彼方は未開封のコーヒーをベンチの置く

カンツ：中身の入っている缶は鈍く響いた
そして深いため息をつく

まるで抑えきれない苛立ちを必死に鎮めるかのように

「俺にはもう何が何なのか分からないよ……。一体さ、6年前に何があつたの？」

起きた出来事になんの理解も出来ない自分

自分だけが分かってないこの状況に苛立ちは増すばかり

気付かぬ間に手のひらを硬く握り締めていた

「あのさ、6年前のこと……」

「えっ？」

「初めにあんたが知ってる限りの6年前を話してくれ」

逆にマコから要求されるとは思わなかったのか

彼方は豆鉄砲をくらった鳩のような顔をした

だが、すぐさま思考を元に戻した

同時に体勢を立て直し思考を言葉に代えた

「6年前、満春と会う約束したんだ。デビューが決まったら一度2人で会おうねって電話越しでよく話したから……離れててもいつも嬉しそうな声で『頑張れ』って励ましてくれた……俺が弱音をはいたときも、挫折しそうになった時も本当いつも変わらない声で受話器越し満春は満春のままできてくれた」

「……。」

ただただ真剣な眼差しでマコは聞いていた

「俺にとっての安らぎだった……それほど日々現実を突きつけられる厳しい芸能界気が休まらない世界なんだ。ほら、やっぱりなろうってんだから誰よりも早く誰よりも目立っていかなきゃならない……個性がないやつなんてすぐにお払い箱、その人のやる気や意気込みなんて関係ない……商品価値がなきゃもう終わり。うちの事務所は他のところよりも厳しいだろうね……だから大手なんだって言ったらそれ

までだけど」

程良く温まってしまったコーヒーの缶を一気に開ける
手を止めずにそのまま口へと持つていく

「その中で、何故か社長は俺のことを気にかけてくれて…ただ実
力が伴ってなかった。だから本気で必死に頑張った…やっぱり社長
がどんなに俺には光るものがあるって言っても俺以外にも歌うまい
奴やダンスが出来る奴なんて星の数ほどいたから…でも俺がそう思
っている中でも落ちていく奴っているんだ…」

「……………」

「幼心に思っただらうな…いつか俺もお払い箱になつてしまっ
つてね！俺は他の奴みたくお払い箱になるわけにはいかなかった満
春がいてくれたから…電話越しだけどあいつの声が聞こえるからこ
こまで来れた…世間では天才だの音楽界を牛耳るだの言われてるけ
ど」

段々暗くなつていく中に2人の姿は見えなくなりそう
だったが突然公園の電灯が灯る

「ああ、ごめん…これじゃただの昔話か自慢話だね」

でもこれが彼方の全て

「いやっ、私も聞きたかった…」

完全に灯った電灯はまるで映画のワンシーンのように2人を移した
彼方達の影が伸びていた

「そうこうして…俺のデビューが決定した。会いに行こうとした
当日今でも信じられないくらい憶えてるよ。逢う約束も電話でだっ
た6年前の夏から秋に変わる頃あれは土砂降りの雨の日だった…満
春に会うのを反対されて速瀬さん、俺のマネージャーと大喧嘩した
後押し切つて傘もささずに事務所を飛び出した。そして待ち合わせ
た時間から10分遅く到着したよ…だけどいなかった、何処捜して
も見当たらなかった」

「……………」

「翌朝まで待つてたけど満春は来なかった…その後その場で俺は

うだ！！あなたが電話しなかった日が続いたときどれほど辛い思いしてたのかまったく知らねーからそんなこと言えんだよ！！」

「どうであれ事実を知らない俺にはそうケリをつけるしかなかった」

「毎日毎日たった一人の電話を待つては悲しい顔して待つては泣いて…寂しさを隠してた知らないだろ…受話器を置いた後いつも泣いてたよ…」

足に力を無くし地面にへたり込む

「でも、自分には電話越しで笑って励ますことしかできないって…」

座り込んだと同時に今まで我慢していたものを吐き出すかのようにマコの瞳から次々と涙が零れた

「それなのに…分かってるんだよ。時々しか出来ないことくらい寂しい思いをさせるもの彼方が頑張ってるからだつて…辛くないはずはないだろうし、だけど魂が抜けた満春を見ると…ごめん」
そう言い終わったマコは止めどなく流れる涙に顔を覆った

「……………」

顔を隠すだけじゃ補えないほどの涙に夜の静けさは容赦なく襲う
不意にマコの肩を優しく叩く

そしてゆっくりと静寂に腰を下ろしマコの目線に合わせる

「ごめん、俺が言える筋じゃないけど」

視線を向けないマコに構わず瞳を見つめる彼方

「酷いことを思つてたつて分かつてる。だけど今回満春に似た満春に出会つて俺はまだ忘れられてない事に気付いた…。何処かで満春を捜してた。いつも…。だからこそ本当のことが知りたい…どうしてこんな誤解が生まれたのか聞きたい」

マコは彼方に瞳を合わせる

不安な表情を見せていた彼方は凜々しく決意した表情に変わる

まるで何もかも受け入れる体勢が整ったと言わんばかりに

一瞬強い風が吹いた

突然な風はますます彼方の決意をより固くさせる

その顔から感じ取ったマコは

終わりが見えなかつた涙を無理矢理拭った

まだ上手く立つことのできない力を無くした腰を

震わせながらゆっくりと立ち上がる・・・

「……………話すよ、全部。」

無言の承諾と共に

マコの頭の中は複雑に思考が絡み合っていた

今までにあったこと、一体何があったのか・・・

何処から話せばいいのか

彼方は思っていた通りに彼だった

全て話すつもりでついてきたから

例えそれが互いを傷付ける結果になつたとしても

23・6年前の真実（後編）

その夜風で高潮した額を当てながらマコは口を開いた

「今、満春が感情が欠落しているのは知ってるな？」

「ああ…知ってる」

再会してからの満春の表情を思い浮かべる

彼方は静かに首を縦に振った

「そつか…」

すっかり暗くなった空を目を細め見つめるマコ

彼方はその仕草をただ黙って見つめる

「そう、昔の満春はクラスでだって明るかった…あの時は確か私らはお互いを知らなかった。満春は隣のクラスでその時はあまり顔見知りじゃなかったけど人懐っこくて、人が良くて、嫌みがなくて…そしてさつき彼方が言った通りよく屈託なく笑う奴だった」

虫は泣き止み静まり返った夜の公園を迎えていた

夕日は姿を消し朝を再び迎えるための準備を始める

辺りが見えない中、明かりといえは連なるベンチに一つだけ

その電灯は疑うことなく忠実に彼方達を照らしていた

「誰もに慕われる奴も悲しい顔をするときがあった…それは決ま
って電話の前にいるとき」

「……………」

「確かに人気者の満春に惹かれたのもあるけど…時々見せるそんな表情が私には気になって仕方なかったのさ」

空へと向けていた瞳は地上へと戻る

もぬけの殻の公園を当ても無く見つめる

「だけど、笑った顔も時折見せる悲しい顔も…全てある事件で跡形もなく消え去った」

誰もいないはずの公園を

何も見えない木々の奥をひたすら見つめ続けた

まるで脳裏で描いた光景がそこに浮かんでいるように

一体その闇の中に何が見えているのか到底想像がつかない

「悪夢のような出来事だった。何年たっても忘れやしない6年前」

…あれは夏の終わりの頃

初めて口を利いた時よりは少し親しくなった時

私は親から買いた物を頼まれた帰りだった

「ったく!!ふざけんなっ!!?自分は買いに行かないからって

重いものばかり頼みやがって」

丁度、駅前の通りを差し掛かっていた

その時目に入った女の子がいた

何故かそわそわとしている満春だった

「あれっ?…どうしたの?」

この暑さには鉛にしか思えないスーパーの袋を抱える

「えっ!?!…ああ、マコちゃん」

暑さにも関わらず「らしい」笑顔を私に向ける

鉛のはずだった袋が軽くなるのを感じた

「何…待ち合わせ?」

ピンと元気よく親指を突き出す

「ははっ…それ親父くさいよ!!」

「こつこつというのは思い切りが大事なんだよ…。言われると恥ずかし

いだろうが!それより、もしかして電話の彼氏?」

事情は説明されてないけど予想はついた

悲しく見つめる電話の相手

だからあえて意地悪な質問をした

「そっか!…なるほどね。やっと会えるんだ、その人に…よかつ

たな』

そう言つと何も言わずまたまたらしい笑顔が返つてきた

私は何だか照れくさい気がした

『ああ！！安心…これでぴーぴー鳴く満春をなだめる役から解放されるう！！』

必死に隠し私は精一杯の皮肉を込めた

『…失礼だなあ』

気に触れ怒つた顔に変わる

『あれえ…焦つてますなあ??？』

『あのね！そんなこと言われると誰だつて…』

私は一息置いた

『まあ、何はともあれ…あれだけ寂しい思いをしたんだ。ピンタの一発や二発くらわしてやれ！！…『ふざけんなあ！?』って顎に一発なつ！！』

顎にパンチする真似を見せる

『…マコちゃん』

『あ、なんならどう殴られると痛いか教えようか?』

『はははあ…殴りたいのはマコちゃんなんじゃない』

いきなりの指摘に言葉を失う

そりゃそうだ…こいつは殴るところか文句一つ言わなそうだもん

それがこいつのいい所でもあるけど

悪いところでもある

俗に言う一人で何でも背負い込むタイプだ

『ああ、かもな！！じゃーなつ！』

気付かない程度に軽く微笑んで後にした

再び腕に襲ってくる試練と格闘しようと思構えをしたとき

後ろから聞き慣れない声が耳にかする

『あのさ…あんた』

不穏な空気に足を止め振り返ると見知らぬ人が満春前に立ちほだかっていた

それは1人2人じゃない5人位はいる

怪しい雰囲気で満春を見つめていた

なんの用事なのかその時分からなかったけど

どう見ても満春は知り合いといった感じの表情をしてなかった

『……？』

相手も友達という間柄にはどうしても思えない

でも、これだけは確信した嫌な予感がする

あまりにも悪い予感だ

だけど、私が確認のために一応満春に聞いた

『この人達知り合いか？』

再び満春の元に戻る

小さく耳打ち

『あ、…え、ううん全然』

そう話す側から不信な空気が放たれている

知り合いじゃないのなら私はためらうことをやめた

こんな奴らに関わる筋は無い

『行こうっ…』

言い終わる前に腕を引つ張った

満春も感じ取ったのか抵抗なく無言で私の後ろからついてくる

『ちよつと待って!!』

相手にしなかつたのが気に障ったのか

3人くらいがその号令に従い目の前に立つ

声がさつきより張りあがって聞こえた

よりドスの利いた声で私達の足を止める

すかさず5人の中で一番偉いのか身なり悪そうな女が話しかける

それはあからさまに満春のほうに視線を向けていた

『私らその子に用事があるんだけど…』

用事があるなんて温和な瞳じゃない

ますます嫌な予感的中した気がした

『いいから行こう…』

『待てっって言ってるだろ!!…!』

『…!!…!』

横暴な言葉と同時に満春の腕が引つ張られる

思わず満春は体勢を崩してしまった

『あんた、桐谷満春でだろ?』

『…っどうして貴方達に答えなくちゃならないんですか』

彼女には似合わない表情で女を睨む

それに対抗するように女も負けていない

女の背後からも睨み付ける奴がいる

『言われたこと答えればいいんだっ!!』

『名乗らなくても知ってるんじゃないの?…馬鹿みたいに自己紹

介しなきや駄目なの?…幼稚園児じゃあるまいし』

腕を引つ張つたこの人物を完璧に敵と見なしたようだ

満春の眼光に親しまれていた微笑みはない

容赦ない怒りをむき出しにする

『このっ!!…こいつ生意気なっっ!!…?』

手のひらを振り上げるそれは空中で止まった

思わず目を伏せる満春

だが思い止まったのか平手打ちは空中で終わった

どうやら人だかりを気にしてのようだ

『…っいいからついてきな!!』

怒りを抑えて言葉にする

『なっっ!!…そんなことさせるかよ…満春行くことないよ!!…!』

『ちっ!おい、あんたには関係ねーよ!!…!』

引つ込んでると言わんばかりに私の身体を突き放す

痛いと言ってる場合じゃないひるまず口を挟む

『関係なくなんかねえ！あんたら満春に何するつもりなんだよ』

『はあ？！何って話し合いだよ…なあ？』

後ろにいる仲間と顔を合わせる

『話し合い???…手を挙げようとした奴のいうことじゃないけど!?!』

私はリーダーと思われる奴に人差し指を突き出す

気に触れたのか頭に血がのぼったようだ

思った通りの単細胞

拳ははつきり分かるくらいに震え顔は歪んでいた

満春に限って何したのか分からないけど

少しは私の方に怒りを向けてしまえばと思った

満春一人にしてしまうとやばいって

『あんた、手が震えてるよ。また力で訴えようとするんだ…馬鹿の一つ覚えだね』

ビンタ一発でもしたら終わりだ大声で叫んでやる

わざと高らかに笑ってやった

相手がちよつとでも私の方を気にするように

理性が切れたのか今度は迷いもなく思い切り腕を振り上げる

それが振り下ろそうと体勢と変えたとき

『待って!!!!!』

いきなりの怒声に持ち主が分からなかった

ゆっくりと周りを見渡すと瞳に入ってきた

『用があるのは私だけでしょ!!!?…だつたら余計な事しないで下さい!!!』

凜とした声で立ち向かっている満春

女は標的をまた満春へと向ける

『なつ!!!…満春っつ!!!?!?』

『いいから、マコちゃんは黙ってて?ねえ…?』

まっすぐに澄んだ瞳が私の口をつぐませただけど心の中では疑問で溢れかえっている
こいつらは一歩お前が目当てなんだと

『ふんっ！！最初からそうすりゃいいだ…』

そして先頭を切って歩き出す女

後ろから私に眼を飛ばしながらついていく他の4人
気にすることも無い視線は素通りした

私が気にしてるのは満春

相手の誘いを受け入れてしまった満春が気になって仕方なかった
時々目に入るあの女の満春を見る瞳

言葉して男みたいな暴言

私も言葉遣い悪いけど似ても似つかない

尋常とは少しも思えなかった

嫌な予感確信へと変わらずにいられなかった

『満春…！』

思わず満春の名前を呼んだ

『行くな』そう言おうと呼び止めた

だけど、私がそう名前を呼ぶと振り返っていつもの微笑みで返して
くれた

いつも友達に向けるいつもどおりの笑顔

『また学校でね…！』

やっぱり嫌な予感がした

満春が笑顔でいればいるほど

もう、満春には会えないようなそんな気がした

動こうと懸命に指示をする足は金縛りのように地面に縛り付けた

でも、私は的中しないようにと考え方から消そうと必死になっていた

私は数分立つてもその場から離れようとしなかった
ただただ立ちつくしてるしか

満春の消えた方向を眺めていることしか出来ない
彼女の姿をもう一度見る限りは…

その状態があと15分続いた時

いなくなった道からさっきの連中がフラフラしながら出てきた

『!!!!!!』

視力はあまり良いほうじゃない

だが、一目で理解できた

彼女たちの動きが異常なことを…

怯えているような表情

あまりにも足元がおぼつかない

何回も転んでは起き上がってその場から離れようとしているように
見えた

身体が恐怖で打ち震えているように見える

嫌な予感は的中中だって頭の中で連呼する

やっぱり一緒について行けば良かった!!

予感がしたのに何で思い過ぎてしまったんだ…

でも気のせいなのかもしれない

私の思い過ぎしなのかもしれない

迫ってくる真実に思いきって口を開いた

『おいっっ!! 満春はどうしたんだよ!?!』

肩を掴んだ手には微かに血が付着していた

『ひいっ!!!!!!?!』

私の掴んだ手に過剰反応する

『っ!!!!?!』

考える余地もなく真っ先に逃げてきた女を振り向かした

相手は放心状態…意識はそこになかった

この状況を信じたくない

思わず目を伏せたくなくなった…それは出来ない
心臓は一時機能を忘れてしまう
嘘なら嘘だって誰か言って欲しい
嫌な予感はしただけど…こんな
女の服には赤い絵の具をぶちまけたような跡がついていた
見てなくても分かる…

これは…これは…血だ。

一体誰の血…

この女は無傷だ

…考えられることは一つしかなかった

こいつらが怪我が無いとしたら

その結論に達したとき止まりそうな心臓は分倍にスピードを上げた
苦しい、痛いなんて言ってられない

動悸は私をまったく無視して加速をあげていく

嫌なバクバク音が体中に浸透していく

視界が真っ白になっていくのをまるで第三者のように見つめていた
嫌な汗が背中を伝っていく

『わ、わ、私は悪くないっ！あ、ああ、っあいつがっ！』
とりつかれたかのように首を激しく振る

さっきの威勢は見る影もなく消え去っていた

今はまるでこれから殺されるみたいなお表情をしている

そんな女の行動に一気に我に返る

『あ、あいつって誰だよ！…おい！…おいっ！』

『私じゃない、私じゃない！！？私じゃない私じゃない私じゃ
ない私じゃない！！』

会話になっていなかった

というか、会話にならなかった

一瞬にしてイラだった私は女の手を乱暴に払った

私じゃない…私じゃないって一体誰が。

『……………!!』

その時気付いた

あの通路から出てきたには確か4人

一人足りない!!

あの中で一番満春にくっついてかかってくるたあの女

『…なんでまさかっつ』

ダツツツ!!!!

勢いよく駆け出す

この予感は当たって欲しくない

でも間違いないく確実に

嫌な予感がする、嫌な予感がする、嫌な予感がする!!

私は無我夢中で駆け出した

心では否定する

そんなはずない…だけどさっきから震えが止まらない

無理矢理震える足を叩き走る

ただ行かなきゃならない

頭では何回も最悪な事態がこの数分間で繰り広げられる

そう頭の中で警告していた

カランカラン…

何か蹴飛ばした気がする

だけど気に何かしていられない

『ハアハア…ハアハア』

まだ全然走っていないのに意志とは反対に息が荒れる

細い路地を幾つも幾つもぬけ

目的の場所へと足を運ばせる

バツツツ!!!?

……っ。

信じられない光景が眼球に飛び込んできた
心臓は大きく跳ねる

まだ頭ではその状況を理解できてないというのに
そのまま後ろに倒れそうになる

足に力が入らない
手に力が入らない

変に静まり返っている周りの騒音
風や蝉の声は止んでいた

やけに埃っぽさを感じる路地

丁度電信柱の影に満春はいた

…周りには血が溢れていた

笑顔がない…動いてない…立ってない

満春は指先ピクリともなくぐったりとしていた

私はこの状況を目を背けたくなるくらい信じたくなかった
つま先に力をこめ

近づこうと足を動かそうとその時

『……………えっ!!!?!?!?』

スローモーションのように視線を移すと

今にも獣に成り果てんとする女

女は眼球が飛び出てきそうなほどの殺気で満春を睨んでいた
睨んでいるだけで相手が朽ちそうな

よく見ると水道管の切れ端のようなものを握りしめている
先端には…血が、血液が付いていた

それは生々しく

いわゆる道ばたの凶器である

私の心臓は何度も何度も早鐘の打つ

24・願う笑顔

「それから私は運悪く壁に激突して気を失ったんだ…。その後のことは知らない。気付いた時には病院のベットの上」

彼方の横でマコは小刻みに震えていた

きつと思い出したくない過去に還ってしまったのだろうか

彼方は自分のジャケットをマコに羽織らせる

肌寒さで震えているわけじゃないと知っていながら

大丈夫なんて声をかけられなかった

「……」

彼方は無言で首を振る

「今でも忘れられない…あいつの声が6年経っても鮮明に蘇るんだ。すべて…そして気がついたら私と満春は救急車で運ばれ気付いたらもう…」

押さえ込むように瞳をそっと伏せる

沈黙が2人の間を通り過ぎた

「満春は記憶を失っていたっ！」

「……！！！」

予想はしていたもののショックは隠せない彼方
やっとの事で言えた言葉に涙がこもっていた

「その時の医者が言うには…頭中心に強打した後が数力所あった
つて。ちよつと運ばれるのが遅かったら…っ！！！」

「もういいよ」

痛々しく見えたマコの言葉を制した

怒りで震え身体中が煮えたぎる

手を握りしめ声を掛けるのもためらわれる

それはきつと連中への怒りもあるけど自分の不甲斐なさにも怒りを
覚えているのだろうか

「うっ、…！！！」

ますます手に力が入る
声を掛けることが出来ない
声を出すことが出来ない
そんな2人の間に夜の冷たい風
と、マコの抑えられない悲痛の声だけ

.....
「ゴメンなんか…取り乱したりなんかして。ハハッ、話の途中だ
ったのにな」

「もう、いいよ。分かったし…なっ？」
と、優しく制する

それは彼方の出来る精一杯

「いやっ、やっぱり全部話すよ…」

いつものマコに表情が戻る

「この先が重要なんだ…あんたも知っておかなきゃいけない話な
んだ」

ここまで話すのに随分時間がかかったと思う
そうこうしているうちに話は続いていく

「この事件で前とは違う失ったものがある。さっきも言ったけど
『記憶』がその一つ。目が覚めた時満春はこの事件のことはもちろ
ん家族、学校、名前そして私やあんたのことも忘れ去ってしまった。
医者が言うには頭を強打されたこともあるんだけど一番は事件のシ
ョックからなる喪失」

「.....」

「一時的なものと判断した…だからリハビリも含め日常生活にお
ける常識、名前から家族、友達に至るまで時間はかかったけど次第
に思い出していった。けどあんなの記憶だけが思い出せないまま時
間は過ぎていった。きつと思いつくのが怖いんだ…医者もそう言っ
てたし…まあ、いわゆる『引き金』なんだろうな」

彼方の眉がピクリと動く

「親はそれで賛成だそうさ。だからこれ以上の治療も望まなかつ

た…。退院は　すぐだったよ。」

気付いていないマコは話を続けていく

「それ以外の怒り、悲しみ、喜び、あいつは事件以来ちつとも笑わなくなった。冗談も言わないし怒りもしない」

「……………」

「きつと自分の軸になるもの、喜怒哀楽の軸になるものを失ってしまったからだと思う…。あいつの中心は6年前に壊れてしまったんだ。いままでの自分を支えてきた柱をさ…。だから思った満春は本当に彼方のために笑ったり泣いたり怒ったりしてたんだって…。」

「昔はあんなに笑っていたのに…。人懐っこい笑顔で友達たくさんいて…。羨ましいほどに。今じゃ、抜け殻魂のこもっていない人形みたいになっちまって…。誰かなんと言おうと何とかしてあげたかった」

「……………」

「あんだだつて心当たりあるだろ…?」

彼方は答えられずにいた

それは彼方の気持ちは違うところにあつたからだ

「あのさ、ひとつ聞いてもいいか?」

長いこと開いてない口を開く

さつき思い立った疑問

「なんで、おれが引き金なんだ?…」

マコの動きが止まった

「それは」

「それは、あの事件起こした連中…。あんたのファンだったんだ

「よ

「……………!!!!?」

言葉を発する力を失った

頭が一気に真っ白になる

「なっ…。なん、だつて…。!!!」

驚きを隠せない彼方を横にマコは話を続けた

「あの後、すぐに警察に捕まったんだ…満春を殴った奴は覚えい
剂所持。…してそのまま鑑別所…」

「そ、そんなはずがない！！！！…」

「…」

「どうしてそんな見透かした…こつちの行動を把握してるような、
タイミング良くそんな奴らが満春を？…！！」

「忘れたかのように会話は止まってしまった」

「何かに思い当たったようだ」

「そんな彼方の頭の中を呼んだかのように口を出す」

「残酷な物言いだけど、考えてるとおりだと思っぜ。」

「……！！」

「マコ言葉を聞いた彼方は思わず顔を伏せる」

「それしか考えられない。…あんたにとって投げ所だった満春の
存在が…」

「頭の中それは今、速瀬の顔しか思い浮かんでいなかった」

「邪魔だったんだ」

「過剰なほどの物言い」

「満春と聞いたときのあの反応絶対何か知ってる」

「だが心の中で結論が出たかのように」

「彼方の心臓は不思議と落ち着きを取り戻していく」

「でもここまで探ってきたけど…別に私は犯人を捜したい訳じゃ
ないんだ。確かに悔しくて仕方ないんだけどさ」

「彼方は伏せていた顔を上げる」

「ただ正直今までの行動が最前とはどうしても思えなかった。満
春の母ちゃんは反対してたけどお前に逢わせるの。あの出来事を思
い出して背負っていくにはあまりにも酷だって…一理あると思う。」

「でもあれじゃ、あいつはまるで生きた人形…昔の満春を知ってるか
らこそ辛いんだ、見てるのが歯がゆくてイライラして」

「……。」

「大それたことを言うつもりはないけど…私が思うことは一つ、」

昔の満春に戻って欲しい…瞬間まで一途に会える日を待っていたあいつにこんな結末はあんまりだ」

そんな願い事を言葉にしながら瞳は夜空を仰いでいた
まるで流れ星を捜しているかのように

「でもきつと…私が出れることは多分ここまで」

「……………」

「色々と似合わない小芝居してきたけど。何でもいい…あなたに触れさせたかったんだ。望む結果が得られなかったとしても」

「え！？」

目を丸くする彼方に向けて苦笑する

「そろそろ話そうと思ってたんだ！…どうにかしてあなたと接触してさ！！だけどそつちから来てくれた。会えなかつたら事務所に殴りこみに行くトコだった。改めて初めまして…満春の親友やつてるマコ…荒木マコと申します！！」

「あ、こつちこそ…えつと」

間抜けな表情を浮かべ自己紹介をする

話が話だっただけにちよつと可笑しく見えた

が、その言葉はマコのかき消された

「ああーっ、いいよ！！さつき言つたる？自称『ファン』だつて知ってるよ！！奈津美程じゃないけど知ってる。これからよろしくつてことで…それにここから先は彼方にしか出来ないんだから…」

そう言ったマコは心なしに微笑んでいた

彼方はその言動行動を目で追うばかり

「あなたと再会して満春は変わった。時々見せる何気ない仕草に嬉しく感じるんだ！！今の満春なら多分、あなたになら笑ってくれと思う…だけど『満春』はどうあがいても私じゃ取り戻せない…！！私は笑顔になって欲しいんじゃない。昔の満春に戻って欲しいんだ…」

「……………」

「言っただろう？…あんたを忘れたことで怒るのも泣くのも笑うのも失ったんだ…可能性はあんたにある」
彼方に指を立てる

「満春が私が欲しがってる記憶は彼方…あんたなんだよ」
真剣な眼差しで彼方を見つめる

その言葉、姿全てが彼方の身体の中を勢いよく駆け抜けた
そして心の奥底で鋭く突き刺さる

彼方の知らない何処がでうなりをあげた

雨の中ずぶぬれになりながらも

6時間待ち続けた少年の時は一歩また一歩と進み始めた
笑顔を失った彼女の元へと…

25・一つの決心

気がつけば月傾いていた

夜が深い証拠

公園から帰る途中風は少し強さを増した

でも今は丁度いい風で

心地よさそうに部屋のカーテンを揺らす

それをベットで横たわりながらただ眺めていた

何をするではなくただ思いにふける

マコと別れたのは2、3時間前になる

話し終えた後マコを家まで送り

今の今まで眠れない夜を過ごしていた

寝れるわけがない

知らなかった真実があまりにも多すぎる

自分だけ知らなかったというのもあまりのショックだ

気になっていたとは言えそれは言い訳にしか過ぎない

満春のことを忘れようと必死にがむしゃらに仕事していたあの頃

とても情けなく見えてくる

終いには自暴自棄になって無茶なことをたくさんしてきた

もう覚えていないほどだ

仕事に打ち込むことで全てを放棄したかった

彼方は暗闇の中夜空に浮かぶ星だけを頼りに

ただただ思いにふけていた

今日一日起きた出来事、会話がよみがえっては消えていく

『来て欲しくなかった！！…出てったださいっ！！！！』

『それは自己満足よ…』

『遠くからでも娘を守るなんて…っ！！』

『出てってえ！！！？』

満春の母親の言葉が脳裏に浮かぶ

今にも崩れ落ちそうな表情が目には焼き付いていた
目の前に昼間の信じがたい光景が繰り返される
割れたカップ…そして泣き叫ぶ叔母さん

そのたびに彼方の心臓は気持ち悪い脈動を繰り返す

『満春を苦しめてるんです！！！！』

深くため息をはき

それを消そうとするかのように荒々しく寝返りを打つ

振り切れる事無く脳裏に襲い掛かる

公園でのマコの声が脳裏を突き抜ける

『…6年前の事件で記憶を無くしたんだ。今じゃ、抜け殻…魂の
こもっていない人形みたい』

『どれだけあんに会いたがっていたか…』

マコの取り乱した顔が視野に写る

眉間にしわが寄るくらいに力いっぱい目を閉じる

『頭を中心に強打した後が数力所あったって』

目に見えない沈黙は容赦なく襲う
その度に何回か寝返りを打つ

『あんたのファンだったんだよ』

悪い夢でも見たかのように飛び起きる
身体を起こし首を振る

ジツとしてられなくなりベットに座る
相変わらず夜風はカーテンを泳がせていた

『ファンだったんだよ』

「…つく！」

ベットを降りた足はキッチンへと向う
暗い中から冷蔵庫を探し出しミネラルウォーターを取り出す
酷く喉が渴いたのか

3分の2は入っている水を瞬く間に飲み干す
まるで余計な考えを吹き飛ばそうとするかのように

『昔の満春に戻って欲しいんだ…』

マコの言葉がさつきから何回も重なる
鈍器で殴られたかのように響きわたる
その痛みにだんだん慣れてきたとき
ある決心を彼方は固めていた

『満春が取りもどしたい記憶…あんたなんだよ』

マコが指を立てたところがヒリヒリする
荒々しく飲み干したペットボトルを置くと

窓のあるさつきまで寝ていた寝室へと歩く

床が軋む中窓から漏れる僅かな夜光

その光に彼方は素直に身を任せた

しばし目を閉じ…何処にといいこともなく想いを馳せる

視界は暗くなった

そして目をゆっくりと開く

彼方の瞳は色彩を魅せていく

何者にも揺るがない強い眼差しへと…

月はあるのままの姿を映す

余計なことをちらつかせないために深く深呼吸

…決心はついた。

26・開いた距離

いつもの見慣れた朝を迎える

今日朝一番の天候は雲がかかっているが晴れといえる空

7月の上旬これからもっと暑くなる

それを予告するかのよう

アスファルトは段々と熱気を増していく

窓越しに見ても分かるくらい

教室には次々と人が入ってくる

疎らに聞こえていたカバンを置く音も次第に増え始める

私もその中の一人となろうとしていた

「よっ！！！はよーっ！！」

カバンを置くと聞き慣れた声

ためらいもなく私は声の持ち主へと顔を向ける

「おはよ……」

元気満々挨拶口調はマコだった

それだけを言うつと机に視線を戻す

嫌な沈黙が流れた

「あ…ゴメン！！昨日…先に家に行ってるって言いながらいなく

てっ！あの後急に用事おもいだしちゃってさあ」

申し訳ないって顔で私に頭を下げる

苦しい言い訳に見える

昨日の家の状況で用事を思い出したなんてあからさま過ぎる

素っ気なかったのが怒っていると思ったのかいきなり昨日の事を持

ち出す

「別にいい。気にしてないよ」

「ほんと悪かったなっ」

昨日、家に帰ったらキッチンがダイニングが荒れてた

ティーカップは砕けて、椅子は全部倒されていた

もちろんそこにはマコの姿はなく

いたのは…お母さんただ一人

そのお母さんは腫れた目を赤くして放心していた

だけど私が着たのに気付くと誤魔化すかのように欠片を集めていた
真つ赤な瞳で私にいつもの笑いを見せた

何があつたの…って咄嗟に聞くことも出来ず

私はただその有様を見つめることしか出来なかった
異様な重い空気にそんなことを聞く余裕さえ失った
どうしてあんな状況で母一人だったのか

いつたい何処に行つたのか先に行くつて言つて姿がなかつたマコ
別に疑つているわけじゃなく

なんとなくマコは話さないような気がした

また隠し事が増えた

「何か…隠してる事つてない？」

だけど一応聞いてみる

ふつと脳裏にあの夜のことが思い出された

あの夜、マコとお母さんで言い争っていた日のこと

「…えっ」

鈍感な人でも分かるほどの動揺の眼差しをみせる

なんでもストリートに自分に正直なマコ

とてもいい所だし私も気に入ってる

けど、こんな時はなんて不器用に見えるんだろう

「昨日…」

繰り返し言葉を発しようとしたとき

「ねえねえ！！！！ねえねえっ！！！！」

遠くから…と言つても教室内だけど聞き慣れた声が
地雷を踏んだようなギャグ音が近づく

反射的に振り向いた先

「ねえねえ！！聞いた聞いた！！？…そっかあ、聞いてないのか
残念っ！！うー…んっ！！どうしよっかなあ？？」

この独りよがり勝手なしやべり方は奈津実だった
振り向くだけで暑苦しさが増す

顔にこそ出さないがこんな元気何処からでてくるんだろう
その時後ろ、マコの席から深い息が聞こえた
息は息でも安心したため息

『ホッ…』と言う息

同時にシヨックだった

言うならば気付いてはいけないもの
知りたくなかったもの

また隠すつもりなんだ…

頭の中でますますあの夜のことが蘇ってくる

完璧に私に隠し事をしている二人

次々とキリがないほどの不信任が押し寄せてくる
思わずマコから視線をそらした

それをぶち壊すかのように

弾丸のような声が耳に飛び込んできた

「ちよつとちよつと…!! この奈津実ちゃんの話聞いている!?!」

「はいはい。聞いているよ、たつぷりと! 厚身」

隣からマコのいつもの声がすり抜けていった

そしていつものリアクションをみせる奈津実

「キーーーーーッ!!! 違うって言うてんでしょー!!!?…?…?
えも何気に久々にそう呼ばれて有頂天になってる私にで・こ・ぴ・
ん」

定番の展開が私の目の前で繰り広げられている
自分の世界に入ってる奈津実

それがむかつくのか怒鳴りちらかすマコ

何も考えることなくただ座っている私

…のはずなんだけど

不安の渦は容赦なく私を飲み込む

昨日の出来事はただ事ではなかった

涙の跡でグシャグシャのお母さん

目が泣きすぎて真っ赤になって

必死に誤魔化そうとする姿が痛々しく見えた

あんな母親を見たことない

何も信じられない、拒絶する眼差し

昨日のお母さんの顔が頭から離れない

その理由を知っているはずなのに何も言わないマコ

逆にその話に触れた途端身体を強ばらせた

それはさっき奈津実が来たときの安堵の表情で分かる

私に質問されることを恐れている？

一体、何があっただろう

何かなんなのか私には分からない

嫌だ…この感じ

何かが起ころうとしてるそれだけは分かる

「はあはあ、ゼエ、勝手にやっつてなっ!!」

突然マコの姿が目に入る

いつものパターン

きつとマコがあほらしく思えてきたんだろう

適当に見切りをつけて席へ逃げようとする

「あっ!!…ちょっと待ってよ。さっきの言いかけようとした話

気になんない？」

「……………」

無言で奈津実の方に振り返る

「あ、気になるんだーっ???」

そう言っつてニヤツと口をつり上げる

まるで毒リンゴを白雪姫に渡すかのよう

まあ、もちろん2人ともそんなキャラじゃないけど

ただど今の奈津美はりんごを渡す老婆にそっくり

やっぱりさしずめマコは白雪か

「……………」

マコの額にギャグ的血管が浮き出る私には見えた

奈津実は血の気が引いた

今度の白雪姫は気性が荒いようだ

危険を感じた奈津実は渡すはずの毒リンゴを隠した

「ああ…ウソウソ！冗談だってば…そんな怖い顔しないでよ
う！」

「話つて？」

何事もなかったかのように話しかけるマコ

「あ、そうそう！！奈津実ちゃんリサーチ連盟部で調べたんだ
けど…」

「部員は？」

「しくしく…」

ゆっくりと片手でゼロのサインを出す

「ああ、悪かった。…話は？」

突っ込んだマコは悪いと片手で顔を覆う

「有力情報が入手できたのよ！！…日夜活動してきた甲斐があっ
たわ！！…これは確かな情報。キュフフ…今や私の白馬の王子様、
私…奈津実はこの日を幾度待ち続けたことか！！…彼方君」

私達は同時に奈津実に視線を向ける

今や聞き慣れた名前

それが奈津実の口から言葉となつて出てきた

ふっとマコの顔を覗き込むと複雑な表情を浮かべていた

「何？情報つて彼方のこと…？」

動揺を隠せないマコ

一瞬忘れかけていた思いが蘇る

「そうそう！！あのね、実は…」

気付いたときにはマコと私は身体の全神経を耳へと集中させていた

27・牙を剥く飼犬

足音の持ち主は近寄りがたい空気を漂わせていた
長く続く通路をモデル級に足並みをそろえながら
軽快に鳴り響く淡々としたヒールをならす音

だが誰も寄せ付けない威圧感

足音はぴたりと控え室前に止まる

辺りには慌ただしく行き交うスタッフ

その中でこの女性だけは至って冷静でいた

コンコン！

規律の良いリズムで扉をノックする

『彼方様』と書いてある控え室ドアを再度叩く

「どうぞ」

部屋から聞き慣れた低い声

だが関係なく言い終わる前にドアノブを回す

「ん？あ、速瀬さん」

眉間にしわを寄せた速瀬は詰まる空気と共に入る

これからスタジオ入りなのかヘアメイクさんがいた

速瀬に軽く会釈をし、また鏡と彼方とにらめっこ

テキパキとこなしていく様はさすがプロ

「…何？」

入ってきて微動だにしない速瀬を鏡越しに見る

メイクさんは気にする素振りもなく仕事をこなす

「申し訳ないんだけど…席外してくれるかしら。」

言葉にしているものの申し訳ない気持ちなんてないんだろう

冷たい視線を投げかける

するとメイクさんは軽く微笑み控え室を出ていく

扉が閉まったのを確かめると

途端に増す空気は彼方に身体を包んだ

張りつめた沈黙はこれから他愛ない話をするのではないことを確信する

「…貴方私に言わなくてはいけないこと、あるでしょう？」

「言わなきゃいけないこと？」

ワザとらしく首を傾げる

「さつき、担当から聞いたわ。新曲の内容変更申し出たんですって？」

怒りで速瀬の拳に力が入る

それにひきかえ彼方は無反応のまま机にひじをつく
逆撫するような態度に怒りは頂点へと達していた

「自覚してるの！！？確認したでしょ！！時間がないのよ…レコーディング、打ち合わせとか新曲発表マスコミだって、宣伝含めても時間が足りなすぎる！！…今までののが台無しになったわ！！」

「……………」

「もう、最近何考えているのか分からないわ…」

そう言い終わると頭を抱える

頭に血が上った速瀬は顔が赤くない

彼方は静かにテーブルについていた肘を下ろす

「どうして？」

「俺はただ今回出す新曲に納得できなかったただだよ？」

怒っていた速瀬に気付いてないのかサラッと交わす

平然とした顔で話を進めていく

「気に入らなかつたんだ。…歌う側が気に喰わなくてつてよくある話じゃん？だから大目に見てよ…？絶対間に合わせるからさっ！」

そう言うと軽く微笑む

彼方の反応を見ていた速瀬は言葉を失っていた

「そんなこと今まで一度も無かつたじゃない…何がそんなに気に入らなかつたのかしら？」

「不満はないんだ…プロデューサーには悪い事をしたと思ってる

けど…今、手にかけている曲が一番歌いたい曲なんだ」

「……………」

「怖い顔。俺にそんな顔しても効き目がないことぐらい知ってるでしょ…」

軽口が宙に舞う

その軽口が逆効果になることを彼は知っている

速瀬の表情は見る見るうちに険しくなっていく

「こうやって融通きかないけどでも今までちゃんと仕事はこなしてきたでしょ？…信用してよ。期日までには絶対に完成させるから！」

根拠のない自信、無謀な要望

その瞳の奥には秘めた決心に満ちていた

「分かった？じゃあ…邪魔しないでね」

テレビで見せるスマイルで速瀬に微笑みかける
見れば分かる

彼はお世辞でも笑っているとは言えなかった

「それじゃ、俺…これから撮りがあるんで」

言いたいことはたくさんある…昨日の今日だ
だけど感情を微笑みで隠している

彼方は静かに椅子から立ち上がる

そしてドアへと視線を移す

速瀬とはあえて視線を合わさない

またもやこの控え室に滞った沈黙が巡る

「俺は、たった一人のために歌ってきたんだ。」

速瀬の真横を通り過ぎる

「あんたにだけは絶対邪魔はさせない」

…ぱたん

扉の閉まる音が空しく響いた

静寂が彼方の低くとがった声に重みを増す

表情が固まったままの速瀬

温度が低下しきった控え室に佇む

「……………くす、飼い犬に手を噛まれたって感じかしら？」

しかし子犬程度としか思っていないのだろう

魔法が解かれたかのように微笑む

それは決して微笑みではない…

ぞつとするような笑み初めて見る微笑み

「何も貴方の邪魔何かしないわ…勝手にそうなるのよ…貴方は知らないだけこの世界を」

微笑みとは裏腹に一瞬

彼女は悲しい瞳をしていた

それは何年ぶりだろうか

彼方位の年齢の若かった頃こんな悲しい憤りの無い感情があった

そんなのとつくの昔に忘れた

というか捨ててきた…

忘れなくてはいけなかった

この世界にこの感情はあまりにも不似合いすぎる

隠れた悲しい行き場の無い笑み

冷徹さに含まれた速瀬の想いは一人残された彼女しか知らなかった

28・気持ちの整理

目先100メートルにある家に隠れる

だけど私の方が言わんばかりに輝きを放つてい太陽

徐々に傾き夕日へと変わり始める

退屈だった授業は終わり下校時間

頑張りたい生徒は部活に力を移す

怠け者のとはあえて言わずに帰宅する人は

一緒校門に向かっていた

「奈津実が言ってた情報、ホントなのかな？」

「…え」

いきなりの問いかけに

私は不意に見ていた夕日から視線を外す

「ほら、朝言ってたこと」

…核心をつかれた

あまり考えたくないことだった

思わず視線が足元に

「本当なのかな？…彼女がいるなんて」

「……………」

「だいたいそう言う情報とか何処で仕入れてくんのか知らないけど…ガセじゃないんだよなあ日々冗談で生きてるような奴だけど…

根拠のないことは言わないだよ不思議と」

自然とマコの腕は組まれる

「んまあ、最後らへんはガセなんだろうけど…だってさ」

組んでいた腕を解き

いきなり前を歩いていて私の前に立ちはだかる

突然のことに私は立ち止まってしまった

「んもう！！聞いて聞いて…彼方に恋人発覚だってえ！！ネットで調べたらその光景を見た人目撃者多数なんだってえ…彼方だった

らとうとうその気になったのねえ…そんな堂々と報道しなくたっていいのに！！…んもう、奈津実ちゃん困っちゃう！！でもね、安心して…こんな可愛くないこと言ってるけど本当は嬉しいの。…しっかり貴方の気持ち受け取ったわ！！いつでも貴方の奈津美がお慕いしております」

身振り手振り奈津実の物まねをする

はつきりいつて本人じゃないかって位

しっかり似てると思わせるのがさすがマコ

あまりにもそっくりで

気付いたら笑ってしまっていた

自然と目尻が下がる

「あつ！そんなに似てた？奈津実の真似！！ってか、言われても全然うれしくないあーっ…」

微妙な表情をしながら元いた場所へと戻る

だがそんな釈然としない顔が一瞬にして変わった

「満春さ、この話聞いたときから少し元気なかった感じだったろ

？…気にしてんのかなって思ってたんだ。勝手な考えなんだけど」

誤魔化すように頬を掻くマコ

照れ隠しにも見えた

「でもまあ…奈津美には悪いけどなんの証拠もなし根も葉のない

噂だと思っよ。もしくは」

「……………」

マコの口が止まる

…ん？マコがこっちを一瞬見たような気がした

気のせいだったのかマコの視線は全く逆の方向を向いていた

嘘を隠せない人がとる行動って馬鹿っぽい

こんなにもわざとらしく見えてしまう

何がでも言いたかったんだろ…

「…何でもない。」

そう言いながら軽くスキップ私の2歩先を歩いた

最近嫌と言つくらいお母さんとマコが会話していたことが頭から離れなかった

一体何だろうって…冷静になればなるほど

頭の中で分析を開始する

…6年前、失った記憶、そして何故か関係のない彼方君までずっと頭の中で渦を巻いてた

だけど感情を表に出さない私が元気がないことに気付いてくれたと言われるとそうだったことに気付く

そんな私を気遣ってくれた

分かりにくい私の気持ちを誰よりも早めに気付いてくれる知ってる上でマコなりに元気にさせようと気遣ってくれる

過去や噂やあの夜の出来事…何より

目の前にいるマコが真実だった

知っていたはずなのに

誰よりも不器用で誰よりも正直で真っ直ぐ…

マコ達が何を隠そうとしているのかは分からない

だけどきつと私から聞かなくてもいつか2人から話してくれるその時を待っていることにする

ありがとう…

私は2歩先のマコの後ろをそんなことを想いながら歩いてた

29・伝わらない言葉

色んな機材が行き交っている

次の仕事があるのかバタバタと急いでいる人が目立つ

丁度数分前撮りが終わった

次の移動までそんなに時間はなかった

忙しい中合間を見て彼方は机に向かっていた

そう、無理矢理延ばしてもらった新曲に力をそそぎ込んでいた

「……………」

机の上には一つ寂しくペットボトル

そしてノートパソコン

まるでそれしか必要がないみたいに

後は綺麗に整頓されていた

軽快な音をたてながら

誰もいない控え室にキーボードを叩く音が響く

機械的にリズムを刻むように

いきなり新曲変更を申し出た彼方

90%は仕上がっていた曲をけり

リリースされるはずだったものを取りやめ速瀬に啖呵を切った

彼方はそれからこんな感じでパソコンを前にしている

仕事の合間、移動の合間、睡眠を削ってまでもいた

休憩という休憩は全て新曲に気を向けている

だが、そんな過酷さを感じていない

瞳の奥には疲れの一欠けらも見えない

むしろまだまだ余裕を感じる

愛おしむ様な眼差しそれは映し出される文字一点に注がれている

曲に魂を込める…心を映す

歌詞に己の感情を吹き込む

いつの間にかノーパソでは彼方自身の世界が出来ていた

「あ、お疲れさまです!!」

挨拶をしに来たアシスタントの人が顔を出す

「お疲れさまでした…」

彼方は軽く挨拶を返すと扉は閉まった

「…ふう」

深く息をつくとゆっくりと肩を回す

目に入った清涼水を手に取る

よほど喉が渴いていたのか半分空にする

蓋をせず机に置くと目をつむった

その瞳の奥で今、昔へと還っていた

自身が奏でたいもの

一番歌いたい曲

今の自分にぴったりのフレーズを搾り出していく
でなきゃ本当に人を楽しませること共感させる事なんて出来ない
数秒が経ち静かに目を開いた
そして胸ポケットから携帯を取り出す

ある番号へと電話を掛ける

『はい、もしもし…』

少し甘えのある声の持ち主が出てきた

「あ、もしもし満春ちゃん？俺だよ。分かる？」

『…はい。』

簡潔に答える

『……………』

相変わらずの電話での沈黙には戸惑ってしまっ

「あ、ゴメン…用件ただけだね」

『はい…』

電話先だといつももの倍に大人しく聞こえる満春の声だが、誰にも真似できない甘えた通る声
受話器から彼方の耳に鮮明に通過していく

「あのさ、今度の木曜って空いてるかな？」

『えっ？』

耳元で声のトーンが心なしか高くなる

「あ、もちろん学校終わってからで良いんだけど…」

『…あ、はい』

「俺もさ、午前中は打ち合わせ…仕事があるからさ。午後、そうだなあ〜7時前位がいいんだけど…どう？」

少しの間無言のまま電話を耳に当てている彼方
とりあえず彼女の返事を待った

『…いいですよ。別に』

聞こえたイエスの返事に笑みがこぼれる

「マジ！！…本当！？よかった。じゃあ場所は」

過剰なほどに

テンションの上がった彼方

緊張の糸がとけたのか話を進めていく

『はい。はい、分かりました』

「うん、じゃあ待ち合わせはそこで…待ってるからね。絶対的に来て！！」

「絶対」を強調する

『……………？はい、必ず』

プチッ…

そう言い終わると彼方は電話を切った

固く携帯を握りしめる

あとは覚悟だけだ

「またあの子？」
いきなりの訪問者に我に返る

「……………！！！」

「また、満春って子に電話していたの？」
側に立っているのは不機嫌な顔をしている速瀬だった

あれから凝りもせず文句を言ってくる

この前言った言葉を脅しと捉えてないのか

イマイチこの女性のことがかつかめない

それよりどうやら気付いてないほど電話に夢中になっていたらしい

「……………速瀬さん」

「まったく！！いつまでそんなことやっているつもりなの…?!
貴方は啖呵きつて新曲変更を申しで…人に多大な迷惑かけて尚今やらなくてはいけない事って彼女に電話なの!? 仕事をなめるのも…
いい気になるのも大概にしなさい!!」

上からも言うまさにこの状況

椅子に座っている彼方

それを見下ろす速瀬

話すことなんて無いと無言のまま席を立った

出ていこうとするのを止める

「待ちなさい!!」

「……………」

「確かに6年前のあの日の出来事は認めるわ!! 結果的に悲惨な
結末になってしまった。それは忠告程度に現実を見て欲しかったか
ら…貴方の頭の中を占めてやまない彼女に。だけれど悪かったとは思
ってははいない。貴方やあの子のためにやった事なのだから」
怒りのあまり乱暴に振り返る

「俺のためって…何言ってるんだよ!!? 何が俺のためなんだよ!
!知ってるよな…俺はただのらりくらしとレールを走ってきてた訳
じゃない!!俺が才能あるなんて言うのは上っ面しか見てない奴だ
け…どれだけ必死で頑張ってる誰のために努力してきたか…長年連れ

添って分かつてるんじゃないやなかつたのかよ!!」

「ええ、知っているわ」

「じゃあ、なんで!!」

問いかけようとした矢先

速瀬の鋭い目が彼方の言葉を詰まらせる

「分かつてない。分かつてなさすぎるわ。この仕事がどんなものなのかをつ…そこらの一般の仕事とかと違うの!!成功しなければすぐお払い箱…実力なければ即アウト…去った人に目を向けてたらずぐ蹴落とされてしまう…。惚れられて、愛されて、育てられてがこの世界なのよ…私事なんてあつては足を引つ張るだけだわ」
いつか言っていた言葉

速瀬の冷静な声で再現される

「その世界に貴方は飛び込んだの。…それに恨むところが間違っているわ。恨まなきゃいけないのは私じゃない、再会の過程にこの世界を選んでしまった幼い頃の貴方自身を恨みなさい…ここは遊び場じゃないの。」

「……………」

「今後一切、桐谷満春と会わないで…。」

速瀬は一直線に彼方の瞳を見た

だが、その瞳を彼方はいとも簡単にかわした

「会わないで…何かにつけてはそれだな。」

そんな彼方に深いため息をもらす

これは速瀬も彼方も引く気はないという証拠

「貴方は確かに努力して勝ち取ったものどれも申し分ないわ…。」

だけど理解力はかなり欠けているみたいね」

呆れた口調で言葉を返す

言葉はどこにも通過せず空しく宙へと舞う

お互いの感情が行き違えている事を意味していた

「じゃあ、その何だっけ?才能やら何やら見込まれてるようだけど…それは幼い頃からの成果が物を言わせてるだけだよ…言わば努

力の賜物つてやつ。さつきも言ったとおり。あるとすれば約束を守りたかった…。全てあの子がいなきや速瀬さんが見込んでいる今の『彼方』はなかったも当然なんだぜ」

「でも今は必要ないでしょう…？」

戸惑いもせずサラリと言ってみせる

彼方は一瞬めまいがした気がした

予想さえしていなかった答えに言葉を失う

躊躇いもない割り切った発言に怒りが湧き起こる

「確かに今の貴方をつくったのは紛れもないあの子かもしれない…。でもそれは昔の話…今の貴方にとってあの子は何の価値もないわ！…十分一人でやっていける力を持っている。そうね、今は足枷、邪魔の何者でもないわ…。道を塞ぐ石ころでしかないわ」

トゲのある言葉が彼方の耳を貫く

速瀬の言葉は衝撃の何者でもなかった

「…黙ってないで。まだ言いたいことあるんじゃないかしら」

「何も言わないと言うことは認めるって事かしら？」

息が吐き出せない程の興奮

呼吸が出来なくて倒れこんでしまいそうだ

全身は意志とは関係なく震えおさまりが利かなくなる

言い方を改めない速瀬に怒りは頂点へと達する

思わず腕を大きく振り上げる彼方

「……っく」

だが腕は空中で止まったまま静止した

殴れるものなら殴つてやろうかと思った

とんでもなく理不尽で勝手な言い分に暴力的なことではしか表現できない

今にも振りかざさんとする腕を理性で止めていた

たった数センチの理性で…
震えの止まらない腕を身体を深呼吸で持ち直す

「はあ……やめた」

「……………」

「あんたごときにこのマイクを持つ手を使うのはもったいないっ
！」

そう言い終わると速瀬に背を向ける

立ち去ろうとする彼方の後ろから話しかける

「これだけは覚えておいて…これはあの子にも言いたいことなの。
これ以上会ってはいけないのよ…危険すぎる！会っならそれなりの
代償が必要になるわ」

一瞬見えた彼女の心配に気付かない彼方

その問いかけを無視し控え室を後にする

速瀬に声が段々と遠のいていく

果たして声は届いていたのか、いないのか
どちらにしろ

歩いている足取り、そして前を見据える瞳が強く物語る
なんて言おうが…結論は決まっていた

30・蘇る予感

今日一日を締めくくるチャイムが鳴り響いた
きつと全校生徒がこのチャイムを待ち望んでいたんだろう
見渡す限り爆発寸前のクラスメートがそわそわしている
時刻は4時過ぎ、授業が終了したこの瞬間から
溢れだしたかのように声が色めき出す

「くはあゝ… やつと終わった」

吐き出すかのようにだらしのない声を発する

私の耳に一番に入ってきた気が抜けるような大きな欠伸
涙目になりながらこつちを向くマコ

爆発寸前：もちろんマコもその一人

「なあ？… これからどっか行くか！」

「あ、ゴメン。今日は用事があつて…」

少し間をおいて軽く断る

この前約束したあの日のこと

『あのさ、今度の木曜日会えない…？』

そう、今日は会う約束をした当日

心なしか落ち着かない朝から

「なあんだよ… 売約済みかよ。しょうがねーなあ！！」

不発に終わった爆弾が肩を落とす

「……………」

「…なあ、もしかして」

帰り支度をしているマコが

いつも間にか私の瞳を見つめる

時間が一瞬止まったかのように動かなくなる

それをマコが見落とすわけがなかった

「マジい！！ 本当かよ… 相手は？」

「何で…？」

「何でって…最近分かりやすくなってきてるんだけど。お前分かってないのか？」

今日一日のストレスがそんなにたまっているのか
そういえばやたらどの先生もマコに問題答えさせてたかも
だけどそれは校庭見てたり、時間ばかり気にしてるから
うっぷんを晴らすためにこれ見よがしに私に絡んでくる
そんな時のマコは奈津実よりたちが悪い

「ふわああああ！！…よく寝たわあ」

タイミングを図ったかのように大きな欠伸をしながらの登場
こういう時の奈津実は心強い

「よく寝ただってえ？？！…お前寝てたのかよ！！」

「いいのっ！私は誰かさんとは違って頭良いから。自分が偶然寝てなかったから突っ込むところじゃないと思うけどなあ。すべてはテストだよマコちゃん？」

「っな！！…頭が良くても寝てばかりじゃ〜益々厚身ちゃんになっちゃうぜ…こりゃ楽しみだ」

そう、絡む標的が奈津実に変わるから

馬鹿なくらいにムキになるのが面白いんだろう
いつもこれ的から解放される

「ふ、ふふっ…何を失礼なことを言うかと思えば、睡眠は美貌を保つ大切な薬！！」

「…へえ、美貌ねえ」

大げさに目を見開き奈津実の身体を眺める

周りを行ったり来たりオーバリアクションをする

「ふーん…美貌ねえ」

それを横目で見つめながら私は静かに席を立った
今日ある用事を済ませるため

そんなに急ぐ必要はないんだけど、この2人に囲まれると
いつまでも終わらないのは実証済み

私の存在を忘れてこの時に去るのが賢明

「どう?…奈津実ちゃんのスレンダーな身体は」

「あ、ありえねえ」

相変わらずのかみ合わない話は続いていく

耳に入ってくる言葉を後目に私は教室の扉を開く

「ああ、もう!…そんなこと言わなくても分かってるって!…あり得ないほどの美貌だなんてえ。キャツ 当たり前すぎるう」

「……」

「ちよつとあんた無言でなにやってんの?」

うかれ調子の奈津実だったがあることに気付く

「あり得ないほどの…だねえ」

不意に下を向くとマコが奈津実のお腹を突っついてた

そして終いには了解もなく摘んでいた

「いやっ…くすぐったいって!!なっ…肉掴むなっつうの!!!人様の肉をにおいそれと触るあ!?!」

乱暴にマコの手を振りほどく

「なあんだ!!自覚してんじゃん。…やっぱり人間正直に生きなきゃ!!可愛いよ奈津美ちゃん」

流し目になる奈津実を追いかけるように

ニンマリと視線を追いかけるマコ

「なっ、何言っちゃってるのかな???…肉が摘めるように演技しただけ!!演技だよ。真似!!」

「いや、意味分かんないし…」

マコは飽きたのか勝利を確信しての行動なのか視線を泳がせる

「あれ?…満春は?…満春がいねえ。」

今頃気付いたマコはしばらく教室中に目を配らせる

「満春うーっつと、本当にいない…おいつ!奈津実。満春知らないか?」

「ふふっ！！私に負けるのが怖くて逃げたわね…」
なんの勝負してたんだよ

よく分からない言葉はもちろん無視をする
もう一度辺りを確かめるが結果は同じだった

満春のカバンはない

そこでやっと気付くマコ

「あいつ帰っちゃったのか？」

「なんかそうらしいね…はあ、せっかく大スクープ持ってきたの
に…野獣の世話をしたら遅くなちゃったじゃない」

マコの身体は過剰に反応した

そう、マコの身体は脳より早くあることを察した

「…まったくしょうがない。」

奈津実はゆっくりと頭を振る

きつと生まれてから片手で数える程しかしてないであろうため息を
する

その隣でマコは顔を引きつらせながら後ずさりをしていた
ずりずり、ずりずり…

一歩また一歩奈津美に目を配らせながら遠のく
そしてまたもや頭より先に身体は反応した

「こうなったら満春抜きで話すかあ！！！！？」

ずりずり、ずりずり…ずっ！！

さりげなくマコの肩に奈津実の手が置かれた

これでマコは動けなくなってしまった

「ねえー？まこちゃん…聞いて聞いて！！大スクープ！！？」

「断るッッ！！！！！！」

問答無用で即答した

おもわず奈津実に猫なで声が止まる

「断るったら断るっ！！…絶対やだ！！？お前の話長いんだよ！
！いつまでもいつまでも…くねくねくどくど」

「でも面白いでしょ？」

素直なマコはつい頭を縦に振ってしまった

反射的に首を振ってしまったマコ自身もビックリしていた

ハッと我に返るとニンマリと微笑んだ奈津実

「なあんだあ！まったく素直じゃないんだから……やっぱり聞きた
いんじゃない」

「き、気の迷いだ……！」

「そんな意地張らないでえー……」

戸惑うマコにやたら人懐っこく引付く奈津実

それをまるで床にへばりついてしまったガムを剥がすように押し
ける

「うわっ！？引付くくな……！きもいつ……近寄るな……ってえの……！」

「……う」

奈津実の視線に押し黙った

マコの脳裏で『段ボールの中に捨てられた猫』の図が思い描かれた
から

そんな眼差しで見つめられていた

「はあ……んで、何なんだよ。そのスクープって」

泣く泣くマコはおれた

普段は自分の意志を曲げることはしないマコだがこっぴつ眼差しに
は弱い

針金のようにグネグネと意思を曲げられてしまう

「はあ……いつはい……！よく聞いてくれましたあ……！」

それを知ってか知らずか奈津実ははしゃぎ出す

そんな態度を見たマコは腑に落ちない顔をする

だが、そんな気持ちは次の発言で覆されることになる

「それはずばりずばり……！永遠の貴公子彼方様関連ニュース……！」

「……！」

「……！」

「ふふっ……！この前、彼方様に恋人いるって言ったじゃない？
実はその彼女って女子高生なんだって……！」

「…え？…なっ」

「ネットで書かれて…公表はされてなかったけど、どうやら一部の人は彼女の正体素性全て公開されてるらしいよ」

その一言でマコの頭は真っ白になった

一人ではしゃいでいる奈津実が違う世界の人みたいに

「なんで…。」

「へ…？何でって？」

「何でそんなに早く…！！なんでそんなに早く…っ！！」

奈津実の肩を思いつきり掴む

「そんなこと言われても…ネットで書いてあつたんだもん。私だつて知らないよ…ただすごい内容だった。文句とか愚痴とかそんなレベルじゃない。一面にその女の子を中傷するような言葉ばかりで…名は伏せられてたんだけど多分一部は…」

満春の顔が脳裏に浮かぶ

情報が漏れるのがあまりにも早すぎた

甘く考えていたわけではない

だかそれはあまりにも急だった

浮かんで消え浮かんで消え繰り返していく度に不安が増していく

「み、はる…」

誰にも聞こえていない独り言は空しく

空気中で碎け散って消えた

31・夜7時、広場にて

想像したとおり学校の帰り駅前はごった返していた
考えていたと言ってもうんざりする

気合いを入れるために深く息を吸い改札を出た

喧嘩(?)をしていたあれは最早じゃれあいだろう

2人を置いて教室を出た私は1人

改札を出た私はめまいがした

いつも見慣れているところとは言え何回来ても慣れない
行く手を阻むみたいに交差する人、人、人
正直な話待ち合わせじゃなきゃ来たくない
それぞれの会話は

この街では騒音となってこだまする

私の好む静けさとは程遠い

少し気落ちしながらも足を進めていく

待ち合わせ先それは私の足で20分ほど歩くとあった

「……?」

この大きなものなかなあ…

この公園には不釣合いなセツト

確か彼方君が指定した先ってここだったと思うけど

何なのか分からない…巨大な四角いものが置かれている

何か分からないように上から黒いカバーが被せてある

…近々工事でもするのかな?

いつも周りに気を配っている性格じゃないが

これだけ派手に置いてあれば気付く

もう一度指定された場所を頭で思い描く

…待ち合わせ場所もここ…。

この前の電話での話を思い出す
間違いはなかった

一見公園というか広場

何かのイベントじゃないと役目を果たさない場所

夏なら花火大会、冬なら十日町

だから今のこの瞬間は価値なし

見渡すばかりカップル

こんな場所で何しようっていうんだらう

でも呼ばれたからには理由があるはずだし

こんなに殺風景だと自分の身の置き場がない…

あるのはあの工事道具らしきものだけ

考えてみればこの場所はよく言う『デートスポット』

うちの学校から近いんだったらお馴染みになるだらう

希に顔見たことある程度の生徒が通り過ぎる

お互い軽い面識だから声を掛け合わないけど…

私は何もすることがなくそこらにあつたベンチに腰を下ろした

ふつと空に顔を写していた首を地上へと向ける

写る人全員に瞳を動かしていた

人と人の間から見えるまた人

人の瞬間瞬間を観察していた…

運命とか乙女なことを言うつもりはまったくないけど
座って腰を下ろして人の波から外れて

『人間』第三者として見た時

この世界でどれくらいの人がいて何分の一の確立で人は出逢っているんだろう

そのうちの何分の一で私は彼方君と出会ったのかな？

こっぴど行って行き交う人

もちろん人は視線を合わさずに行き違うけど

それさえももつたいたい気がする

今、隣ですれ違った人…また出会いを失ったって

でも偶然私は彼方君と目を合わせて向き合って確立の一つを手に入れた

その運命を逃さなかったってことになる

見逃せなかった…見送れなかったそれが運命？

見逃さなかったのは運命？偶然？

偶然、運命…なんか違う気がする

もっと違う何かがあるところにあったんだ…

ツキンツ…

最近になって多くなってきた

記憶を辿っていくと何も見えなくなる

迷路からなかなか抜け出せない

必ず終わりはあるはずなのに…

絶対ゴールがあるはずなのにまたスタートへと戻る

私の思考はそれから動かなくなる

まるで『突き当たり』、目の前は壁

圧迫感を感じざる得ない

何時までもこの繰り返し

あまりにも甲高い声にビツクリ

何故かそれにつられるように周りから人がいなくなる
気付くと大分人がいなくなっていた

その時私みたいに乗遅れた人の話が耳に入った

「ねっねっ!! 今日ライブやるらしいって本当かな!!?」
えっ?! ライブ…待って誰の?

「いきなり決まったライブだから口コミでしか広がってないって
やつでしょ?… 実際本当なのかどうかも分かんないよねえ… あっ
!! 見て!?! あそこに人が集まっている!! 行ってみよ!!」
あっと言う間に目の前を掠めていってしまっ

…ライブ???

じゃあ、今の悲鳴は客の悲鳴だったの?

待って待ち合わせをした相手って

「…ライブってもしかして…」

半信半疑で疑問に想いながら足を進ませてしまっ

「ちよっと待ちなさい彼方!!」

その頃の舞台裏

いつも通りの罵声が飛ぶ

だが、態度はうって変わって

冷静沈着な速瀬とは思えない程の騒ぎっぷりに
周りを取り巻いているスタッフも目を奪われていた

「待ちなさいって言ってるでしょ!?!」

「なんだよ!?!?!?!」

まわりついてくる速瀬の腕を強引に振り払う
と同時に歩くスピードも遅くなる

「これから何をしようって言うの?!?!?」

「何って…これはシングルのPRじゃないのかよ…」
面倒くさそうに答える彼方

「違うわっ!…そんなことを言ってるんじゃないの!?!」

「曲のこと?」

少し落ち着きを取り戻したかのように言葉を返す

速瀬も周りの視線に気付き冷静さを取り戻す

と、同時に聞かれてはまずいとばかりに彼方を連れて物陰の裏へと移動する

「そうよ…まさかこれで彼女に思い出してもらうつもりなの?」

「……………」

「こんなことで思い出せるはずが!?!?」

「でもこれには俺の精一杯の気持ち…」

彼方だつて信じちゃいない

だかこれが自分が一番歌いたい曲

どんな歌より勝る曲だ

これで成功してもしなくても自分の言葉が彼女に伝わればいい

さつきとは違い冷静に話す2人

「これには今までの全てが詰まってる…歌詞を自分へと取り込んでいく間に確信した。色んな行き違いがあつて誤解もしたけど、ただど傷ついたり傷つけたりしたけど…でもいつもいつも同じ場所にたどり着いてしまう…。俺、6年間の自分にもう嘘はつきたくないから」

彼方はまっすぐに速瀬を見た

「かな…た?」

「このステージが終わつた後話したいことがある」

今回で二度目の瞳

彼方はまっすぐと目を逸らさず速瀬を見つめた

一度目はこの事務所初めて入つてきたとき

その光景が速瀬の胸の内で蘇つた

「だ、だいたい、だいたいね！！こんな歌詞一つで貴方の歌一つで記憶が戻るんだったら苦労してないわ！！こんなこと、そんな事に望みを持ってても後悔するだけよ・・・」

速瀬の心の中が熱くなつていく

「だけど、今の俺に出来る事って…歌うことだから
それだけ告げると彼方は物陰から出ていった

『…歌うことだから』

速瀬の心の中で熱さは増していく

苛立たしさも増していく

髪を縛つてあつたゴムを一気に引つ張る

あまりにも強い力にゴミははじけ飛んだ

音をたてずにゴムは床へと転がって突き当たりで倒れた

「まだまだ子供ね…その考えあまりにも浅はかすぎる…。理解なんて出来るはずがないわ…私も、社長も…そして初めてあの子がこの事務所に入ってきた日から散々言っても変わらないんだから。もう何回目よ」

静かに速瀬も物陰から姿を現す

「懐かしいわ…。」

その声は誰にも届かなかつた

32・億分の一の奇跡

広場に一夜限りの人並み

普段は広く見える広場は信じられないくらい人で集まっている
まるで満員電車みたいだ

何処が前でどこが後ろになっているのは分からない

何処かステージで何処が出口なのかまったく

瞬後悔という2文字が頭の中に浮かんだ

息もできない状況に…

隙間のある空間へと無理矢理身体を動かす

そこに少しの間気持ちいを落ち着けた

「……はぁ。」

こういうときに整理券配って欲しいものだ

ふっと私は夜空を見上げた

この状況を他所に涼しい顔して星は煌々と光っている

完全に夜へ変化を遂げた

身動きできない身体を無理に動かしケータイを取り出す

『…7時、57分』

もうすぐ8時になるうとしていた

待ち合わせからもう一時間も経とうとしている

呼吸も十分に整い辺りを見渡せる余裕が出てきた

今頃気付いたが私は結構良いポジションにいるらしい

ステージが目の前

準備している人の顔が分かるくらいの近さ

若干左寄りだけど全体が見える

不意に私の隣にいる女の人

か…な…、た

ロゴマーク入りのTシャツを身につけている
やっぱり彼方君のライブだったんだ…

こういうことなら言っておいて欲しかった

けど私の頬が心なしかゆるんでいく

一度見れなかったあのライブを見れるんだ

しかも途中で倒れちゃった最初のライブ

すっかり私は彼方君ファンになってしまったみたい

こんなにもステージに近いのが嬉しくてそれに向かって悲鳴を上げ
ている

ファンの人たちを見ると私も何か叫びたくなってくる

いつになく心臓が倍に動く

照らしていた照明が一斉に消え

広場内を上手い演出で興奮へとさらっていく

鼓膜を破かんとする迫力のある音響で大パニック

何も見えない中どう始まるのか何が起きるのか分からない気持ち

今にも心臓が飛び出してきそうなそんな周りの空気が伝わる

そんな爆発しそうな心臓を必死に抑え時を待つ

ハラハラしながらもみんなの眼差しは惜しみなく

ステージへと注がれていた

会場は一人一人大きな爆弾を抱えながら静まり返る

……パツ!!!

「っ…!?!」

途端ステージに覆われていた幕が落とされる

眩しいライトは瞬く間に闇を支配していった

あの時と同じ衝撃が目走る

いきなりの閃光に目がくらむ

そんな会場を無視して聞き慣れた曲が流れ出す

いつも耳にしている彼方君の曲

イントロの時点でもう観客はピークを迎えていた
後ろからたまらず叫び出す声

届くか分からない自分の声に精一杯の想いを託す
感極まって泣き出す声

まだ姿を見せていないが喜びを感じられずにはない
ただ呆然と立ちつくすファンの子

自分が本当にライブに来ているという実感がないんだろう
それは…その想いはたった一人に向けられていた

私の瞳はそんな少女、女性の姿が映る

誰もかれもが綺麗…

気付いていないはずがない

私の心の奥もふつつと何かあふれ出そうとしている

そしていつの間にか一緒になって彼方と呼んでいた

普段の自分じゃありえないそれがライブなんだろう

瞳は同じステージへと心を預けていた

熱い…暑いけど見ていたい

目に焼き付けたい彼方君のライブ

そう思い始めた頃

曲は中盤に進みステージはますます熱気を帯びていた

ファンの想いを十分に受け取ったのではないかと思うほどに

格好良く激しい曲を決めた後

静かにマイクスタンドに。そしてMCへと移行した

ここまで汗が飛んできそうな程

ステージの彼は濡れていた

邪魔なのかな?…思いつきり髪を掻き上げる

汗でしつかりと髪が張り付く

オールバック状態

そして彼方君の歌ではない声がマイク越しに聞こえ出す
叫んでいたファンは静まり返り耳を澄ませる

汗の重さに落ちてくる髪を無造作に振る

それはまるで水浴びを終えた犬みたいに見えた

「ロコミで広がったこのライブだけど…こんな集まってくれな
んてありがとう。このために借りた会場もみなさんのお陰でもう入
れないほど詰まっています！もう感謝感謝だね…」

一言一言終わりごとの反応

拍手や受け答える声が疎らに聞こえる

「でもみんな…この瞬間のために集まってくれたんだよね？」
彼方君は一息置くと言葉を重ねた
それを黙って見守る私達

「新曲、出来ました…」

閑散としていた会場が悲鳴や絶叫に変わる
バケツをひっくり返したようなこの変わり様

「そのためのライブだけど。まあ…いろんな意味も込め…ちょっ
と切ない曲にしてみました」

軽く息を付くと静かに目を伏せる

長い間瞬きを忘れていたかのようにゆっくりと

「今までのとは打って変わった曲調でしつとりと…でもみんな気
に入ってくれると思います。」

マイクスタンドを持ち替えす瞬間私と目が会った

「…え、」

思わず声が出てしまった

えっ…？何、今

今、私が何処にいるか気付いてるの？

戸惑っていることを知らず彼方君はMCを続ける

「これは、俺が幼い頃を元にしたもので…9歳の時の話なんだけ

ど昔、家が隣同士でさう歳下のすごい仲のいい子がいて…もちろんいつも一緒に日が暮れるまで遊んでた…一番の遊びは絵と歌、なんでもか俺が歌い手で、彼女は慣れない拍手なんかしながら俺の歌聴いて…つい調子に乗って歌ったりもして…」

「その子はすごく楽しそうに笑う子で今思えば初恋だったのかな？その子の笑顔だけで幸せになったの覚えてる。その子といると楽しくてこんな日がずっと続くんだと思ってた…。子供だからいつかの別れなんて考えなかった。『いつかの別れ』それは突然で俺の両親の都合で引越すことになって…」

マイクを持つ手が強くなる

「このままで握りしめる音が聞こえそうなくらい」

「彼女は幼いながらに感じてはいたんだろうけど『別れ』ってものが…。漠然と最後分かったのか泣き出すんだ。俺も涙が自然と流れて大泣きしたのは覚えてる…何時までも離れられなかったから…」

「そう、彼女は笑顔が最高に似合う年下の初恋の相手。もう一度」

記憶の奥底で波が立つ

視界が少し揺らいだ

「もう一度その笑顔に会いたくて…この曲を作りました」

「最近…何度も思い出す機会があつて思い切つてメロディーにのせてみました。今思えば、きつとその子がいなければこのステージには立つてなかった気がする。人生を変えた女の子…なあって！！真面目になりすぎ？」

ファンを誤魔化すように茶化す

そう思つてか所々笑い声が聞こえる

「けどその表情は笑顔とは言えなかった」

「まあ、そんな今回の曲なんだけど…みんな一度はあつたでしょ？『別れ』悲しい別れであったり、突然の別れであったり…辛くても悲しくてもこの曲でそんな心の引き出しにしまい込んだ思い出をもう一度取り出してくれたら光栄です…」

そして、歌う体勢に入っていく

「…それでは、聴いて下さい。」

辺りは静まり返る

彼方君の微かな息使いがマイクで聞こえそう
聞き逃したくないというファンの思いでこの沈黙は続いている
みんなどれほど新曲を待ち望んでいたのかが分かる
新曲が出た次の週には次の新曲が気になって
ライブがあつた翌日には次の公演を待ち望んでいる

さっきの彼方君の昔話

幼い頃一緒に遊んだ気の合う女の子
その子のために彼は芸人になった
たった一人のこのため彼方君は人生を決めてしまった
忘れられない人…心の引き出しから覗いてる
笑顔の似合う初恋の幼なじみ
一体、どんな人だつたんだろう
ステージの上、彼方君にそこまで思われて
彼女は知っているのかな？
貴方のお陰で芸人になったの知っている？
もう一度笑顔が見たくて
彼、貴方が好きだつたんだって
あれ？

…なんで？私はなんでこんなに涙が出てきてるんだろう

なんでこんなにも気持ちが流れ込んでくる
まるで彼方君の気持ちがあるまま入り込んでるみたい

自分の事のようにストレートに言葉が…
忘れられないさっきのMC
なんたる…漠然とした感じ
頭の中急かすように血が駆け巡っていく
早鐘を打つ…頭が熱くなる
心臓の裏側から叩かれてるような
…うつすらと脳裏に浮かぶ
追い打ちを掛けるようにしつとりとイントロか耳に入る
よく通る歌声が広場中に響きわたっていく

僕と君の幼いメモリー

それは儂い終わりを告げてしまったけど
納得できた気持ちとは裏腹に
今でも記憶を思い返しては心の奥に閉まってしまっよ

共に笑ったり 泣いたり 怒ったり
そんな単純な感情しかなかったあの頃
でも至福を感じたあの頃 懐かしいよね
君の大好きなメロディー口ずさんだり
手をつないで遊歩道歩いたりしたよね
そう、覚えてる君の笑顔が頭から離れないよ

思い出が閉じこめておけないほど溢れて
あの場所から時計が動けずにいるんだ
僕の時計はあの日
激しく雨降る中で壊れてしまったんだ
大好きだった君の最高の笑顔と共に

僕と君の止まったメモリー
それはお互いが気付かぬ間に見失っていたね
でも、消えない笑顔が僕の支えになっていたから
今の変わらない自分がいる

もう君はすぐ側にいる
その似合わない仮面を剥いで僕を見て欲しい
憶えていてくれるなら　　振り返ってくれらるなら

今の真実を捨て・・・君の名を呼び続ける

その時は君の真実の微笑みで
止まった時計は動かせるだろう

激しい拍手が飛び交う

歓声はこの会場を強く揺らしていた

思わずハンカチで顔を隠してしまう人

一緒に来た友達と手を取り合い叫んでいる子

破裂寸前の会場を湧かしている

彼方君はゆっくりとマイクを口元から離れた

マイクスタンドを握る手に重心を預ける

まだ目を閉じたままの彼方君

ライトで光っているのは汗なのかそれとも…

私の滲んだ瞳では分からない

ただただ…心の中のもやは晴れた

分かった…やっと分かった

隙間がないくらい同じ言葉が繰り返される

全てのことが一つになった

チグハグだったピースが一瞬で合わさる

マコの言葉お母さんの言葉

不可解だった疑問が脳に浸透していく

やっと、やっと…

次から次へと大粒の涙がこぼれ落ちる

ハンカチで隠す暇もない

今の私にはいらぬ

精一杯泣き明かしたい気分

自分の奥底から溢れてくる想いに

我慢してきた抑えてきたものが零れていく

「か、奏汰君…っ」

私の幼い記憶が蘇っていく

「…ご、ごめんなさい…」

そしてありがとう…

その後は憶えていない

ただただまるでこの6年間を埋めるように泣きはらした
会いたくても会えなかったあの頃みたいに…

33・会いたい

翌朝、私は学校をサボってしまった

気付いたときには自分の家に帰っていて

目が覚めたときには無性に会いたくなつた

ひたすら会いたいつて気持ちを抑えられなくなって

昨日のことは夢じゃないと感じるために

今すぐ会いたい…

私は多分不安なんだろう

またすぐ消え去りそう

明日になれば無愛想な無関心なつまらない私に戻っていそう

でも自分でも分かる

これが真正銘『満春』なんだつて

カーテンを開ける日差しが差し込んだ

目は腫れ上がっているけど

気持ちは十分に晴れ上がっている

落ち着かない本性の私は気付けば外に出ていた

やっぱり昨日の今日で学校もサボっちゃったし

もっと重要な記憶を残したまま

浮き足立つ私には思いつかなかつた

今電車に乗り込んだ

確か彼方君の事務所はまだ先かな？

どんどん速度を増していく電車のドアに身体を預ける

昨日と見ている景色が全然違つて思える

どこか光かかったような世界、樂園つて言ったら可笑しいけど

あれだけ泣いたから気分もすっきりしてるし

こんな私は方向転換が早い人だつたんだ

「…あ」

そうだ…いきなり事務所行ったら迷惑だよ
ね
彼方君に電話入れとかないと

いきなりってこと自体大迷惑???

記憶戻ったからって馴れ馴れしく行っていいべきかどうか
ごちゃごちゃ考えるより当たって砕ける
砕けるだって…覚悟決まってるし

その前に…

「あ、しまった…」

携帯、昨日のバツクの中

気が付かないまま寝てしまったらしい

一心不乱だったから携帯出してないことも覚えてない

もう電車は何駅か通過してしまっていた

重くため息を吐き出す

「はあ…仕方ない」

自分のせいとはいえ認めたくない

電車から行き交う人が見える

普段慣れているスピードで線路の上を走っていく

窓から見える人は途絶えることはない

すれ違う人ほんの一握り

極限られた人としか向き合えない

『出会い』それが奇跡いうならば

昨日思い出した記憶

あれはどれくらいに値する奇跡なんだろう…

リアルじゃない…当たり前だ

人間簡単に忘れて好きに思い出せる訳じゃない
一生に一度あるかないかの奇跡に感謝さえしたい気がする

「…？」

気のせいか心が締め付けられる感じがした

この時、身体だけは感じてしまったのだろう

私達がしてしまった過ちを後、後悔することになる

「あ、いないんですか…？」

声のトーンが下がる

ビル街に立つ一際立派な建物

目が奪われるほどの防犯体勢

きつと埃一つ落ちてないだろう社内

全てに置いて一流企業並

ここは本当に芸能事務所なのかと思わず考えてしまう

何か事件が起きてからじゃ遅い！！

そんな理論がこの事務所から感じる

さすがにこんな緊張感漂う場所に踏み入れられず佇んでいた私

どうしようか迷っていたところに

前、彼方君が一回連れていってくれた撮影にいたスタッフが目に入
って

今の状況に至る

「あ、すみません今、彼方君…」

相変わらずのトーンで話しかける

「その類の情報は教えちゃいけないことになっているんだ…いくら知り合いと言っても、ごめんね」

いきなりのストップがかかる

言い終わる前に言葉を遮られ

スタッフの人は頭を掻きながら軽くお辞儀をする
起きてからじゃ遅い…

やっぱりあれがモットー会社なのか

知り合いさえもお断りなんて…

気持ちを入れ替えるしかなかった

「分かりました。ありがとうございます…」

スタッフを後目に歩き出す

ますますな声のトーンに少し目尻も下がっている

普通だったらきつと優しい人なんだろう

だから引き下がるしかない

それでも無理にお腹に力を入れ尚かつ気合いも入れる

私の頭の中はフル活動していた

この6年間で相当蜘蛛の巣が張っているのだろうか

動き出すのに時間がかかる

今の彼方君が行きそうなところ

それは仕事場？振り出しに戻る

「はあ…」

事務所を離れ大通りへと出ていた

突然ガヤガヤと騒ぎ出す街の活気から

切ないメロディーが耳元にやんわりと入ってくる

「あ、この曲」

彼方君の曲だ

…奏汰くん

私が記憶なくなっている間もずっと
歌い続けてたんだ

6年前のあの日会えなかったのに…

何を思っただけで今までうたってたんだろう

知っていることなのに有線越しに実感が湧いてくる

昨日聞いた曲と今日聞いた曲

伝わり方が全然違う

記憶のない私が側にいて辛かったはずなのに

脳裏の奥に閉まった記憶がうずく

さつきから奥底でまだ知らない疑問が疼く

「ふう・・・」

余計なことを考えるのはもうやめよう

あれから思い当たる場所をとにかく探した

彼方君がファンに追われてたあの通り

その後行っただごくごく普通の喫茶店

撮影の合間、待ち合わせした駅前

…捜してて思った

これじゃ、彼方君がいるところじゃなくて

彼方君と行ったところだ…

そんなんじゃ探せるわけない

のに…何も他に思いつかない

私は今の彼方君の何を知ってるっていうんだろう

記憶は取り戻せたけど

これじゃ記憶がないのと同じ

携帯…何で忘れたんだろう

バックの中の空洞に苛立ちを感じる

足の矛先は昨日の会場へと向かっていた
そこでは昨日使った機材を片付けているスタッフ
何人位いるのか分からないけど大人数で運んでいる
そうだよな…昨日ライブやったんだから
ここはもぬけの殻って決まっている
いたら不思議だよ

近くのベンチに座りこむ

「一体、なにしてんだろう」

ただ会いたいからって会える相手じゃない
分かってなかった…

今は奏汰君じゃなくて『彼方』君なんだ…

精根尽きて独り言を呟く始末

だってもう何も思いつかないから

今の気持ちは『遠い存在』な彼

下手したらハードなスケジュールだもん

撮影とかいって海外にいちゃってるかもしれない

それが出来ちゃうのが今の彼方君

自然と肩が落ちていく

今まで夢心地だったはずなのが現実に引き戻されたみたい

昨日までの私が『夢』

今日からの私は『現実』

本当はどっちだったんだろ

一体どっちが良かったかさえ分かんなくなってくる

「…なあ？社長もやるよな！！」

休憩なのかスタッフの人がやってくる

目当てはベンチの隣に位置する自販機

「本当本当！！…なんたって大張り切りだから」

「そうそう！！これだって急に決定しちゃうし…その方が話題に

なるってさ」

意味なく私は耳をすなせていた

自販機が無言で飲み物を提供する

「しかも昨日ライブやったばかりなのに今日はM会場で披露だつてな！…こっちは片づけで大忙しだつていうのに…夢を見せる人はいい気なものだ」

冗談まがいに飲み物を受け取る

スタッフは少し汗をかいたジュースを開ける

彼方君を指していることが分かる

この暑さ一気に飲み干してまだ足りないという顔をする

私は思わず自販機にある全てのジュースをあげたくなった

財布の中身が破産になるうが関係ない

だけどそんな感謝の気持ちよりも早く私の足は駆け出していた

34・手の届かない人

どれ位かかったんだろう…

「ここか…」

場所だけ聞き耳立てて聴いたせいか

捜すのに手間取ってしまった

急いだせいか上気する額が熱い

火照ってる気がする顔を軽く拭う

少し涼しくなったような気がする

はやる気持ちを落ち着かせるように息を吐く

… M会場ってこんなに遠かったんだ

今度は屋内らしい

さっきまでいた会場を出て何時間経っていた

電車を乗り継いで…歩いて捜して

辺りを見渡すと気付くことがある

今日、ライブがあるっていうのに人が少ない気がする

昨日はあんなに人で溢れ返っていたのに不思議に思い会場近づく

「…あつ」

会場内から何か声が聞こえる

エコーのかかった声と歓声に似た声

「もう、始まつてる…」

そう考えれば説明が付く周りに人がいないこと

だよな…もうこんな時間なんだから

ライブが始まつていて丁度いい頃

と言いながら私は携帯を取り出そうとする

カバンを探る手は空振りに終わった

「あ、そういえば今日」

持ってきてなかったんだ…

だから私、彼方君に会うのに苦労してるんだよね
事務所行ったりとかして

思わず誰もいないのに一人笑ってしまった

「ついてないなあ」

今にも気が滅入りそうな気持ちは目先に写る人物にうち消された
ただただ見えない壁越しに何かを見つめている女子高生2人
不思議に一部始終見ていた

会場に入る風でもなくだたの通りすがりでもない
その瞬間彼女たちは壁に耳を当てた

「…聞こえる？」

片方の女の子が声を掛ける

「ううん…あまり聞こえない」

空しく言葉を返す

「そう、だよ…やっぱり聞こえるわけないよね」
残念そうに肩を落とす

「でもいいんだよ…ここに来たことに意味があるんだから!!」
と満足な顔になる

「あつ!!…来て!!こっちからだとちょっと聞けるよ!!」

元気な声があがった

2人は同時に耳を澄ませる

「あ、本当だあ…」

彼女たちはお互いの顔を見合わせて微笑みあう

その光景に私は心が痛んだ

中で微かに感じる歓声や熱さが

壁ひとつ隔てているだけなのに別世界に感じる
彼がくれる一時の幸せをこの会場で共有してる

漠然とした気持ちがいよいよと私を襲う

不意にこの会場から離れた

聞こえる彼女たちの口ずさむ歌を耳に焼き付けながら…

控え室の用意してあるジュースを一気飲みする

乾杯の合図が待ちきれなかったスタッフ

いきなりジュースの掛け合いをするまたまたスタッフ

野球選手とかでよく見られる光景…だけじゃないらしい

アンコールの終わったライブ後は

いつも通り和気あいあいと賑わっている

まるで終わったと同時に子供に戻ったみたいに

だがその中に彼方は加わっていないかった

「彼方、貴方もこっち来て座ったらどう?…主役でしょ?」

いつもと変わり上機嫌の速瀬

なかなか輪に入らない彼方を心配してやってきた

「…何をしてるの?」

彼方はその言葉を見無視しなにやら電話を掛けていた

それを速瀬は不思議そうに見つめる

「電話?…誰に」

と問いかけている途中で答えは見つかる

「彼女…?」

その問いかけにも答えず同じ動作を繰り返していた

速瀬の耳元にも微かに電話の声が聞こえる

「つながらないの?」

「…。ああ」

一息おいてやっとの受け答えをする

「朝からずっと電話してるわよね…?一度も?」

「ああ……」

彼方は静かに携帯をしまう

「心配？彼女のこと」

いつもの癩癩持ちな態度とは裏腹に優しく問いかける

それになれていない彼方は拍子が抜けた表情

「あ、いや……きつとどっかに遊びに行ってるんだろっと思っ……」

「

「なら、いいんだけど」

そう言いながら片手に持っている飲み物を口に運ぶ

「何？もう酔ってんの……？」

喉に通し終えた飲み物を近くのテーブルに置く

「え？どうして？」

「だって怒らないじゃん……電話の相手分かってても。携帯ひったくられないしなんか妙に親身だし……険悪な仲になってたと思っけど俺達嫌みっぽくはにかむ」

だが、予想していた反応とは違っていた

「そう、ね……後が無事でいてくれたら」

言い終わる前に速瀬は口をつぐんだ

近くの飲み物で無理矢理言葉を押し込む

その表情は驚くくらい動揺していた

「速瀬、さん？」

大丈夫と手を肩に置こうとするが

その手は空しく宙へと舞った

「そ、そうね……。酔いが回ったのかしら……どたばたと忙しかったから……失礼。ちょっと外の風にあっただって来るわ」

彼方の手をすり抜け控え室を出ていった

速瀬の背中を見送ると

彼方の視線はさっきまで速瀬が飲んでいた紅茶を眺めていた

35・思わぬ再来

アンコールも終わりを告げ会場が騒がしくなる
いろんな服装をした人達が私の側を通り過ぎる
シンと静まり返ったさつきまでとは逆にお祭り騒ぎみたいになって
いく

それからどれ位経つんだろう

素直な考えが体を動かした

単純に彼方君に会いたいつて思つて…

今日一日色んなところを搜したから

今の私の思考はそれだけで何よりも勝る

搜した分だけ歩き回った分だけ想いが募る

単純思考つぷりに我ながら笑える

その前向きな思考が何よりも身体を動かす

だけど、この状況じゃ裏から入りたくても入れない

右見ても左見ても警官だか警備員だか配置されてる

無断で入るのは良くないって分かつてるけど

彼方君にさえ会えれば誤解は解けるって思ったのに…

会つ前にこれじゃねえ

「…ふう」

目にした座れそうな柵に腰を落とす

もう少し収まってから行こう

今動く生きて帰れない

こんな何人もの人があの建物に入ってたんだ
この何千何万の人がたつた一つものを求めに

そしてこの会場で会ったこともない同土が心を通わせる
みんないい顔してる
顔は見えないけど空気がそう伝えてる

そしてみんな同じ想いで帰って行くんだ

たった1回だけど共有出来るとは思わなかった

それが彼方君がやっている仕事

紛れもない奏汰君なんだ…

心なしか嬉しくもそして寂しくも感じた
願っていたはずなのに

「……………」

だんだん人並みは途切れていく

普段通りといえる街が見え始める

この静けさがやっと今は夜なんだって気になってくる

一時それさえ忘れてしまいそうな賑やかさだったから

「行ってみるか！！」

再度決心を固めて腰を上げると同時に

目の前に2、3人の柄の悪い人達が立ちはだかる

「あんた…桐谷満春って子？」

「え？…」

言葉も出ないほどの迫力に圧倒される

取り囲んでいる人達は何処か他の人とは違っていた

私に刻まれた記憶の中である信号を確実なものにする

ずきんっ！！！！

頭に電流のような激痛が走った

黙っていらえなくなりそうな痛み

脳裏で走馬燈のように6年前が思い出される

『…あんた桐谷満春だろ…』

…一体誰の声…？

『…っせ！！？放せって言ってるだろ！！』

い、いや…だ、誰の声っ！？

怖い…いやだいやだ

この声聴いたことがある

『こいつさえいなければ！…こいつさえいなければあああっあ
あ！…！？』

目の前が真っ白になる

…ああ、ああ…いやだ

いや、思い出したくない！！？

思い出したくない思い出したくないっっ！！！！

「あがつ…っつ！！痛っ…」

顔を引きつらせ血の気が引いていた
寒くないのに歯ががたと震える

「ただだっ、誰か…」

本能一つで後ずさりする

…この人たち、嫌な記憶をつれてくる

「ちょっとこっちに来てもらえる…話したいことがあるんだけど」
「違っ…おかしい」

私を睨みニヤニヤしながら話しかけてくる

「はあはあはあ…助けて」

走ってもないのに息切れが起きる

「あ、たまが痛いっ…」

そんなことお構いなしに話を続ける

「…っいいいからちよつと顔貸せよ…!!!!」

無防備だった腕を掴まれる

いきなりの凶変ぶりに私の身体は容赦なく震えを増す

「…い、いややめて」

身体に力が入らない

振り払いたいのには振り払えない

逃げたいのに足は動こうともしない…

同じ事を経験したことがある

「いやああああああああ!!!!!!!!…誰か!!!!」

やっとまともに出た声は声にならなかった

誰もいなくなつた会場が私の声だけに素直に反応する

私の声は会場につき抜け私に反響して返ってきた

それは誰も来てくれない事を意味していた

電話のつながらない携帯を片手に彼方はジュースを飲んでいた

気を利かせて寄ってくるスタッフと飲んでも気分は乗らない

「最後のあの締めは良かったよなあ…俺、スタッフだったけど泣きそうになったもんな…感動するようなことやってくれたな!! 彼方」

「…あ?、あ、ああ…ハハハツ」

誤魔化し笑いをしながら携帯を取り出す

着信は0件だった

彼方は思わず不安な顔色になる

「…どうした?」

「あ、いや…俺、ちよつと外出てくるわ」

軽く愛想笑いをすると輪の中を抜け出した

他の楽しんでいるスタッフの邪魔にならないようにドアを静かに閉める

そして携帯を取りだしリダイヤルを押す

「……………」

またリダイヤルを押す

「くそ!…なんで出ないんだよ。こんなに掛けてんのに!!」

不安があふれ出す

「昨日今日連絡の一つもないなんて…」

これじゃまるで…

まるで…6年前みたいだ

そう言いたい気持ちを無理矢理喉に押し込んだ

「なんで掛け直してこないんだ」

「…つく!!」

ただあの瞳は思い出したっていう表情だ

歌い終わった俺から瞳を逸らさず泣き続けた俺は見てた

嫌な予感だけが彼方の身体を震わせる

36・暗闇の中のリアル

会場を近く雑木林に突き倒される

「…っ!!」

枝の破片が突き刺さる

痛いなんて考えている余裕はない

摩擦で全体が擦り切れたみたいに熱を帯びた

土や泥で顔や手が黒くなる

「…そうそう、話って言うのはね。」

え…っ!!

目を開けたらいつの間にか人数が倍に増えていた

きつと待機していた仲間だろう

身体に緊張が走る

ますます震える手を必死に抑えるつける

「…!!」

肩の下くらいある髪の毛を無造作につかみとる

「やめてくれるかなあ…? 彼方に近づくの…どんな手を使って近

づいたんだか知らないけど」

口調とは裏腹に私との距離を詰める

「平等に考えてくれなきゃ…ねっ!!」

途端一気に掴んだ髪の毛と一緒に地面に打ち付けられる

必死に後ずさりをする

後ろがないのは分かってる

だけど、出来るだけ彼女達から遠くへ

が、私より遙かに女の方が早い

彼女達の高い笑い声が聞こえる

「……………っ！」

詰め寄ってくるついでに近くにある尖った気の破片を手に取る

「はっ…なんだか分かってないようだねえ…」

6年前が鮮明に蘇る

心臓が漠々と高鳴る

笑って騒いで私を殴る

玩具のように楽しそうに…

狭い扉に追いやられる

凶器が視界に入る…

叫んでも助けにこない

やっとのこと立ち上がる

「しゃべんなきゃ分かんないって言うてんだろっ！…！！…！！？」

「つつ…！！？」

だけどそれは無駄な抵抗

誰からか分からない衝撃が腹部に入る

目の前が一瞬真っ白になった

空しくお腹を支える暇なく倒れこむ

痛み能耐え切れず咳き込む

「何のつもりだか知らないけど…こんなとこに堂々と出てきてむかつくんだよ！私は彼女ですってかあ…？…？！」

2 撃目が私の肩に激痛を走らせる

「ふさげんじゃねえ…よ…！！…！！！」

地面にうつ伏せになると同時に
左右何処からともなく何本かの足
私には一瞬の影となつて覆いかぶさる
蹴られる足の間に見える一瞬の光だけが
気を失つてない希望だった

それは本当に一瞬の光で

…っ！！、う…っ、がい！！！！

継続的に走る痛みが教えてくれる

ドカツ！？…ガンツ！

もう恐怖なんてものなかつた

ここまできたら

痛みさえ痛みとは認識できなくなつてきている

抵抗なんて出来るはずがない

あまりにも現実から離れてる現実に

痛みと一緒に目を瞑るしかなかつた

複数の手が私の身体に忍び寄る

マヒし始めていることは分かる

ザワザワしてる声が耳に入ってくる

もう何も痛くない、感じない…怖くない

「おいっ…お前らどいてろ！これで二度と彼方に近づけないよう
にしてやる」

女が持つていた木刀

微かに目に映つた

そして力強く握りしめた

何をしてくるのかは一目瞭然

私は恐怖で彼女から目が離せなかつた

脳裏に記憶が蘇ってくる

『あんたさえいなければ!!!』

なんで貴方達に言われなきゃいけないんですか・・・？

『つく…マジむかつくんだよ!!!てめえ』

私は別に奏汰君が有名人だから一緒にいるんじゃないやありません・・・
『彼方』君が目当てなのは貴方達じゃないんですか???

『なに生意気言つてんだよ!!!このガキ!?!』

『まあまあ…そんな躍起になるなつて。こいつにもう彼方には近づかないつて言わせれば良いんだから…なあ?言わせれば』

わ、私はそんなこと言いません!!!…約束を守るために!!!
だから私は誰よりも近くで…

『このアマ…なに分かんない話してんだよ!!!こつちが大人しくしてるからつて調子に乗つてんじゃねーよ!!!?』

…つつ!!

『や、やばいつて!!…凶器はやめようぜ・・・?』

『むかつくんだよ!!!?…?そうだろ?だからやめるなんて野暮なこと言つなよ』

…つつ!!

わ、私は…見ていたい感じていたい

ずっと前からの約束

誰にも邪魔されたくない

側にいない分誰よりも奏汰君の心の支えに

幼い約束を小さなただ…その小さな身一つで叶えてくれた

泣き出した私をそつと慰めるように言ってくれた

いつも一緒に入れるようにって笑ってくれた

何よりも大切な… ……。

「うっ…っ…っ!!」

再びなぎ倒された

でも気付いてしまった…

うっん、もしかしたら今日目覚めたときから思ってたのかも

叶わぬ約束もあると…

奏汰君へと歩を進ませる度に明確になっていった

ずっと付きまといていたわだかまり

大きな尖った凶器が私の頭に覆い被さる

力の限り目をつむった

「待ちなさいッ!!? 貴方達一体そこで何をやってるのっ!!!!」

致命傷といえる衝撃が走るはずだった

そのかわり鼓膜にギューンと痛みが走る

甲高い声が耳に付く

私は声のした方向を見る余裕がなかった

「はあ…はあ…うあ…」

目の前で去っていく人達

次々と草を蹴っていく音がした

私はその場に座り込んだままになっていた

「はあ…はあ…はあ…」

何が起こったのか分からない
変な呼吸を繰り返してる私
辺りに静けさが戻る

立つ……気がない

「あ、う…」

「…貴方、大丈夫？」

側に誰かの気配がする

「み、はるさん？…!!」

甲高い声の女性は目を丸くした

視界が戻り始める

目の前に髪の毛の長い女がいる

助けてくれた人だ…きつと

目を丸くした女性はすぐさま何度も私を呼んだ

「っ…満春さん？」

「っ…」

なんで私の名前を

指一本も動かす力がない

やつとの事で見えた顔立ちに目を丸くした

「満春さん…私のことは分かるかしら？」

「は、やせさん…？」

「ええ、そうよ」

やつとのことと言葉を口にすると

完全に視力を取り戻した瞳は速瀬さんを凝視していた
その視線を交わし速瀬さんは腕をひっぱる

「…立てる？」

「いった!!」

本当はもうどこが痛いかなんて麻痺してた
立てる状態じゃないと判断した速瀬さんは再びしゃがむ

「なにがあつたのかはだいたい想像が付くわ…。私が言う立場じ
やないんでしようけど、大丈夫?」

瞳から涙が零れる

待っていたかのように次々と零れていく

「うつく…ひくっ!!ごめっ」

漠然と安心という言葉が脳裏を掠めた

私の力じゃ止められそうにない

今になって遅れたかのように流れていく

「ごめ、なさ…とま」

止まらなくなつた

恐怖とか絶望とか緊張の糸が切れたとかそんなものじゃない
たどり着きたくなかつた結論に巡り会つてしまった

「いいの…無理にしゃべらなくても。今は泣きなさい…」

目を背けていた結論に従うしかできない自分の不甲斐なさ

大声で泣き叫ぶ私の身体を速瀬さんはささえていてくれた

この歯止めの利がなくなつた感情の嵐がやむまで

まるで母親のような優しさで速瀬さんは私の身体を抱きしめてくれ
てた

「どう?…気分落ち着いた?」

あ……

丁度よく高い声が優しく耳をつつく

泣き止むまで近くにいてくれた速瀬さん

私、ちよつとこの人のこと誤解してたのかもしれない

「…はい、すみません。取り乱してしまつて」
静かに頭を下げる

「別に気にしてないわ」

「……。」

「さて、とりあえず…そのあちこちにある傷の手当しましょう！
！もしかしたら何処か折れてるかもしれないから」

私のスカートに付いた土をはたく

そのお母さんみたいな姿をただ見つめていた

「さつ…おぶさつて」

そう速瀬さんは私に背中を向ける

この前まで敵意むき出しだった彼女とは思えない
好意を分かっているながら疑問を投げかけずにはいらなかった

「あの、どうしてここまで？」

一時の無言が二人の間をすり抜ける

「そこまで非道じゃないわ…それに事の経緯は想像つくから…さ
あ傷の手当を」

「平気です…。」

「平気ですつて貴方…」

あつちこつち血が滲む身体を見つめながら驚く

だけど構わず私は話を続けた

「そうですね、想像付きますか…じゃあ話は早いです」

「話？」

一息おいて一段と決心を固める

「一人で歩けます。だから私を今から彼方君のところへ連れてい
つて下さい…。」

きつぱりとした口調で私は口を開いた

想像したとおりの呆気にとられた顔を見せる速瀬さん

「あ、貴方今自分で何言っているか分かつてるの？」

その言葉に小さく頷く

「なら何故今、そんなことが言えるの…それでもあの子に会いた

いって言うの？どこまでも一途なのは良いことだわ。だけど誰にそこまでの傷を負わされたのか…何のためにさっきの子達が満春さんに言い寄ってきたのか分かって…」

身体が微かに震えた

「…はい、分かっています」

「悪いけど、会わせることは出来ないわ…貴方達を会わせるのは危険すぎる。魂胆が見えない」

速瀬さんの言葉に一瞬落胆を憶えたが

決意は揺るがなかった

私は擦りむいた傷だらけの足で速瀬さんの前に立つ

「会わせてくださいっ！！決して速瀬さんにご迷惑掛けるようなことませんから！！約束します！だからお願いです！！会わせて下さい…っ！！」

必死に頭を下げる

目の前で困惑そうに立っている速瀬さんが何か喋るまで

必死に頭を下げていた

「…満春さん」

頭上から深いため息が聞こえる

「悪いけどなんて言われても彼方に会わせる気はないわ…」

「……………！！」

「…って言ったら貴方ここから動こうとはしないでしょっね…傷の手当てもさせてくれないだろうし」

その言葉に続く内容が理解できた私は顔を上げた

「いいわ。ついてきなさい…案内するわ」

そう言うと私の存在を忘れたかのように足早に歩こうとする

「あ、あともう一つ良いですか…あの出来れば速瀬さんの羽織っているジャケット貸して欲しいんですけど」

無言で渡されたジャケットをなるべく肌にこすれないように着るだけでピリピリと電流が流れるような痛さが身体を伝っていく

こつやつて隠してれば彼方君に知られない

色々と考えた結果

たとえ最後だとしても…こんな自分を憶えていて欲しくない

私が『会いたい』と言ってから速瀬さんは一言も喋らなくなった

3歩先を歩き振り向いてもくれない

でも良かったのかも

後ろで静かに泣いていられるから

歩いている2人の足音で涙の音はかき消されていく

37 ジャケットの裏側…

たった一日

会わなかったただけなのに

彼方君の姿が懐かしく思える

随分ここまで来るのに長かった気がする

目の前の彼方君は昨日まで私の瞳に写っていたのとは違っていた

記憶が甦った私の瞳で彼方君は

アーティストではなく幼なじみに変わってしまったている

ファンではなく…幼馴染に変わってしまったてる

それに私はしつかりと蓋をしなくてはならない

頑丈に鍵を掛けて二度と出てこないように…

何故か彼方君は落ち着かない様子で裏口にいた

控え室は落ち着かず外に出てきたという感じ

「何してるの…こんなところで」

一足先に来ていた速瀬さん

声のする方へと顔を向ける

柱に隠れて私のことはまったく見えていない様子

咄嗟に私が周りのものに隠れたのも原因なんだろうけど

片手には携帯電話が握られていた

「また、電話していたの？そんなに気になる…？彼女」

無表情のまま返事をしない

その態度に速瀬はため息をもらす

「反対だけど…それは今も変わらないけれど」

何を言いたいのかわからないと言いたげな顔をする彼方
再び溜息を漏らすと

「彼方：貴方にお客さんよ」

脈絡のない会話の流れに混乱する

そんなことを気にしていられる気分じゃない

どうやら苛立ちを隠せないようだ

私は咄嗟に涙の後を拭う

そして私は笑顔で彼方君の前に姿を現した

「…こんばんわ」

そう言った速瀬さんは不満げに距離を置く
視線が私に向いたまま固まる

「満春？」

「…うん」

私は返事を短くして答えた

「え、なんでここにいんだ…？」

その言葉に声を詰まらせる

「携帯に連絡したんだけど…」

「あ、ごめん…携帯家に忘れちゃって」

私は…とにかく笑った

「なあんだ！…！…忘れたのかよ。心配かけんな」

安心したのか座り込むと

彼方君は笑顔へと戻っていく

心臓が裂かれるように痛くなる

「ごめんね…」

何も思い浮かばなかった

ただ色んな意味を含め私は頭を下げた

それを速瀬さんは離れたところから見つめていた

「いいよいいよ…無事だったら…！」

屈託ない顔を私に向ける

「あ、でさ！！ライブ来てくれただろ？」
あ…

私の表情は彼方君と打って変わって段々と強ばっていく
途端言葉を失っていた

彼は気付かず私の言葉を待っていた

「どうだった…？」

覗き込むように私の顔を見る

気付かない振りをして満開の笑顔を作った

「え？…どうだったって？」

笑顔…とりあえず笑顔

「昨日のライブで何か感じなかった？…」
子供みたいに遠まわしな表現をする

「ライブで感じたこと…」

彼方君の眼差しから視線を背ける

と、少し離れたところにいる速瀬さんが視界に入ってきた
ただ黙って見ている

「今回の新曲、いい曲ですね」

彼方君が驚いたのが手に取るように分かった

速瀬さんも私の顔を凝視していた

二人から私は目をそらす

「あれ、幼い頃を題材に作った曲なんですよね！！凄く素敵だっ
た…気持ちがかつちまで伝わってくる感じがして…大切な思い出
って必ず一個はあるよね小さい頃に。私もあつたなあ〜」

とにかくしゃべったはしゃいだ

顔が見れない、けど笑ってる

どんな気持ちでいるのか知るのが怖い

「他には？」

言葉だけが耳に入る

その声が重く私の心にのしかかる

表情だけは逆らい続けていた

「他：そんな突然言われても困りますよ…でも素敵なライブでした」

私は笑い続けていた

3人の間に緊張の空気が流れる

「それを…それを伝えたくて今日、ここに来ました。頑張っ
て、ほしくて」

とにかく悟られたくない

このジャケットの奥にある真実を知られたくない

私は必死に手のひらをジャケットを握りしめる

にっこりと微笑む

そして、私は彼方君に背を向けた

私は泣き叫びたい気持ち在必死に押さえ込んだ

「あ、そうだ…応援してます。その女の子にいつか会えると、いいですね!!」

決定打を投げた

これを言ったら終わりだと思っ

「ファンとして心から…」

彼方君に背を向けたまま話す

私がこの台詞を言わなきゃ彼方君は芸能界を辞める

…そう予感してた

笑顔は笑顔でも…こんな笑顔が初めて最後だなんて辛すぎる

これ以上彼方君と正面から向き合えなかった

居たたまれなくなって私は走り出す

「…待って!!!」

「っ!!!」

「なんで、そんなこと言うの？」

後ろから腕を掴まれる

振り向けない…振り返るのを拒んだ

「君、…なんだ。」

あ………。

「……！！！」

私の耳に微かに聞こえた

だけど私は聞こえない振りをする

その言葉を無理矢理押し込むように語りかけてくる

「君なんだよ…女の子は」

私は返す言葉を失ってしまった

心から叫びたかった

私を掴むその手が体温が痛い

どんなに真剣か伝わってくるから

この腕の強さが眼差しが…

心臓が漠々と音をたてる

私はもう一回喉に力を入れる

「あははははははっつ！！！！！」

思いっきり笑った

彼方君の声が聞こえなくなるくらいにまで

「…冗談言わないで下さい。」

「………」

「人違いですよ…ただのファンだから小さい頃、貴方になんて会ってない。記憶喪失の話だって相談したの冗談だし…興味あったんです。どう答えるのか」

苦しい言い訳

彼方君が口を挟もうとするが

「それじゃ。…さよなら!!」

私は駆け出した

ふつと会話を聞いていた速瀬さんと目が合う

何故?と言う言葉が無言で投げかけるのを無視し

軽くお辞儀をすると私はそのまま駆け出した

瞳に涙を浮かべながら

走る私に容赦なく悔しさが襲いかかる

その倍の速度で涙がこぼれ落ちる

気持ち静める機能はもはや麻痺していた

こんな結論にたどり着きたくなかった

私は彼方君とは笑顔で再会する予定だった

大好きって言うてくれた笑顔であう予定だった

今日一日でこんな変わってしまったなんて

ううん…もしかしたら心の何処かで気付いていたのかもしれない

ドーム満員にし会場の全員を熱くさせる

閑散としていた会場が悲鳴に変わる

精一杯の想いを託して叫び出す声

感極まつて思わず泣き出す声

感動のあまり呆然とする子

今日見てしまった会場に聞き耳を立てる女の子

何もかもたった一人の人に捧げられている純粹無垢な想い

それが今の彼…

今、社長さんも一目置いてる『彼方』

そう考える度に不安を呼び起こす

…私には重い。

このみんなの思いをたった私一人のために壊すわけにはいかない

覗いてしまったから知ってしまったから
純粹無垢な部分も汚い部分も全て
たった一つ交わした約束のために
みんなの気持ちを台無しになんて出来ない
なかったことにしよう
幼い頃の約束も全部…さよなら

彼方はただ呆然と立ちつくしていた
風が気持ちとは関係なく髪を揺らす

「……………」
そんな彼方に速瀬が髪を掻き上げながら近づく

「彼女…」
速瀬が何を言っても興味はない
そんな彼方に笑みを浮かべながら見つめる

「なんでもないわ」
あさつての方へと顔を背ける

「追いかけないの…？」
彼方とは反対に視線を向けながら呟く
速瀬の瞳は呆れた表情ではなく悲しみに満ちていた
それは時々吹く風によって彼方には見えていなかった
短い時間が過ぎると速瀬は口を開いた

「ねえ…気付いたかしら？」
視線を彼方へとむき直す
「なんで満春さん…うちのジャケット着ていたと思う？」

「…え？」
突然の質問に困惑する
頭の中が白く染まった

「貸してくれて言われたのよ…満春さんが傷だらけになった身

体を隠すために」

ますます彼方の頭に重度の霧が覆った

「貴方に気付かれぬようにするために…ファンの子にリンチされたのを」

「なん…だつて？」

脳がマヒをしたかのように動こうとしない

速瀬の言葉が重くのしかかり声を出すのがやっと
淡々と話を続けていく

「私が見つけた時…放心状態だった彼女。見た限りあちこち打撲の後だらけ、6人くらいの貴方のファンにに囲まれて…私が止めに入ったら逃げていったけど1歩遅かったら」

彼女は言葉を返せなかった

「それでも私に縋って必死に貴方に会いたいって言ってきたわ…

まさかあんな嘘を言うためなんて正直私も驚いたわ…。」

「…だよ。」

誰の声だか分からないような低い声が速瀬の耳を突き抜ける

彼女は怒りを露わにする

正体の見えない犯人に苛立ちを憶えていた

「一体誰だよ!!!…!!!」

速瀬はその豹変ぶりに目を丸くさせる

「ちよっ!!ちよっと落ち着きなさい…!」

言葉で制する速瀬

「か、彼方!!!」

もはや速瀬の言葉は耳に入っていないかった

手のひらは血が滲みそうなくらいに力が入っていた

怒りで気が狂いそうになりながら言葉を発っそうとする

パンツッ!!!!!!

闇の中に衝撃音が走った

一瞬時が止まる

一体何が起きたのか

それは突き抜ける夜風と一緒に解かれた

「落ち着きなさいっ!!」

速瀬の手のひらは赤くなっっていく

彼方の頬は段々痛さを増していった

だが、その痛さが彼の平常心を取り戻していく

「彼女の方が利口だわ」

深くため息をつく

「周りの物事が見えてなさ過ぎる!!」

そう言う速瀬を余所に力を無くした彼方は階段に腰を下ろした

「なんで速瀬さんは落ち着いていられるんだよ!!...それともこれもあんたが仕組ん?!!」

「馬鹿言わないでっ!!!!!!?」

大声で彼方に怒鳴り込む

彼方は息をのんだ

「こうなること...。予測してたからよ」

それは速瀬の声だったのか判断がつかなかった

「速瀬さん」

「私の話聞いてなかったの?...あれはすべて貴方のファンから受けたものなのよ。きついこと言うようだけど新曲ライブの時貴方が余計なこと言わなければこんな事態は起こらなかったかもしれない」

「俺、が?」

「気付いてないようだけど入った時から貴方は満春さんに関する

執着があまりにも強すぎる…こんな事態が予測できないほど周りを
見ていないのよ…」

それから言葉を失う速瀬

言い終わった後思わず顔を伏せる

不意に6年前のことが脳裏に蘇る

「そ、んなことって…」

速瀬の言葉は『貴方が仕組んだこと』とされているのと同じ

自分のせいで満春は酷い仕打ちを受けた

そう受け止めざる得なかった

何度も耳にした言葉はまた速瀬の口から繰り返される

あの時交わした約束のせいで約束を守れなくなっている

細い声で呟く

それは言わなくても脳裏に浮かんだ

何が起きたのかなんて分からない

彼方自身で見えてはいないのだから

身体の体温が下降する

喉が塞がれたように声が出せなくなる

気付いた途端全身の力が抜ける

彼方が真っ白になった

38・決意の涙

私の周りでガヤガヤと音が聞こえる

時計の音　椅子を引く音　カバンを置く音

負けないくらいの声で話してる人もいる

甲高い声　笑い声　怒鳴り声

それが慌しい朝の教室を演出していた

私にとってこの光景は久々だった

気が付いたら目が腫れ

それもあるけど…気持ちの整理がしたかった

誰にも会いたくなかった…

とにかく考える時間が欲しくて

だから何日か休んでしまった

まだきちんと整理が出来たわけじゃない

いつも気にならなかったはずの教室

ただこの場所に来てこの場にいれさえすればいいはずだった所

何もかも見えるものが違ってみえる

心の整理がつかないままな

余計なものまで一気に流れ込んでくる

変わる景色や人の表情や感情の流れ

何も吹っ切れてないけど

目をそむけていたモノが否応ナシに視界に入る

「……………」

まだマコは来ていなかった

いつも遅刻ぎりぎりなのがマコ流

フツと窓の外を見た

彼方君のことが脳裏に浮かぶ

「……………」

傷つけてしまった

知らない振りをしてしまった

速瀬さんがまた何か言ったとかそんなんじゃない

私が言ってしまった言葉自体に

でもこれで良かったんだよね…

あの日から同じ事を自分に問いただしてる

何を話したのかあまり憶えてない

無我夢中で言葉にしていた

そこに気持ちなんて入れたら…どうにかなってた

何も考えなくていいって言うのなら間違いない飛び込んでた

彼方君の顔が瞳から離れない

机へと顔をうつぶせる

いつの間にかマコは自分の席である前の席に座ってる

頭が上手く働かない…

気が付くと時間は昼時を知らせていた

私の中の4時間は無意識のうちに過ぎていった

今何の授業だったのかさえ分からない

周りのクラスメートは解放されたという表情をしてる

まるで私一人取り残されたような感じ

思いにふけっていると眠気眼のマコが顔を寄せてきた

「今日一日ボーっとしてるな…」

マコは心配そうに私の顔を見つめる

おでこのうつつ伏せた後が気になった

視線を逸らすように私はお昼の支度をする

「…そう?」

身支度をしながら愛想笑いを浮かべる

「なんかあつた…?」

お弁当を広げる手が止まる

何で分かるんだろう…

いつも思う

あまり感情を表に出さない私の心の内がマコにはバレてしまう
マコは他の人とは違う

「なんかあつたんでしょ?」

再度言葉を繰り返してくる

息が詰まって何もしゃべれなくなる

「別に何も無いよ」

私はそれだけ言うようになるべく笑うように心がけた

マコは複雑な表情を浮かべた

なるべく下を向いてマコの顔が見えないようにお弁当を食べ始める
じゃないと場が続かない

どうしてボーっとしているのとか…

何でここ何日か休んでたのとか

…最近、彼方君とはどうなのとか…

休んでる間色々と考えてた

この前の事件だけじゃない

彼方君と出会った頃とか一緒に遊んだ時のコトとか

6年前の出来事とか記憶がなくなった時とか

この間6年ぶりに彼方君と再会した時とか

ここまですまい話はない

『また偶然会って』とか出来過ぎてる

私の記憶の中にはないけど

うちにマコが泊まったあの夜

… 当時を知ってる

記憶の断片がなかったこと

それが6年前の事件が原因だってことも

『仲宮 奏汰』

彼方君つながっていることも

全てマコの不審な行動に結びつく

ライブを誘ったのは偶然じゃない

何で今まで興味なかった音楽の話を持ちかけたのか

家に泊まったときの夜の会話

何よりも無口な私の面白みのない私を気に掛けて

全て知ってるのに面倒な私とここまでつき合ってくれた

時折見せる真剣な表情とか悲しげな表情

こんな事も言ってた

『満春を昔の笑顔に戻してあげたい…』

ドアの向こう側聞こえた声

啖呵を切っていたマコ

あの時は意味が分からなかったけど

今なら分かる

その言葉だけで十分だった

今でも心に染みわたっていく

それだけでこれから生きていけるって言ったら大げさだけど

昔の自分に戻る…

笑顔になれる気がした

「そうか…何かあったら遠慮なく言えよ？相談乗っから」

上の空の私にそう話かける

きつと感じている

私が元気がない理由

だけどそれ以上はマコは踏み込んでこない

話さない限り気付かない振りをする

それがマコの優しさ

知らないうちに何度私はこの優しさに救われたのかな？

涙がまたこみ上げてくる

これは元気になるための最後の涙

「み…はる？」

不意にマコは持っている箸を床に落とす

そして慌てて私の側へと駆け寄ってきた

「彼方さん！！…スタンバイお願いします」

「あつ、はい！」

スタッフが軽く彼方に声を掛ける

反射的に通話ボタンを切る

「……」

思わず苦笑いを浮かべた

毎週金曜日放送の番組

シングルをリリースしたアーティスト集め

一つ一つ紹介してしく音楽番組

淡々と音楽を紹介していく局アナ

時刻は何時か分からない

でも丁度、前のアーティストが歌い終わった後だった

「ありがとうございます…：シングルは来週火曜日18日にリリースされるそうです…：それでは今週の目玉！！3組目のゲスト彼方さんです！！」

観覧席から悲鳴に似た声

会場内が膨張した感覚にとらわれた

と、同時に拍手が会場内をいっぱいにした

あちらこちらから彼方を呼ぶ声がある

タイミングを計ったかのような持続する悲鳴の連続

その反応に司会者は満面の笑みを浮かべていた

その笑顔は

いつ進行して良いのか迷っている感じにもとれる

「凄い歓声ですね…：彼方さん」

その受け答えは軽くシンプルなものに終わった

こんな事言われても反応に困るだろう質問

『そうですね』と言っていていいのだろうか『ありがとうございます』
なのか

さすがのプロそつなくこなしていく

「…この前野外ライブをされたそうですね!!…ロコミで集まったお客さんだったそうですね…たくさん集まりましたあ?」

カメラと彼方を交互に見る司会者

マイク越しに彼方に問いかける

「はい、お陰様で…2カ所で歌わせていただきました…」

「そう、突如会場を2箇所を増やしたそうですね…予想以上の反響を受けたそうですね!!」

ニコニコと微笑みながら説明する

「新曲発表ライブだったんです。…いち早く聞いてもらいたくて」

「そして新曲どうやら思い入れのある曲のようですね…もう有名な話になりつつありますが」

淡々と会話をこなしていく司会者

その質問を余所に彼方は一瞬曇った顔を見せる
言葉の返ってこない方向に顔を向ける

「彼方さん…?」

「…ああ、ごめんなさい」

「大丈夫ですか?2日連続の新曲ライブにお疲れのようですね…」

軽くフォローを入れる

もやもやとした気持ちを追っ払い笑顔を見せる

「いやいやそんなことないですよ!!確かに突然の企画で負担は大きかったけどたくさんの方の顔を見て嬉しかったですよ」

再度微笑みを見せる

カンペの合図で紙を取り出す

その説明を司会者は簡単に視聴者に伝えていた

「…と言つわけで番組恒例の企画…いっぱい来てますよ。彼方さんに關する質問が。」
手のひらに持つてみせる

「彼方さんはどんな子供だったんですか？…音楽を好きになつたきっかけは？歌手を目指したきっかけは？…まだたくさんありますよ！」

次々と読み上げていく

彼方は上手く乗れていなかった

「ははっ！本当ですね…」

それだけ言つと司会者に任せる

「本当は全部の質問答えていたきたいのですけど時間が迫つてきてしまいましたのでお一つだけ…一番質問の多かつた『歌手を目指したきっかけ』ですね、聞かせていただけたらなと思います」

カメラから視線を外し彼方へと目を向ける
彼方の顔がアップに映し出される

会場内は静まり返っていた

「きっかけ、ですか？」

彼方の身体は強ばつた

それは彼方も気付かないくらいのもの

この前感じた絶望感が頭支配する

『余計なことを言わなければ彼女は傷つけられることはなかつた

…』

ふつと速瀬の声が鼓膜をすり抜ける

深く彼方の脳裏に突き刺さる

「そ、れは…気付いたときには音楽が好きになつていて気付いたときには歌手になつてました昔から歌うのは大好きで…」

彼方の口はよく回つた

まるで意志がないみたいに
ただただ口先だけを動かしていた
そして、ただ微笑んでいた

「はい、それでは聴いて下さい…ニューシングル」
曲紹介の台詞を言う司会者

途端彼方は一人ステージに立ちライトを浴びていた
一気に歓声は止み耳を傾ける観客
いつもと違い静かに入る曲
照明もゆっくりと彼方を映し出す
前奏は終わり彼方は息を吸い込んだ

僕と君の幼い物語

それは切ない終わりを告げてしまったけど

今でも僕は何度も思いだしては心の奥に閉まってしまっ

これは満春のために書いた詩

あの6年前から何度も諦めようと思った

待ち合わせ場所に君は来なくて

速瀬さんには忠告されそれでも諦めきれなかった

だけど、電話がつながらなくなったあの時

現実に戻った感じかした

受話器から聞こえてくる元気な声も

今、頑張っている自分さえも夢で…

何度も何度もかけ直してそれでもつながらなくなっていたあの時
君とのつながりは途絶えたと思ってた

だけど俺が芸能界を辞めなかったのはあの日を予測してたからかも
しれない

君に似た子が現れて正直驚いた
まさか記憶を失っていたなんて

そしてまた俺は幼い頃に戻った気がして必死に駆け回った

『君に似た子』は不確かだったけどかけずり回ることが嬉しかった
君に近づける気がした…

だけど原因が自分自身だったなんて

約束は果たしたけど果たしてない

『約束』が俺達の邪魔をする

でも君の笑顔が今まで支えになっていたから

僕は歩み出すよ

思い出してくれるなら 振り返ってくれるなら

俺は…何のために

誰のために歌ってるんだろう

ウソまでついて愛想笑い浮かべて

まったく歌詞が頭に響いてこない

自分自身の声が耳に入っていない

俺は…何のためにここにいるんだろう

40. たった一本の線

今日は学校が休みの日曜日

しかも明日明後日も休み

いわゆる三連休

明日は祝日明後日はうちの創立記念日

だけど世間では二連休となる

それに伴ってか街は予想以上に溢れ返っていた

もうすぐ季節の変わり目だしお店の戦略と言っている

この2連休…稼ぎ時だ

私ともかく知ってか知らずか相手の戦法にどっぷりはまっている

マコなんてその波に負けまいと必死に

行き当たりばつたりのお店を網羅していた

「なんだよ…みんな考えることは同じってかあ!!」

呆れ返るマコの私は隣で笑っていた

9月をさしていた

軌道に乗り遅れた個人店やラストスパートをかけるデパートは

ますますの格安セールを行っている

それを狙ってそれと重なっての二連休

マコもそれは重々承知な訳だ

私の隣で荷物を下ろしぐつたりと座り込むマコ

「もう挫けちゃいそう…」

珍しくしおらしいマコだと思っただけ

甘かった…泣き真似

「そんなこと言っても売れ残りが増えるだけだよ…嫌なんですよ

？」

私は苦笑しながらマコの肩を慰めるように叩く

ますます肩を落とすマコ

「それに、今回バイト代少ないからって服はこの連休にかけるっ

て言つてたのマコじゃない…」

その考えの人がこの人混みの中でどれだけいるのやら

「そうだよな！…ここで落ち込んでたらマコの名がすたるぜい
！！」

どこの江戸っ子だろう

勢いよく膝に力を入れ立ち上がる

こういうところは奈津実そっくりだとマコは嫌がるけどそう思う

「荷物、持つてあげるからさっ！」

私はそう言つてマコの置いた荷物を持つ

先にとことこと歩く

「なっ…ちよつといいつて自分のものなんだから自分で持つよ！
！」

後ろから追いかけてくるマコへと振り返る

「これからまだ多くなる予定なんだから一人で持つより2人で持
つた方がいいでしょ？」

冗談めいた口調で笑う

マコはそんな私につられたのか苦笑しながら隣へつく

「あれ…満春もしかして携帯なってる？」

マコの視線は私のカバンへと向けられる

間違いなくカバンから音は鳴り響いていた

只知道らない振りして私は隣のデパートへと

少し歩く足を速めに移動させる

「？満春、出なくて良いのか…？」

マコは不思議そうに顔を覗き込む

それに気付いた私は軽く微笑んだ

「これ、メール音だから平気！だから行こう！…」
荷物を胸に抱えると走った

あれから何ヶ月経ったかな…？

2・3ヶ月位経つのかな

考えないようにしてるけど

決まって考えてしまうときがある

私はマコがいない間に携帯を開いた

『着信アリ…彼方』

あれから随分経つのに収まらない

この電話で気付かされてしまう

医務室で久々に彼方君に会ったことも

街中でぶつかったことも

一緒に喫茶店行ったことも…スタジオ案内されたことも

夢じゃない…

自分がまだ忘れられてないことさえも

私はどうすればいいの

どうしたらいいのか分からない

きつとこの電話に出ることさえ私達の運命を変えてしまう

一歩彼方君に歩み寄ることが多分重大な意味がある

この電話も取っていいのかさえ分からない

あの時の気持ちはまだ甦ってしまう様な気がして

ライブの時の別れ際

私は何度も伝えたかった

伝えるために行ったライブ

『満春です』って改めて言いたかった

それが抑えきれなくなりそうで怖い

携帯の画面をもう一度よく見つめる

その時着信音が鳴った

ブルブルブル~~~~ツブルブルブル~~~~ツ

ビックリして携帯を地面に落としそうになるのを必死で抑える
軽快に鳴り続ける携帯に視線を向ける

『着信 彼方』

心臓は大きく跳ねた

ドクン…ドクンッ

固まったかのように私は動けなくなる

そしてまた同じ事を繰り返す

この短い間にあっという間に思考の迷路に迷い込む

思いつきり目を閉じた

携帯を胸に強く握りしめる

携帯の振動が私の心臓と重なる

嫌に心臓がバクバクしている

取っっちゃ駄目だ…見ちゃ駄目

決心が揺らぐ

ここさえ我慢すればこの時さえ我慢すれば

一種の呪文のように自分に語りかける

着信が鳴り終わると私は力が抜けたか様に携帯を地面に落とす

一気に力が抜けた

顔を手の平で覆う

もう、泣きたくなかない…

「おいっ…満春、大丈夫か!!」

落とした携帯を拾い上げる

「あっ…マコ。いつの間に戻ってきたんだ」

安堵のため息をもらしマコに笑いかける

「あ、ついさっきだけど具合悪いのか？」

「だいじょうぶ大丈夫!!…この人込みで目が回っちゃって」

渡してくる携帯を受け取る

マコはまだ心配そうな顔で顔色をうかがってくる

「大丈夫だつて言ってるでしょ？…ほら元気なんだって！」

私はガツポーズをして微笑む

それを見てマコは肩をなで下ろした

「…ならいいんだけどよ。焦った…正直」

「ごめんごめん心配かけて」

前より笑えるようになった

前より話せるようになった

今がすごく楽しい

記憶が戻って私が戻ってきてよかった

だからいつか忘れられる

いつかこの電話もなくなつて…普通の生活に戻つて

…戻つてしまふのかな…。

心の奥でこの繋がりだけは消さないで欲しいって思ってる

電話を掛けているこの瞬間だけは彼方君は私と繋がっている

想ってくれている…

苦しい…辛いけどいつまでも鳴っていて欲しい

首を左右に大きく振ると

私はそつとバッグに携帯をしまいマコを見て微笑んだ

41・忘れられない

殺風景な屋上

煎れてから随分経つコーヒーをただ見つめていた

何かを考えているけど

考え事が多すぎて頭がいつぱいになる

ただただブラウンに染まった良い香りのコーヒーを

無表情のまま見つめる

辺りに吹く風がカップの中身を揺らす

自分の顔が一瞬歪む

だがそれから目を反らすことはなかった

「こんなとこにいたのね…捜したわ」

凜としたいつも緊迫感のある声

彼方はその声の主へと顔を向けなかった

声だけで分かっってしまう人物だから

長い髪をかき分けながら問いかける

「珍しいわね…貴方がこんなとこにいるなんて」

と、速瀬は辺りを見渡す

さほど高くはないがそれなりの景色が見渡せる屋上

「クスッ…さしずめ一人になりたかったってとこかしら」

コッソ　　コッソ　　コッソ

心地いいヒールの音で彼方との距離が近づいているのが分かる

すっと伸ばした手は彼方の隣手摺りに届いた

無言のまま横で立ち止まる

「ここだと誰にも邪魔されずに考えてられるものね…人も来ない

し、雑音もあまり聞こえてこない」

ささやかに吹く風が速瀬の長い髪を揺らす

彼方は変わらず手元を見つめていた

「今は私の声も雑音に入るのかしら？」

「速瀬さん…次の仕事まで時間あると思っただけど」

それは半分拒絶の言葉

速瀬は密やかに微笑んだ

「クス、どうやらそうみたいね」

その疑問による返事は返ってこない

「まあ、いいわ…貴方に言いたいことがあってきたの。の貴方評

判悪いの知ってるわよね？」

彼方の方へとチラリと視線を向ける

だが、その表情は何も変わらなかった

「このままでは困るわ…公私混同はしないで…しっかりとした気

持ちで仕事をしてちょうだい。」

口調が厳しいものへと変わった

それはプロとして彼方を見つめる瞳だった

「いい？…分かったわね？」

綺麗な黒い髪が怒っていることを知らせてくれる

洋服をひるがえすとさつきよりヒールの音を鳴らせて歩く

音が遠ざかるうとしたとき彼方の声が耳に入った

「…じゃあ、意味ないでしょ」

「……………」

「辞めさせれば？」

速瀬の歩きが止まった

「こんなの必要ないでしょ？」

彼方は振り返らず言葉を投げかけた

なんの感情も感じられない言葉で

ゆっくりと速瀬は再び振り返った

「なんですって？」

吐く息を絞り込むように発する

途端に速瀬は力の限り彼方に歩み寄った

「こつち向きなさい！！彼方！！」

怒り任せの剣幕は隣のビルにも聞こえそうだが、それを気にもとめない速瀬は怒りをぶつける

「辞めさせればっていつたんだよ！！！！」

「……っ！！」

「こんなんじゃないだろ??！役立たずだろ!!！だったらさつさと他に行けよ!!！あんた得意だろう!!！それにこのままじゃ俺はここに来た意味がない!!！必死に頑張ってきた意味がない!!！音楽だつて満春がいたからやってこれたんだ。まさかこんな!!！ことのために」

彼方は速瀬を振り払い勢いよくまくしたてる

手元にあつたコーヒ―は無惨に地面へ落ちた

コロコロと転がっていく紙コップは音をたてて屋上から落ちていくそれがまるで奈落の底のように

だが、それを見ることなく速瀬は黙って聞いていた

眉間に隠せないしわを寄せながら

「俺は満春の側にいたいんだ!!！だから俺がその仕事辞めればあんな事件も起きなくなる!!！」

彼方は言い終わったのか視線を足元へと向ける

速瀬は今までにないほどの落胆を憶えていた

「本当にそう思ってるの?あなた!!！本当に満春さんの気持ち分かってないのね。まったく失望した!!！己の気持ちしか見えてないのね。記憶が戻っても尚貴方にうち明けなかつた理由が分かる!!！」

彼方は驚いた表情で速瀬を見つめる

「記憶が戻った!!？」

「分からなかつたでしょうね!!！今の彼方に分かるはずがないわ!!！記憶が甦つたことも!!！今の満春さんの気持ちも!!！！!!？」

何故か速瀬の瞳から涙がこぼれ落ちた
それは今の彼方の目で分かるくらいに

「は、やせさん…?」

フツと我に返り彼方に背を向ける

だけど明らかに速瀬の頬は濡れていた

何も交わさないまま風が吹く

彼方はそれ以上何も言えなかった

「勝手にすればいいわ…」

それだけ言うと速瀬はゆっくりとヒールを鳴らし始める
空しく吹く屋上の風に頬を浸しながら

何故他のところに行かないのか気づき始めていた
どうしてこんなに執着するのか

それは速瀬の脳裏が物語っている

「速瀬さん…」

出口へと歩く速瀬をただ見守っている

あまりにも意外な一面に思考や言葉が停止していた

『鬼の目にも涙』 そう言っても良いくらい

見たこともない涙

その涙は一瞬だったけど彼方の瞳に焼きついた

チャイムの音と一緒に教室中はざわめき始めてる
次の準備で慌しさが増す

「ねえ、マコ!! 次の時間って何だっけ」
前の席へと声を届かせる

珍しく寝ていないマコに感心しながら

「分かるわけねーだろー？お前が分かんないのに…」

自信満々の口調で後ろを向くマコ

その態度で言う台詞か、と心の中で呟く私

そしてとりあえず次の時間の用意そっちのけで話に入る

「私は次の時間より放課後が気になって仕方ないね…ああ、授業
退屈」

と、私の机なのに寝そべってくるマコ

うざがりもせずその様子を見守る

「そればかりだね…」

「まあ、それしかないから」

間髪入れず即答

結局放課後になっても何しようか退屈だとか言うくせに

私の頭は可愛げのない愚痴へと変わっていく

「ん……？」

しばらく経つとお久しぶりのキャラクターが顔を出してきた

懐かしい足音と共に…

「何寝そべってんのよ…またろくに授業聞いてなかったんでしょ
？」

頭をこぞく奈津実

「いつてえなーっ!!!？」

痛くない程度なのに大げさに言うマコ

いつに至つてもこの二人の関係は変わらないらしい

それとも今は虫の居所が悪いのかな

「そんなに強くしてないのに酷いわ！聞きました満春さん…」
いきなりのお姉言葉に戸惑う

奈津実はどんな技を繰り出してくるのか分からない

普通に話しかけてきたかと思えばこんななるし

結局ついていけないから笑うしかないんだけど

前からこんな凄いパワーの持ち主だったっけ…

「あああ！良いよこんなの相手にしなくても…それよりも次の時間の準備を早くしようぜ…」

といいながらも準備をしないマコ

ただ追っ払いたいたけなんだよね

「惨いわっつ！！？マコさん…悲しいわっ奈津実さん！…私の話を聞いて欲しいだけなのに…！！」

「あんたは自分の話以外でここには来んだろっが」

激しいつつこみをいれるマコ

その言葉に少し賛成する自分の心

「ま、まあ…良いじゃない！！聞いてあげようよ」

二人を制して話しを進める

やっぱり呆れた顔をした

その反対ではキラキラとした顔が見えるのだけど

「最近ね…調子悪いみたいなんだよ」

気にせず話し始める奈津実

「ああ、それくらいが十分だよ」

「風邪かな？…それともどっか痛めたのかな」

「そうなら私心は晴れ晴れだ…」

真剣に悩んでいる奈津実を余所に

次々と言葉を重ねていくマコ

当人は本人を見ずに窓の外を見ている

「マコ」

そんなマコを軽く小突く私

「だから私もご飯が喉に通らなくて…」

「おお…良い傾向じゃないか」

『も』って…

マコも自分自身の話と想っていたのか顔を見合わせる

「最近ね…雑誌とかでも少ないんだ。一部じゃ活動中止って噂が流れるくらい…この前の新曲披露の曲以降シングル出してないみたいだし」

私はマコから視線を逸らし下を向いた

誰だか分かってしまった

「ネットでもそのことは何も書かれてない…あのライブからあれから約4ヶ月14日16時間あまり私は彼方の声を耳にしてないことになるわ…」

口調はふざけた感じでも表情は悲しんでいた

私は目を伏せた

「あの噂も『女子高生』ってあたりで止まっているの…いつになったら私を紹介してくれるのかしら…?」

今は尚…聞きたくなかった

いつも通りの学校

いつも通りの友達

そして…どんどん昔の自分に戻っていく私

十分だっと思ってた

忘れられると思ってた

この取り戻してくれた日常の中で

だけど、昔の自分になっていくにつれて

猛スピードで甦ってくる記憶

それは全て彼方君によって築かれてきたもの
思い出すのは受話器を片手一喜一憂する自分
再認識させられる

今でも私は…私は。

忘れられるって思ってた

「……っ」

こんなにも彼方君との思い出が強いんじゃない

何時になっても終わってくれない

気持ちの奥底に押し込む

溢れてきそうな言葉を無理矢理喉元へと押し込む

フツと誰かが私を見ていることに気付く

…マコ…？

ただじつと私の顔を見つめていた

「あ、もうすぐ授業始まる…ちょっとトイレ行って来るね…！」

後ろからマコが見ているのが分かる

だから私は今持つてる最高の笑顔で振り返って笑った

42・一番の理解者

もう夕方になる

今日の授業は終わり、下校時間になる頃

生徒は早々と教室を出ていき

残った生徒は授業と一転し、しゃべり場となっている

いつもと変わりのない中

校門出口のあたりで数人の生徒が騒いでいた

それはある人物へと視線は注がれている

全身黒い服装をした人物に…

私は帰り支度をしていた

まあ、大抵これから寄り道って言うのがマコのお帰りコースなんだけど

まだ空っぽのカバンを机の上に乗せる

明日必要なものといらないものと分けていた

そんな私をマコはただひたすら眺めていた

「マコは帰らないの…?」

軽く微笑んで質問する

けど、マコの返答は沈黙となっていた

「…マコ?マコってば!」

マコの身体を揺する手が掴まれる

食い入るような目で凝視していた

「ど、どっしたの…マコ」

「まだ…」

戸惑う私の耳にマコのささやく声は聞えなかった

もう一度問い返そうと口を開く

「まだ…私には話してくれないのか？」
突然な物言いに私の身体が固まる
いきなりだけど分らないほど馬鹿じゃない

「えっ」

何を意味しているのか知らない振りは出来なかった
そこまで鈍感じゃない
ひらすら言葉が詰まる

ただ真剣に瞳を見つめてくる

その瞳から逃げることももう許されてないような

「無理、なのか？ああ…いや忘れてくれっ」

気がしたが簡単にマコは折れた

その時いきなり校舎内にどよめきが走った

気付けばみんなが窓の外を食い入るように見ている

何が起きたのか一瞬で分からない

そう困惑した頭の中に衝撃音が舞い降りた

それはドアを激しく開けた音

「ねえ…！！？校門のところに彼方が来てるってよ…！！」

現れたのは奈津実だった

帰ったはずなのに

彼方のことに関しては鼻が利くというのか
匂いをかぎ分けているのだろうか

だが、関心をしている暇のなく

今の状況が把握できない自分に必死になっていた

……………か、なたくん？

彼方？かなたつて！！

今、奈津美…彼方君って言った！！？

「は…う!! やっぱりに会いに来て下さったのね!! 会えない分辛さが募ってこんなところまで…い、今貴方の奈津実がお側に行きます!! 待っててくだ…ぐほおおおお!!!?!?」

マコは一目散に教室を飛び出す

奈津実は思いつきりはねとばされた

続いて教室でしゃべっていた運がいい生徒も

奈津美は元からいなかったかのように

体当たりして出て行く

「なんで……」

戸惑いですくんでしまっている足は言うことを聞かない
教室から動けないでいた

力をなくした腰はカクンと椅子に着地した

マコが走っていった先に

蜜に群がる蜂のような生徒が溢れ返っていた

目の前には目的の本人が見えないほどの人ばかり

騒ぎなんてものじゃない…

キヤーと言えば駆けつけるし

人が集まっていればまた人が寄って来るもの

興味本位で集まる人も含め

学校に関係のない人まで紛れ込んでいた

「……！！」

マコは一瞬哑然とした表情になった
だがすぐに正気を取り戻し

周りを見渡し小さな石ころを拾い

彼方の足にめがけて放り投げる

足元に当たった石には気づかない

再度石を拾い今度は少し強めに背中へと投げる

運良く他の人には当たらず

彼方は腰の当たる違和感に反応した

人混みをかき分けるようにあたりを見渡す

幸い困んでいる生徒は女ばかり

身長の高い彼方は容易にマコのことを見つけることが出来た

だが、マコは用心のため木の陰から顔と手だけを出す

ここで彼方と接点があると分かれば取り返しのつかないことになる

他の人には見えないように

彼方に『来い』とジェスチャーを送る

と、言っても皆目の前の彼に夢中なのだか…

察知した彼方は適当に笑顔を見せながら校門から外に出る

その後をマコは裏門から追う

ちよつと離れたところにマコを捜しているであろう

彼方が右左と行ったり来たりしていた

「こつちだよ…」

小声で誘導する

彼方は多少の安堵を見せた

「あんたが学校なんかに来るから大騒ぎだよ。あつ、人だかりは
やんだ訳じゃねーんだ。ここの中で話しようぜ？」

と、言い終わらないうちにマコは奥へと入っていく

彼方はその後を追う

その先には狭いがちよつとした広場がある

そこでマコは立ち止まった

途端振り返り怒りをぶちまけた

「なんで学校になんか来たんだ！！…あんな風になるって予想つかなかつたのかよ！！…満春に会いたければ他に方法があるだろう！？こつちの迷惑考えなかつたのかよ」

怒りをあらわにするマコ

「…それでも俺は満春に会いたかつたんだよ。もう一度あつて話したがしたかつた」

「そんなこと関係ないんだよ！！？何があつたのか知らないけど最悪の事態考えなかつたのか？…何も知らずにあそこで満春が登場して見る！！どんな態度をとつてたんだ！！とこる構わず近づいてたんじゃないのか？！」

彼方は言葉を返せなくなる

それはマコの言っていることが正しいことだから

表情で読みとつたマコだが怒りを止めることが出来ない

「少しは周りのことを見る！！…満春の立場を考えてやってくれ。あんたは平気かもしれないでもこつちは一般人なんだ！！」

彼方はますます押し黙る

脳裏にはつい最近口論した速瀬の言葉が甦っていく

それと同じ事をマコは言っていた

前よりも拍車をかけて彼方にのしかかる

「…ごめん」

それしか言えなかつた

言えるわけがなかつた

そんな彼方から目を反らし林の奥へと視線を走らせる

「いや、こつちこそ大声張り上げて悪かつたな。悪気はなかつたのは分かつてるんだけどな」
分が悪そうにマコは頬を掻いた

「んで、何で満春と何があつたんだ…？」
単刀直入に質問する

彼方は不思議そうな顔をする

「君は聞いてないのか？満、彼女から…」

「何も、全然。何かあつたのは察しがついたけど」
軽く左右に首を振る

彼方は途端に無言になった

「あ、ならいいんだ…気にしないでくれ」

マコに向けて微笑むと出口へと足を進める
おもむろに彼方は背を向けた

「ちよつと待って！！」

マコの声が林中に響きわたる

「気になるっつーの！！」

ぐいつと彼方の袖を思いつきり掴み留まらせる

馬鹿正直なマコはストレートに突っ込んだ

回りくどいことは嫌い

「遠回しなことは嫌い…気になることは片っ端から突っ込む！！」

可能な限り、とにかく気持ちの向くがままに「

何を言い出すのかと戸惑う彼方

ただただ呆然と聞くことしかできない

「それが吉と出でても凶とでてても…これ私のモットーなんだわあ」
帰ろうとする足をマコに向ける

「だけど満春目の前にすると、らしくない…いろんなあいつ今ま
で見してきたから考えてしまふんだ。だからどうしても切り出せない。

放っておいても言うヤツじゃないって分かってても…」

ゆっくりとマコに近づく

「本当は役に立ちたいんだ…親友として一番の理解者でいたい。

だから彼方あんたに聞いてもいいか？」

苦笑いしながら話していたマコだが

改めて彼方へとむき直す

「…何があつたのか」

満春から少しは聞いているマコが存在

いつも負けん気強くて、お調子者で…素直

初めて彼女と話したときも

この子は『満春』のことになると真剣なんだ

そう、直球と言ったのに今の言い方も遠回しなのも気付かないくらい

真剣なほどに慎重なんだ

彼方は思わず苦笑した

43・それでも埋められない隙間

ゆるい坂道の先にそつと覗かせる

夕日も私達が歩く度に見え隠れする

その度眩しさに瞳を細める

私達二人はこの道をダルさにも似た疲労感を感じながら
玄関までたどり着いた

「あーあ！！来週からテストか…」

部屋にたどり着いた途端ベットに横たわる

誰のベットだが気にもとめずに

前もベットへ一直線だったけどお決まりなのか

後から入ってきた私は静かにドアを閉めた

「テスト…ガンバンなきやなあ〜ああ〜っ」

欠伸しながら気合いを入れる

「言ってることとやってることがかみ合っていないんじゃない？」

思わず突っ込みを入れてしまう

分が悪そうに笑うと仰向けにひっくり返る

「だあーっつて！！やる気ないんだもん…学校は友達と会うためにあるんだから」

どこの小学生の意見???

口調も気のせいしか幼く感じる

「だったらここに来た意味ないじゃん…帰る？」

私はわざといたずらな言葉を選んだ

その瞬間マコは跳ね起きた

「いやだ！！？頑張るっつ！！」

ますます幼い子供に見えた気がした

そのことをとやかくは言わないけど…怒るから

気付かれない程度に微笑むと

私はマコに背を向ける

「じゃあ私、何か飲み物取ってくるね！！ちゃんと準備して置いてよ！！」

カバンを指差し忠告をするとドアを閉めた

階段をリズムよく下り冷蔵庫を開けた

何を思ったのか取らず静かに冷蔵庫を閉めた

「はあ〜……」

私の知らないうちにため息が漏れる

フツとテーブルに置きっぱなしの携帯に目が止まる

わざと視線から外した

あまり考えたくなかったから

だけど拒否すれば拒否するほど気になる

一つの事が気になれば全部気になる

そんな自分自身に気付き

思いっきり首を左右へと振った

振りすぎて頭がぐらっとする程振った

振ったからって何もかも忘れるわけじゃない

……………。

昨日あれからマコ教室に何食わぬ顔で戻ってきた

どうして彼方君は来たんだろう

私が電話を受けないから？避けてるから？

そんなに何か話したいことがあったのかな？

だけど今も尚彼方君の中では記憶の戻っていない私のはずで

しかもそれはちゃんと私の口から否定した

…嘘がばれた…とか
ドクンツッ！！

その考えにたどり着いた途端
心臓は急激に高鳴りだした

私、今…

今、ばれてしまったてたらいって思ってた
そしたら素直に言える気がするって
ありのままに彼方君と向き合える…

だけどそれは望まれない結果

手を伸ばして望んじゃいけない結論

私の瞳の中には今も忘れられないくらい焼き付いている

あの歓声の中必死に彼方君を呼ぶ声
誰よりも自分に気付いて欲しい…

言葉に出来なくて泣いてしまった隣の子
ただただ感動で打ち震えてる人

抱き合って彼方君との出会いに喜んでる人

わざわざ遠いところからライブのために来た人
入れなくても外から耳を当ててた女子高生の子
みんながみんななくさんの人達が

たった一人の『彼方』を愛してる

あの動員数も、あの歓声も、

全てが『彼方』が好きだから

分かってる

再会してからも、あの幼い頃も

ずっと応援してきてたから

そして、私もその『ファン』の一員なんだから

だけど記憶を取りもどしても…
記憶が戻る前と何も変わらない
何も変わらない…変わらないんだ
そう実感した途端空っぽになる
空白の自分に気付いてしまった

思い出さなきゃ良かった
もう一度出逢わなきゃ良かった
こんな自分に気付かなきゃ良かった

……あんな約束しなきゃ良かった……

そんな訳ない
もう一度逢えてよかった
離れててもいい…遠くからでも奏汰君を見れるなら
あの過去の事まで後悔してはいけない
必死に築き上げてくれた奏汰君
私達は会えなくても会えてよかったんだ

どっちつかずの正反対の気持ちに
心が翻弄される…
不意に手に水滴が零れたのに気付く
冷蔵庫の扉が反射して鏡みたいに映る

自分の涙に気付くと押さえがきかなくなったかのように
止めどなく涙が次々とこぼれ落ちる
もう私の意思では止められなかった

心が訴えてる

気持ちこそ叫んでる

それを押さえつけるのに拳を握りしめる

心臓がペチャンコになりそうな感じ

その反動で涙は床へと流れ落ちる

「…くっ！」

たくさん愛してる人達がいる

そんな彼女たちを無視なんて出来ない

これは無責任な約束を交わした私達の罰

だけど私は・・・！！

「…満、春？」

階段から顔を覗かせるマコ

思わず硬直した

この顔ではどうしても振りかえる事は出来ない

知らないマコは階段を下りてこようとす

私は思わず声を大にしていった

「も、もうちよつとだから！！」

話す言葉は涙声

「…え？」

マコのトーンが微妙に変化した

勘が鋭いマコ

私の声の変化に気付くことくらい

だけどこんな私をマコには見せたくない

心配させたぶん笑っていたいから

マコの前では…。

「だ：から上で待：ってて？」
可能性があるののであればこのまま黙っていて欲しい
私は驚いて硬直したままでいた
マコの足が動く音がする

内心ほつとした

「なあ：満春」

遠ざかると思っていた足音が急激に近づく
安心した分心臓が大きく跳ねた
私の肩にマコの手が差し伸べられる
一気に拒否信号が体内を走った

「上行っててって言ったでしょ！！！！？」

私は顔を見ずにマコの手を振り払う
ハッと我に返る

焦った私は怒鳴ってしまっていた
戸惑いの中見たマコは…
私の知らないマコだった

「…何だよ…それ」

何も言い返せなかった

どうしてそんなことを言ったのか分からなかった

「意味分かんないんだけど…」

呆れ吐き捨てる様な言葉

自分の髪をかきむしる

行き場のない衝動を何処に向かわせるでもなく
自分の身体に押し込める

そんなマコの一つ一つの仕草が私の肌に突き刺さる

心臓が底のない沼に落ちてく

どどん重くなっていく

「こっちはさ…心配で心配で聞けないくらい気をもんでたのに」

「あ…」

「何も分かってないと思うな！笑顔戻ったって愛想笑いばかりじゃないか！！？それが昔のお前か？…馬鹿すんのも大概にしろっ！…いつでもどこでも気持ちのない顔しやがって…っ」

マコは私に身振り手振り怒りをぶつけてくる

こんなマコ初めて見た気がする

「わ、私は…」

「マコのためにつてか！…なんで私のために無理して笑顔になる必要がある？！…記憶が戻れば不安な事だつて戸惑うことだつていっぱい出てくる。悩んでるなら悩んでるつて…迷ってるなら迷ってるつて言ってくれよ…これじゃただの木偶の坊じゃないかあ」
マコの声が段々弱くなっていく

「私にどうしろつていうんだよ…」

どんなに私の行動がマコに影響していたのか手に取るように分かる
少し沈黙が続いて冷静になったのか

私の頭をポンポンと叩くマコの手が優しくかった

ずっと背けていたマコの顔が久しぶりに視界に入ってきた

「なにも、記憶が戻れば満足つて訳じゃないんだ…こっち的には
いつも奈津実とはしゃいで騒ぎちらかしてるマコ

だけど今日はお姉さんに見える

これもマコの顔の一部なんだろうな

「何でもフォローするし助けてやる…」

「…っ、ごめんね。マコ」

私一人勘違いしてて

「ホントに…」

涙がまた流れないように必死に堪えながら
言葉をつないでいく

「酷いことだって…」

軽く笑顔もマコが視界に現れる

不安な分だけ涙は正直だった

「まあなんだ、話聞く前にその胸にあるしこり流しちゃった方が
いいんじゃないの？今まで泣けなかった分」

…待つてやるから

そうは言わない

不器用なマコのことだから

優しい言葉なんてかけないんだ

とても優しいけど言葉足らずで…だけど遅い

私の緊張の糸は完全に切れた

無我夢中にマコの袖を掴み泣くことしかできなかった

それをただジツと背中を撫でながら見ていたマコ

もうこれ以上は分からなくなっていた

そして後から聞いた

マコが昨日彼方君と相談したことも

私に会わせる約束も交わしていたことも…

ビックリはしたが後は何も

まるでそれを必然と予感していたかのように

44・マコの想い

さつきから交わす言葉なんてなかった
ただひたすらカップの中を覗いては口へ運ぶの繰り返し
私はというとマコの反応を逐一見つめている
昨日あの後結局話し合う結果となった
まさか次の日：だなんて
心の準備なんてまったく出来てなんていない
何を話せばいいかなんて考えられない
だけど心臓は必要ないくらいに高鳴っていた

都内にある喫茶店

皆それぞれの昼下がりを過ごしている
その中で私達は理不尽ながらも学校を休んでいた
結局泊まっていったマコが言った一言から始まった

『満春：明日は学校ふけるぞ』

一瞬私は耳を疑った

『そんな顔じゃ学校なんていけないし…それと彼方と会う約束して
るから』

マコの言ってる意味が分からなかった

だが、マコはそんなことお構いなしに言葉を重ねる

『だから準備しとけよ』

それからさらに次の日現在に至る

ここでひとつ疑問に思うことをぶつけてみた

私はアイステイーを一口飲むと口を開いた

「あのさ、マコ」

「ん？」

何もすることなく窓の外を見ていたマコは不意に私に視線を返す

カップをテーブルへと置く

「あのさ、今日私が行かないっていつたら約束どうするつもりだったの？」

マコの瞳はしばらく硬直した

きつとその先の事なんて考えてなかったんだろう

すこし微笑み混じりで答えを返す

「無理矢理にでも連れてきたかな…？」

平然と語るマコ

わ、私の気持ちはお構いなしですか

ほおずえをついていた手が腕組む動作に変わる

「だっていつまで暗い顔してる気なんだよ…原因がそれなんだから解決するしかないだろ？満春みたいに納得してない気持ちでただ『時が解決してくれる』なんて甘い話はないよ…何もかもやり尽くしてから時つてもんに頼れよ」

いつものマコらしさにホツする

時々核心につくことをよく言う

空になったグラス

ストローでかき混ぜていた氷は意味もなく回り続けていた

まるで空回りしていた私のように

「納得してないんだろ…？終わりになってないんだろ？」

私の中で昨日泣いて泣いて泣き止んだ後

妙にすつきりした気持ちになった

潰したものがなくなつて

それがきつと私を正直にさせたんだらうな…

自分の中ではずっとずっと終わってなかったんだって事に

無理矢理押さえ込むことで解決しようとしてたかも

だからはつきりさせないと…

そのために先手打たれたけどマコは私と会う約束をさせたんだ

「ここまで心配させちゃったけど…私の出した答えにマコは黙っ

「見ていて？」

私が一晩中悩んで出した答え

何一つ嘘なんてついてないと思う

自分の気持ちの奥をさらに奥まで疑いながら問いかけながら出した
答え

私の心臓は知らぬうちにいらぬ緊張で張り詰めていた

「…ああ、分かった」

それだけ言っただけでマコ

きつとマコなら頷いてくれると思った

言い方ずるいと思うけど

「ありがとう…」

私達だけ周りの世界から取り残された気分

というか昨日の時ほど深刻にマコと話したことはなかった

昨日の話に遡る

マコは私と出会ってからと全てのことを話してくれた

『ごめんな…満春の事情全て知ってたんだ』

私が泣き止んで少ししたら話してくれた

台所から私が落ち着くようにとコーヒーを両手に持って

『ありがとう』

持ってきたあったかいコーヒーを両手で覆う

私はすぐに何のことだか直感できた

『満春が記憶失ったことも…6年前のことも全部』

『……………』

『なんか色んな事がありすぎて何から話して良いのか分かんなく

なつてきたな…』

罰が悪そうに頭を搔く

私はその仕草に微笑んだ

『知つてたよ…』

マコが私に視線を向ける

『何か隠していることがあるんだろうなって事ぐらいは…マコの口から聞きたい』

掌に覆ったカップは温かい

とても安心できた

だから決意もそんなに必要なかった

『どうして私にここまでしてくれたの？』

そろそろ時期が訪れたんだろう

私は誤魔化さずに質問をした

ずっと私が思ってたこと

あの夜中にマコとお母さんが話してたのを目撃してから

『ああ…なんでなんだろうな？…自分でも分かんないかも』

マコはソファアーの上であぐらを掻いた

そんなこと気にせずマコの言葉に耳を傾ける

『お姫様に見えたからかもしれない…』

『え？…お姫、さま』

瞳を白黒するしかなかった

あまりにも意外な返答に

『ほら、私つてなりからして男っぽいだろ？…男どもに囲われて育ってきたし言葉も冗談でも女らしいとは言えねーし』

『……………』

『あ！…でも勘違いするなよ！…私はちゃんと男が好きだ…！』

？』

居たたまれないのか落ち着きがない動きを見せる意味の分からない力こぶに

私は思わずクスツと微笑んだ

『大丈夫だよ！…そんなこと思ってないから』

『そういうとこだよ』

『え？』

『私の理由』

何が何だか分からなかった

だけど冗談で言ってるわけじゃないって表情見たら分かる

『男所帯で育った私には満春は新鮮だったんだよ…誰にでも分け隔てなく笑顔を見せる…だけど決して曖昧な笑みとか媚びうる訳じやなく白黒はつきりとしてるお前が』

私も自然と照れもせず聞いていた

『最近のヤツは何を考えているのか分からない時代によあ…喧嘩して口論してって家庭で繰り返してた私の前に、こんな表情するヤツいたんだなって正直驚いた…そんなお前の周りにはいつも人がいたよ…そしていつの間にか気になっていった』

私は返す言葉がなかった

あまりにも遠いことのように話すマコの瞳に

まるで今の私にはその面影がないような気がして

『その時だよ…もう一つのお前を発見することになったのはあの電話ボックスの前で会ったときさ』

『電話ボックス？』

頭に一つに映像が浮かんだ

『それまではさ…まるでテレビの中のアイドルのように見えてた満春がいきなり自分の世界に近づいてきた様な気がした。ははっ！人間なんだから落ち込むときもあるのにな』

マコは合間合間にはにかむ

『でも、笑顔を見せる子が一瞬で消え去りそうな表情が気になってショックで仕方なかった…それから何度もその場に居合わせちゃったりしていつの間にか事情も知っていった』

『……………』

『それが満春と親友になった理由…簡単に安直言っただけだな！立派な理由なんだぜ？』

話に一段落つけたのか自分の入れたコーヒーに初めて口を付けるでも私には分からなかった

どうしてここまで私に親身になってくれるのか

『でも、私には分からない…それだけでここまでのこと？…あんな回りくどい真似までして』

マコらしくない

『どうなんだろうな？気分は彼女の弱い部分を見てしまっただけ…つは一生かけて俺が守っていくと心に誓った熱血男って感じ？』

『何それ…？』

言ってしまったことに咳払いを一つ入れて誤魔化すマコ

『まあ、いいんだ。忘れてくれ。あまりにも放っておけなかった…あれほど待ち続けたのにこんな結末はない。記憶を無くして笑顔も忘れて感情もどっかに置いてきてそれさえも「無事だったからよかった」で忘れようとしている家族に苛立ちを感じた』

拳を握りしめるマコ

『まるで満春だけが重みを背負い込んでいるようで許せなかった…前の満春と違うんだ！どうしてそれを見て見ぬ振りをする！！心の中でそう叫んでやまなかった。生きてさえいれば無事ならそれでいい…よく言う言葉だよ。ただどあれが生きてるって言えるのか』
口調が強くなる

『あの時障害事件が起こって病院に運ばれたあの日…目を覚ましたお前見て涙が止まらなかった…何を見ても視線さえ動かさないお前に』

『マコ……………』

私はマコの身体を抱き寄せた

あまりにもか細い声で話すマコに

『笑う事さえ分からなくなつてたお前に…だけど、周りではそれ以外の話しが交わされてた…事務所関係やマスコミ終いには慰謝料の話それにお前は覚えてないだろうけど大人つてこんななのかなつて失望した』

マコは私の袖をきつく握りしめる

『もつとさもつと…あるじゃん!!大切な話。目の前に!!自分の娘って言うものが、それから悔やんでも悔やみきれなかつた!!どうしてあの時強引にでも行くなつて言えなかつたのか!!』
私の腕を強く叩くマコ

そんなことどうでも良かった

私に消えない記憶があるようにマコにもあつたんだ

その怒りに似てる感情がこんなにも私の腕を痛くさせる
心臓を熱くさせる

『だから思つたんだ…こいつは私が守つてやるつて!!』

こんなマコ初めてみた

いつも強気で短気でいつも奈津実と冗談言い合っている裏では
こんなマコが潜んでいたんだつて

だけどそんなマコの一部を早くも受け始めてる自分がある

それは何より私にとって強い味方となつた

きつと昨日の今日で気まずいんだらう

いつも喋っているその口は閉ざされている

用もなくミルクティーをかき回してる

お互い様だらう…

取り乱してしまつたのは

だけど、満春に変なところ見られてしまった
そう感じてるんだろうな
だけど安心して
いつものマコに戻ってるから
いつもの男気いっぱいマコだから

「マコ…ありがとう」

今までのこと全部

いつも親とは違う視点で私を見てくれたこと

「な、何だよ…いきなり」

「昨日ははつきりと言えなかったから

「さあ？何でしょう…」

私ははつきりと答えなかった

ここで正直に言ったら誤魔化すに決まってる

「はあ？分かんないヤツだな・・・」

私は微笑むだけ微笑んどいた

まだ首を傾げるマコに携帯は鳴り出す

マコの携帯からゆったりとした曲が流れ出した

「電話？」

「いや、メール」

素早く開くと中身を確認した

私はその間何もすることなくアイスティーに手を伸ばした

「満春」

飲もうとした私の動きを止める

「ん？」

「この店の近くの公園に来てっさ」

そう言いながら文面そのまま私に見せる

誰からのメール？

そんなこと聞かなくても分かった

飲み終えてないコップから手を離しテーブルに置く

「もう、来てるのかな？」

心臓が勢いよく跳ねた

マコは一口飲んで席を立ち上がる

とりあえず私達は近くの公園に向かうことにした

身体は重みを増していく

だけど私に出来ることといったら

そんな気持ちを見捨てるしかなかった

ため息は号令と言わんばかりに沈黙を破る

「彼方、あんた会いたかったんじゃないのか？…それに満春何か言いたいことがあったんじゃないのかよ」

私と彼方君両方に目配せする

だけど私は気付いていた

こんな強気で言うマコの手が微かに震えてること

何も不安になっっているのは自分だけじゃないんだ

今まで誰にも言えず一人この光景を見てきた

マコだって怖いんだ

なんで私はこんな事で後ろめたくなってるんだろう

私は言いたいこと

伝えたいことを言わなくちゃ

「マコ…」

これから私の選択が間違っていたって

「ありがとう」

あとで気付いたって

迷っちゃいけないんだ

私は正面から彼方君の瞳を見た

返事をしないマコは眼差しで答えた

「きつと長くなるから、3人分の飲み物買ってきてくれるかな？」

遠回しの合図

きつとマコは分かってくれる

思っていること

私は謝罪の意味も込めて軽く微笑んだ

マコもまた微笑みを返してくれた

「分かった、飲みもんだな？」

一言交わすと静かにその場を後にする

沈黙を私から壊しにかかる

「久しぶり、だね」

「そうだな」

気まずい空気の中

私は視線を少し彼方君からずらして挨拶をする

分かってる見なくたって分かる

難しそうな顔してることもくらい

「とりあえず、何から話せば……」

必死に会話をつなごうと心がける

「一つさ、聞いていい？」

次に繋げたのは彼方君だった

「あの時ライブに来たあの日から記憶戻ってたって本当？」

身体が思わず反応した

予測していたこと

誰にも言わなかったけど

速瀬さんなら気付いてしまうことなんて

だけど質問に対しての返答なんて考えていなかった

「ははっ……その感じからして的中ってことかな」

「速瀬さんから聞いたの？」

無言で言葉は返される

彼方君は側にあつたベンチに腰掛けた

とりあえず私はゆっくりと歩を進めながら近くへと移動する

周りには人なんていなかった

そんな場所をマコは用意してくれたんだろう

当然の事ながら近くに人がいない方がいいから

軽くあたりを監視するみたいに見渡し

私は彼方君の言葉を待っていた

こつやつて目が合う事なんて

笑いを抑えきれない私は再び笑い出す

「もうやだっ！…！…やめようこのテンション」

気合いを入れて頬を軽く叩く

そう、こんな刺々しい言葉の張り合いなんてやめよう

「こんなのさ、私達らしくないよ…正直に行こう？」

彼方君の隣に座る

「包み隠さず話して？私もありのまま話すから…」

目の前に写る彼はすっかり緊張した顔じゃなくなっていた

「じゃあ…話し戻すけど忘れたんじゃなければどうして隠したり何かしたんだ…？」

さっきの重い感じは消えいつもの話せる状態へと変化していた
沈黙せず宣言したとおりそのまま答える

「夢は覚めたから…」

「私ね、はつきり言って貴方に再会したとき全然思い出さなかった、記憶喪失だったから。色んな目に遭わされたけど、結果的にねよかったと思ってる。そりゃいい事ばかりじゃないけど」

「……………」

「記憶なくしてたおかげで貴方を知らないところからスタートできた…ただの有名な『テレビに出てる彼』から…それから何度か会ってどんどん惹かれていってファンになってライブにも何度かスタジオにも行ったよね？」

張りつめていた糸を解くように話す

隣で黙って聞いている彼方君

「だから『幼なじみ』として見てたら分かんなかった…。こんな気持ち…ライブでの感動や街で偶然であった時とか、テレビ越しで見ると貴方を見かける時とか…それだけでこんなに幸せになってしまっ気持ち」

「……………」

「きつと気付かなかった…貴方を一途に思う彼女たちの想い。もしかしたらあの事件が起こらなかつたら。それ位いつも奏汰君しかみてなくて…見えてなかつた」

「ねえ…？彼方君」

「…え」

「知つてた？貴方を遠くで眺めるだけで思わず泣いちゃう子とか声だけで元気になる子とか歌で励まされてる子とか…会場に入れなかつた子が壁越しに貴方の歌を聞いたりしてるの一緒に歌つたりとか…」

顔を覗き込む

だけどその表情は読み取れはしなかつた

「そんな人達を後目に私は約束だけを優先に出来ない」

「……………」

「再会したことに素直に喜んだりなんかできない…の。」

私の身体が一気に硬直していく

自分が言ってしまった意味とか

だけど私は正直偽善なんだと思う

46・悲しい別れ（後編）

だからって幼馴染っていう事実なんてかえられはしない
だけど、これはもう結論付いてしまった私の決意

「じゃあ、俺はどうなるんだ？ 一体誰のためにここまでやってきたと思うんだよ」

固く閉ざした口を開く

「お前を泣かせたくなかったからこの約束をいつまでも守ってきた。今じゃ夢みたいな話だけど『笑って会える場所』じゃないか！ お前が笑ってくれるからここまで来れたんだよ。いつも聞こえてくる電話越しの元気な声」

「もうさ…」

「だいたいさ…どうしてそこまでファンのこと思うんだ？ お前を傷付けた張本人じゃないか！」

「止めよう…そう言う問題じゃないよ」

「え？」

「そんな行動に出してしまう彼女たちの気持ちが分かるから」

私は落ち着いた声で話す

「っ…！！」

「好きなんだよ…彼女達」

言葉に詰まったかと思っただ途端涙が零れていた

自分の彼に対する気持ちと彼女たちの気持ちが比例して

何にも考えられなくなってしまう

「こんなに辛い思いをするのも馬鹿な約束をした罰なんだよっ
ずっと抱え込んでいた結論

どんなに酷い仕打ちをされても仕方ない
それくらいのことを私達はしてしまった

小さい頃とはいえ軽い約束を交わした私達に選ぶ手段なんてない
考えれば考えるほど決定づく

私の好きと彼女たちの好きは一緒
そんな彼女たちを都合よく弄んでいたんだ
だって有名になってテレビに出る
みんなに認められ惚れてしまうファンのいて
その人達を踏みつけて彼方君に手を伸ばそうとしてる自分
…そういうことだから

「俺は、それでも・・・」

無言で首を振る

「それは…自己中だよ」

彼方君はいきなり微笑んだ

それは皮肉にも似た笑み

「ははっ…なるほどね。速瀬さんの言ったとおりだわ」

「速瀬さん？」

「俺は自己中だって…周りのことが見えてないって前言われたよ」

「速瀬さんに？」

「ああ。ついでにあのさっきいたマコって子にも言われた」

「……」

「仕方ない、じゃないか…。俺には全てなんだからそれしか見えないのは当たり前だよ。お前が望むなら芸能界辞めたっていい」

途端に悲しい顔をする

私は言葉を失った

かける言葉なんてなかった

「ごめん…ごめんね？」

この謝りもなんの意味をなしているのか分からない
だけど何か言わないと

私自身何か壊れていきそうで

なんて言えば答えたら良いのか

「なあ？一つ聞いて良いか？」

「え…？」

「俺は幼い頃からお前が好きだった…好きじゃなけりゃここまでしないけど普通は…。内面的な部分もそうだけどお前の笑った顔に惹かれた…さっきお前と笑いあって数年間忘れたフリしてきたけど…気持ちまだあることにも気付いた」
胸が高鳴るのを感じた

「満春が好きだ…お前は？俺のこと一体どう思ってるんだ？」

また再び鼓動が鳴る

不意打ちというのもあるけど

今、一番聞かれたくない質問

私はしばらく固まり返す言葉を必死に捜していた

「わ、たしは」

私は…私は

ベンチから腰を上げる

なるべくなるべく彼方君の顔が視界から見えなくなるまで

「好き」

喉からあふれ出る言葉を必死に飲み込む

好き…

ここまでが精一杯の正直だった

「好き、だった。」

一呼吸置くと私は力の限り彼方君がいる方へと振り返る

その顔は笑顔だったと思う

「好きだったよ！！…だけどそれは幼い頃の話し。あれから色々あって、好きな人が出来たんだほら私記憶なくしてたでしょ？その

時よくしてくれた人で…」

そんな人いない

私はマコ以外誰の支えもなく生きてきた

「病院で知り合ったんだけど…私のことよく理解してくれて」

そんなことなかった

私を取り囲む人は同情する人だけ

また一つ嘘をつく

ウソつてつき始める次々と言葉がでてくるものなんだね

「きつと、6年前のあの日から別々の道に走っていったんだね」

出来るだけ彼方君の瞳を見るようにする

もう、これで終わりにしたいから

…最後にしたいから

「だけど知らなかったあー！！彼方君が私のこと好きだったなんて…私だけかと思った！！って言ってもこんな小さい頃の話だけだねえ」

きつと私妙にはしゃいでると思う

嫌にニコニコして自分で自分が分からなくなる

「さっきの…」

「え？」

「さっきまでの言葉は嘘だったのかよ」

一気に真顔のなる

顔中の血の気が一気に引いた気がした

早くもぼろが出る

「さっきまで言葉？」

「ああ…」

あれは私の本当の気持ち

そう言えたら楽だけど

それじゃ、いつまでたっても私達は終わらない

いつまでもあの約束を追いかけてしまう

決意が鈍らないうちに顔に力を入れる

「い、嫌だなあ！…勘違いしないで！！あれは幼なじみとして
いったんだよ。昔のよしみとして知り合いだからって会ったりする
のはなあ〜っていう話し」

自分でも無理あると思う

下手な言い訳だと思う

そんなんじゃない誤魔化せない

「これはファンからの忠告なんだから！！」

彼方君の無言の視線が怖い

だけどここは真面目に真剣にならなくちゃならない

「…。だから私達、もう会わないようにしよう？」

やっと言えた言葉

「そう、決めたから…それを言うために貴方に会ったの」
のどの奥が酷く痛む

まるで他に言いたいことがあるを主張しているように

だけど私は息を飲み出来るだけ抑える

言い終わると席を立った

「本当に、本当に…今は何とも思っていないのか？」

頷くことをためらう私

首を縦に振ってしまおうとそれですべて終わりだから

終わりにしたくない自分と

終わりにしなくちゃいけない自分との葛藤で

胸が潰されそうになる

「俺は信じない」

気持ちごとっかに飛んでいきそうになる

そんなこと言わないで…

どうして納得してくれないの
私だってそんなの聞いてないで立ち去っちゃえばいい!!
だけど、終わりにしたくない

この最後の時間を…
貴方といれる記憶が戻って最初で最後の時間
喧嘩でも争いでもなんでもいい

この時間を繋ぎたい…

「そういえばね!!…私のクラスで熱狂的な貴方のファンの子がいるの。その子は本気で貴方のが大好きでポスターだってこゝんな特大サイズ持つててシングルだって…こゝ、これでもかつ!!…てくらい聞いてて、でもそれだけじゃない…写真集や雑誌とかレアなものとか学校でいちいち自慢とかもしてきて…等身大の『彼方』を愛してる」

「信じない」

手を掴もうとする腕を払う

「そんな人達を私なんかでがっかりさせないで?」

なんでもいい繋ぎ合わせる

私は必死に涙を拭う

「…!!」

「貴方を大切にしている人達を…お願い大事にしてあげて?」

矛盾してる事だらけでもうグチャグチャ

これが私の精一杯

きつと伝わったって信じてる

「それじゃ…これからも頑張つて」

最初の一步

うん、もう歩き出した

大丈夫、大丈夫…
歩き出したんだから

もう振り返る必要なんてない
サヨナラだって言ったし
後は…

「っ…!!っく」

この流れ出る涙を止めるだけ

「満春!!…俺は信じない。好きなヤツが出来たなんて嘘だ、ただのファンだなんて信じない」

どうしてここまで聞きたくない人の言葉が届くんだろう

聞いていた言葉はそれじゃないのに
これだけ心はざわついてうるさいのに

早くここから離れたい!!

走った…とにかく走った

自分が何処に向かって走ってるのかわかんなくて知らない

そんなことどうでもいい

ただ聞こえないところへ

見えないところに行かなきゃ

私はまた立ち止まってしまふ

「お前が…お前が俺のこと好きじゃないなんてっ!!ちくしょう
っっ!!!!」

思いっきり砂を蹴り上げる

『お前俺のこと一体どう思ってる?』

決まってるじゃない

私はずっと待ってた

会える日を…

記憶がなくなつた後だって

必死に捜してた!!

夢から覚めない暗闇の中で

玄関越しに、電話越しに、6年前も

幼い頃離れたあの場所から

トラックで行ってしまった奏汰君を

ただひたすら…

「マコツ!!…うっ」

言葉にならないほど

言葉では伝わらないほど

この気持ちは募っていく

好き…。

ただどこの想いは頭の中で強く想っては消えていく
その繰り返し

「うわああああ…!!?!?」

空しく私の気持ちは涙と一緒に流れていく
激しく辛く噛み合わない私の気持ちと共に

47・変わっていく環境

彼方は無気力な顔で事務所のドアを開けた
何をしてもなくただ無意識に

一人ではいたくなかった

そんな気持ちは本人しか分からない
通り過ぎていくスタッフは

そんな彼方を知るまでもなく

慌ただしく資料集めや機材運びやアポ

それぞれの仕事をしていた

誰一人彼方を気にすることなく

それは普段の彼方だと気付く違和感

「…あら？彼方」

書類を手一杯に持っている速瀬が声をかける

だが、彼方は返事をしなかった

「そう、丁度ね話しがあつたのよ。ちょっと来てくれるかしら？」

手に溢れ返っていた書類を適当なところに置き

彼方を引っ張るように手招きをする

それにつられるがまま空いている一室に招かれる

「随分な顔ね」

「……」

「まあ、いいけど…私にはもう関係のないことだわ

その一言に彼方は視線を向ける」

だがもう興味なしといったたげに早々と話題を変える

「貴方に報告することがあるわ。今日限りを持って私は貴方のマネージャーから外れます…。貴方よりもっといい人材が見つかったの。この仕事に信念を持って取り組んでいる子をね…嬉しいですよ？口うるさいのがいなくなって」

「……」

「貴方はもう私にとって何の価値もないわ。消えようが辞めようが私には一切関係のないことだもの」
相変わらずの強い口調

だが、それに動じることなく彼方は生気を失っていた
変わらない凍り付くようなヒールの音を鳴らす

「ああ、そうそう元マナージャーとして言っておくわ…貴方このままだと終わる。その時は一体何人の子を悲しませるのでしょうかね？遠くから応援してるわ」

「…！！」

強い口調ではあるがまっすぐに彼方を見据える
パンツ！！！！？

「何も答える気がないならもういいわ！！一人でそうやって黙り込んで誰からも見放されていくことを心から祈っているわ！！」

机を叩いた震動は彼方の手のひらまで響く
彼方の腕は貸すかに震える

だが、心まで届くにはあまりにも病んでいた
そのまま怒り任せにドアを閉める

閑散とした事務所の一室

あたりは物音を立てるもの一つもない

ただ机を叩いた音が頭の中で鳴り響いている
静かに壁に沿いながら床に膝をつく

それは『落胆』と言う言葉が脳裏に浮かぶ
そんな文字が頭に浮かんだかさえ分らない
余裕なんてこれっぽちもないのだろうから

あれから彼方君に会わなくなった
あんな別れ方したし、きつぱりと言ったから
当然と言えば当然、当たり前と言ったら当たり前
あれからどれ位経ったんだろう

結構経ってる気がする
だけど、なるべくカレンダーは見ないようにする
別に、私は何かを待ちわびてるわけじゃないから
期待とかしてるわけじゃないから

…もう、何か起こるなんて思わない

だったらカレンダーを見る自分なんて必要ない
だってカレンダーを見ると今の私が浮き彫りにされる気がするから
昔の私と違う

ぽっかりと心に空洞が空いた自分に
だけど、こんな私でも学校に来れるのはマコがいるから
親友っていうのはこんなに心強いんだって
この歳になって気付くなんて思わなかった
お陰であまり落ち込まずにいられる

あれからテレビに彼方君は出ていないらしい
耳元でうるさく言うヤツがいるから
ちよつと詮索しちゃってる

奈津実から何か言ってこないか耳を傾ける

今はそれが精一杯

「はあ…」

私とは反対に携帯のスケジュールを覗き込む奈津実
そしてまたため息

「はああ〜」

その動きを私は何もすることなく
観察していた

「ぷはあ…」

だんだん大げさになっていくため息の嵐

「はあああああ〜…」

「聞いて欲しいのか!？」

居たたまれずマコがツツコミ入れる

「あ、分かる？」

「ああ…お陰様で」

そりゃ誰だつて分かるでしょ

肺の空気全部出してるんじゃないかくらいのため息吐かれちゃ

「最近、全然彼方の笑顔を見てない…」

ドキツツツ!!

私の表情が凍る

分かっている、マコが私の顔色伺っていることは

出来る限りの笑顔をマコに送る

そんな事なんて知らない奈津実は

いつもと違って弾丸トークではなく頼りない声で話す

「見て?分かる?この記号」

そのスケジュールには日にちの下にハートマークが記してあった

「彼方に会えた日。だけどこの2ヶ月半あまり全くの後沙汰なし

…」

そこで再びため息

やっぱり、奈津実の元気の元は彼方君なんだ
私から見ても落ち込んでいるようにしか見えない

「まったく…浮気しちゃうぞう！」

ガクッ！！

でもないんじゃない
だけど、まあ…それなりに元気ないか

奈津実は奈津実なりにしょんぼりモードかな

「ねえ！！！」

私は一つ提案をした

もちろん私に注目する人が2人

「今度の日曜日、どっか遊びに行かない?！」

突然の提案に両隣で驚く姿

いつ見ても思う

リアクション2人とも同じ

何でこれで仲悪いのかが不思議

まあ、逆を言えば良いのかもしれないけど

「パアーツとさ遠くに…そうだなあ、遊園地!!！」

「女3人で?」

微妙な顔をする奈津実

「げっ!! お前も来るのかよ」

こっちはこっちで違う微妙な顔をする

「いいじゃないいいじゃない!! 奈津実いたほうが楽しいって…」
うまくフォローを入れる

じゃないと、まったくって言って良いほどまとまんないんだもん

「はい、決定!!!」

むちゃくちゃなまとめ方をする

私、幹事役の満春であったが

私自身もどっか遠くへといきたい気分だったから

変な取り合わせだけど羽を伸ばしたかった

48・久しぶりな展開

そして迎えた当日

待ちかまえていたかの様な天気

雲一つない晴天とはこのことだ

これで混まなければ先は長くない

大げさに言っても過言ではない位お出かけ日和

その通り！！予想したとおりの騒がしさ

いや、ここで勘違いしないで欲しいのは

遊園地がじゃなくて

隣でにらみ合っているお二人さん

会ってからこの繰り返し

待ち合わせ場所でも電車でも歩く先々もそして今も

今日はこの調子でやっていく気かしら

ここまでの白熱ぶりはそんなじょそこの格闘シーンでもあり得ない

…はあゝ

思わず溜息

周りのこと気にしたことあるんだらうか

「違うっつうのっ…！！今度はこれだって言っただらうが…！！」

怒りが加速していくマコ

その指の先には絶叫マシーンを示していた

「違う！！これっっ…」

火山噴火が見越せる奈津実

指先はメリーゴーランドを指していた

全く逆のジャンルじゃんか・・・

口出しする気もなくなる

「そんな悪趣味な乗り物乗るか！！…なんでノロノロ走るかぼちやの入れ物なんかに入って何が楽しいんだ！！」

「私だってそんな野蛮な乗り物は嫌ッ！！…煙と何とかは高いところが好きっていうしねえ…マコにはお似合いだろうけど」

お互いがお互いで譲らない

失敗したかな？遠出するの…

そう思わずにはいられない

「こういう場所ではな！！すかっとするもの乗って憂さ晴らしすんだよ！！それが遊園地の醍醐味だろっ」

「何言ってるの…いつも頭の中はすつかすかのカラカラのくせに」

「…っ！！」

もうどうにかしてこの同レベルな戦い

「それより私はこの白馬に乗って…待つの、王子様」

しなりと身をくねらせ輝かせる

「死ぬまでいる気か！！があああもういい…これじゃ埒があかないっ」

気付くの遅過ぎです

マコ…いくらここで立ち往生してると思います？

私はひとまず争いが病んだことに安堵のため息を漏らす

「満春！！！！」

ええ？？？？私…

「お前に選んで貰おうじゃないか！！さあ、選んで貰おうか。大親友」

な、な、なんで私に来るの！！

しかもこれ見よがしになんか付け加えてるし

「何を言ってるのっ！！満春ちゃん生涯私の親友よ！！」
いつも名前なんか呼ばない癖して

なんか釈然としない…

そしてなんで二人とも古典的なおだて方

「ああー」

こんな2人に顔なんてあわせらんないよ
空を仰いだ

神様見てるならこんな私を助けて下さい…

ませんよねえ。

考えに考え抜いて試行錯誤練った

「ああー…私、飲み物飲みたいかも！…て、適当に乗り物乗っ
てて」

戦線離脱！！

というか、私は善良な市民です

愛想よくその場を去る

なんかマコの叫び声が聞こえた気がするけど

…後が怖いなあ…

けど、つき合ってらんないよ

別にいいじゃんと思うけど

個人個人で乗っちゃえば乗りたいものは乗れちゃうじゃん

そんな考え当たり前だけど

やっぱり気付いてないんだろっな

事実私は喉乾いていたので自販機を捜すことにする

やっぱり日曜日

子供連れの家族が多いかな

休日の家族サービスに力を入れるお父さん

子供に連れられて抱っこ抱っこ大変そう

…まあ、デートにも最適だよな

私の前を横断するカップル

仲良く手をつなぎながら通り過ぎていく
いけないいけないあまり人のことジロジロ見てちゃ
私は目に付いた自販機に近づくと
迷うことなくミルクティーのボタンを押した
やっぱりこれだよ
暖かくても冷たくてもおいしい一番大好き
私は腰を曲げ拾い上げるとある光景が目に入った
人だかりが出来てる
何かの催しものかな
とりあえずその人だかりを素通りする振りして覗いてみる
そこには聞き慣れた声が木霊していた

「なのよ!!!?!?!?」

内容までは聞こえなかったけど
それは紛れもなく速瀬さんだった
何か、口論してる?
あの人独特の怒った高い声が耳につく
そんなんで本人って気付くのもどうかと思うけど
そんな記憶しかないかも残念ながら
相手は誰だか知らない子だけ
その時、速瀬さんと不意に目があつた

「…あ」

ヤバくはないけどヤバイ
目があつてしまった

私は軽く会釈するとその場を後にしようとする

「ちよっと待って…」

無視とすと思うたら声をかけてられた

とりあえず私は振り返る

「やっぱり、満春さん…。こんなところで会うなんて奇遇ね」
長い髪を耳にかけながら話す
やっぱり思う

綺麗なだけにこの威圧感は絶大

いつまで経っても拭い去れないこの人の印象

「あ、ちよつと時間いいかしら？」

軽く微笑む速瀬さん

私は返事だけすると後に続く

49・愛し方

さっきまで交差するカップルや

肩車をしている親子連れがいたところまで帰って来た

適当なベンチを見つけ速瀬さんは座る

「ごめんなさいね…いきなり声掛けてしまって迷惑じゃなかったかしら？」

ベンチに座る速瀬さん

軽くコンツ…とヒールをならし綺麗に足を組む

やはり何処か上品が見える

私は手元にあるミルクティーを見て気が付いた

「あ、飲み物何か買ってきますね…」

「あ、いいの。気にしなくても…ありがとう」

あ、また微笑んだ…

どうも今日の速瀬さんは感じが違う

今まで私と言う存在自体が敵で

微笑むどころか真顔の速瀬さんさえ見たことない

いつも何処か威圧感を向けられてた気がしたから

私に向けられていた壁がないというか

何となく親近感を覚える

「座って」の合図なのか手のひらを席に向ける

それに従って静かに腰を落ち着かせた

「あの、話して…」

なかなか話しを切り出さない

「私、ここにいたらまずいんじゃないんですか？」

別に怒ってるわけじゃないっていうのは分かるんだけど

…でも、このままいたら

「それは彼方のことを言ってるの？」

心臓が一跳ねした
心を読まれたのか

速瀬さんの口元でもう一回復唱された

咄嗟のことにつつむくしかなかった

「大丈夫よ！！…私は担当から外れたわ。というか外して貰ったわ。今はさっきいた彼方より2、3下の子のマネージャー」

言い捨てるため息をついた

「…それはどういう」

「言葉通りよ。愛想が尽きたから外れたの。始めからこうすれば良かったわ。」

速瀬さんらしくない言葉

つて言つても私は速瀬さんのことを何も知らない

さっきまで威圧感があつていつもキリツとした人だと思つてだからううん…だからかな

引き受けた仕事は投げ出すような人じゃないつて

「実際、貴方と会つてから問題が色々あつてね…運良く報道はされなかったものの新曲はいきなり白紙に戻したり、仕事をサボったりドタキャンしたりの連続、どんなに言つてもしても貴方の事ばかり」

「それで、あの子に担当が変わつて2ヶ月・・・」

丁度私が別れを告げた時期と重なつてる

私はどうしても気になることを訪ねた

「それで彼方君は…？」

「芸能活動休止」

「…！！」

手に持っていたミルクティーを落としそうになった

「なんて表向きだけど…それじゃすまないかもしれない」

「え？」

「役に立たないなら切り捨てるだけ……解雇、契約破棄になるかもしれない」

言葉を無くす

…解雇。引退？

私の脳裏に数百回と繰り返される

その度に殴られたような感覚に陥る

「…そ、そんな」

「このまま立ち直れなかったらの場合だけ」

「わ、たしは…」

「分かっているわ…別れたんでしょう？」

目を丸くする半分

やっぱりっていう答えがあった

この人は何でもお見通しなんだから

「本人から聞いてないけど…あれを見たら一目瞭然。それに貴方が彼に嘘をついたあの時の瞳で気付いたわ。」

「……」

「私はファンを大事にして欲しかった…数千数万というファンにいい子ぶってるって思われても例え偽善者と言われても彼方君が彼女たちを愛して欲しかった…それを私一人だけのものにするなんて重すぎる…それに比べると軽すぎるんです。昔約束を交わしたのなんて小さく思えるくらい」

私は彼方君に話したのと同じ事を話す

「軽かったのかしら？」

意外な言葉に顔を上げる

「貴方はただ哀れんでいるだけ…汚い部分、綺麗部分も見てきてしまったから。それがファンのため？同情してあげることが？なにも愛すって事は一つだけじゃない。色んな愛し方があるわ…貴方を

想いながらファンを大事にすることだって出来るはずよ…」

「……………」

「それを満春さんは拒否してしまっている…確かに彼方は貴方しか見えてないわ。馬鹿なくらい」

胸の奥が疼く

「満春さんに対しての彼方が異性として『愛』なら、ファンの前で彼方は格好つけてだけど笑ってはしゃいで楽しそう…それが彼なりのスタイル『愛し方』なのかもしれない…。全身でファンに答えてるし与えてる…貴方を今も昔も傷つけた張本人達に…」

「……………」

「逆に貴方はファンの気持ちばかりで彼方の事考えたことある？はいなんて返事できない」

確かに口先では思っているって言っても

何故かそれは嘘のような気がする

「貴方は状況に流されているだけ…もっと視野を広げたら色々な事が見えてくるわ。きつと」

「それは私も一緒だったんだけど」

「…え？」

言葉は思考に遮られた

速瀬さんの言葉

「まあ、いいわ…これで話しはおしまい。つき合わせちゃって悪かったわね」

今回何度目の微笑み

私には引つかかっていることがあった

「あの、最後に一つだけ…」

「何かしら？」

「何故、…あ、いえ何でもないです
改めて聞きたくなかった」

本当に担当から外れたんですか…？

言葉は何故か口に出来なかった

速瀬さんの言った事って

今でも彼方君の事を思っていていつてる言葉にしか

まだ…彼の担当から

まるで…外れてないような言い方だから

50・中途半端な私

前とまったく同じ生活が戻ってくる

いつも通り玄関を出て

マコにあつて、授業受けて、マコと奈津実のバトルを隣で聞いて
帰りは時々マコと寄り道して

いつも通りの平凡な毎日が帰ってきた

あれから速瀬さんからも

もちろん彼方君からの連絡もない

前からこんな生活だったかのような日常

今までが嘘だったんだろう

なんかそれが事実な気さえしてきた

というか、ドラマを見てたんじゃないか

少しリアルな物語

今日一日の日課

学校という日常は終わった

今日の昼休み提案したこと

奈津実はどうしても連れていきたくないからって
いない時を見計らって

明日は日曜だしマコん家に遊びに

もとい…勉強しに行こうと言うことになった

もうすぐテストがあるからって

私は平気なんだけどマコが大慌て

『今度赤点取ったら親父にチクられる!!』

なんだそうだ…

ここまでマコを駆り立てるお父さんのパワーって一体
なんて思いつつも

別に私は構わないからOKを迷わず出した

んーっ…

確かにそうだ

ここに奈津実がいたんじゃはかどるものはかどんないだろうなあ

帰り際にコンビニへと寄っていく

マコにとっては毎度お馴染みのコンビニ

夜のご飯を買っていく

「おっ…みつけ！！私の大好物」

と、マコは迷わず鮭おにぎりを手に取った
人のカゴ見てアレコレ言うのも何だけど

マコの性格が出てる

欲しいと思ったものはバコバコいれってる

すばらしいほどの潔さ

…恐れ入ります

そしてコンビニを出る

「あ、そうだ！！…その自販機寄っていい？」

歩きながら私に尋ねる

「別に良いけど…ジュースならなんでコンビニで買わなかったの？
？忘れたの？」

そう私が言うがいなやマコは軽く微笑んだ

まるで悪巧みを考える子供のように

そんな表情を見せると小走りで自販機に駆け寄るマコ

規則正しい自販機は音をたてると

マコはなにやら見せつけながら

こっちへと帰ってくる

「へへっ!!何つってもこれがなきゃ始まらないもんなあ〜」
お酒、みたい

私はマコに合わせるように笑いを浮かべた

時間は夕方近く

珍しく二人して視線は下を向き教科書が開かれてる

…んと、この問題を上記を例にして答えを導き出しなさい
思った以上に勉強ははかどっていた

カラン…この音は？

もうすぐそんな貴重な時間は終わりを告げようとしていた

「あー…っ!!もう飽きた!!」

と、というかジ・エンド

マコ自らがボス戦に挑んで全滅したご様子

いわゆるゲームオーバーですな

電源も切ってしまったみたい

ゲームの舞台となる教科書は投げ捨てられた

「一番最後にこんな難しい問題出さなって言うのっ!!」
それが問題でしょ…

「最終ボスは手強かったか…」

私は独り言を漏らす

それでなくても雑魚でも仲間の手助けがなきゃ倒されてたし

「もうやめよう!!やーめっ!!!!」

乱暴に寝っ転がる

ああ、世界に平和は戻らずかあ…

頭の中で繰り広げられていた物語に終止符を打った
静かに教科書を閉じる

「どうする?マコ」

次にやることを体勢を崩しながら訪ねる

あれ…返答が返ってこない

「マコマコ、寝た？」

「んにゃ！！…起きてるよ。」

言葉と同時にマコの顔が起きあがる

「腹減ったなあ…って単純に」

そして無造作に探り当てテレビのリモコンを押した
場所を把握してたのかなあ…素早い動き

自分の部屋だからって納得していいもの？

今まで無音だった部屋に騒がしさがプラスされる

今まで灰色だった画面に彩りがプラスされる

一気に場の雰囲気が変わった

別に悪かった訳じゃないんだけど

「なんか面白いのやってないのかな？」

そう言つてマコは無意識に時間を見た

私もそれにつられ時計を見る

「…6時」

見計らつたかのようにコマースヤル

時刻は6時少し過ぎていた

隣でマコのため息がほとばしる

「何だよ…ニュース領域じゃん」

そう言つた矢先にニュースが報じられていた

何もすることがなく画面を見つめる

「あつ！そう言えばお腹空いたって言つてたよね？」

やることを見つけ座布団から腰を上げる

「確か…さつき買ったお菓子が何個か」

言い終わらないうちに視線は画面に釘付けになってしまった

表情もいつの間にか蒼白になる

私達の視線は同じ方向を向いていた

「…これ」

マコはやつとの思いで言葉にする
そこには『速報彼方、芸能活動停止!!』と書かれていた

マコの反応をうかがいながら何くわぬ顔をつくる

「お、お菓子持ってくるね？」
返事はなかった

それはそれでホツとした

だけど私の脳はいつの間にか足を止める命令を出していたらしい
一歩たりとも動かなくなつた

「…それね」

「満春、知つてたのか？」

私は振り向かずには頷きだけで返した

「そうそう!!この前遊園地行ったじゃない?…その時速瀬さん
つていう彼方君のマネージャーさんにあつて偶然!!」
明るく元いた席に戻る

「その時に、これ聞いたんだ」

「……」

「もうね、危ないつて…色々あつたみたいで、さ。でもほらっ!
うちらにはどうすることも出来ないし…」

「へえ…」

マコは何気ないような返事を返す
何故か倍に明るい口調で話を続けた

「まさか今になってねえ!!」
思いつく限りの笑顔をマコに向ける
だけどマコは無表情のままだった

一瞬にして沈黙

ニュースだけが私達の空気を取り持っていた

「いきなりの活動停止ですね…事務所はこのことについて一切語らずで…」

調子付くコメンテーター

相づちを打つキャスター

「ネットでは恋人発覚という情報も流れているみたいですね…お相手は高校生。それ以外は一切不明その噂から間もなくして活動中止。これは何かつながりがあるんでしょうか？」

無言の時間が長く感じる

私は勇気を出して語りかけた

「ははっ！！今更だよな？…チャンネル変えようか」

何か言われるかと思っただけ

マコは何もいわずに従ってくれた

もう何もかも終わっている

だけどそんなマコの仕草に

私の心は穴が空いたような気になる

いつものマコだったら何か言ってくれる

何でそうなんだ！！違っただろう！！とか

勢いのある言葉を浴びせてくれる

今の私はまだ中途半端

あの、彼方君と別れを告げた日から

ガツンと背中を押してくれる言葉が

欲しいのかもしれない

いつからこんなになっちゃったんだろう

こんな他力本願な考え方

こんなの戻りたかった『満春』じゃない
いつになく曇った私の表情
マコはどう思っているのだろう
やっぱり嫌いこんな私

51・お誘いの意図

そう、これで最後

ほんとに最後

マコの家から翌日帰ってきた私は

昨日決心したことを実行に移す

最後の決心を胸に掲げ携帯を取りだした

なんて事はない、ただ電話するだけなんだから

そうただの友達として

これは私が言わなきゃいけないことだから

速瀬さんが側からいなくなった今

きつとそれを告げてくれる人はきつといない

ここ最近の自分に終わりを告げるために

複雑な想いとは裏腹に

無情にも軽快に呼び出し音は鳴り出す

ドキン ドキン ドキンッ

プルルルプルルルプルルル

ドキン ドキン ドキン

呼び出し音と心臓の音が交互に私を揺らす

音を重ねる度に冷静さを失っていく気がした

プルッ!?

「…!!」

心臓が飛び出してきたのかと思った

切羽詰まったかのように言葉を吐き出そうとした

「あつ!もしも…しい」

『留守番電話サービスセンターに接続します。発信音の後に…』

ホッとした気がした

そんな自分に苛立ちもあるけど

それ以上に安心感が勝る

「留守…かぁ」

ほんの僅かな時間緊張感から解放され

私は勢い良くベットへと身体を預けた

…何も上手く言っていない気がする

きつとそれは何か間違っている証拠

何処かを正さなくちゃいけない事実

何処？…何処から方向を間違えてしまったんだろう

答えが、真実が何処にあるか分からない

ブルルルル！！

「わっ！！？」

条件反射で私はベットから跳ね起きた

と同時に枕元にあった携帯がバイブを鳴らしながら落下した

一体誰…何だろう

でも、そんなのきつと決まっている

ゆっくりと携帯を足元から拾って開く

とりあえず私は軽く上を羽織り玄関を後にする
上着ポケットには携帯をにじり込ませ

待ち合わせ場所は家近くの公園
だからそうは遠くなかった

「…よっ！」

目的の場所へとすんなりたどり着く
近いから当たり前の話なんだけど…

そこには普段着のマコが待っていた

「どうしたの？今朝別れたばかりじゃん」
そう言わずにはいられなかった

マコはその問いには答えず話を切りだした

「これからボーリングいこーぜ！！」

「えっ…！！」

「なにそんなビックリしてんだよ・・・」

マコはさも不思議な顔で首を傾げる

「だっ…だつて今からっつて！！」

開いた口が塞がらないとはこの状況

昨日お泊まりしたのは誰なのか分かってる？

他の誰でもない目の前の私なのよ…

「久々にやりたくなつてさ…こうスカーンツとね！！」

転がす真似をしてみせる

…その音はミスってますけど

呆気にとられてる私に目もくれず歩いていく

「…ハハッ！！またまたストライク！！」
はは…っ

呆気にとられてたけど

自分が一番楽しんだりして

「見た見た！！…また取っちゃったよ」

「今日の満春は手強いぜっ」

で、手強いって

まるでいい勝負かのように…

マコに気付かれないように点数を見る

こう言っちゃいけないけど圧勝ですけど私

だって昔から言ってたなあ

こう力を調節してやるスポーツは嫌いって

確かドッチボールとか好きだって

…思い出したら笑えてきた

現にボーリングなんてマコと一度も

……………あれ

あれ…？

じゃあ、どうして今ここにいるの？

「うがぁ！！！？…まただよ。普通に投げてるつもりが筋はある
と思うんだけど」

異様な音をたてて転がった球は清々しいくらいに
ガーターゾーンにストライクする

「なあ！！…満春、あたし間違っていないよなあ！！…こう投げ
てんだよ！？これでいいんだろ？なんで満春みたいに上手く転がせ
ねーんだろなあ〜」

あまりの言葉の嵐に返す言葉が出てこない
マシンガントーク本人の態度がいきなり急変した

「ラ、ライバルに弱みを見せてどうする！！」

そう独り言とも言えない独り言を言うと嵐はやんだ

「い、良い試合じゃないか！！なあ…あともうちよっとで満春追
い抜くぜ！！！」

極端!!

極端すぎて痛い…

けどこんなマコの性格が私は安心する
こんなウダウダと悩んだときは特に

あつ…まさか。

つてか、私鈍感すぎ

まさかも何も無いじゃない

思わず心から苦笑というものをしてしまった

だって不甲斐ないなあ…って思って

自分が…情けなくて泣けてくる

良い親友を持ったとかそんな安っぽい言葉じゃ言い表せない
もっと大切な気持ちがある私の中で芽生えつつある

「…ありがとうマコ」

「はあ?…何言ってるんだよ!!もう勝利宣言かいっ…」

「違う違う…そんなじゃないよ」

私はこぼれ落ちそうな涙を拭いた

隠して隠してとりあえずマコにだけは見られたくなくて

止めるってマコに忠告されても私の癖

自分を隠すことに一生懸命だったけど

だけど今はマコを正面から見えて言いたかった

私の間違っていたこと一つ

何だか分かった気がする

「…満春…」

とりあえず今は…

「マコ!…とりあえず今ははしゃぎまくるぞ!…!…!…!
!?!」

勢い良く私は立ち上がり

その弾みでジャンプを試みた

色んなモヤモヤが一色になって空で弾けたような気がした

52・一枚のCD

ポリングの帰り色んなところを見て回った
いわゆるウィンド何とかがつてヤツ
そのついでに一つのCDを買った

「ねえ、マコ？今日またマコんち行っても良い？」

そんな断る理由がないといった感じでピースサイン
私は軽く笑うと足はマコの家を指していた

「何？…また今日も勉強会やるっていうの？」

もう場所はマコの部屋

上に羽織っていた上着を脱ぐ

「ううん…違うんだ」

マコの言葉は返ってこなかった

少しおかしな沈黙が続く

「あつ…今、あれ飲み物持ってくる。ちょっと待ってな？」

「…あ、うん」

慌てたマコは部屋を出て行った

言葉のあいだあいだに入る不自然さ

「確かあったんだよ…昨日買いだめした残りがさ」

ドアが静かに閉まった

私は一人取り残されている

その時間が長くはなかった

何か急いだようにマコは盆も持たずに扉を開けた

「あいよ！」

そう言いながら私にコップ八分目まで入ったコーラーを差し出す

「あ、ありがとう」

「……………」

「さっきまでとは打って変わってだな。どうしたんだよ」

あの時から決心していた

『とりあえず今ははしゃぐぞー！ー！ー！ー！』

全てあの時から心は決まっていた

だってうやむやも何もかも全部あのボーリング場のチリにしたんだから

「実はね……………」

カバンの中からさっき買ったCDを取り出す

「あ、マコデッキ借りるよ？」

部屋にあるCDデッキに手を掛ける

「ずっと避けてたことがあって」

再生ボタンを押す

そこからは聞き慣れた懐かしい声が歌声となって耳に入ってくる

その瞬間私は震える手を足を全身を必死で抑えた

「…これ」

「そう！彼方君の曲。さっき買ったヤツ」

私はとにかく笑った

「マコには言ってなかった、よね？」

これを言っちゃうと私の全てが崩れる

今まで張りつめて私を造っていた壁が全部

全部壊れてしまう

でも、今の私はこの場で壊すことを望んでいた

「これ、ね？私のために作ってくれた曲、なんだよ」

人間とは不思議なもので
決まったキーワードを口にすると
途端に涙を流してしまう

…私に作ってくれた曲

それは自分が触れずにいた膿であり
それに気付かない振りをした末路
心臓が心が止めてくれって賢明に叫ぶ
私はそれを断固として拒否していた

「なんか何から話して良いのか…分かんないなあ。」
涙に邪魔されたくなくて髪を掻く

「いいよ…ゆっくりで」

ここにまたマコの優しさが一つ浮き彫りにされる

「ずっと聞きたくなかったんだ…この曲、昔をさ…思い出すから、
どれだけこの曲を貰った時に嬉しかったか思い出すから…これね、
私が記憶を無くしてた時に奏汰君がくれたものなんだ」
歌詞が頭に染みわたっていく

いつもの彼方君の歌声じゃない
切ない感じの声

それが痛いくらいに心臓に伝わって涙に変わっていく

「それで私の記憶は戻った…言うなら現在の私になった曲」
「……………」

「だけどね?…同時に怖くなったんだ。一時だけだったけど周り
と同じ『ファン』として奏汰君を見てた時があったから…彼の良い
ところにドキドキしてハイテンションな時にワクワクしてしんみり
した時は泣いて」

言葉をつないでいく

「一緒になつて騒いでた。気付いたら…周りを見てみるとたくさんの人が色んな形で彼方君を愛してる…想ってるって状況を見たら居たたまれなくなつて…ただぼんやりと6年も記憶なくしてた私にこの曲資格がないような気がして彼の前から姿を消した…」

「……………」

「昔、『近くに居られない分僕が満春ちゃんの近くにいて』って

……………」

脳に甦る遠い記憶

『僕、歌手になる！！満春ちゃんの側にずっといるから！！』

……………」

マコに話したことはないことだった

「小さい頃の口約束こんな事になつちゃうなんてね…笑っちゃう

よね?!でも真剣つ…だったんだ、よね…」

消えたはずの傷跡が痛む

それは心かそれともあの6年前のことか

だけど覚えてる…ジャケットの擦れる傷の痛みは…

彼女達の痛み

私は着ていたスカートを握りしめ精一杯に笑う

「満春…」

分かってしまった…

ほんとはサヨナラしたときから気付いていた

だけど気付くわけにはいかなかった

これは隠してなきや

きつと私は明るくみんなの大好きな笑顔になんて還れない

私はその扉を開く

「だけど好きなんだよっ…最後にあつた日のことが忘れられない

…まだどうしようもなく好きなんだよっ！…この気持ちは何処へ
持っていけばいいのかわからない」

「…み、はる」

止められない涙をマコの身体にしがみつく事で絶える

「つく…う」

「……………」

「もうテレビの中だけじゃ近くになんて…感じられないよう」

それは至ってわがままだった

彼は手の届かない人自分で自分に言い聞かせる

それは誰のせいでもない

自分達がやってしまったことだから

約束さえしなければ奏汰君は近くにいた

何年も離れていたとしても…

だからこれはただのワガママにしかならないことを知ってる

もう何も語らなくなったデッキ

今までにないくらい小さな声

マコは何も言わずに私の背中を撫でていてくれた

電話の音が鳴り響いた

「…え」

どっかで音がした

これは電話の音

私は手探りでカバンの中を捜した

それは一定のリズムで持ち主を呼んでいた

画面を見ると予想通りの相手だった

タイミングがいいのか悪いのか

「誰から？メール？」

「ううん、電話…彼方君から」

隠す事無くすんなり答える

迷わず受話器ボタンを押した

「おま！！声…っ」

噎れて涙声になっていた私の声

マコの顔は見なかった

言いたいことが分かったから

電話のみ耳を傾ける

「もしもし…？」

当たり前の挨拶を交わす

『満春？俺だけ…あのさ、今朝電話くれた？』

「あつ、うん…忙しかった？」

『お前からまた電話来るとは思わなかった…』

久しぶりの声に挨拶していられる余裕はない

だけど素直に涙は出てくる電話の向こうの低い声に…

『ああ、まあ…色々とごたごたと…ってお前、声おかしいぞ！風

邪か？』

「…あ、はは」

当然って言えば当然のことを言われた

『泣い、てたのか？』

嫌な沈黙が走る

彼方君は私の返事を待っていた

「今日電話したのはね。昨日ニュースで流れてただけけど…」

『あ、ああ…』

「どうして？」

そんなこと知ってる

だけどわざとらしく分からない振りをする

『何でって…もうさ、意味ないから音楽やってても』

冷たい言葉が受話器から背筋へと伝わる

「私、言つたよね？…」

『…っ！！俺は』

「…あの時は子供だったんだよ。現実をちゃんと見て？何人の人が貴方のこと必要としてるか…。これは私達だけの我が儘だけじゃ許されないの。」

速瀬さんと遊園地であったときのことを思い出す

彼方君は彼方君なりの愛し方があるんだって

彼はまだ気付いてない

「それに、私思った…音楽好きでしょ？確かに始まりは不純な動機だったのかもしれないけどこの前ね…偶然速瀬さんを会って話してそう思った。貴方も一人一人のファンの子を大事に想ってて…音楽は彼方君のかけがえのないパートナーなんだって」
何故か自然と言葉は繋がっていく

それを黙って聞いている彼方君とマコ

だけど…それを理解しても

私、一人じゃ抱えきれないものってたくさんある

「いきいきとはしゃいでライブやテレビで飛び回るそんな彼方君

を私は応援したい。」

『……………』

「それに」

「ただ必死で言葉を拾い集める

「それに…ここ最近冷静になつて考えたんだ。私、幼なじみとしてしか見てなかったみたい。前にも言ったよね？初恋の人に再会してまた恋に落ちましたってヤツ？…結構いるけどその場の流れで運命みたいに感じてつき合っちゃったりとかするのあるじゃん…結果冷めるのも早いつてパターン！…それみたいだったんだよね私つ…」
喉から出そうになるものを理性で止める

『それ本気で言ってるのか？』

マコは私の持つている受話器をただ見つめるばかり
息を呑んで彼方君の返事を待った

『そつか…』

「こんなの意味ないよ…今からでも遅くない！芸能界に戻つて？
昔大好きだった音楽に」

『……………』

「昔、よく2人で絵書いたり歌うたりしたりしたよね？…あの時の大好きなものにひた向きに打ち込む奏汰君の瞳が私、好きだった…それはね今でも好きだから。ねえ？気付いてた？奏汰君が嫌ってたファンの子を貴方は立派に愛してしまつた…『彼方』を活かすエネルギー源になつてるってこと」

これは速瀬さんと話して出した結論

『エネルギー源？』

「ファンからの言葉…私が記憶なくなつてから支えてたはずだよ？」

それを私の心臓は良く理解していた
結果がどうであれ支えていたのは
周りにいるたくさんのファン

『これで、最後…なんだな？』

「ありがとっ！今まで私の事捜してくれて、嬉しかった。本当に嬉しかった」

「……………」

息を無理矢理飲み込む音が聞こえる

そんな軽く嬉しかったって言える自分が悔しい

私にとってそんなものじゃない

「私を想ってた以上にファンの人達…信じてあげて？私も遠くから応援してる」

友達として一番言いたかった言葉

大好きな人に対して一番言いたくなかった言葉

私の口から流れていく

昔は本当に酷い目に遭わされたけど

人間不信にもなったりしたけど

それは全部愛情の裏返し

貴方のファンになってから気持ちが変わった

きつと私が記憶を失ってなかったらこんな結末にはならなかっただろう

だけど私はこれで良かったと思う

ツーツー

彼方君の声は聞こえなくなった

「大好きだよ…ずっと」

聞こえなくなった電話口でそう囁く

54・それぞれの夜

私はゆっくりと受話器を下げた
軽く深呼吸をする

「本当にこれでいいのかよ」

「いいの。これが私が出した答えだから……」

どんな目をマコに向けているか分からない
きつと酷い顔してると思う

けど、いいんだ……

どんなにマコに心配掛けたって
我慢する必要なんてない

「マコも今まで……ってこれからもなんだけとありがとうね!」

「満春! あ、あのさ」

言いかけようとするマコの言葉を遮った

「ありがとうついでに……もう少しだけ身体貸して貰って良いかな?」

もう……何にも左右されたくない

私は静かにマコの身体に寄り添った

「……」

マコは何も答えない

何を言いたかったのかも分からない

けど、寄りかかった途端マコは何も問わなくなった

今はとにかく瞳を閉じたい

頭にはつきりと映る

今もまだ鮮明な私と…奏汰くん

彼が歌ってる隣で私は眠ってる

5歳年上の隣に住んでた少年

年上だから大人びた一面もあつて

すごく優しくただけど涙もろくて

彼は公園遊ぶのが好きで絵を描くのが好きで…

何より歌うのが大好きで

その隣で聞いてた私自身も大好きだった

引っ越しなかったらどうなってたのかな？

6年前会えてたらどうなってたかな？

昔に戻りたいなんて思わない

きつと引っ越ししてなくても

約束をしてなくても…

例え何もなかったとしても

彼は音楽を夢見ていたんだから

歌いながら向ける澄んだ眼差し

そんな奏汰君が今でも好きだから…

額から一滴涙か落ちる

…私は忘れなくちゃならない…

彼方は受話器片手に力無く笑んだ

「まさかこんなことになるなんて…」

さつき満春からの最後の電話が終えたところ
力なんて当に尽きてる
今朝スタツフを殴った拳が痛い
さつき怒りまかせに壁を殴った拳が痛い
八つ当たりにも似たどうしようもない自分

「…なにしてんだか」

言葉なんてとうにつきてる

本当に終わったんだな

今度は確実

6年前みたいな意味も分からない結末じゃない
しつかりと聞いた満春の声で

どんなに間違いであればと考えたが

考えるだけ空しさが増す

しけた笑いが無意識に零れるだけ

ベットに横になる

何を見るでもなく普通の家よりも

少し高いマンションの天井を見つめる

さつきから腕の力も話す言葉さえも失くしてるのに

何でか不思議だ…

頭だけはフル回転で動き続けている

他の誰でもない満春の声だけが部屋を支配していた

速瀬の言葉が脳裏に浮かぶ

（そついえば速瀬さんに『彼女の気持ち分からないの』かって
言われたことあるな…）

気持ちが冷静になっていく

『音楽好きでしょ?...今のかけがえのないパートナーになってる』

歌が...俺のパートナー?そんなこと考えたこともなかった
俺は今まで必死だったんだから
なんて今となったら自己満足なんだけど

『幼馴染としてしか見てなかったみたい』

ひたすら耳に響く声は木霊したまま

『音楽好きでしょ?』

『はしゃいで飛び回るライブやテレビの彼方君を応援したい...』

『音楽は今の彼方君にとってパートナーなんだってこと...』

鳴り止まない言葉を連呼させる

『また戻って』

『フアンの子を信じてあげて...』

お前は逢っても電話先でもそればかり
だけど何より満春らしい

最後は綺麗事ばかり並び立てて

お前は何様のつもりなんだ...

昔からそれは変わらない

自分の話をしているのにいつの間にか俺の話になってる

二人の話をしているのにいつの間にか皆の話になっている

俺の話なんて気にも留めてくれないんだ

いつもいつも周りを第一に考えて

そんな偽善者で天然な彼女が好きだった

『信じてあげて...?』

彼方は途端に飛び起きる

止まない言葉はいつも間にか聞こえなくなっていた

『……………』

まるで彼方の結論に納得でもしたかのように

『これで最後……………』

はつきり言って半信半疑だった

だけど彼女のそんなところが好きだったっていうなら

最後の約束……………守りたい

なんて俺も立派な偽善者だ……………

静寂な夜は彼という存在を忘れたかのように過ぎていく

そんな中彼方は掌を見つめた

何か見えるのだろうか

真剣な瞳で掌を貫く

ギョッ……………

そして強く今までにないくらい握り締めた

55・見ない振りしていたモノ

足早に人並みをかき分ける

いつも以上に帽子を目深にかぶり

彼方はあるビルを指していた

これで何回目になるんだろう…

引っ叩かれはしないけど

そうしてくれた方がありがたい

何回か事務所に足を運んでいる彼方

人と人との合間をぬって歩いていた

今、自分の素顔を知られるとかなり厄介

ただでさえ活動中止が報道されているのに

こんなところで見つかってしまったら

トラブルどころじゃなくなってしまう

そう確信しているのか帽子を押さえる手に力がこもる

異常な警戒とは裏腹に

「キヤッ…」

「あっ!!!!」

見知らぬ誰かとぶつかってしまった

その人は手に持っていたものを落としてしまった

「ご、ごめん」

彼方は謝ると同時に落ちた彼女のバックを拾い上げる
慌ててそれにあわせて拾い上げる彼女に手が止まった

「……………」

「これで全部かな？」

「……………」

「あれ、どうしたの？」

硬直したままの彼女を見上げる

その時あんなに目深にかぶっていた帽子が外れていることに気付く

「…げっ」

いつの間にか回りに人だかりが出来ていた

まるで彼方自身が犯罪者か珍動物にでもなった気分

あっという間に人だかりは彼方を囲んだ

その時硬直していた彼女が彼方の手を取った

「あのっ！このままだと騒ぎになっちゃいます…」

「えっ？」

「まだ皆が困惑している間にこっち…」

そっぴいなながら彼方の手を引く張る

それに引きずられるしかなかった彼方

呪縛を解かれたかのようにすり抜けた側から

たくさんの女性の甲高い声が耳を貫いた

たどり着いたところはちよつとした空き地に

あまり目立たないベンチが一つ

「ここまで来れば大丈夫だと思います」

「ありがとうございます」

彼方は軽くお辞儀をすると踵を返す

またこんなところで長居しているとヤバイ

「あ、あの

「……………」

「あのっ…！」

「あ、はい？」

進ませようとしていた足を止める

「あの…彼方さんですよね？」

「……」

「あのぉ…芸能人の」

いまさら何を言うのかこの女の子は…

そんな半信半疑で男性をここまで連れ出したのか？

俺が『彼方』じゃなかったらどうする気だったのか聞いてみたい気もするが

何も無反応な彼方に

間抜けな質問を重ねる知らない女の子

見た目服装的には高校生なのかもしれない

だけどそこらにいる女子高生じゃなく

いくらか垢の抜けてない印象が伺える

「よく言われますけど…違いますよ…」

でもこう答えるしかなかった

彼方は平然を装って答える

「彼方さんですよね？」

再度答えを促す

「違いますって…」

「じゃあ、なんで帽子目深にかぶってるんですか？」

「これは俺流ファッション」

「そうですか…じゃあなんで返事遅れたんですか？」

「誰に言ってるかわかんなかったから…」

「そうですか。じゃあなんでさっきあんなに慌ててたんですか？」

「行くところあったんだ…」

「あ、彼方さん…携帯落としましたよ？さっき…」

「あ、どうもありがと…」

「やっぱり彼方さんじゃないですかあ！」

「今のタイミングだと誰だって俺だって想うだろ…！」

「なにその言い方テレビで出てる時と全然違うじゃないですか…

！…」

「あれは営業用だ!!」

口をつぐんだか遅かった

ポケットをあさる振りして舌を出す

「クスッ……」

この口論の嵐にあっさりと自白してしまった

なんでか試合に負けたような敗北感

彼女は小さく笑い続ける

「……クス」

満春とは違い静かな笑い方

彼方の一瞬の緊迫した顔を彼女は見逃さなかった

「……分かりました。彼方さんじゃないんですね？」

今度は『否定』の意味での肯定

ばれている筈なのに

「え……」

「なんか訳アリみたいですね。時間大丈夫なんですか？急いでたのは本当ですよね？」

少しずつ近づいて来る彼女

「あ、まあ……そうだけど」

「暇なら私の話に付き合ってもらえませんか？」

彼方の表情は固まった

なんとも人の話を聞いているようで聞いてない子

会話が成立していない時の違和感

「なんか……変な人だなこいつとか思ってますん？」

「いや、そんなことないけど」

思ってるなんて口が裂けてもいえない

初対面の人だ……我慢我慢

満春より長い髪をした女の子は疑いの目を向ける

「……まあいいですよ」

その瞳はやんわりと笑みに変わった

「君他の子と違うんだね……」

「君じゃないですよ？もとかです。沢渡素花16歳」

彼方は言葉をなくし頭をかく

「もとか…ちゃん。君は疑わないの？」

「さつき疑ったじゃないですか…」

それはそうだけど

確かに間の抜けた質問だけど

俺、自白した気がするんだけど違うの？

「それに違うって言うってたし」

「おかしな子だね…君。」

彼方はここに来て初めて笑った

「それ、笑えるところですか…？」

「おかしな子だけど…元気にさせてくれる子だね」

彼女の顔から一気に微笑が消える

彼方は不思議そうな顔をする

「本人は元気なんじゃないんですよね…これが」

「え？」

長い話と予感させるようにベンチに座る

自然に彼方の視線は素花へと向けられる

「私、来週入院なんです…本当は外に出ちゃいけないんですけど」

さつきまでの彼女からはありえない言葉

「へへっ！こう見えて病弱っ子なんですよ？」

はにかむように苦笑する

そんな表情に彼方はかける言葉を失った

「だからかな？貴方が他の子と違うって言ったのって。いわゆる

外の世界が分からない子なんですよ…」

高校生なのに荒波も何も無い

まだ若いのだから

「……………」

「何回か入院繰り返してたせいかな？ぜんぜん馴染めなくなっちゃって…というかそんな私に皆同情しか向けられなかった」

彼女の感情を表すかのように風がすりぬける

「あつ！待って…これからが愚痴なの！！」
表情は一転して変わった

「そんな時に知り合っただんです貴方に似てるアーティストに…。
キツカケは些細なことだったんです。『かなた』って名前…昔、家
にこもりがちな私に母が私に買ってくれた犬の名前なんですよ…」
懐かしむように微笑みながら話す

「その子は亡くなっちゃいましたけど。それがキツカケと後偶然
入院中ラジオで…いつも聞き慣れてる歌なのに歌い手の力の違いで
こんなに感動するとは思いませんでした」

「…そうなんだ」

「なのに！！…いきなり嫌な噂は流れ出すわ、活動中止だわで正
直大変苛立ちました！！」
ベンチから飛び出すかのように立ち上がる

この子の感情の起伏にはビツクリする

驚いた顔を隠せない彼方

「彼は最高でした…ありきたりな言葉だけどこんな私に勇気をく
れた。伏せがちだった私を歌で励ましてくれた…クラスの友達に声
かける勇気をくれた」

「……」

「そんな気がするんです…こんなに軟弱体質だけど追っかけもや
ってます！！！？」
ガッツポーズを決める

「公演が決まったら…即座に見に行つて大声張り上げてたくさん
笑つてたくさん泣いて次の糧にします！！こんな自分がいたんだな
って自分自身でも驚きですよっ！こんなことで救われるんですよ？」
浮き沈みの激しい彼女は大きく深呼吸をする

「だから…」

彼女はもう一度呼吸をしなおす

「だから…歌をやめないでください」

「…!?!」

「私だけじゃない…皆望んでると思いますよ?」

途端周りの空気が変わる

彼女は真っ直ぐに彼方を見つめる

「辞めないでください…っファンでいさせてください」

「…!」

「な、なんて貴方に言っても、仕方ないですよ」

仕方ないなんて顔をしていない

彼女の表情は確信を得ている

「で、でもっ!私だって…ははっ、私何感情的になってるんだろ

う…バカみたいです」

彼方に見えないように顔を隠す

そしてベンチから腰を上げた

「あ、これから用があるんですよ?ごめんなさい…引き止めて

しまっ」

去っっていこうとする後姿

言葉は喉の先のほうまで出掛かっていた

「あ、あのさ…!」

身体を震わせ立ち止まる

「な、何でしょう?」

「あ、あのさ…今度の入院、手術って何時?」

「えっ…」

素花は振り返る

「え、丁度一ヶ月後…です」

「…頑張つて？こつちも頑張るから」
言葉に出来ないほど瞳を丸くする
彼女は今までにないくらい涙をためた
それは今にも零れ落ちそうな
そしてゆっくりと頬を緩ませる

「あ…ありがとうございます！！！！？」

彼女は走るペースはゆっくりだけど確実な足取りで彼方の前を後に
した

「…頑張るから、か」

再び一人になった彼方

56・速瀬の思惑（前編）

静寂の中彼方の足音だけが響いた

それは歩を進めるのつれて喧騒へと消されていく

相変わらず人の行き帰りが激しい事務所

見渡す限り今にも崩れ落ちそうな書類

フツと目を移すと彼方に対するメモやFAXも目に付く

電話片手にパソコンと向かい合うスタッフ

考えながら歩いていると肩がぶつかり

名も知らないスタッフが通り過ぎる

ここはいつにも増しての騒がしさ

彼方の事務所はいつもこんな感じ

これで何度目か、活動休止した後訪れる

俺は満春との最後の約束を果たしたくて

そして素花ちゃんのを願いを叶えたくて

毎日ここに来てる

一人のスタッフとすれ違いでぶつかる

「あ、ごめん…」

今日はぶつかられる事が多い

でもさつきとは違う知っているスタッフだった

「あ…」

「…忙しそうですね」

「そうなんですよ…彼方さんが活動休止してからの抗議電話が後
を絶たなくて…いつもいつも回線はパンク寸前で今日だって…」

「余計なことは話さなくていいわ」

カッン…

聞きなれた足音は声の後に聞こえた

よく響く緊張をあおる様な足音

「あ…すみません！」

「貴方は持ち場に戻りなさい」

冷たい視線をスタッフに向け命令する

肩を震わせたあとスタッフは通り過ぎていった

「速瀬…さ」

彼方の形だけの挨拶は空しく宙を舞った

「何度来ても同じよ…ここに貴方の居場所はないわ」

「……」

「出口はあつちよ」

彼方だつて知っていることをワザワザ告げる

声のトーンもそのままの速瀬

目の前に誰もいなかったかのように踵を返す

「悪いけど…俺が話あるんだ」

腕をつかみ呼び止める

「…この間から言ってるとおりその話なんてものが聞く権利なんてないわ」

まるでゴミをはらうかのように彼方の手をのける

「もう貴方との契約は終わったはずよ…忠告をことごとく無視しておいて今更貴方が用があるなんて都合が良いにも程があるわ…忙しいの。さっさと出て行きなさい。」

長い台本でも読むかのような話ぶり

何の感情も流れてこない

だが彼方の言葉は止まることはなかった

「そう言われても仕方ないと思ってる…だけど俺にだって通したい意地があつたんだ…あんだだつてそこまで敏腕なんだ…つや二つ

通してきた意地があつたんだろ？」

場を繋ぎとめるための言葉しか出てこない

「貴方にしては下手な言いぐさね」

「別に許してくれって言うてるわけじゃない。仲良く仕事をやるうと思ってるわけでもない…俺のしてきたことはそれを勝ると思ってる…でも、恥を忍んでても頼れるのは速瀬さんしかいない」

彼方は真剣な眼差しで速瀬の瞳を射抜く

途端速瀬は驚いたかのような表情を見せる

「あの頃と同じ眼ね…」

「え…？」

聞こえるか聞こえないかのところでヒールを鳴らし

来た通路をまた戻っていく

「…速瀬、さん？」

「その瞳に免じていらつしやい…話だけは聞いてあげるわ」

言葉で促す通りついて来た彼方は

いくつもある会議室へと通された

「……。」

扉を開け招き入れた速瀬は彼方を横目に静かに椅子へと腰掛ける
さつきまで会議をしていたのか書類をデスクに置く

「いつまでそこにいるつもり？」

指摘を受けた彼方は開いた扉を閉める

その瞬間張り詰めた空気が流れた

「あのさ…」

切り出したのは彼方のほうからだつた

「俺さ、好き勝手言つて…」

速瀬のいる窓側にゆっくりと歩み寄りながら

言葉をつなげていく

「ガムシヤラに突っ走つて怒鳴り散らかして…速瀬さんから一喝

されて、さらにムカついて突っ張って…全て満春を取りもどすためにやってたことだけ。その度満春との距離広がって」

「……」
「何でだ!!…気持ちさえ向けていれば伝わるって信じてた…。速瀬さん前に言っただろ?…もつと周りのことを見なさいってさ」

「昔の話だけと言った気がするわ」

彼方の顔を一目も見ない速瀬

無意識に彼方の眉はゆがむ

「確かにさ、自分のことばかりだった気がする…満春の気持ちや皆の気持ち何も考えてなかった。もしかしたら俺自身何も考えてなかったかも…ただ必死にあの頃の面影を追いかけてた。それ程大切なことでそれは満春だって同じだと何よりも大切なんだと信じてた」

「それは」

「ああ、それは間違いじゃないと思う。けど、この前あいつから連絡が来て改めて別れを告げられた。言ってたよ…貴方を見ている人達のことを考えてあげたって」

無言で外を見つめる速瀬

「どうしてって苛立ちも覚えたよ。だってそうだろ?こんな仕打ちを受けたのは誰のせいだよって…しかも同じ仕打ちに2回も。だけどあいつの考えは違うんだ。」

「……」

「全て受け入れてたよ…俺の気持ちさえも知っててあいつは身を引くことを決意したんだ」

「……」

「ただ約束を守るために入った芸能界…満春と連絡が途絶えた後俺を支えてくれたのは速瀬さんや俺を囲むその時いた僅かなファンだった。何も信じられなくなつて自暴自棄になつてた頃、安らぎをくれたのは紛れもなくファンからの手紙だった」

いつまでも外の景色しか見ない速瀬
訴えかけるように後姿を見つける

「今でも満春の言葉を受け入れようとすると頭が混乱する…」

「……。」

「このまま終わっていいのかって。けどそんな自分と向き合っ
て気付いた…俺、こんなにも音楽が好きなんだって。歌い続けたい
って思った。困惑した環境の中で手にした俺の気持ち…」

不意にきつと無意識なのだろう

向きたくて向いたんじゃない、きつと

そつばを向いていた速瀬さんの顔が彼方の方へと向く

「あいつが身を引いてまでも俺とファンとの繋がりをつくってく
れた…俺、音楽続けたい」

「これからも音楽をつくっていききたい…。」

時間が止まった気がする

心臓が停止する

喉の奥がジンジンして収まらない

「…そう」

張り詰めた室内の中で速瀬の一言が部屋をこだました

「悪いけど…俺は諦めるつもりはない。色んなことをいろんな意
味で今まで一つのことしか見てこなかったから今からはたくさん
ことを目にしていきたい…納得してくれるまで何度でもここに通う
…勝手な話だけどこれから先も速瀬さんとやっていきたいって思う

から

「……………」

「だから、俺にもう一度音楽やらせてください!!」
振り返ったままの速瀬の瞳を見て頭を下げる

「お願いします!!!?!」

「どうして、それを私に?」

冷静な声が彼方の懸命な声を一喝させる

「頼む相手が間違えてるんじゃないかしら?」

「入った頃から俺の面倒見てくれた速瀬さんしかいないと思って
る……」

皆についていけなくて疲労限界の時に

水を差し入れてくれたのは速瀬さんだった……

この女性のそんな優しさも見落としていたんだ

下げた頭を上げない彼方

「何度も言うけど私は貴方から担当はとうに外れてるの……興味の
なくなった者の面倒を見るほど私はお人よしじゃないわ……」

「……………!!」

「今は貴方より優秀で……2、3歳年下マネージャーをやっている
わ」

彼方の身体が強張る

それに追い討ちをかけるように速瀬の深いため息が耳元に響いた

「それにもう遅いわよ。ファンは着実に離れていってるわ。それ
が芸能界の怖さ何度も教えたはずよ?」

「……けど!!」

静かに椅子から立ち上がり書類を手にする

呆然と見上げる彼方を他所に歩き出す

「悪いけど、私……これで失礼するわ」

すれ違いざまに囁くような声で彼方にあてる

いつもと変わらない懐かしいはずの足音が
今は一段と違って見えた
速瀬は閉めたドアを見つめる

「……………」

反転し背中をドアに預ける

途端胸いっぱい書類が一枚落ちた

何を考えているであろうその瞳は

ドアの向こうのことが気になるのだろうか

落ちた書類もろくに拾わず立ち尽くしていた

「あの、速瀬さん…」

「え…」

「書類落としましたけど」

そう言いながら拾い上げるスタッフ

「あ、ごめんなさい…ありがとうございます。」

「いえ」

ちよつとクシャクシャになった書類を速瀬の手元に置く

「そういえば聞きました…？速瀬さんが担当していた例の子正式
にここを辞めるそうです。」

「そう」

「社長が一応、速瀬さんにも言っておいてくださいと」

「分かったわ…ありがとう」

書類を受け取ると踵を返した

が、突然立ち止まる

「貴方、一つ頼まれてくれる？」

「はい？」

「今その部屋に彼方がいるから…彼方の事務所に残した忘れ物
渡しておいてくれるかしら？そうね…後私のデスクの右端にある

箱の中のもの忘れ物だからそれをお願いするわ。」

「はい、分かりました」

そう告げると速瀬はその場を後にした

57・速瀬の思惑（後編）

すぐには会議室を後にせず

近くの椅子へと座った

何だか離れたくない気分だった

身体は予想以上に重く彼方の気持ちを罵る

「…はあ」

軽いため息はついてみるものの

現状は考えるよりさらに重く感じる

彼方の頭から速瀬の言葉が拭い去ることはなかった

カタンッ…

重い腰をあげさっきまで速瀬が見ていた景色を見つめる

近くにある手すりに肘をついた

『失望』 『裏切り』 『落胆』

何度速瀬さんにそんな思いをさせていたんだろう

速瀬さんらしくない言動や行動

時々見せてくれていたから分かっていたはず

どんなことを言っても受け入れてくれた

6年前俺が大事な仕事をすっぽかして逢いに行った日も

熱出して帰ってきた俺に厳しい言葉の後優しくタオルを額に当ててくれた

今回それが通用するなんて心のどこかで思ってたなんて

甘い…そういわれても仕方ないのかもしれない

いつも叶える俺に異常なほどの執着心があつて
度が過ぎたことをしてきたかもしれない
けど、速瀬さんの言つてたことは
勝手や我侭じゃなくいつも事実であり真実だつた
子供な俺にちゃんと合図を送つてくれてただ
思わず頭を伏せる

『興味なくなつた者の面倒を見るほどお人よしじゃないわ……』

興味のなくなつた者…

あの人に言われるのがこんなに辛いだなんて

昔の自分からは考えられない

今、冷静になつて分かる

速瀬さんがいたから俺はここまでやつてこれた

それだけじゃない…

俺について来てくれた数多くのファンがいたから

『音楽止めないでください！！』

素花ちゃん言葉が心に刺さる

コンコン！

伏せていた顔を上げる

周りを見て自分しかいないことを再確認する

少し間が空いたが返事をする

「はい…」

ゆっくりとドアノブが回つた

「失礼します。あ、本当にいらっしやうってたんですね…。」

「え？」

相手の発言に目を白黒させる

「あ、いえ…あの、すぐそこで速瀬さんに会いまして彼方さんにこれを」

さつきから彼方の視界に入ってた荷物を机に置く

彼方は側へと歩み寄った

「何、速瀬さんから？」

「あ、あの…彼方さんの忘れ物を届けてくださいと。」
女性のスタッフは申し訳なさそうに話す

「そうか。」

「じゃあ、私はこれで…」

ドアノブに手をかける

「ああ…ありがと」

振り返り軽くお辞儀をすると静かにドアを閉めた

窓から手を離すと持ってきてくれた荷物を目にする

「…忘れ物、か。」

近くの椅子へと腰掛ける

中には様々な私物がまじっていた

触れる程度に箱に入っているものにつける

その間言葉なんてなかった

後悔とか落胆とかそんな感情で固まらない

取り返しのつかないところまで…

彼方にこの前まで嫌というほど付き添っていた彼女

心のどこかで思っていたのかもしれない

速瀬さんは何があっても俺と一緒にいてくれる

そんな甘い考えを持つ人じゃなかった

前から言っていた耳にもしていた

使えない子は切り捨てると…

彼女はそんな考えを実行したまで
必死に謝ればとかそんな考えこそが
もう俺は…ここに在る資格がないのかもしれない

何処までも速瀬さんを無視して
裏切ってここまで自分を追い詰めた
気付けばそこまで結果が出ていた

だけど!!

って思うこの気持ちもこの世界を甘く見てるのかもしれない
だとしたら…俺は笑うしかない

椅子の背中に身体を預けようとする
箱の中にまた小さな箱が入っていた

「…あれ」

そこには見かけないものがあつた
綺麗な白い小箱に確かではないが手紙みたいなものが入っている
それは小さな箱にぎっしりと入っていた

「これ…」

彼方には見覚えがないのか
手にとつて確認

「手紙？」

分かつて私物でないのは確かだつた
しかもそれはぎっしりと隙間なく入っている
その手紙に手をかけた
手に触れたとき予感はした
この手紙の正体を…

それは的中することになる

58・待つている人達

的中することになる

「……」

彼方の周りから音という音が一切なくなる

別にそれを疑問に思うことはない

それは彼方も含め音を失くしているから

そう考えていいと思う

紙のこすれる音以外、心臓の音さえも聞こえない

あっという間に何通目かの手紙を読み終わり

山のような中から手紙を取る

静かな空気が流れる中

誰もいないこの空間で彼方は何を見ているのだろうか

そしてまた次へと視線を移す

空いている窓が部屋に風を送り込む

微かな風がカーテンを揺らす

速瀬が開けたのか彼方が開けたのか

それとも元から窓は開いていたのか

さっきまで気付かなかったほどの風が

まるで主張を始めたかのように存在をあらわす

少し強い風が会議室を駆け抜ける

彼方の髪を揺らした

その心地よさに気付かないのかどんどんと手紙を読み進めていく

彼方の頬を通り彼方の読み散らかした手紙を揺らす

続く風の反動に耐え切れず静かに落ちる

促されたかのように落ちていく手紙

落とされた紙から見られる言葉

そこにはそれぞれ個性的な文字でこう書かれていた

『音楽止めないでください…』

『落ち込んでた私に元気をくれました』

言葉にすれば文字にすればあまりにも陳腐なもの

しかしそれに頼るしかできないそんな懸命さが綴られている
だが彼方の脳裏には表現できないものが霞んでは形にしていく

『この前の新曲聞いてから貴方様のファンになりました。とても切ない詩ですね。でも幼い頃にあったその女の子をすごく大切にしていたらっしゃるのが伝わりました…この歌がもう美しく育っている
である少女に伝わるのを心から祈っています。そして応援しています。次の新曲楽しみにしています。』

大人の女性なのかとても綺麗に書き綴られていた
そして次の手紙に移る

『音楽止めないで…!!?…引退しないで…!!』

パラッ

『私はデビューの頃から彼方さんのファンです。いつも貴方の歌を聞きながら家事に取り組んでいます…今、貴方様がどんな壁にぶつかっているか、私には想像つきませんが貴方を待っている方々はたくさんいると思います。つらい事、悲しいこと、楽しかったことど

んな些細なことでもいい…耳を傾けてくれるファンの方、周りに貴方を大切に思っている方々たくさんいると思います。信じてみてはいかがですか？不躰な手紙で申し訳ありません…ですがこの手紙が彼方さんに届くことを信じて送らせていただきます』

言葉が出なかった

ただ自分は子供なんだと思った

口先だけでは何とも言えるしっと思って思える

『応援している人たちを大切にしておいてあげて』

あいつの言葉で行動に起こしてみようと考えた
現に今、この気持ちはこの人たちに

俺は最後の手紙を机の上に置く

髪で隠れた俺の顔まったく想像がつかない
自分のふがいなさに幼さに…覚悟のなさに

まだ心のどこかに飾り立てた自分を見せようと

本気になっていなかった気がする

半信半疑だった気持ちが変わった瞬間

落胆していた腕に力が入ったような気がする

カタンッ

しばらく経って彼方は静かに椅子から腰を上げた

それからこの部屋を出て行く時間はそう長くはなかった

どこにいけば会える

どこに行けば見つかる

どこを捜せばいるんだろう

唯一つのことを考え出すとどうして人というものは他のことに興味がなくなる

普通に考えれば分かるはず

あの人がどこにいるかなんて…

速瀬さんが俺を見ていたのと同じくらい俺だって

ドンツツ!!

スタッフの誰かにぶつかる

会議でもあるのか資料が廊下に散らばる

髪が地面真っ白になる程散らばる

「ご、ごめん!!…急いでるから」

何人かにぶつかる

気にかけている余裕がない

普通に考えてみれば分かる

あの人が何処にいるかなんて

俺がこの世界に入っつてずつと…

バタンツツ!!!

ドアを凄まじい勢いで開け放つ

「速瀬さん!!!?」

向こう速瀬さんは無表情でそこにいた

それはさっきと変わらず

彼方とは初面識と言わんばかりの顔

「速瀬さん!!俺に、俺にもう一度チャンスください!!…勢いで不順な動機で入った芸能界だけど堅い話なんてないかつこつける気もない単純に俺、音楽が大好きなんです…どうしようもなく好きなんです!!聞いてくれるファンの子達の笑顔も俺の歌を応援してくれる人たち皆もどうしようもなく大好きです!!」

「……」

走りこんできた勢いで椅子が倒れる

そんなこと気にしてる場合じゃない

「俺は、そんな本心を6年前の事だけでうやむやにしていた!」
彼方は頭を下げたまま顔を上げない

そんな彼方を見下ろすだけの速瀬

「そんなことにいまさら気付くなんて…本当馬鹿げてるけどだからこそこの一瞬にかきたい…俺にチャンスをください…どうかお願いします」

「……………」

「お願いします!!!」

時が止まった

一気に言葉を放ったからか頭がボーっとする

けどこの人の言葉だけは逃すわけにはいかない
頭を下げたままその時を待つ

……………。

「話はそれだけ?」

変わらない言葉が彼方の脳裏にこだまする

「もう言いたいことは言い終わった?」

ハイヒールを鳴らすと出口のある彼方の方向へと足を進める

「そう…じゃあ」

ゆっくりとカーテンに手をかけた

「なら、外見て御覧なさい」

「え…?」

瞬間思いつきりカーテンを開ける

思考回路は一瞬停止した

「聞こえなかったの?…外よ」

彼方は言われるがまま速瀬のいた窓のほうへと足を向ける
窓の外には想像もしないことが起こっていた

「…!!」

「な、に?…」

視線を向けた下にはたくさんの人だけが出ていた

お互いが押し合いへし合い

われこそ先へと足を踏み入れようとするが

警備員に止められ絶叫を増す

そこでは微かに聞こえる

窓は閉めたままなのに…

「誰かに見られていたのね…貴方がここに入っていくのを」

聞こえる微かな声が

だけど今の彼方にとって微かなんてものじゃない

…彼方…彼方あ!!

彼方っつ!!!!

「…っ!」

ファンの声が耳に入っていくたび心臓が早鐘を打つ

無意識のうちにこぶしを握り締めていた

「もう、俺には無理なんですか?…皆の前にステージの上に立ち

たい。…そのためには速瀬さんが必要なんだ。」

光景が見える窓にこぶしを押し付ける

「覚悟はさつき聞いたわ。だけど貴方に出来るの?過去の出来事

全て忘れて貴方を愛する全てのファンを貴方の方から愛することが

出来るの?」

彼方は言葉を濁さずはつきりと言いつける

「はい…」

瞳に迷いが無い

その姿を見ているのか速瀬はなにも答えない
沈黙は速瀬の軽いため息で打ち消された

カツン：カツン

音の呪縛からとかれた

目の前から歩いてきている女性の足音は軽快だった

「は、速瀬さん？」

「空いてるの…残念ながら暇もてあましてるの」

「……………？」

彼方の脳裏にハテナマークが現れる

久しぶりに見た速瀬の笑顔は少し苦笑いも混じっていた

「担当外れたの…っていうか担当の子この間辞めて行ったわ。まあ、さほどいい人材じゃなかったからいいわ。はあく考えの範囲内には入ってたけどまったくの根性なしだったわ」

「……………」

「少し、怒鳴ったらすぐこれよ」

気のせいか少し怒りも混じっている

「そりゃそうでしょ…」

「何が」

「速瀬さんみたいに一癖も二癖もある人一般人じゃ扱えるわけがない」

彼方も自然に笑顔を見せる

「失礼ね…人を猛獣にみたいに」

「あながち間違っていないかと思うけど」

失言だと思つて口を塞ぐが遅かった

「軽口も大概にしなさい？彼方。私は…怒鳴つて怒鳴つて怒鳴り散らかしてもついてくる子じゃないと張り合いがないし先も渡っていけないわ…ただの軽い気持ちで入つてこられても迷惑なだけ。イ

ジメ抜いてさよならよ」

「……………」

「貴方は違うんでしょ？私はそう信じているわ…あの子達が」
窓の外に視線を向ける

「貴方を信じて待つているように……」

そついい終わると懐かしく感じる優しい笑顔に向けた

それは幼い頃動機は不順でも頑張った彼方に見せた笑顔に似てる

「…速瀬さんらしくない。な？」

誰に疑問を投げかけているにもかかわらず目配せする

速瀬はフツと口の端を上げる

窓から彼方の傍から踵を返す

「そうね、私らしくないわ…まったくよ」

離れていく後ろ姿はどこまでも嬉しそうだった

まるで彼方がここに來ることを知っていたかのように

こうなることを知っていたかのように

彼方はもう一度窓の向こうの人達に

「彼方…つ彼方！！」

呼ばれていることに気がつき振り向く

「何をしているの！！これから記者会見するのよ…ボーっという

までも立っている場合じゃないの。早くしなさい」

そして気がつけばいつもの速瀬さんに戻っていた

59・心地いい風に変わるその日まで…

まもなく聞いた

彼方君が芸能界に復帰したこと

それはテレビからとか雑誌からとか

奈津美からとかじゃなく

なんだか自然といつの間にか気付いたときには

たくさん番組に彼方君はいた

嬉しいとか実感はまったくない

もう終わったとか後悔とか

そんな落胆した感じでもない

自分が下した結論に後悔はなかった

ただただ普通の生活を送っていた

他に考えることなく心は軽い

私たちは屋上にいた

午前の授業は難なくクリアし

というか、先生の話を永遠に聞いているだけ

これもまた楽なものだった

暑さも過ぎ去り少し涼しいくらい

最近はあまり考えなくなつた

あれからどれくらい経っているのか

「早4ヶ月暇だね…」

見事思い出してくれた

右手にパン左にイチゴミルクを持ちながらマコはグラウンドを見て

いる

涼しくなった風はくすぐるように髪を揺らす

「そうだね…平穏な日々だよ。」

マコは私の座っている隣に腰を落ち着かせる

もう飲んでしまったのかイチゴミルクをおいた

「ああ…頂戴？満春のお茶」

私の脇置いてある飲み物を指しながら言う

無言で私はそれを手渡した

「センキュー…」

持っていた2個目のパンをほおばりお茶を飲む

気分はご満悦のようだ

「あれから何事もねーな…」

「その言葉かなり微妙だけど」

無言で私にお茶を手渡す

目の前に差し出されたものを受け取る

「ちよっ!!?!マコ、これ飲み過ぎ!!殆ど空じゃない」

ペットボトルを高く掲げ中身を確認する

だけど確かに中身はないに等しかった

「ははっ!!お前知らねーのかよ。人のものほどおいしく見える

もんなんだよ」

「何それ!威張って言うることじゃないでしょ…」

思わず呆れ返りすぎて笑ってしまった

フツと視界から外れたところで手が伸びる

「しょうがないなあ…。私が飲み物ぐらいあげるよ」

その先にはペットボトルが差し出されていた

「あ、ごめん…ありがとう」

つい条件反射で冷たいコーラーを受け取る

「えっ?」

確か差し出された方向には誰もいないはず

…なのに何で手が???

そんなことで尊敬されてもなんて答えたらいいのか
頭をかきながらマコの笑ってる姿を見つめる

「ハハハッ！こいつに水でもかけてあげれば？」
必死に笑いをこらえて言葉にする

そんなマコの姿にんだか私も笑えてきた

「ふ：ハハハハハハッ！」
終いには私も笑い出した

あれから平穏な日々が続いてる
変わらずマコとじゃれあつて

いつの間にかそこに奈津美も参加していて
奈津美がバカ言つてマコが突っ込む

そんな繰り返しの中
時々彼方君のこと思い出すけど

あれから連絡とつてないし
あつちからも来ない

だけど携帯の履歴だけはちゃんと残ってる
4ヶ月前

私たちの中で何があつたのか
消えない事実、消したくない事実

別に未練があるわけじゃない
これで本当にすつきりしてるしわだかまりもない
ただ思い出に取っている

彼方君との間に何もなかったなんて思いたくない
それは私の生き方に反してることだし
私らしくもないから

この過去の先に私がいるって
それが私が泣いて泣いてマコに何度か助けられて
そしてここまで笑えるようになったのは

過去のおかげだから

それがなくちゃ私は笑えてない

涼しい風が私の頬をかすめる

この風を何度か感じて

私の気持ちは少しずつ変わっていくんだ

薄れていく

消えていく…いつか忘れて

記憶の中の一部になる

それが半年先になるか一年先になるか分からない

もつと時間がかかるかもしれない

知ってるのは未来の自分

やっぱり今は胸が痛むし

テレビで歌っている彼方君を見ると切なくなる

いつかギョツと締め付けられる感覚を忘れる時が来ても

記憶に書き留めておきたい…

私の頬に気持ちのいい風が霞める

60・飲み込めないレタス

空は快晴遊びたい盛りの人達大集合
毎度おなじみ私たち

今日はお休み

完全週休二日制ラッキー！！

…なんて奈津美みたいなテンション
今日はさすがにお傍にいないけど

……

い、いないと思うけど

前科があるからなあ…断言は出来ない

そう発言してみる今日この頃

私とマコは歩きつかれて行った先近くの喫茶店に入っていた

「ういー！ー！！さみい」

何だ始めの効果音は…

言葉にならないほど寒いという解釈をしておこう

もう寒さが身に染み始める季節

私たちはすっかり厚着をしていた

外は晴れ晴れなのになんで寒いんだろう

見た感じ夏とあまり変わりないように見えるけど

でも、日差しが細かいかも…

窓から見た印象では…やっぱ寒そう？

暑くなったり、涼しくなったり、寒くなったり

人間は切り返しが大変だ

まあ、この繰り返しがなければ私たちは

生きてるって実感できないんだろう

時が経ったって感じないんだろう

いつまでも同じ時の中でなんていられないんだから

季節は人間にとっていい刺激になる

なぜか焦りを覚える

何回かの季節を乗り越えていくことに

自分が何も変わってないんじゃないかって

繰り返していく日常の中で不安を抱く

この暑さと寒さとの往復の中で

人間はなんて単純で繊細な生き物なんだろう

私自身繊細な生き物で…

何も変わっていないんじゃないかって

私が見えない心の奥底でキューキュー唸ってる

コンコンッ…コンコンッ

何かを叩く音が聞こえる

私の視界に人差し指が目に入る

「……？」

そこを辿っていくとマコが終着となっていた

「なあ…早くしろよ。」

マコは私自身に触れるんじゃないって

机越しに合図をする

ちょっと焦りがちに机を小突いていた

「いつまで考えてんだよ。寒さしのぎで入ったけどマジでお腹す

いちゃったんだってばさ…」

それは早く決めろって事？

同じページをジーツとみつめてる私をじれったく思ったみたい

慌てて適当なページをめくる

その一部始終をマコは呆れた瞳で見つめていた
痛い視線を肌に受けながら無理矢理決めた
そして店員さん呼びマコとともに落ち着く

「…世の中平和だなあ。」

その言葉に口にしてる水を吐き出しそうになった
少し咳き込んでしまう

「コホツ！いきなり何を言い出すの何を」

「これも故に奈津美がないからだな!!」

そして何をそんなに威張っているのか

ふんぞり返って良からぬことを口にする

「何？今度はどうしたの？」

言葉にした瞬間マコは辺りを見渡す

「いや…奈津美がないかとおもって」

悲しい習性だあね

そんな怯えなくても…

「だってあいつうちらに会ったびニコニコしながら彼方のことばかり語り倒すんだぜ…あの復帰してからなんて特に、ウザイったらありやしない！！何度も何度も聞いた話を」

マコは肘を突きながら文句タラタラ

「それは好きなんだから仕方ないよ…」

「…あつと」

「ん？」

途端マコが口ごもる

「ごめん…また無神経なこと言ってさ」

「え？ああ」

何事かと思っただけ一瞬で理解する
マコがここまで恐縮するのは
決まって彼方君のことだ

「え…何、別に気にしないでよ」

手なんかおばさんっぽくなってしまった

それがわざとらしく見えてしまったのか

「だけだよ」

なんて弱気になってしまった

「本当大丈夫だって、あ！！ほらマコお腹空いてたでしょ？来た来た！！オニオンスープとサンドウィッチセット……」

店員さんに注目する

「あ、私のも来た。いいからいいから食べよ食べよ……」

勢いよく自分の陣地に置かれたフレンチサラダをほお張る

私はあまりお腹空いてなかったから軽食を選んだ

元気を取りもどしたマコはサンドウィッチをほお張る

その姿を見て私は一安心する

「うん！あっさりしておいしいここはまた来なきゃだね……」

「……ほお！！ひょうだな……」

………ねえ

口いっぱい入れすぎだよ

言葉遣い乱暴でも一応女の子でしょ

「私ね、本当吹っ切れたから。色々心配とかかけたけど……そんな気にかげられちゃうとそっちのほう辛い。逆に彼方君の話題とか避けて通られちゃうと」

私は下を向きながら手持ち無沙汰にフォークでレタスを刺す

だからマコの表情が分からない

「それに最後の約束したんだ。『応援してる』ってだから影ながら応援したいって思ってる。昔のね！昔の私達にはもう戻れないけど時が過ぎればこれでいいんだって思えるから」

「………」

「だから、そんなに避けないで？ただの幼馴染からファンになっただけなんだから」

その言葉を口にするのと刺していたレタスを食べる

ファンになっただけ…それ以外は何も変わらない

口にレタスを入れる

開いた時違和感があった

私、笑えてない…

無理矢理レタスを口に入れることで

表情、誤魔化そうとしてる

飲み込もうとしてる？

でもなかなかレタスが飲み込めない…

……

そんなまさか、私は心の中で笑う

だってマコに大丈夫ってさっき言った時自然に笑えてた

だけど下を向いた時顔が引きつった

自分の知らないところの私

…ううん、大丈夫

「だから…しんみりしちゃったけどそういうことだから…!」

でも私は元気だった

気軽に言えた

それは忘れ始めてる証拠

私は心のそこから喜んだ

「そうか!!分かった」

マコも笑顔の戻る

いつもの強気な性格に戻る

「そう!!だからこの話はおしまい…そして気を遣った罰金とし

てこれ一個もらいまあ〜す!」

マコの皿に乗ってるサンドウィッチを取り上げる

「ああ〜〜〜!!何してんだよ!!お前」

「だから罰金〜」

私は容赦なく食べていく

「ははっ！…これもおいしいよ！…食べてみなよ」
目の前のサラダを差し出す

マコの瞳は鬼と化していた

「んぐうっ…！！全部食ってやる！！」

「やだ！…それはやめてえ…」

慌てて取り上げようとしたけど

時すでに遅し

サラダは敵の手中に収まってしまった

マコのテリトリーの入ってもなお主張する

サンドウィッチも食べた…ミルクティーも飲んだ

それなのにレタスの味だけは鮮明に残っていた

61・謝罪

スタジオ内に沈黙が走る

周りを取り巻くスタツフは誰も無表情

静かなスタジオに溜息が聞こえる

それにつられてまた一つ

少しずつ増えていく溜息の数

「はいっ…オッケー」

そしてどよめきが歓声に変わる

ザワザワ…

一人また一人言葉にしてく

彼方はゆっくりとヘッドホンをはずした

途端、周りの雑音が耳に入ってくる

「お疲れ様ですっ…」

「お疲れ!!」

挨拶はそれぞれ交わされていく

彼方も思わず溜息が漏れる

「ふう〜…」

軽く汗を拭いスタジオから出る

そこにはいつも見慣れている顔があった

「お疲れ様。彼方」

速瀬は目の前にタオルを差し出す

「ありがとう…」

あれから上手くいっていた

速瀬は何事もなかったかのように

一週間後ノートが埋まるくらいの予定をもって現れた

久しぶりの仕事記者会見の帰り

速瀬は彼方に『一週間、時間をあげるわ』と言って去って行った

すぐにも仕事はできる準備は出来ていた

今すぐにも取り掛かりたい気分だった

一週間後速瀬の姿を見て言葉を失った

それは並大抵のことじゃなかったことは

容易に想像できる

信用の失った俺にやすやすと仕事をくれる程

この世界は甘くないって彼方自身速瀬に教わったことだから

いつも皺一つなく綺麗なスーツに化粧をしている速瀬は

その日に限ってはスーツはしわが寄って

トレードマークの赤いハイヒールも少し汚れていた

何回も頭を下げ、必要あらば土下座をしてきた証拠

その時ほど彼方は胸が痛んだことはなかった

今思えば『時間をあげるわ』じゃなく『時間を頂戴』って意味だった

自分のふがいなさや情けなさに

涙が止まらなかった

どこまでも子供でどこまでも浅はかな自分

彼方は満足していたのだった

自分のことをわかってくれたと

でも速瀬はその先のことも覚悟して一週間前笑顔に向けてくれた

彼方が泣いていることに気付くと

『これは私の仕事よ?…たいした事ではないわ。これは私が貴方

を捨て切れなかったケジメなのよ。泣く位なら笑いなさい?』

厳しく言い放つと笑顔を見せてくれた

それはこの仕事にプライドと誇りを持っている笑顔

スーツに汚れた靴

彼方の目の前

誰よりも凛々しく格好よく映っていた

「これでアルバム完成だね」

タオルと一緒に冷たいコーヒーを貰う

彼方は近くの椅子に座った

速瀬もその隣に座る

「そうね。そして発売を記念して全国ツアーも入ってくるわ」

もう一本持っていたコーヒーを開ける

気持ちのいい音が響いた

仕事の終わったスタッフが席を立つ

「お疲れ様です……」

「お疲れ様です」

彼方の椅子の前を通り過ぎていく

その姿を見送る

「全国ツアーかあ」

そういつて貰ったコーヒーに口をつける

「あれから初めてのライブだからね……」

「ええ、きつと皆待ってると思うわ。ツアー全国34公演ファイナルは3ヶ月後、東京ドームはつきり言ってる久々のツアー申し分ないと思うわ」

「……へえ」

「ちゃんとトレーニングしてるの？」

「ああ、そりゃもちろん」

どこか上の空の彼方

「どうしたの？」

「え？あ、いやね……あいつと満春と久々に再会したのも東京ドームだなあ……って思ってる。なんか妙に思い出しちゃってさ」

黙り込む速瀬

「ちよつと速瀬さん変に考え込まないですよ？」

「別に考え込んでなんかないわ……確かにそうね」

素直に話題に参加する速瀬に首をかしげる

「怒らないんだね」

冗談交じりで言い返すと

速瀬は少し睨みあきれた様な表情を見せた

「馬鹿ね……」

そういつて席を立つ

「怒らないわよ……あの時は貴方が子供過ぎて子供過ぎて自分の立場さえも考えてないようなお子様だったから」

「そんな何回も子供子供……」

「当然の言葉よ……子供なんだから」

少しムカツときたが

ここは大人になった証を見せようと思いき我慢する

その姿に速瀬は微笑んだ

「少しはね……悪かったって思ってるのよ？顔に出ないけど。こんな別れ方になってしまつて。悪かったわ……」

「いいよ。分かつてるから」

沈黙が2人の間にわつて入る

「6年前も……」

「あそこまでするつもりはなかったわ。本当に」

いつになく口ごもる速瀬さん

「返す言葉なんてないわ」

椅子から腰をあげた速瀬の表情は分からない

だけどその背中には彼方に見せた事のない小さな背中だった

初めて聞いた謝罪の言葉

感じ取れるその背中に攻めの言葉なんて持ち寄せてなかった

「今は、速瀬さんに謝られることが辛いよ。俺考えたんだ」

「……」

「覚えてる？速瀬さんとけんかして俺が仕事すっぱかした日……」

「ええ」

「あの時、速瀬さん満春ん家きたる？」

「ええ…確か」

「その時は何も思わなかったけど…速瀬さん何度も来てるだろ？」
「！！」

「冷静に考えたらはじめて来た人の訪問の仕方じゃなかった…迷わずに満春ん家入って…たし速瀬さんはこれでもかかってほど恐縮して…満春の母親も自分の子供をあんなに…した事務所関係者に毛嫌いの一つも見せてなかった」

速瀬は硬直する

「謝りに、謝罪しに何度も訪れてたんじゃないのか？」
彼方の顔を見る

「満春さんのこともそうだったけど…会社が事務所がこれを機に満春ちゃんのお父さんの会社に多大な圧力をかけてたの」

彼方は言葉に詰まった

何を答えたらとか考えたらとかじゃない
分かるのは頭が真っ白になっている

「事務所が？社長が？」

「ええ、正確には当時に社長だけ…いつでもこっちの手中にあるって事を思い出せるように」

彼方の持っていた缶を取り上げ
近くにあるゴミ箱に捨てる

カーンッ…

どこか気持ちのない音が響いた

「それもあつて満春ちゃんの家だ。どうしようもなかった…若かった私はあのときの社長に反論することは出来なかった。でもこれは言い訳ね。だって6年前の自分の不始末をもみ消しにしてくれた

のは社長、それに甘えたのも私自身なんだから」

彼方に背を向けている速瀬

どこか震えている

彼方はそれに気がつかないようにわざと視線をはずしていた

「それからね…私が仕事だけに生きるようになったのは、私にとつて貴方たちは商品でしかない。私に背くことは許さない…じゃなきゃこの薄汚い世界の中じゃやっていけないから。愛情とか優しさとかそんな安っぽい感情で渡っていけるほどの仕事じゃない」

「でも、裏では速瀬さんは俺の親代わりだった。それに優しさを忘れてないからそんな社長に隠れながらも満春ん家行つてたんじゃないのか？」

速瀬は黙り込む

「俺が熱出したときに厳しいことを言いながらも俺にずっと付き添つててくれた…3日3晩いてくれたんだろ？側に…」

「……」

「それに、見捨てた俺をまた面倒見てくれたのは速瀬さんだろ？」

速瀬さんからは散々な目に合わされた

だけど彼方からも速瀬さんに迷惑をかけた

誰に頼まれたわけでない

意識的でもなく自然に言葉が外へと出て行く

「そんな出来事があつたから俺はこうしてここに座ってる…目の前にある状況だけだ俺の知ってる速瀬さんは…後は知らない」

前、満春の母親に久々にあつたときの疑問

今、分かった

彼女は俺の上にいるものに怯えていたんだ

消えた…いなくなつたはずの俺が目の前に現れて

また圧力をかけられるか

それに怯えていたんだ

俺は思わず深い溜息をついていた

「なんか本当に俺、身勝手なことばかりしてたんだな」

「申し訳ないことをしたと思っっているわ…ごめんなさい」

初めて見るこんな姿

冗談とか形だけとかそんなんじゃない

今まで俺に隠し続けて欺いて

きつとそれは一つや二つじゃない

背負わなくてもいいところまできつと一人背負ってきたんだろう

犯してしまった過ち

その重荷がきつと俺を成功へと導く異常なほどの信念

俺の目にとまらないところで

幾つもの嘘や打算を重ねてきて

その分彼女も傷も増え続ける

だから歪むしかなかった

自分を変えるしかなかった

そうじゃなきゃこんな世界にいられない

上司から信頼されるまでの人になんてなれない

表向きの速瀬さんしか見て来なかったけど

頭を下げた彼女の背中、とても深く傷ついている

「いいよ。別に気にしてない…って言ったら嘘になるけどだけど

必要だったと思うから」

俺は全てを許せる余裕を持っている

「だから、頭上げてよ」

一向に頭を上げようしない速瀬

「でも私はそんな純粹すぎた貴方の気持ちを利用したの…幼い貴

方を欺いて陥れて満春さんまでも追い詰めて」

「速瀬さん…」

自分に怒りを覚えているのが

それは一目瞭然だった

「だけど簡単に貴方の復帰は実現した…私は望んでいたはず」

「…ならいいじゃない」

彼方は思わず微笑んだ

「え？」

「これが望んでた結果なら良いじゃない？」

速瀬は何を言っているのか分からないと言う顔をする

「俺が復帰した…ファンもそれを望んで速瀬さんも望んでた」

「だけど彼方！貴方は」

「そして、満春も望んでる」

顔を上げた速瀬を確認しスタジオを出ようと歩く

「これで貴方は満足…」

後ろから声が聞こえる

だが、その声は貴方の声にかき消された

「俺は」

「俺は…速瀬さんが傷ついてないとは思ってないよ。」

それが分かっているからいいんだよ

つと言わんばかりに開けたドアから出て行く

「…!!!」

速瀬の言葉はとまった

凶星だからとか見抜かれた驚きじゃない

漠然と誰もなくなったスタジオで

たったの一粒

彼女は人知れず涙を零した

62. 私の中のピース

退屈な授業の中間点昼休み

一時の自由時間にハイテンション

天気もいいことだし

今日は中庭に出てみようかとマコのナイス提案

少し早めに終わった授業のおかげで

晴れの時は大人気の中庭には人が一人もいなかった

「おお！！優先席がいっぱいありますなあ……」

隣で歓喜の叫び

こんなことで喜べるマコ

片目でクスクス笑いながら心は弾んでいた

ここでいいかなあって決めたところに

お弁当を広げる

「あれ？…マコ今日は」

「ああ、これ？ちよつと気分が乗ってね？」

ワザとらしく語尾にハテナマークつけてふざける

いつも近くのコンビニとかでご飯を買ってくるマコが

そう鮭おにぎりは必須！

だけど今日はかわいらしいお弁当を取り出した

そんなマコと一緒に私もお弁当を広げた

「あたしだってやるときややるのさ！！見てみて」

視界にマコの力作お弁当が登場する

自分のお弁当を膝においてマコの手を取る

「味見してみよよ…ほら」

言われるまでもなく箸は自然と向いていた

その時見知らぬ男子が私たちの声をかけた

「あ、あのさ」

自慢の肉じゃがを口に運ぼうとするその時

私の味見は中断された

誰か分からない男子に私たちは言葉を失った
聞けば隣のクラスの子だと言う

「何だよ…何か用か」

少しぶっきらぼうなマコ

余程味見の邪魔をされたのが気に食わなかったらしい

「マコ！ごめん、何？」

眼飛ばしを静止するかのようにはいる

それにもめげず睨みを利かす

「…話あんだけど」

そう言われて私はその隣の男子についていった

「何で」って疑問なマコを何とかなだめ

過保護なマコを置き去りにその男子と歩いていく

マコの後姿が見える

呼び出されたのは私だけ…

用が済んだのはついさつき

色々気をもんでいるであろうマコの元にたどり着く

気付いていないマコの背中を軽く押した

「おまたせ」

私が座るのも待たずに質問攻めにあう

「何だよ。あいつ…何のようだったんだ？」

とりあえず座らせてと無理矢理座る

「んで…!!」

食い入るように私の顔を見つめる

そのマコの反応に私はますます言いつらくなってしまっ

「な、何でもないよ」

何食わぬ顔でお弁当を手取る

「何でもないでこんな楽しいお昼時に声かけるか!!普通」

肉じゃがの瞬間を奪ってしまった罪は大きい

と声を上げて言うマコ

そんな言葉を横目に玉子焼きをかじる

「本当にたいしたことないんだ…」

「じゃあ言え」

間髪もなしにマコの返事は返ってくる

言葉を詰まらす

玉子焼きを何とか喉に通す

そして静かに箸をおく

「告白…」

「はあ？」

間抜けな声を出すマコ

今度は横目で睨みながら再度言葉にする

「告白されたの…さっき」

言ってるこつちが恥ずかしくなる

だから言いたくなかったんだ

こんなこと何だかマコに教えるようなことじゃないような気がするし

「告られたのか？」

きつと赤い顔をしてる

俯くだけじゃ隠し切れないって分かってるから

ますます顔が反応する

「こくっ…付き合ってた」

「告られたのかあ」

「何回も言わないで!!」

声を荒げる、だって嫌なんだもん

知ってはいた

奈津美から聞いてはいたけど

「いい奴だつたんだろ？」

私は黙つてうなずいた

「まあ、告られただけでいい人かどうかはわかんないけど…あの後姿、言葉に出来ないぜ…なんて断つたんだよ」

「考えられませんって…他の子探してくださいって」
ため息をつき肩を落とす

「酷いフラれたかだわ、それ何者でもない好きな子にそれ言われるのって…軽はずみすぎるなあ。満春さん、少しは相手の気持ち考えて」

きつと冗談で言ってるって分かる

「満春らしくないなあ」

少し調子に乗ってるだけだつて分かる
だけど私の中で何かが切れた

「!!!!!!」

心の一番奥にワザとしまい込んでいた
何よりも怖かった自制する最後の太い線
知らないうちに剥き出しのなつて
早く外に出たいつて叫んでた
それがこんなことがキツカケで表に出るなんて
私はちつとも望んでなかった

「何…それ」

「はははっ…っえ？」

「何それ、マコは冗談で言ってるのかもしれないけど…どれだけ私は不安になつてるのか知ってる？」
一気に頭がさえる

違う私は何かをしゃべってる

これは紛れもなく自分
そう納得するしかない

だって他の誰でもない私が自分の発する言葉に納得している

「ねえ、答えてよ」

思った以上に声が低い

「私はね、確かに一本につながった。それまでバラバラだった」

「み、満春？」

マコのしどろもどろな問いかけに私は無視した

「夢の中が現実だってそう思い込んでいたけどそうじゃなかった。いきなり迷路に迷い込んだ気分よ。それが漫画とかで見る展開だったらよかった、だけど私は現実に戻った私は途端一番大事なものを失ったわ」

「……………」

「だけど、別の部分で抑え切れないものが膨れ上がって行って綺麗に飾ってた私が小さくて人が羨ましく思えるって！！別れなきや良かった…記憶なんて戻らないほうが楽だった。何も感じな自分が懐かしいって。マコの気持ちも無視して出てくるもの醜い自分ばかり！！こ、こんな自分の事ばかりしか考えない自分もだいつ嫌い」

笑って文句を言っていたマコ

そんなマコが初めて嫌だって思った

「昔、確かに明るく元気でみんなの人気者だったかもしれない。だけどこんな私と比べないで…『らしくない』って言わないでよ」
ここにきて初めて悔し涙を出した気がする

流れてくる感情に私が制御できずにいる

私の感情は真つ当な人間何だって実感できる

悔しさ、悲しさ口にする以上に重くのしかかる
蓋をしていた自分

それは何よりも醜くて、汚くて

6年間燻ぶっていた気持ち

同時にこれから出てくる言葉も全て本心なんだったって分かる

「落ち着いたか？」

こんなに取り乱した私の傍にマコはいてくれた
とつくに午後のチャイムは鳴っていた

酷いことを言った

それだけは自覚できる

だけど、今の自分は落ち着いていて

何を言われても素直に答えられる

「はあ…冗談で言ったつもりだったんだけど、な。調子に乗りすぎたわりい〜」

ばつが悪そうに言うマコ

私は静かに首を振った

「だけど、結果よかったかもな…」

「え？」

よかった？

頬が引つ張られる

「いたたた！」

「どうだ？気分は…清しいだろ？」

「一気にしゃべっちゃったからね」

「我慢すんなっつーの」

またつねるのかと思いがード

「お前記憶が戻った時だって何も喋らないままなんだもんなあ…
勝手に黙って苦しんでしんどいだろ…お前の癖だ!!」

「彼方君に会わないって言った時その時はこれで良かったって本
気で思った…彼方君のため、見守るファンのため…。記憶が戻って
一気に押し寄せた選択の嵐、感情の中で何を大事にすればいいのか
決められなかった」

「……………」

「何が大事か。応援してるファンをないがしろに出来ないってい
うのも嘘じゃない。それって偽善かな？」

問いかけた私の傍でマコが笑う
ちよつとムツときた

「いや…正直、満春らしい…」

「釈然としない言い方」

「あれだな…お前、今どうにも動けない私の背中を誰か押してく
ださいって心境か…」

どこかトゲがございますね

そのお言葉…

思わずお嬢口調になる

「だけどね…それ以上に私」

彼方君が好き

奏汰君が、好き

「きつと5年後、10年後、20年後お婆ちゃんになっても芸能
人じゃなくなっても変わらず彼方君に会いたって思ってると思う
…それって偽善かな？」

隠されていた奥深くの一本の線

真っ白になって私は一層強くなった

想う気持ちを無理に押し殺そうとするから限界がきちゃったんだ
素直に受け止めればいい

そんな気がする

溜まっていた感情をさらけ出た後

見えてくるのはいつも本当の自分ばかり

「今までの自分なかったことにしようとしてた。何か一つでも許してしまえばもろく崩れる…彼方君と一緒に過ごした時間、楽しかった時、必死に忘れようとして落ちてきたもの一つ一つの收拾に必死になってた…でも違う。それさえも受け止めればいいんだ」
黙って聞いている

「マコ、寝た？」

途端、不意打ち頭にこぶしが振ってきた

「どうやって寝ろっていうんだよ！！ここで」

意外に痛くなかった

「ははっ！そりゃそうだ！！…ねえ、マコ？」

自然とマコは私の顔を見つめる

「私、もつと貪欲になったほうがいいのかな」

マコの表情が一瞬止まった

だけどそれは本当に一瞬

いつものマコに戻る

「それは何とも難しい問題だね」

マコは腰をあげる

そして随分同じ場所に座ってたからか腰をポンポンと叩く

太陽は赤く染まりマコの大きな影をつくっていた

その中で大きく伸びをする

「んーーーーっ！！」

気持ちいいのか声が漏れる

「んはあ!」

ババくさいってマコ

「だけどさ…」

「え?」

「何度も言ってるけど…力にはなるから」

マコ…

そっついながら体をもっと伸ばす

ごまかすのが相変わらず下手

そんなマコに私は後ろから抱きついた

「ぐへえ〜!」

タイミング悪かったのか変な声を出す

「痛つてえ〜なあ!??」

気にしない

マコが痛がつてることなんて

私がそうしたいんだから

63・穏やかな日常

「カンパ〜〜〜イツ!!!」

カーンッ! カンカン!!

人と人の間で挨拶がかわされる

それはお疲れっていう挨拶

そして、これからも頑張ろうっていう意気込み

仲間と交わされる無言の合図

彼方の目の前でも交わされる

カーン!!

「お疲れ!!!」

彼方の持つているビンにも合図が交わされる
勢いよく重ね合わせた

「カンパ〜イ!!!お疲れ様：彼方君」

「明日から違うドームだけだね」

つい皮肉な言葉を口にする

そっぴいなながらも元気にグラスを合わせる

とりあえずは今いるドームは終わり

一時の余裕からかスタッフの皆は大騒ぎ

大人気なくおどけて笑ってみせる

そのなかで彼方はいつも以上に笑っていた

カーン!!

これで何度目の乾杯なんだろ

それくらい何度の何度もグラスの音がする

彼方の周りには運が悪いのか良いのか酒癖が悪い人が多く

後始末が大変

それはお互いに気を許しあっているからなのか
ただの気にしない奴の集まりなのか
昔からついていけないところがある
そこまで飲まない彼方にはついていけない

「挨拶も何もなしね」

次もがんばりましょうとか

乾杯の前の挨拶

「いつも通りじゃん」

当たり前のことにもいままさら何も思わない
なので苦笑いだけを浮かべる

「速瀬さんは飲まないの？お酒」

「飲んでるわよ」

カランカランと彼方の前にグラスをちらつかせる

「の、わりには全然酔ってないんだね」

言葉を聞きながら缶チューハイ喉に通す

「私、悪いけど…酔ったことなんて一度のないわよ。ましてこんな仕事場で飲む時なんて尚更だわ。気分が安らげないもの」
大騒ぎしている人達を目の前に微笑む

「静かに飲む派なの…」

言われればそんな気がする

ドンチャン騒ぎする光景が思い浮かばない

逆にドンチャン騒ぎする速瀬さん

彼方は想像して笑えてしまった

「何…？」

いきなり彼方が笑ったからなのか不思議そうに首をかしげる

「あ、ごめん別に気にしないで」

「……………」

「それにしても酔わないって言ってたけどこの前のライブのとき悪酔いしてたよね？」

フツとわいた疑問

満春をライブに招待した次の日の打ち上げやけに速瀬さんが絡んできたのを覚えてる

「いつの日？ライブ、ああ。」

心当たりがあつたのか言葉を詰まらせる

いつになく黙り込む速瀬に彼方は顔がにやける

「あの時も酔ってなかったわ」

知ってたが肯定され表情が固まる

聞こえなくらいの小さな溜息をつく

「彼方、少し外出ない？」

突然のお申し出に彼方は一瞬止まった

返事はいつになく素直にイエスだった

いつものストレートは軽くゴムで縛つてある

外に出ていつも気になるその綺麗な髪

今は風があつてもなびかない

ふつとそんな違和感を感じながら速瀬の後をついていく

会場の外は少し肌寒かった

もちろんライブの歓声も消え

観客もいない

落ち着くには静か過ぎる夜

「主役がいない打ち上げなんて聞いたことないよ」

自分で言う彼方

おかしかったのか速瀬は背を向けたまま微笑む

「気にしてないわよ。きつと、あのまま泥のように眠ってるわ」

話す口調が笑っていた

いつもあまり変わらない表情に変化が起きる

こういった意味ではお酒の効果は現れているのかもしれない

会場を出たところにちよつとした休憩する場が設けられていた
もちろん外からは見えない

関係者だけの休憩する場

そこを速瀬は選んだ

「ライブがあつたなんて嘘の様だね」

「ええ……」

「つてライブやってたの俺なんだけどさ」

おちやらけて笑う

「だけど、やっぱり寂しい。ライブの後って……」

「……………」

「なんかライブが楽しかった分ばかりと穴が開いた感じがする。
皆まとまって一体になって一緒に同じ空間楽しんで暖かかったのが
イキナリ一人になって一気に孤独になったそんな気分」

「そうね」

静けさがもつと孤独にさせる

寒さが暖かさを強調する

「ファンの皆もそんな気分なのかな？」

「……………」

「寂しくて寂しくてまた会いたいつて思ってくれてるのかな……だ
つたら俺、なんか嬉しい……っていうかこんだけのスタッフ使って頑
張ってる意味があるっていうか」

一瞬速瀬の脳裏に甦る

満春と最後に話をした遊園地での会話

言っていて恥ずかしいのか頬に手を当てる

彼方の姿は写ってなかった

「何も寂しいのは会いたいのにはファンの子だけじゃない…それが上手く伝わらない。俺は、一人しかないから」

硬くなっていた速瀬の表情が柔らかくなる

「これから何人の人に分かつてもらえるんだろ…」

風に触れている額は妙に悲しそうだった

「…速瀬さんと一緒にあの窓越しから俺を待つてるファンを見て溜まらなく愛しくなった大切にしなきゃって思ったから」

瞳を向けた彼方に不意に明後日のほうに向く速瀬

その不自然さに彼方は首をかしげた

「速瀬さん？」

「何でもないわ」

いつもと変わらず甲高く冷静な口調
すっかり暗くなった会場

だから気付けない

その表情には気付けない

「ごめん、だけど…速瀬さん」

声のトーンが微妙に下がる

気付かれないように頬を拭い彼方を見る

「俺、やっぱり…忘れられないんだ。何ヶ月経ってもきつと同じ
だと思っ」

「……………」

「今、無理にしようとかそんなんじゃないんだけど…無茶は絶対にしない。ファンのことと思えば思うほど、このことを教えてくれたのは速瀬さんと…何より満春なんだから」

前みたいな冷静になれない彼方じゃない
前みたいに冷静になれない自分じゃない
お互いそれを認識し感じ取っている

「だから、今じゃないけど俺は必ず会いに行こうと思ってる…そ

う言つと速瀬さん怒る？」

返答の言葉が聞こえない

彼方は分かっていた

「俺、知ってる通り諦め悪いし…何十年越しの恋だから。きつとこれからお爺ちゃんになってマイクを持ってなくなっても満春に会いたいって思うとおもっ…」

速瀬が言いたいこと

それは『速瀬マナージャー』として首を縦に振れない

『速瀬』としては快く首を振れるということ

速瀬の葛藤どうしようもないことだっけ分かってる

賛成できないのは確実だった

彼方は再度確認せず黙り込むしかなかった

お酒はすっかり冷めこの夜らしい冷たい空気が

頭を冴えさせてくれる

だけど、これ以上言葉はなく

お互いの表情は読み取れなかった

最近毎日が楽しい

気遣いや空元気でもなく

そう思えるようになったのは
もう一人の自分を受け入れてから
今から築き上げていく自分
無理矢理忘れようとしていた自分
辛いだけだから早くこんな気持ち捨てちゃおうって
自分の隠れた一面を素直に認めてから
生活がまた一段と違うものになった
必死に隠そうと忘れようとしていたことが
苦しかった日々がバカだったって思えるほどに

そう考えると

フツとよみがえる

また事務所尋ねたりとかするんじゃない
会いに行くわけじゃない
ただ

素直に

彼方君に会いたって
ふあつと広がって全体に浸透していく
そう思うと自然に私の頬は喜んだ
こんな気持ちあと何年経いても大丈夫

何をするわけじゃない

ただ会いたいんだ

今まで会いたいから会いにいくだった

だから四苦八苦してた

上手くいかない自分にイラだって当たって

泣してた…

だけど今は純粹に

彼方君のことを考える

そんな日々

窓をあけて一休みをする
ライブの間にレコーディング
スタッフの皆は彼方の分も含め食品調達
なんともこれからも続いていくんだけど
あわただしい毎日

だけど不満はなかった
毎日が楽しい…

窓を開けると彼方に気付いて
手を振る追っかけファン
彼方は軽く手を振った

こんなとこ速瀬に見られたら大目玉だろう

『気安くファンと接するんじゃない!』

彼方は思わず苦笑い

後は軽く微笑むだけにして窓を静かに閉めた

近くの椅子に座りなおすとフツとよみがえる

満春の顔が幼いときの笑顔しか本当の笑顔は知らない
だけど、今は満足していた

あんな酷い別れ方したのにあの頃の笑顔は色あせてない
彼方は軽く微笑んだ

あれからどれ位経っただろう

64・進んでいく日々

教室中あわただしい

それはそのはず明日から三連休

なんだか忘れたけどどこかの代わりの休日

いわゆる振り替え休日

と、土日がはさんで私たち学校だけの三連休

子供じゃないけど子供みたいにはしゃがずにはいられない

なんだか特別な気分になっってしまう

それ以上に幼稚園の遠足並にはしゃいでる人が一人

いやいや、これから一人増える模様

「明日から三連休だな!!」

ハイテンションなマコ

こっちもうれしくなる反面子供でも引いてしまう

「どうすんだ!明日からの連休」

「んー!別に用事はないけど」

そんなに寄んなくても聞こえてるよ

「んー!っとなね!!奈津美はライブ三連続!!!」

突如現れる奈津美

一瞬何なのか分からなかった物体に目を大きくする

私の言葉よりマコの拳が先に来た

パソコン!!

それは何も入ってないであろう脳天に直撃した

「っつたあ!!!!!!」

それは私の両サイドから声が聞こえた

奈津美なら分かるけど…マコ
奈津美、あんた何も入ってなさそうなのに
どうしてそんなに硬いの？
思わず脳内実況を試してみたが
早くも復活することは分かっていた両サイド
「何で私が痛がつてるんだよ！！」
もう逆切れする始末

「アハハハハハハッ！！！」

私は無意識に大声を上げて笑ってしまった
お腹を抱えてしまうほどに

沈黙があると思ったら

笑い転げていた私をジーツとみつめる二人
それに気付いたらおかしいことが何だったのか忘れてしまった

「えつと、何？」

二人が物珍しげに私を見るから
見られてるこっちは

ちよつと気恥ずかしくなってしまった

「あ、いや別に」

少しはにかんで顔を背けるマコ
ますます首を傾げるしかない私に奈津美は言った

「あんた、そんな風に笑うことあるんだ…」

「え？」

突然なことに戸惑う

不意に奈津美は微笑んだ

「そつちのほうが良いよ。前みたいにツーンとした感じじゃなくてさー!」

そついうとまた今度ははにかむように笑顔を向けた

「それなら田中君を私は忘れられる…」

なんだか格好つけながら私の肩を優しく叩いてるけど

……………。

田中君って誰?…だっけ。

「田中って誰だよ」

心のうちをマコに読まれたみたいに質問が入る

「私が告白したダーリン。私が小鳥のさえずりを聞きながら体育館裏で告白した愛しのあの方」

なんかそんなエピソードもあったようななかったような
思い出せるような出せないような

「ああ!結局相手はこなかつたって奴?あ、それとも『俺は団子より花がいい!』って逃げていった奴だっけ?」

あ、思い出した

振り向いた奈津美の顔には青筋が浮き出していた

「あの時は血迷ってたけど…今回は彼方という誉れ高き男に惚れたわ!!そつよそれを言いたくて私はここに降り立ったのよ」

ここが戦場みたいなニュアンスでことを進める

「聞いて!!この三連休私は彼方三昧よ!?!彼方オンパレードよ!?!」

分かったもなにも

マコは言葉を失った

今の話しでどんなりアクションを取れと?

「分からないなら説明してあげる…彼方のライブに行くのよ」

説明は簡単だった何より簡潔始めからそついえば良いのに

「はいよお…いつてらっしゅい」

適当にあしらうマコ

「あ、いつてきます…じゃない!?!?!?!」

そっかあ…雑誌とかで見てはいたけど

彼方君まだライブの最中なんだ

ふっと彼方君の顔が思い浮かぶ

「そう、今回ツアーはなんと全国50件以上はまわるといわれるのよ半年間で！私はその中の半分は行くわ！愛しの彼方に会いに…これは愛の鉄則、ライブなくしては二人は会えないの。いいの分かってる、彼方は忙しい人だもの…少し会えないことぐらい奈津美我慢する。いい子にして貴方の帰りを待つわ！！理解ある彼女だなんて…もういやだあ、本当の事いわないでえ〜っ」

始まってしまった奈津美劇場

閉幕まではもう少し、いや大分かかりそう

「へえ、あいつそんなにまわるんだ」

「何それ、知り合いみたいに言わないでよ」

私は少しどきりとした

「な、何言ってるんだよ！！お前には勝てないよ」

必死にマコは誤魔化す

考えてみればそうなんだ…。

奈津美は私という存在知らないんだよね

幼馴染って存在…知らないんだ

分かってる下手なこといわないほうが良いって

でも、チクリと痛んだ

「勝てないなんて当たり前よ〜…そういえば最終公演のチケット取りたいんだけどまだ決まってるじゃないんだ。まだ先のことだから決まってるって当たり前なんだけど」

奈津美は真剣に考え込む

ふっとした疑問

「何公演行くの？」

「29公演…だから次は記念すべき30だから他、チケット取れなかったから最終公演で決めたい！！」

「その間、学校どうすんだ？」

その前にお金の出所！
しばしの沈黙

「あ、愛に障害は付き物よ!!」

ガッツポーズする奈津美

あ、きつと奈津美追試する覚悟だ…

馬鹿馬鹿しいとばかりに奈津美を見つめるマコ

半年くらいライブするんだ…

あっちこっち各地回ってのライブ

体、大丈夫なのかな…

それなりの体制で挑んでるんだらうけど

雑誌で見るとまわりながらレコーディングやらテレビ出演やら行っ

ていくらしい

言葉で語る以上に過酷なんじゃないかって

私はやっぱり芸能界って世界をよく知らない

だからあれこれと考えてしまう

傍にいたいなんて性懲りもなく思ってしまう

賑やかな会話とは裏腹に窓を見つめる私は

今日何度彼方君を思い出したんだろう…

慌しい足音は鳴り止まない

たまに怒鳴りあう声も聞こえるほど
緊迫感は増していた

いつもお酒をがぶ飲みして笑い叫んでいるとは思えない
そう思うのはかなり失礼な話だか
見ないふりをするには差が激しすぎる
何度見てもなれない光景

その中に彼方ももちろん入っているのだが

楽屋には人が入れないほどの物であふれ返っている

片付ける余裕がない

全国ツアー中の合間に新曲づくり、生出演、取材…

その他衣装合わせ

計画は立てたそして通りにいつてる

彼方はほんのつかの間の一時を手に入れた
少し落ち着くために体の力を抜く

「速瀬さん、休憩平気？」

すぐ傍にいる速瀬に声をかける

速瀬も忙しい中自慢の長い髪が鬱陶しいのかアップにしていた

「ええ、そんなに余裕はないけど…歩きながら休んで」

「それ休憩じゃないよ。しんどいねえ。さすがに…この年になると」

速瀬から疲れた表情が消える

そして、言葉もなく水を彼方に渡す

「なに？これ」

「さっきの合間に買っておいたのよ。車に乗りさえすれば到着まで休憩だから我慢してちょうだい」
そっぴいなながら彼方は手に取る

「あんがと！敏腕マネージャー！！」

そういつて笑うと一気に喉に流し込む

「そんなこと言ってもスケジュール通り行ってもらっわよ」

「分かってるって！！」

苦笑いになりながら言葉を返す

「しんどいけど、楽しくないわけじゃないからライブは精一杯楽しむよ」

子供みたいに笑う彼方

正面玄関ではなく裏からだというのに待っているファンの子は少ない

こっちの出かたはお見通し

そんなファンの心の中が読み取れるようだった

手捌きというか上手く人並みを掻き分けていく

やり手敏腕マネージャーはするりと彼方を車まで誘導した

思わす彼方は拍手喝采だった

「もう、彼方！冗談はやめなさい！こんな時に」

「別に俺は苦労してないもん」

と、今度はVサイン

速瀬は呆れて答えられなかった

「車出してちょうだい」

困難を要したが何とか人並みをすり抜けられた

速瀬は小さく溜息を吐く

きつとこれは安堵の息だろう

「これから何処だっけ？」

「今度はMスタジオで…」

淡々と言葉を重ねる速瀬

「生番組じゃなかったっけ？」

「それは来週の火曜日…」

把握していらっしゃる

抜け目がない…質問にも即答

いつもの速瀬だ

スモークガラス越しから見える景色

もうすぐ高速に乗ることを予測

彼方は少し眠ろうと呼吸を落ち着かせる

この車から降りたらまた人騒動なんだから

目を閉じようとしたその時

「そう、…彼方、一つ報告することがあったわ」

「……」

返事を返さなかったが速瀬は続ける

彼方は聞いていることは百も承知だからだ

「最終公演が決まったわ…公演場所は東京ドーム。そう気付いての通り東京ドームから今回出発して東京ドームに帰ってくる…それまで一緒に各地を回ってくれたファン感謝を込めての同じ場所よ」

「……」

「追っかけのファンには最初の場所で感動フィナーレ」

速瀬はそっぴいなながらゆつくりと次のページを開く

「そして、最終公演日時は…」

「9月15日」

彼方は眠るはずだった瞳を一気に開いた

「な、なんだって」

何故か動揺を隠せない彼方

さっきまでの疲れが吹っ飛んでしまったかの表情

「も一度言つて…」

イキナリの豹変に速瀬は間髪も入れることなく繰り返した

「最終は9月15日」

彼方は動揺した

言葉を発したくても出来ない思い

ごちゃごちゃになった気持ちで脳を支配した

65・今がその時

今日何度目のチャイムだろう

聞きなれた音は感覚を麻痺させる

何度時刻を伝え終了を伝えてくれているか忘れてしまった
そして何回目かのチャイムは一日の終わりを教えてくれた

「ごめんね、結局日直掃除当番つき合わしちやって…」

「いいつて何度も言ってんじゃん!!」

男らしく肩にかばんを持つマコ

「この方が早く遊べる手っ取り早い解決方なんだって!!」

今日一日の授業の疲れをほぐすように背伸びをする

私もなんとなく真似するかのよう

マコみたいに豪快ではないけど腰を伸ばした

その時伸ばした手に持っているあるものに気付く

「あ…」

「…あ?」

その手には…

「「ああ~~~~~っ!!!!!!」」

声が思わずそろってしまった

伸びをした手の先には日誌が掴まれていた

思わず伸びを中断して日誌を大事なもののように両手でしっかりと
掴む

「これ、帰りに忘れないようにって思ってたのに…」

「ああ」

マコの棒読み溜息は普通に溜息つかれる以上にグサツツときた

さっきの倍になって落胆が体を重くする

「これ、先生に渡してくるね」

「……」

「本当ごめんマコ！すぐ帰ってくるから待っててっ
両手で拝むように謝るとダツシユで校舎内に戻った

相当焦ってしまってるのか何度か転びそうになる

マコは溜息をつきながら近くの柵に体を傾かせる

本当はムカついていない

そんな満春が見れてむしろ嬉しい気もする

ドジで慌てる満春 笑ってる満春 怒ってる満春

そんな満春が中学からの理想だったから…

不意に辺りが暗くなった気がする

いい感じに夕日は校舎を照らしているのに

と思いながら辺りを見渡すと

意外な人物がそこにはいた

「よう…」

一瞬誰だと思つて変装はあえて触れずに彼方だった

マコはとりあえず周りに気を配る

慌てた姿はやがて安堵に変わった

その反応を一部始終見終わってから変装を解く

今日は満春が日直もう残っている生徒はほとんどいなかった

前は大騒ぎになったが気にする必要はもうない

あの時は素顔も隠さず、下校時間真つ只中だったから

そう思うとかなり気を遣つてきてくれたらしい

「よくまだ残ってるって分かったな…」

「いや、勘」

突っ込みたいことは山ほど発言だか聴かなかったことにする
彼方は意外にも笑った

「冗談だ。この時間しか空いてないんだ」

「そりやそうだろ…大変なんだろ？今、仕事が」

間が空いたが彼方は言葉を返した

「死にそうにしんどいけど、楽しいよ…前と違ってね」

そついい終わった彼方はどこか潔い

マコはなんとなくその表情で読み取った

「追い返さないんだな」

「前とは違うからな。私もあんたも」

別にマコは彼方のことを嫌っているわけじゃない

ただ立場上どうしてもこんならしくない冷静な対応になってしまっ

これはもう満春の保護者根性としか言いようがない

「用は何？」

「ああ、そうだった…マコ、だったかな？」

イキナリの呼び捨てに言葉が詰まる

「あ、わりい。満春からマコっていう名前しか聞いてないから」

「別に平気だよそれで…で、用は？」

簡潔に言葉をつなげていく

彼方もそれに何か答えようとは思わなかった

「これ、満春に渡して欲しいんだ…それだけ」

そう言いながら掌に封筒を差し出す

軽くその封筒を握り感覚で中身に予想をする

「手紙？」

「いや、違う。チケットだ…」

素直に内容を告白する彼方

マコの表情は変わらなかった

「つき返さないんだな…事実して欲しくないけど」

「しないよ。満春は満春なりに考えがある。力になるって約束したから」

少し彼方の前で微笑んだかのように頬を上げる

そう思ったからなのか彼方も少し笑顔になる

「じゃあ、悪いけど…お願いできるか？」

「ああ、いいよ」

マコが受け答えすると彼方は踵を返した

その行動があっさりとしていて動揺する

「あつ…！」

「ん？何…？」

呼び止めた意味が分かってないかのような反応

「あ、あのさ」

「……え」

「いや、あの…なんだ」

「へ？」

突然の慌てぶりに彼方は目は点になる

「会ってかないのか？満春に、今…日直だからまだ教室にいるんだ。なんなら待ってれば？」

しどろもどろになりながら伝える

立ち去ろうとしていた彼方は会話が聞こえる距離まで戻る

「マコは許してくれるのか？」

「え…？」

「あ、いや…遠慮しとく。今は時じゃない」

「……」

「つい勢いできたけど…まだ、俺たちは会わないほうがいいんだ。

まだ誰も許してくれない。人も時も」

優しく大人になったと言わんばかりに話す

それがマコにとっては苛立たしかった

「時や人が許す許さないも関係ないだろ…大切にしなきゃいけないのは今ここに來た理由、気持ちだろ。本当は会いに來たんじゃないのか？」

自分がどんな自分勝手なことをいつてるか分かってる

一般人で関係のない人間だっていうなら本当の身勝手だ
これから二人の力にはほんの少しならなってあげられる

けど、被害危害をこうむるのは自分じゃない彼方や満春だ

「チケツト渡しに來ただけだから…その日俺にとっては特別な日だから」

冷静に受け答える態度に業を煮やす

「正直言つよ。あいつはあんたに会いたがつてる…！…だから私も一目でいいから会って欲しいって思ってる。あんたもそうなんだろう？…」

「なら…会いにいけばいいじゃねーか…！」

マコは叫んだ心の限り

ずっつと言いたかった言葉

けど、その重み…その言葉の重大さに心が潰されそうになる

自分は観客側…見る側

その事実が消えない以上自分は何言っても人事

マコは悔しくて悲しくて仕方ない

イラだって居たたまれなくて涙が零れる

「お前には分かんない話だけど…色々ゴチャゴチャやってきて本当は駆け引きとか苦手なんだ会う時期とか機会とかタイミングとか関係ない今すぐ飛び込んで行っちまえば一番楽で二人が幸せになる…その後の波風なんて二人が本気なら手を取り合って頑張れるはず

じゃないのかよ」

「マコ……」

口を挟めるはずがない

目の前に立っている彼女はあまりにも綺麗で

表立って乱暴さは目立つが心は誰よりも澄んでいる

「理想論だつて分かつてる！世の中そんな甘くないって分かつてる！！だがな、私にはどうしてもちっぽけなものにみえんだよ。二人が幸せじゃないのに何を成功させようって言うんだ？6年間前とか、幼い頃の約束とか…有名人とかそうじゃないとか…どうでもいいじゃないか！！それを消せるのも、あいつの空白の時を埋めるのもお前しかいないんだ…お互い好きなんだろ？！」

マコの言葉は止まるを諦めていた

出来るなら変わってあげたい

でもそれは出来ない

そついでるのは部外者の余裕

傍観者だからいえる言葉

…それが何より悔しい

一度流れたら自然に止まるのを待ってるしかない

「そうだろ！！」

彼方は答えなかった

「勝手だつて分かつてる…部外者のたわ言かもしれない。だけど、もういいじゃないか？今行くしかなんじゃないか？」

気がつけば彼方の肩を強く掴んでいた

マコの手が微かに震えていたこと彼方は感じ取っていた

「マコのその力があって前向きな考えが満春を支えてくれていたのかもな」

「俺も、前向き思考だけど、あそこにいる以上、色々なものを覚えさせられる。正面向いてるだけじゃ能無しなのと変わらない…そこに人や成果がついてこなきゃそれはただの悪あがきマイナスしか見えないこと」

静かに震えるマコの手を取って放す

「だけど、マコはそれでいいのかもしれない…。マコにはパワーがある。人を説得させるだけの気合がある。人を素直にさせるだけの原動力が」

彼方は涙を拭くように促すと

「『俺』という人が成果としてついていくわけだし…」

マコは思わず瞳を見開いた

そこにはまだ大粒に涙が残っている

そしてまたそれは涙となって額に落ちる

「こんなに泣いたのは久々だ。」

「男冥利に尽きるね!!」

軽くガッツポーズ

「なんかそれシチュエーションが違わないか？」

泣きつ面に笑顔がよみがえる

彼方も思わずふき出す

「会って、くんだろ？」

マコは確かな言葉が欲しいのかもしれない

再度同じ問いかけを彼方に下す

考えている通りの沈黙の後に

「ああ…」

「そ、そっか」

マコはその言葉を笑顔で受け止める

もう自分にはそれしか出来ないといわんばかりに

肩をぽんと叩くマコ

その場しのぎだつて分かつてる

何も起きないなんて誰にも決められない
だけど、二人とも知っていた

このままじゃ何も変わらないうて

「私的にはもつと嬉しそうな顔してくれると助かるんだけど…？
何せ満春の親友兼保護者からの許しが下ったんだから」

何故か自信満々

「今、きつと昇降口辺りにいると思う…二人で話してきなよ」
彼方はその様子に頷いた

「ここで待つてるからさ…」

その言葉を聞いたのか聞いてないのか
マコの傍から離れていった

66・ただ時が止まる

彼方にとって久しぶりになる学校

中学までは通っていたが仕事に専念するため

学校は中学まででやめた

だから、かれこれ何年ぶりの下駄箱なのだろう

ワザとじゃない

彼方の足音が聞こえなくなる

靴を脱ぎ、靴下で廊下を歩いているからかもしれない

気のせいかな歩調が遅くなる

大胆に走ってもいい

それほど早く辿り尽きたい

そういつた願望がないわけではない

だが、思った以上に上手く足は動かず

心は意外に静まり返ったまま

これから誰に会いに行こうとしてるのか脳裏では把握している

落ち着きをはらっている自分は果たして誰なのか…

冷静に考えてしまっている

不思議なものだ

会いたいと思えば思うほど歩く速度は慎重になる

微かにしか聞こえない自分の足音も頭で分析される

これは彼方の中で時間がゆっくりと流れているのだろう

もちろん彼方は満春のいる場所なんて見当がつかない

でも何処かで感じ取っているのか
これだけを示すのなら運命と言うものを信じてもいい

静かに確実に彼方は満春のいるところへと向かっていた

誰もいなくなつた昇降口

静けさに奇妙なところなどなかった

これからの期待や不安が勝る

あの電話以来からお互い音信不通だった

忘れたわけじゃない

2度目の再会そんなことに胸は膨らまない

気持ちはその離れていた時の流れを追いかけている

一瞬あれからどれほどの月日がたって

そして自分自身何をしていたのか理解できなくなる

学校独特の静けさに久々の学校の階段

夕方の学校

背景と同じ色に染まる

今日は偶然にも快晴だった

目に見える教室も廊下も

オレンジに染まっている

室内からでも眩しい

学校だから見える風景

窓がたくさんあってそれを見逃さないかのように

夕日が窓へと光を注ぎ込む

辺り全体オレンジ色に染まっている

自分がどう歩いているのか分からない

だけど確実に階段を上がっているのは分かる

一步一步…オレンジに染まる階段を確かめながら

昇りつく先を見つめ目を細める

あまりの眩しさに彼方は動きを止める

カッソ カッソ カッソ

階段を昇った先の窓から見える小枝の影に一瞬オレンジが失われる
視界が戻る

だが風に吹かれすぐに夕日が差し込んだ

耐え切れず瞼を下ろした

瞳の奥にも薄いオレンジ色が広がる

カッソ カッソ カッソ

静かに瞳を開き

逃れるように掌をかざす

時間差で耳に入る音

聞こえてくる足音は靴下のままでいる自分の音じゃなかった

誰なんてもう彼方は確信している

カッソ カッソ カッソ カッソ

止まる足音

少し視界が開いた

周りが見えるようになったことに心なしか安心する

それを手助けするように人影は気付かぬ間に近くに来ていた

「彼方、くん…?」

自分と呼んだことなんて気付かない

いきなりの視界の変化に瞳が麻痺している

視覚に五感を研ぎ澄ませ聴覚は鈍ってしまった

久しぶりに見えた景色は窓でも枝でもない影が下りていた

そこに誰がいるって分かる

「彼方くんなの?」

階段を一步も下りていない満春に彼方は反応した

その懐かしい呼び声に心臓が鳴る

「……………!」

満春の気配と同時に視界は広がった

そこには久しぶりに会う

彼女は彼方の6段位上で立ち止まっている

突然の訪問者に驚きを見せない満春

その代わりに

なんともたくさんのハテナマークを振りかざした

電話が最後で別れた彼女がいた

どちらかが言葉を発するまで時間がかかった

動く様子もなく話す感じでもない

少しずつオレンジ色は紫色に変わろうとしている

遠慮の知らないはずの夕日は姿を消し始めていた

どっちが先に話したかなんて忘れた
どれくらい立ち止まっていたんだろう
話してる気がした動いてる気がした
笑って再会して喜び合ってる気がした
でもそれは身体中の血が慌てだして
私というものは勘違いしたらしい

今日何度目かの

誰に知らせるでもないチャイムで
お互いに目を覚ましたかのように我に返った
それまでお互い意識は何処にあっただろう
ただいことに呆然として立ち竦んでいた
またその時間を巻き戻すかのように
同時に慌てて話しかけようとして言葉をつぐんだ
とりあえずおかしくなつた
自分たちが余りに滑稽すぎて笑えた
気がついたら彼方君も笑ってた
こんなにも簡単に再会するなんて思わなかった
酷い別れ方をしたわけでもない
お互い了承済みだから怒ることも泣くこともない
不思議に自然にこの状況を受け入れられた
一生会わないと心にしまいこんでた人
『会わない』と告げた人が会いにきてくれるとは思わなかった

67・至福の時

「案外、あっさりとしてるもんだな…」

「えっ？」

気持ちがここになかった私は彼方君の言葉で呼び戻される

彼がいるほうへ顔を向けた

「いや、俺たち…もつと色々あると思った」

「私は、そうでもないけど」

中庭に来たと同時に適当なベンチに座った

「…っそう」

短く相槌を打った彼方君はなにやら嬉しそうだった

「マコに会った？」

「ああ、会ったよ」

「よく許してくれたね…」

少し沈黙の後口を開いた

「むしろマコがさ…会いに行けてさ。」

「え？」

「俺はまだ会うつつもりはなかったんだ…そしたらマコが一発」

「殴ったの?!?!?」

思わず声がつわずつた

「違う違う!!…俺に叱ってくれた『行け』ってさ。いい友達持ったよな」

私はそれを満面の笑みでうなづいた

そしてまた沈黙が走る

「会うつつもりでいてくれたの?…」

「会うつつもりだったの？」

2回繰り返し返す

どうしても聞きたかった

「いたよ…だけど、それは今は時期じゃないって思った」

「…？」

「俺はまだまだだっと思って思うから…。まあ、だけどマコの一言で覆されちゃったんだけど…」

そう言っただけで苦笑いを浮かべる

「何か中途半端なんだよ俺。仕事のことファンのこと満春のこと全部…それが整理つくまで会うつつもりはなかった」

彼方はズボンのポケットに手を入れる

私はつい目線で追っってしまう

「これ、マコに渡して帰るつもりだったんだけど…」

渡される封筒を素直に受け取る

静かに私は封筒に手を入れる

「…チケット」

手に取ったチケットを見つめる

腰をあげた彼方居たたまれないのか空を仰ぎながら言葉にする

「しつこいんだけどさ、あんなに満春に言われたのに忘れられない…満春は会いたくないのかもしれないんだけど会場に来ないかもしれないけど…でも渡したくて」

駆け抜けるように話す彼方君は少しぎこちない

変わらずチケットを見つめる私

何を先に伝えればいい

何を言えば今の気持ちを理解してくれる

それは二人の間に共通して行きかう

もどかしさだけははつきりとしていた

「難しいんだよ！これもまた。ファンのこと大事にしてあげて。分かってるんだよ！…今はないがしろにしようなんて思っただけ…。だけでも満春はそれとは違うもつと近くで声が聞こえるんだ。いつも」

「……………」

「俺は応援してくれる子達が好きだ。俺の全てを知って聞いて泣いてくれる子喜んでくれる子皆好きだ！！寂しいときもあるし、嬉しいって思う時もある！！だけど満春のことが好きなんだ…」

ありつたけの気持ちを込めて言葉にする

「それじゃ駄目なのか？お前の中で答えは出ないのか？」

彼方君に顔を向けられずにいる私

無表情だった

ただじつとチケットを見つめる

何も答えない私にタイミングと言うものを悟ったのか

弱気な口調になる

心の中では答えは決まってる

あの時に答えは決まっていた

マコに本当の私を打ち明けたあの日

だから答えは決まってる

「それ、このツアーの最終日、だから…よかったら来て」
だから答えは決まってる

瞳から涙が零れる

それは一粒、二粒…

私の気持ちを晴らしていく

心の何処かでまだつつかえが取れない

けど、それを押し出し何もなかったかのように
涙が零れだす

私は言葉に詰まりながら口を開く
顔はうつむいたまま

「9月15日なんだね」

私の震えてる声に彼方君は動揺を隠せない

「答えて…これ、その日なの？」

「9月15日だ」

途端堰を切ったかのように

涙が溢れた

息が止まるくらいに

これ以上ないくらいに静かに

声を殺しながら

この偶然に惹かれながら言葉にする

「好き」

彼方は思わず固まった

「好き、だよ」

口から自然に紡ぎ出されていく

「小さい頃から今もずっと、奏汰君のことが好き…っ」

私の言葉簡単な…だけど大事な言葉
言って、しまった

いつも言いたくても言えなかった言葉
素直な気持ち…大切に秘めていた
その言葉は言ってしまうと心地よくて

「ずっと今まで好きだった…っ！」

すーうつと心の何処が軽くなっていく
心の重みもなくなり身体が浮いている感じ
……心地いい

私の口から何度も紡がれていく

歯止めが利かない

きつと後で考えると馬鹿だ

一人泣いて何度も繰り返し返してる

『好き』って言葉

何度も何度も口にするのは重みがなくなる
それは分かる

だけど、私にこれ以上の言葉は浮かばない
スイッチは完全にオンに切り替わっていた
もうどれくらい言ったのか分からない
涙と同じ数だけあふれていく素直な感情

「……………」

不意に彼方君の胸の中にいた
それはとても自然に迷いもなく

彼方君は私の身体を受け止める

まるでそこにずっとあつたかのように

あたたかさが私の体温と混ざり合う

すこし高い奏汰君の体温は私の中の彼自身を主張する

すこし彼より低い私の体温は

寄り添う誰かが欲しかった

唯一、目の前の彼を欲しがっていた

そしてお互いの体温が混ざり合う

それは心地よくて言葉では言い表せない

涙が奏汰君の服に滲む

静かに目を瞑った

気がつけば奏汰君の背中に私の腕はまわされる

いつもより早い鼓動は奏汰君も同じ

抱きしめる腕の力も同じ

それがお互いを求め合う

何よりの至福の時となって私の心に舞い降りる

68・二人きり

なんだかこの展開多すぎ

そしてこの展開は何？

整理出来る振りして出来てない

私は最近なんでいつも懲りずに泣いてるんだろう

後何回泣けば枯れるんだろう

こんなに泣き虫だったかなあ

だけど、こんな晴れ晴れとして心地いいのははじめて

泣きつ面の自分も愛おしく思える

「…ねえ」

「ん…？」

まだ彼方君は私の近くにいた
傍にすることが何より嬉しい

「昔の私ってどんなだった？」

「何だよ、いきなり…」

それはそうだ

イキナリなのは知ってる

だけど聞き返す

「いいから答えてよ」

「そうだな…1と2どっちがいい？」

「何それ…どういう意味？」

私の昔に分岐点なんてあったの
首をかしげる

「答えないなら教えない…」

「えつと、えつとじゃあ…2で」

あまり考えずに2番を選ぶ

「2番を選んだ貴方は…昔の貴方はとてもドジで人のやることにうるさくてお節介で泣き虫で我がままで…可愛いには程遠い騒がしい女の子でした」

心理テストか診断みたいな口調で得意げに言葉にする

「何それ!!…いいとこなし」

てか、そんな人格が出来てる頃に一緒にいたか？

少しはいいこと言ってくれると思ったのに

お約束だよ…

こういうときにはいい事しか言わないのは

つてなに少女思考走ってるの…私

だけど私は思わずムカツと来た

「何で、1番はひかないの？」

「何？選択肢って言うのはどっちかしかひいちゃいけないじゃないの？」

少し怒り気味の声

「でも、最後に種明かしはあるでしょ？」

「手品じゃないんだから」

その独り言は無視される

「1を選んだ貴方は…いつも真っ直ぐで何事にも一生懸命で歌が大好きな明るく笑顔が絶えない…近所男の子に人気のある可愛い女の子でした…」

「要は1番は長所、2番が短所でした…」

種明かししたら簡単なものだった

彼方君はニヤニヤしながら顔を向ける

「何それ可愛いって言ったり可愛くないって言ったり」

「あらら…ちゃんと聞いてた??!!」

照れ隠しに言葉を荒げる私
乱暴な言葉で恥ずかしさを紛らわそうとしている
それを横目で見ながらまたニヤニヤとする

「俺、近所の男の子…」

思わず顔が赤くなった

その事実があまりに恥ずかしすぎて頬を隠す

ってどうかこれでどれほどの人が騙されているのだろう

さすが人前に出てるだけある

口説く上等文句というか…

私とは大違いで余裕をかます

顔を下に向ける

止まらなくなってるない?????!

彼方君のこの軽々しい口調

昔からこんなだっけ?

でも医務室で再会した時はこんな感じだったかも

「満春は？」

「ん…」

うつむいたまま言葉を返す

「俺の昔ってどんなだった??？」

「い、いきなり言われたってわかんないよ」

その隣で苦笑していた

「酷い…俺は、いきなりでも言ったのに」

「……………」

「まあ、いいや…変わりに」

さっきの騒がしさが嘘のように沈黙になる
少し不安になる私
淡々としゃべり倒していた奏汰君がいなくなる

「…変わりにもう一度抱きしめてもいいかな？」

ふっと彼方君を見上げた

それはいつも見慣れていた昔の奏汰君

昔、よく見せていた奏汰君の照れた顔

ふわっと覆いかぶさる感覚はさっきと変わらず心地いい
私の中でまた切なさが押し寄せる

「ありがとう…あの時のまま好きでいてくれて」

心が痛んだ

奏汰君の声が私の耳に降って来る
どうしようもなく不安定にさせる

それは涙を誘わせる

言葉もなく私は腕の中で懸命に首を横に振る

途端、腕の強さが増した

少し苦しくなっただけど我慢した

澄ますと聞こえる鼓動

私の鼓動より早かった

それは余裕がなかったことに気付かせてくれる
表情こそは平気な顔してるけど

本当は私と一緒になんだって分かった途端

腕の中で声なく笑った

負けないように腕の力を強くする

ふつと香る匂い

私だけが感じれる…

『昔のまま』なのが何より嬉しかった

69・ケジメ

その時から会わないと決めた

悲しい結末じゃない

それだけは分かるから

6年分の穴を埋めたい

それは私も彼方君も願うところなんだけど

∴せめて、このツアーが終わるまで

15日が何よりも私の背中を押してくれる

そんな気さえしてくる

その間私も色々整理をつけなくっちゃならない

ケジメをつけなきゃいけないことがたくさんある

心配そうにマコは私を見送る

この場は一人じゃなきゃいけない

この気持ちは嘘じゃないんだから

いつでもどこでも一緒じゃいけない

マコに守られてばかりじゃ

私が弱くなってしまう

∴私だけの言葉で伝えなきゃ意味がない

彼女はきつとそこまで真剣なんだから

いつも冗談しか言わない同級生の友達

教室で待っていた

でも、カバンはあるからいるのは分かる

しばらく待つと奈津美はドアを開けた

「どーしたん？あんだ、まだ帰ってなかったの？」

私だということを確認すると

教室に奈津美は早足で入ってきた

「用事？」

「あ、うん、どこ行ってたの？」

とりあえずは挨拶程度に言葉を繋げる

「職員室！！…先生に用事がございました」

「……」

「そっちこそどうしたの？こんな時間まで学校に残ってたりなんかして」

自分の席にカバンを取りに行く
軽くあたりを確認する

「私は用がすんだから帰るけど…あんた誰か待ってるの？」

用のある本人から聞かれ顔が引きつる

奈津美は不思議そうに顔を見る

「変なの。まあ、とりあえず帰るね…じゃあ明」

「あつ！待って！！」

思わず奈津美の袖を掴んでいた

自分で信じられないほどの大声に奈津美も驚いた顔

不意に口元を抑えた

「あ、ごめん。用事、奈津美にあるんだ。これから時間ある？」

途切れ途切れに言葉を繋げる

「何！？私に用事があったの。そんな改まった顔して。あつ！告

白なら嫌よ…生涯をともに誓った人が…というか、女同士って

ところを突っ込めよっ」

一人ノリつつこみが成立していた

躊躇っていた私は奈津美のボケに笑うことが出来なかった

ますます顔をうかがう奈津美

「何？真剣な話なの？」

「う、うん」

下を向いたまま頷く

奈津美は小さい声で溜息をついた

「しょうがない。深刻モードに入りますか…4年に一回しかならないんだからね。深刻モード突入は！！」

な、なんだそれは

あんたの人生の半分は笑いで出来てるのか
そんなツツコミをマコはするんだらうけど
耳に入ってきてない

「何？それで話って」

適当なところにカバンを置く

お茶らげじゃない

また適当な椅子に奈津美は腰を下ろした

「何の話？」

覚悟を決めて

静かに口を開く

「始めに言っておくんだけどこれは全部事実なんだ…それをふまえて聞いて？」

「事実？何それ」

奈津美が何言ってるのかわからない

そんな表情をするたび私は心が痛んだ

これからの話は決していい話じゃない

不思議そうにしているその瞳をどの言葉で傷つけてしまうのか

慎重に言葉を選んでしゃべろうとする度

ますます余裕がなくなっていく

「何？そんなに真面目な話なの？」

奈津美にあるまじき表情が硬くなっていく

「奈津美ってさ…どうしてそんなに彼方君が好きなの？」

「えっ、何を突然？」

お腹を抱えながら大声を出す

「奈津美！！」

「いいって…そんな大嘘つかなくても」

冗談でポンと私の肩を叩くと

これ以上笑えないのか顔を引きつらせながら笑う

「あ…」

声をかけられなかった

腰掛けた椅子から立ち上がり

ただ教室中を歩き回る奈津美を見てるだけ

捜してる動作を見せる

「どこに隠れてんだあ」

「……………」

ドアの向こう、教卓の下、掃除ロッカーの中
ありとあらゆる場所を探し回る

「…私を驚かそうなんて…そんなバカだと思ってるのかあ？」
もう一度今度は反対側の扉を開ける

私は心が痛くなった

そんな奈津美を見て切なくなっていた

捜しても捜してもマコは見つからない

ありえないとありえないと余裕だった奈津美

ありえないとありえないと思ってる

100%ありえない、当然マコはいない

そんな表情が空回りし始めてる

「ねえ…」

奈津美は知ってる

マコなしで私がこんなことするはずがないと

「彼の本名、仲宮奏汰って言うんだ…知ってる？」

切り札を出すしかなかった…

70・奔放な理由

『彼の本名…仲宮 奏汰って知ってる…?』

目の前のルーズリーフに走り書きで名前を書く

奈津美の笑いは一瞬で止まった

言葉の意味を分かってくれた証拠

言葉がなくなった

「よく、知ってるね本名」

不意に奈津美は私に顔を向ける

奈津美から目をそらさなかった

「えっとさ。本当のこと、なんだ？」

私はゆっくりと首を縦に振った

静かにさつきまで座っていた席に戻る

「えっと、あはは…そうなんだ」

「……」

「そうだよ。私さえも知らないもん。本名」

やけに落ち着いてる

そんな奈津美の態度が気になる

「それで……」

「えっ? あっ……」

「ずっと…付き合ってたの?」

首を振った

「付き合い始めたのは最近、それまでは会ってさえもいなかった。相手が相手だけに」

「……」

「中身を話すと長いんだけど」

奈津美は黙った

その瞳から何も感じられなかった

「…ははっ、本当にマジで！！？」

「え？」

「聞いているとマジなんだって思ってた。テンションも上がってきたっ！！だって芸能人の彼だよ。恋人にしたいNo.1だよ！！うわーっ！すごいマジなんだ！！鳥肌立ってきたあ！！…っ
てか水臭いっっ！なんで話してくんなかったのよ」

いつもの奈津美だ

怒ったりとか泣いたりとかしない

怖いくらいに日頃見てる奈津美

いつものテンションの奈津美

冗談を言いながら力いっぱい笑ってる

「そうかあ…あの彼方だよ！！いつどいう経緯なのか今度、じっくりコトコト話しましょ」

笑いながら言葉にする

つられて私も笑いながらうなづく

「あ、そうだ！！私、これから用事があったんだあ。根掘り葉掘り聞きたかったんだけど。いつもスケジュールいっぱいなの。奈津美ちゃんてばモテモテ引つ張りダコ？」

席を立つ奈津美

カバンを取って扉に手をかける

「…ああ、いそがしいそがし」

忙しいはずの奈津美の手が止まった

「ねえ…」

奈津美の低い声が響いた

緊張が走る

「ばらしてもいい？…奈津美ちゃんネットワークで」

これから彼方君と付き合うのなら避けては通れない問題
いつもとは違う声なのが分かる

時が止まった

一瞬で私の表情を凍らせた
言葉が出ない

それは彼女が本気だと思ったから
いつもと違う声でいつもと違う攻撃的な視線
覚悟は出来てる

それは彼方君の身体に腕まわした時に決まっていた

「な〜んて…冗談だよ」

私の頭は真っ白になった

「まあーたそんな顔しないで…！！ははっ、からかいたくなつた
のよ。」

軽くウインクをする

それにつられまたもや笑う

「でも、さ。なんで私に話したの…言われるの予感なかった？」

「それは」

「だって、そんな特ダネ！！情報収集をモットーとする奈津美ち
ゃんには持つてこいな大好物なんだけど…」

自然と口から出てくる

「本気で好きなんだってそう思ったから…」

何の根拠もない

そこまで私は奈津美を知らないのは事実

笑い合つて冗談言い合つてる奈津美しか知らない

言わば上っ面の彼女しか目にしてない

だけどそんな無責任な言葉はあまりにも簡単に

私の喉を通過した

「そんな気がしたから彼方君のこと話してる奈津美が…」

「じよ、冗談よしてよ！！なんで会えもしない彼をマジになんなきやいけないの」

「な、つみ？」

「空想よ！だって芸能人じゃない！全部こうなれたら良いな…：こ
うなつたらいいなって夢みたいなもの！！冗談に決まってるじゃな
い…：テレビの中のかっこいい人見たら誰でもそうなるでしょ…：」
声を荒げる奈津美

それはいつもの『ムキ』じゃない
本気で感情がむき出しになってる

「要は『憧れ』なの…だからいつか目が覚めることがあっても仕
方ないって思ってた。馬鹿やるしか能がない私には好きになること
なんて何億年も先の話よ！！」

私は静かに席を立つ

「本気で好きなんて笑っちゃう！！あなたに何がわかんのだよ」

「…」
「何にもしなくてもそのままを皆に好かれるあなたに…」

「…」

「私の…」

ゆっくりと奈津美に近づく

言葉もなく奈津美の傍に行く

「…ごめん」

パーーンツ！！

「あなたのそうだったすかしたトコム力つくっ！！」

気がつけば私の頬は叩かれていた

思いも寄らないことだったけど

意外に心は冷静だった

叩かれた重みは奈津美の痛み

どれだけ傷ついているのかが分かる

「いい人ぶつた面見せないでよ！！何もかも知っているような言い方しないで！！……」

奈津美は泣いていた

「だけど…馬鹿なのは私」

いつも元気な奈津美が見せる

涙は流さない…だけど泣いてる気がした

そう笑いながら彼女は何回泣いたんだろう

冗談言いながら彼女は何回自分を痛め続けてたんだろう

想像できなかった…

あまりにもちつぽけな自分にそんな大それた答えなんて出ない

「好きだった…」

奈津美は床にしゃがみこんだ

「マコや満春の前では笑い話で済ましてたけど…私はいつも本気だった。」

それは彼方君だけを指している訳ではなかった…

71・冗談から見える本気

ただ押し黙る教室

辺りが紫に翳っていく景色が妙に怖かった

違う…

私が怖いのはいつも見ている奈津美じゃないから

奈津美の表情は逆光で見えなかった

泣いてる気もして怒っている気もする

正直彼女らしくない雰囲気戸惑っている

「告白した人数とか誰とか関係なくいつも本気で好きになって、簡単に見えてたかもだけど必死に勇気出して告白してた…でもね。

行く人行く人私自身を見てくれなかった。いつもはしゃいで冗談いつてる私しか見てくれてない人ばかり」

「……」

「簡単に好きになってお気楽に告つてるとでも思ってるのかな？この容姿だからジョークで言ってるって思ってるのかな？太ってるから冗談？…綺麗だから本気？日頃面白いから冗談？真面目だから本気？」

奈津美のいつもとは違う態度

そんな彼女がいるだなんて思っても見なかった

奈津美はどこにでもいる女の子だった

「だから、私は夢に逃げるしかなかった。現実には私を拒絶するから…夢の中の私はそれなりに必死に彼方を追いかける恋する女の子…どんなに馬鹿にされようと一方的な恋だけど誰からも文句言われない…私は一番女の子でいられる空想の世界。だから、彼方とあん

だがどんな関係だろうが私には興味のない話」

本気に夢も現実もない

必死にやり遂げれば現実に変化する

きつと夢の中であろうと奈津美は必死にもがきながら

一人の男性に恋をしていたのだろう

それはいつの間にか現実の境界線を気付かずに超えて

本物の顔で私の前に姿を見せる

彼女は本気だ

「所詮夢なんだから！！傷つくはずなっ…」

気付くとしゃがみこんでいる奈津美を必死に抱きしめていた

それは同情なのかもしれない

奈津美の気持ち私には分からない話

嘘でも『分かる』なんていえぬ

「……っ！！」

だからなんでもいい

どうでもなんでもいいから

私には漠然と目の前にいる傷ついた奈津美を抱きしめる

「何よ！…してよ！！気持ち悪い。私にそんな気はないんだから

…」

涙は私の腕に零れる

「離、してよう…」

「ぜんぜん知らなかった。奈津美はいつも元気ではしゃぎまくってる姿しか見てなかった。ごめんね」

これ以上はいえない
というか、私はそんな彼女の一番の理解者にはなれない
奈津美の言った通り偽善でしかない…
いい人ぶって接してるのかもしなれい
『ごめん』なんてその場の勢いみたいにしかな聞こえない
『理解者』ここでなれるというのはそれこそ勢いってもの
気付かなかった私に思わせる力はなかった
だから言えない

今は何を言っても彼女は傷つく
これはこれから逢う奈津美の人生の中での理解者に出会うための
私は通過点、息抜きしか過ぎない
それでも…

だから何も言わずに思いっきり泣いて欲しい
それが精一杯

「ふっ…っく」

また私のせいで彼女を傷つけた

泣いて素顔をさらけ出している彼女の夢は終わった
満春という存在のせい

恋することにも臆病になってしまった奈津美に
これから分かち合っていく人
それはこの傷を癒してくれる人じゃない
同じ視点を持つている人いわゆる『理解者』なんだと思う

「はあ…落ち着いた」

私の腕の中で間抜けな声を出す

「よかった…」

静かに溜息をつく

奈津美は私の腕から離れた

「変なこと見せちゃったただわね」

変な語尾出現

いつもの奈津美に戻っていた

罰が悪そうに言葉を濁す

そして照れ隠しに笑う

またまたつられて笑ってしまった

「今度根掘り葉掘り聞かんね…」

そう言つて今度は心のそこから笑つた

全てをさらけ出した奈津美の笑つた顔は

私が男だつたら絶対に惚れてる！！

そう断言できるほどいつになく違ったものに見えた

これから会う出会いにその笑顔のままですらいられますように

翌日、何も変わった様子のない奈津美に

また彼方の話をされることなんて

わざわざ言つまでもないだろう

熱のこもつたトークを気持ちを高ぶらせながら

それは普段と変わらない奈津美で

変わらない私で…

72・真っ直ぐにさせるもの

今日はライブがない日

だけど休みが取れるわけじゃない

この日はライブでもないのに会場

そう、ライブの合間を見ての入念リハーサル

和気藹々としている

このコンセプトを支えるスタッフも

この時だけは真剣そのもの

先頭を切ってお酒を飲み始める

総責任者も

仲良く肩を組んで飲んでいたスタッフに罵声

だが、そのスタッフはめげるわけじゃない

そう皆必死なのが見て分かる

何十とある公演の一つでも無駄なものにしたいくない

それが一人一人の胸のある

期待を裏切らないライブ

妥協なんてものはない…

それを怠るスタッフは誰一人いなかった

総責任者から紙を投げつけられた後

『はいっ！！』そう会場全体に響き渡るような返事を返し
持ち場に戻る

だがそれを傍目で見ていて重く感じる彼方ではない

「なんかワクワクすんなあ！！」

いいながらの能天気な背伸び

そうだれもない会場に思いをはせている

誰もいないはずなのに…

そう誰もいないはずなのに

歓声が聞こえる

一緒に口ずさむ会場のファン

誰一人名前なんて知らない

全然知らない人たちばかり

どこで何をしていてどんな苦しみを解き放ちたくて
どんな悩みを抱えてこの会場に来て

会場に彼方に逢いに来ているのか分からない

だけどころなにもちゃんど鮮明に愛せる

精一杯愛してあげる自信がある

最高の笑顔で…最高の歌で

楽しんでいって欲しいって心から思う

今、まさに彼方の瞳にはこのドームは満員だった

彼方は目を瞑ったまま会場に笑顔を向ける

「最つつつ高~~~~~!!!!!」

周りにいたスタッフの誰もが彼方に視線を向ける
それに気付いた彼方は思わず

「あ、…はははあ〜」

笑ってごまかすしかなかった

「その妄想青年…貴方一人のん気なものねえ」

後ろから声かける聞きなれた甲高い緊張感のある声

「恥ずかしいわね…身を引き締めなさい!!」

「ははは〜」

ここでも苦笑い

容赦なく注意をくだす速瀬

「何、速瀬さんもう来たんだ…」

「そうね。ついさつき着いたところよ。貴方のお守りをしなきゃいけないから早めについておく事にしたわ。正解だったようだけど」
顎に掌を当てながら呆れた顔をする

「皆こんな必死に頑張っているのに当の主演は無責任なものね」
イコール呆れてものが言えない

そう言われたような気がした

「だから！皆必死で頑張ってるから俺が出来ることって言った
らテンション高めることって言ってもそんな必要ないんだけど」
そう言つてステージの真ん中に立つ

再び大きな伸びをした

「本当すっかり」

「ん？」

遅れてステージの中央に立つ
言いたいことの意図が分からず速瀬をただ見つめるしかなかった
そんな姿に速瀬は苦笑した

「その感じだと本人は自覚してないみたいね」

「何が…？」

「貴方が事務所に飛び込んで来た時と同じ目をしてる」
会場を向いたまま会話する二人

「俺が事務所に入ってきたとき？」

「ええ、知ってはいると思うけれど…私、自分の納得しない素材
とは仕事しないわ…私自身が認めた逸材だけよ。一緒に仕事できる
のは」

そ、素材：人を物みたいに

でもそれは聞き慣れた安心できる言葉

それは久々に聞いたから

最近はなかった事務的な口調

「その私を認めさせたのよ。覚えてるかしら？」
遠く会場を見つめながらにやける彼方

「若い時失望していた、権力：最後お金それしか残らないこの仕事。言いようのない人に媚売って：歌唱力は二の次、ビジュアル重視。確かにビジュアルにも目を向けなくてはならない事は分かっているわ：でも主は歌なの。私には納得できなかったわ。この子ならつて無我夢中の駆けずり回って想いを託す先には私の願わなかった結果：私の仕事は何なのか：考えるたびにこの仕事に誇りを持ってなくなった。そう考えていた頃貴方にもう一度かけてみようと思っただわ」

「……」
「その瞳が私にもう一度力をくれたのよ：でも瞳はくすんで力に負けたんだわって思った。6年前のあの雨の日だね。こんなこと彼方に言うのは変だとおかしいと思うけど試していたのもあったのかも。正直、貴方がどこまで真剣なのか：その真っ直ぐに前だけ見ていける瞳はどこまで強いのか」

「俺は、そんなたいしたもんじゃないよ」
軽く言葉を挟む

速瀬が無我夢中になっていたように
彼方も無我夢中だったそれだけのこと……

一瞬彼方に視線を移しすぐに会場に目を向ける

「そうね、そういうことにしておくわ」

「……」

「もう私の中では答えは出てる」

肌をすり抜ける風はとて心地いい

それは時として気持ちの持ち様に左右される

こんな優しい風にも切なく思えたり

涙を流すほど感動したり

思いのほか感傷に浸れる一瞬
吹かれながらこの風は暖かく自分を包んでくれるような

「貴方も知らず知らずのうちに学んでいく。何時気付くのかしら
…寂しい気持ちもするわ」

フツと途切れる

風の終わりは少し切ない感じだった

「彼方がその瞳でいられる時は信じてる時よ。あの時事務所であ
と会った時『約束』を満春さんをひたすら真っ直ぐに見てた」

「しん、じる？」

「信じるものがなくなった時貴方は貴方じゃいられなくなる」

思い出されるのは6年前と満春と別れたあの日

今、会場をいつまでも見ていたはずが

いつからかお互い向き合っていた

見たこともない真っ直ぐな瞳で速瀬は彼方を見る

「そしてまた強く思うものが出来た。それは満春さんもあるだろ

うけど」

「……！！？」

彼方はビクツと体を揺らす

「黙ってるのが下手ね…それが貴方のいいところだけだ。満春さ
ん一人思ってる時以上に今の貴方はよりもっと前へと真っ直ぐな瞳
だわ」

強く射抜くような風が二人の間を突き抜ける

「貴方は他に何を強く思うようになったの？」

「強く思う？」

言葉の意味はすぐには理解できなかった

長い髪を耳にかける速瀬

「他に貴方を真つ直ぐにさせるものって何かしら…」

遠くから速瀬を呼ぶ声が聞こえる
完全に会話は途切れた

「何が起きてても覚悟できてる。それだけは覚えておいて」
そう微笑むと会場だからか

いつもの足音はなく
振り向くとスニーカーの速瀬はステージの裏に移動していた

ついさっきの言葉が彼方の頭で連呼する

端々が気にかかる

答えが出てる

意味も理解できる

だけど速瀬の言葉の意図が理解できなかった

「速瀬、さん」

速瀬がいたはずの誰もいなくなった空間

眺めながらその意味を考えていた

73・ライブ前日

9月15日まであと一ヶ月
もうそこまで迫っていた

何も変わらない日常で変わり映えのない環境
だけど、これから何かが変わっていくようなそんな予感
友達と話しているこの一時が何故か重要で
必要な一部となっていく

何だか貴重な一ヶ月間

ライブに近づくにつれてのこのドキドキ感
はしゃぐわけでもなく

ただ静かに心がざわつくとってもいいリズムで

9月15日私にとって特別な日
何か起きるそう予感するのは
自分が特別な日って思っているからなのか
それとも違う予知を感じ取っているのか
でも、不思議と不安じゃない

ライブまで一週間に迫っていた
何だか一週間前と違って落ち着いてる
慣れてきたのかそのそわそわした気持ちに
それとも隣で唸りをあげているマコが
私以上に騒ぎ立ててるからなのか
心はいつもの落ち着きを取りもどしていた

聞けば奈津美も行けることになっているらしい
まあ、私たちとは別行動になるけど
すでにチケットを持っていた奈津美とは別々になる
奈津美は奈津美でマコとは違う唸りを上げてる
当の私はいえれば彼方君頑張ってるのかな？
思いをさせている遠恋気取り

それぞれの思いを乗せながら日は過ぎていく

9月14日

もうすぐこのツアーの最後を迎えようとしていた
始まってしまえば終わるのは早い
早くも名残惜しくなってくる
そう思っただけにふけるスタッフも少なくはない

最後の微調整に真剣

入念な作業はスムーズに進んでいく
彼方はその光景を客席から見つめていた

「……………」

ここから見る景色

ステージからより全体が見える

目の前が明日彼方が足を踏み入れる場所

明日あのドアからたくさんさんのファンが期待を胸にやってくる

思いにふけっている眼差しは邪魔をされ
目線の横から白い紙が差し出される

「……………」

彼方は一瞬何か分からなかった

「明日の変更部分よ…読んでおきなさい。」

「あ、速瀬さん」

速瀬の顔を確認すると紙を受け取り

綺麗にホッチキスで止まった紙をめくる

彼方の座っていた席の隣に腰を落ち着かせ

何故かいつも持っている何らかの書類の束を膝に置く

「明日なのに意外と落ち着いているのね」

「ん　？　皆こういうもんでしょ」

パラパラと音がする

あまり目を通してない意味のない動作を繰り返す

「要は明日のために体力温存？」

「明日は晴れだそうよ…ぴつたりな天気ね」

つて言っても屋内だが

速瀬は足を組みなおす

空調が聞いているのか9月の中途半端な暑さが残っているわりに涼
しい

だが明日になると色んな人でこった返して

それどころではなくなるのだろう

紙をめくる音が止まった

一瞬速瀬は彼方に視線を向けた

「あれから考えた…」

静かに紙を隣の座席に置く

「最近ね忙しくても考える余裕があつて…あの時は速瀬さんの言つてた意味が分かんなかったけど…」

貴方は何を強く思うようになったの？
簡単…だった

「聞かせてもらえるのかしら？」

「いや、そのつもりはないよ」

その言葉を聞いたあと速瀬は微笑んだ

「そう、それは残念だわ」

残念つて言つてる声のトーンじゃない

彼方にも分かつた

だから無意識に微笑んだ

「俺さ、あんたとこんな間柄になると思わなかつたよ」

「そう？」

体を背もたれに預け軽く伸びをする

「もつと犬猿の仲つて言うかいつも喧嘩して速瀬さんが俺に怒鳴つてわめき散らかして俺が切れて…そんな日々喧嘩喧嘩の犬と猿の中にこんな関係が生まれるとな」

「それは私を口説いているの？」

思いもしなかつた軽口が返ってくる

背中を預けてなきやこけてたかもしれない

だから言葉を返すのに時間がかかつてしまった

「ははっ、冗談！…そんな昔からのことわざを覆すような真似したくねーよ！」

「そうね、私も同意見だわ。犬は犬で利口に吠えて猿は逃げ回るような関係が望ましいと思うわ。」

彼方は身乗り出した

「それは意味違つたろ。詳しくは知らないけど絶対速瀬さん俺が猿の例えで言つてたろ？」

あまりにも堂々たる速瀬の姿勢に彼方は騙されそうになる

落ち着きすぎているからか本当のことを言っているような気がする
何ともいえない説得力がある

「まったく！俺が言いたいことはだな」

速瀬は笑っていた

「速瀬さんはそれでいいのか？」

「俺を強くしているもの。俺は認めてしまっていていいのか？」

イキナリな質問に速瀬は答えない

彼方は構わず切り出す

「構わないっていたよな？覚悟は出来てるって」

「それは脅しのつもり？」

そんなつもりはない

「言ったはずよ…貴方に任せるわ。こんなこと昔の貴方じゃ言い
出せないことだけど…」

深く息を吐く

「本当は感じてたのかもしれない。満春さんの名前をあの時間い
たときからこの日が来るの。だから私は全力で止めたかったのかも
しれない。貴方に与えるマイナスは絶大だから…これは己の甘さで
侵した失態…この甘さ、毒されたのかもしれないわね」

「……」

「まだヒヨっ子の貴方達が恋だの愛だの約束だつて振り回されて
る。そんな些細なことで私の手がけた仕事を邪魔して欲しくなかつ
たわ…だけど、見るとそんなビジネスな目で見てるのが馬鹿馬鹿
しくなってきたわ。彼方ではない彼方を見てたり、傷ついていく満
春さんを偶然にも垣間見たわ。本当は見たくはなかったわよ…私か
らすると…」

彼方は黙っていた

今度は深く息を吐いた

「やめましょう。こんな話!…前日にする会話じゃないわ」
席を立ち上がる速瀬

そしてかかとを鳴らしながら後にする

「俺が満春なしでここまでやってこれたのは6年前雨で熱出した俺の傍にいてくれた速瀬さんがいてくれたからだから…頭に冷たいタオル乗せてくれる暖かい掌があったからだから」
昔彼方が言っていたことを思い出す

速瀬さんは俺を支えてくれるこの世界での親みたいなものだから…

そんな言葉が脳裏を掠めた

「って何を告白してんだか」

「……………」

背を向けたまま

いつもの調子の速瀬のだったか

そこにはいつからだろうか

何処か柔らかか味を帯びていた

74・傷の治し方

やっとこの日が来た

もうこの日が来た

心境はどっちが正しいんだろう

ここから何かが変わる

そんな予感の前からしてる

だけど一歩踏み出すことはとても困難だった

これまでの経験で鍛えられてる

だからこそ『怖い』って言う意味も込めて

『もつ…』なのかもしれない

彼方君からは何にも聞いてない

逢うことはなかったけど電話は何回があった

いつも他愛のない話で

だけどその半分が昔の話でとても楽しかった

ただ単に楽しめばいい

そう言ってる片方の私がいるけど

電話での彼方君があまりにも変わらないうままで

だから逆に私の心が落ち着かないまま

気もせいつて言っつてしまえばいい

そう思えば思いつきり楽しめる

何だか胸騒ぎがする…

最近変に考え込む癖がついてから

少し臆病になつてるだけかもしれない

私はすこし前向きに微笑んでみた

「何だよ、イキナリ変な笑い浮かべやがって…」

へ、変な笑い

少しへこんだかも

覗き込みながら顔を引きつるマコ

当然ライブまで一緒に行くことになってるんだけど

やっぱり変な引きつり笑いなのかな

少し不安になる

彼方君に会ってもこんな感じならどうしょ

くだらない考えまた臆病虫が再発

「ったく！…なんでお前までいるんだか」

ワザと大声で聞こえるように

「まあ！…そんな私達さつき彼方ファンクラブを独自結成したばかりじゃない！！」

隣でおよよと倒れこむ奈津美

「昨日だつて二人で仲良く内輪とハチマキ作ったじゃない！！」
これで二人で応援しよっ！』って手を取り合つて。ひ、酷いマコ！
！そんな私達の友情を忘れたというの！！」

キラキラというよりギラギラとうざったく光る内輪を掲げる

「さも事実かの様に語るな！！つてか、デカすぎなんだよその内輪！！？…作んのにも程があんだろ！！」

奈津美に覆いかぶさるように怒鳴り散らかす

言わずと知れて周囲の注目の的だ

「ねっ、ふ、二人とも…人が見てるつて」

私のことなんか気にも留めてない

「ありがと、ごめんね…私の心配してくれるんだね。マコ…私なら大丈夫。彼方に負けないくらい私の隣にはマコはいるよ。」

ゆっくりと立ち上がり涙を浮かべながらマコの肩を叩く

気のせいか口の端が光って見える

「私をお前の友情物語に巻き込むなッ！！！！」

げんこつで頭を叩く

あ、あいたあ！！

私は思わず目を塞いだ

「仕方ないなあ…親友の君の頼みだ。」

つてか、効いてないみたい

マコの呆気に取られて何も言えなかった

「主人公は君で行こう」

「誰が配役の不満を訴えとるんじゃ！！！！」

つとまたもや腕を上げるが止める

その手は私の腕に来た

「いこつ満春。ほつといて」

「ほつといてつて…それは」

奈津美の方に視線を配る

「あいつに付き合ってるこつちの骨が折れる」

な、なるほどね

「くすっ！はははははっ」

思わず笑ってしまった

「それでいいんだよ。」

「え？」

笑いが止まってしまった

その言葉が気になって

「いつもお前は笑ってようつて心がける癖があるから…落ち込んで

る時とか考えてるときとかそれなりの顔してりゃいいんだよ！！」

今度は私の軽く頭を殴る

あいたっ！

「まったく…いつも笑顔でいなきゃいけないなんてことないんだから」

「……………」

「あいつもそう思ってるはずだし」
私に再確認を要請する

「うん。そうだね」

マコはその言葉を聞くと気合を入れた
満足したようなそんな表情を見せる
置いてけぼりの奈津美をそっちのけで
なんとも場違いな会話をしていた

私達の話聞いて

後ろでハンカチ片手に嘘泣きしてるのも
気付かないフリをして…

久しぶりの会場

何回も来た記憶はないものの懐かしい
その感情の裏に

嫌な記憶が一つまた一つと甦ってくるような気がした
少し手が震えてる

きっと私だけなんだろうな

皆わくわくしてる中でこんなにモヤモヤ考えてるのって
頭の中ではこれから起こるライブへの期待とか
グッズなに買うとか、何を歌ってくれるのかとか

ワクワクした感じ

脳裏に浮かばないわけじゃない

確かに彼方君に会えて

期待とか楽しみじゃないはずがない

けど、素直に喜ぶにはここでは色々ありすぎたから

久々の東京ドーム

私のお腹の中、頭は複雑な気持ちで渦巻いている
意味もなく周りの空気が気になる

すれ違う人と肩が触れそうになる度警戒する
知らない人と目が合いそうになると思わず硬直する
私の視線とは裏腹にガヤガヤとにぎわっている
その集団の中で心狭しと歩いていた
思った以上に軽く見ていたのかもしれない

ここにくる事の意味を。鮮明に思い出す

6年前を、記憶が戻ったときを
身体が無意識に震えてる

だけど、逢いたかった
それに勝るほどに
今日という日を彼方君と…一緒に、いたい
同じ空間にいたい
一途な想いがさっきの気持ちと反比例する
気持ちがちや混ぜになってあふれ出しそう

気持ち悪い…

「おい、満春顔色悪いぞ？」

突然マコが私に話しかける

そっついながら私の肩を支えてくれる

「ごめん、ありがと平気だから」

「平気そうな顔してないじゃんか」

心配かけないように少し表情をつくる

「何？どうしたの」

少し離れてた奈津美も私の顔をうかがいに来る

言葉に出来ず手で大丈夫と合図

「何それ、ぜんぜん信用できないんですけど」

呆れたような顔をする奈津美

その奈津美の顔をさえぎってマコが支えながら話しかけてくる

「さつき言ったる？無理すんなって」

気のせいかマコの言葉が荒々しくなる

聞いている奈津美も目が点になる

「あ、あそこにトイレあるから一緒に行きこうぜ」

歩き出そうとするマコ

私はそれを弱々しく制した

「大丈夫…人に酔っただけ」

「ってまたお前!!」

「歩けないほど気持ち悪くないから…自分一人で行ってくる。顔でも冷やしてさっぱりしてくる」

マコの言いたいことは十分分かる

だからこそ、私はマコと一緒に行くことを拒んだ

微笑んでトイレに足を急がせる

「分かってるんだよ・・・」

奈津美の耳にマコの独り言が耳に入る

同じく満春を見ていた奈津美だかマコに視線を向ける

「あいつが迷惑かけたくないって頑張ってることくらい」

「マコ?」

「だけど、そんな一人で何でも考えて悩んで答えを出せるほど強くない。あいつは」

遠くを見るような瞳で駈けて行った後を見つめる

「あまりにも情緒不安定なんだ。心を閉ざしてた時間誰よりも…」

だからこそ周りって必要だろ?なのに無理して」

「……………」

「なあ、お前はどこまで聞いたんだ？」

不意に奈津美のほうに視線を向ける

「またまたあ、真面目な顔しちゃってらしくないよあ」
茶化すように向けられた顔を背ける

「別に本当に何も聞いてないよ…ただ彼と何あったってことは聞いたけど…」

ここは公衆の面前名前はさけた

ちらつとマコを見ると奈津美は微笑む

「相談したいって顔だねえ…マコりん ふふふふっ！！相談料…」

綺麗にマコの目の前に手を差し出す

少し間が空くとその手を払った

「そんな気見せたのがそもそも間違いだっただな」
呆れたような怒った様な顔すると

マコは顔を逸らした
「そんなただでは真面目な奈津美ちゃんにはお会いできませんって！！」

そういうと意味なくVサインをする

恥ずかしい奴と横目でみる

「だって事実何も知らないもん…付き合ってるって聞いただけ。」
その言葉本当に信じているのか分からない
あまりにも軽く言葉にするから

「ただ、あんたはそのまま鉄砲玉の様に飛んでっの性格で十分なんじゃない？満春にとつても…鉄砲玉は何も心配せずに馬鹿みにに真っ直ぐすっ飛んでいくのがお似合いだって」

「なんか引つかかる言い方だよなあ」

何が引つかかる分から首をかしげる

その姿を横目に奈津美は歩き出す

「おいっ！もうすぐ会場入りだぞっ！！」

「知ってる。だからトイレ」

振り向きもしないでマコに向けて手を振る
適当極まりない奈津美の行動に言葉を失い
止めようとした手は元の場所へと戻った

75・君の声

大丈夫　　大丈夫　　大丈夫なんだから

そう大丈夫大丈夫…

よし！！…この調子

だいぶ暗示かけたから楽になった

気持ち悪さもさつきよりなくなった

トイレの水道をひねる

会場時間だからなのか外のしかも目立たないこのトイレには数人しかいない

そして、私が最後のひとりとなる

少し身体を落ち着かせる

頭では分かっている

鏡を見つめる私の顔はあまりにも冴えない

これじゃ、マコに心配されても仕方ない

顔前面に冷たい水をかける

「っはっあ」

意外に冷たかった

まだ夏の終わりなのに

それほど私の体温が下降しているのか

今日は9月のわりには涼しいかもしれない

だいぶ意識がはっきりしてきた

首を振って髪を横に分けるとハンカチで顔を拭いた

「ふう〜」

深く溜息をつく

どんなに幸せでもこの場所は笑ってなんて通れない

色々ありすぎたんだろな…

だけど、これを超えなきゃいけないって思ってる

意外と前向きな自分
無責任な行動を世間は許さなかった
自分達だけのために渡っちゃいけない橋

その橋を越えてしまったんだから
何も知らなかったじゃすまされない世界
自分たちだけのことを考えて想い合っていていられる橋の向こう側じゃない

だけど、私は最後まで渡ってしまった
向こう岸にいる彼方君の手を取ってしまった

ふつとよぎる…

私はここに来て良かったのか。

何回も何万回も考えた

何回も何万回も考えたけど…

最終的な答えは一緒だった

「好き」

…だから逢いたい

その言葉を言ってしまうえばそれだけで頭いっぱいになる

もう、いいんじゃないかって

何も考えなくてそれでって

一度手を取ってしまった以上

自分からは手を振り払えない

私一人では引き返せない

これからは一緒に…渡っていきたい

どんなに次の橋が細く落ちそうでも

例え死んでもそれが選んだ選択

間違つて繋ぐロープが千切れえても後悔しない
手を繋いで渡つてた時間は幸せだったから

「っよし!!」

私はマコみたいな気合を入れた

トイレの入り口で人の気配がする

あ、誰かきた?

会場時間なのに珍しい

そう思いながらカバンを手に歩こうと鏡から目を離した

プルルルルルッ

プルルルルルッ

あ、電話…

こんな時になんだろ

必要以上になり続ける電話

「はいもしもし?」

急いで携帯を取り出し耳に当てる

『あ、満春…俺』

俺って…まさか

「俺って…かなっ」

『わっ馬鹿っ!…シーイー!!…!』

その言われて意味が分かり思わず口を塞ぐ

『お前、今どこなんだ?』

「会場前…」

『だったら尚更名前言うなよな!』

そうだったそうだった

しかもさっき誰かが入ってきたような気配がしたんだった
聞かれてなかったかな?

少しあたりを気にする

『まあ、俺的にはいいんだけど呼ばれた方が…』
イキナリの発言に鼓動が早くなった

「な、なんで？」

その先が気になってついつい聞いてしまった

『なんでって、まあ』

「……？」

何を言ってくれるのか期待をしてしまう

『満春の『あなた君』って昔思い出すんだよ』

思い描いたのとは違う返答に言葉が出なかった

「…え？」

『電話越しに聞く『彼方君』は何だか元気が出るんだよ』

「彼方君」

口に出してしまった名前は邪魔されることなく受話器の向こうへと消えた

意外な言葉だったけど変に格好つけられるより嬉しい

もつと聞いていたくて携帯を耳にもつと押し付ける

『満春と引越して別れてからずっとその声、俺の救いだったから』
言葉が出ない

『か、彼方君！！！！？って満春のいつになく元気な声』
一気に顔が赤くなる

「わ、私は！！そんな声してないよ…」

言われたことの恥ずかしさに

関係のないところに文句をつける

じゃなきゃ私がもたない

『またその声が聞けてよかった…』

あまりにも切なそうに言うから

こっちもキューっと胸を締め付けられた

「なあ、満春……」

「ん？」

問いかけてくる声を静かに待った

「このライブ何があっても最後まで見ててくれ……」

「え？」

言った意味が良く分からない

「な、何？彼方君……」

「いや、何：俺のまあ、覚悟っていつかけじめって言うかとりあえず」

「……」

「お前は何もしなくていい。最後まで見てて？」

何かする気だ

だけど詳しくは聞かない

「私：も何か……したい」

それでも何かしたい

「お前には元気もらったから……」

そう、知ってた

彼方君はそう答えてしまっただろうなって

そっぴい終わると電話は切れた

両手で握っていた携帯はいつの間にかおろされていた
ふつと鏡が視界に入った

さつきとは比べ物にならない程の赤みのある良い表情

こんなに単純なんだ

少し笑えてしまった……

それがまた元気にさせてくれる

『最後まで見ていて欲しい』

私に出来ること

「ああ… 必要ないじゃん」

私の視界に入らないところにその人物はいた
聞こえないくらい小さな声に呆れた表情を浮かべ

「つまんないのっ」

そういつて静かにトイレを出る

「事情知らない分ビシバシ言っつてやろうと思っただけど… 美味しい
トコ取り」

本気で残念だったのか

オーバーリアクションの奈津美は舌打ちを鳴らした

衣装に着替えたつかの間の休息に浸っていた彼方
片手に持っていた携帯をゆっくりと下ろし
ソファーに身体を預け

考えるかのように視線を天井に向け深い溜息をつく
余計な不安がこの溜息と一緒に出て行けばいい
そう思わんばかりの深い深い溜息

天井を見る瞳に何が写っているんだろう
彼方にしか分かり得ないことだった

「テンションあがないみたいね。珍しく緊張でもしているのか
しら？」

いたずら心も入り混じった口調の速瀬
いつの間にか彼方の楽屋へと入ってきていた

「いや、逆だよ。テンションあがりすぎて爆発しそうだよ」

冗談ととったのかそれとも真意を悟ったのか
速瀬はそんな彼方を見て笑った

「そう、頼もしい限りね…」

……。

会話がつながらない

そう、間違っていない

気合も十分にあるが緊張もしている

速瀬も同様そのせいで言葉が見つからないんだろう

「俺、間違っていないよな？」

「それは私が決めることじゃないわ」

彼方の近くにあるパイプ椅子に腰掛ける

「だけど、貴方が迷っている以上…それは間違っていることかも
しれないわね」

「ははっ！何その抽象的な言い方」

「いいえ。そんなつもりで言ったんじゃないわ。迷っている以上
周りの皆にも中途半端にしか写らない」

軽く速瀬は足を組む

そして真っ直ぐに彼方を見た

その瞳から彼方は目が離せなくなる

「そんな下らない覚悟で迷っているようなら止めなさい。」

彼方は言葉を失う

そしてホッとしたかのように微笑んだ

「いつもそうだけど、容赦ねーな！まあ、らしいからいいけど」
「……」

「迷ってはないよ。悪かったよこんな言い方して」

強い眼差しで速瀬を見返す

確認してから彼方から目を逸らす

「本当すっぱり言い切っちゃって…俺、速瀬さんのことすっぱり
好きになれねーよ」

「それは光栄ね…」

ソファーから腰をあげる

一気に背筋を伸ばした

「んーーーーっ!!」

気持ちいい背伸びが出来たのかいつまでも伸ばしてる

「安心しなさい。貴方が今の貴方である限り…信じてる限りその姿を見てくれる人必ずいるわ」

いきなりの言葉に彼方は途中で背伸びを止める

そして一気に腕も元の位置に戻した

「だけど、嫌いでもなんだわ。これがとんでもなく意外で仕方ないんだけど」

「…!!」

その彼方の言葉に速瀬は言葉を詰まらせた

「勝手に言つてなさい」

「親みたいで…」

平常心に一瞬にして戻った速瀬

ポーカーフェイスに瞬時にして戻る

彼方は呆れながら笑った

いつまでも変わらない速瀬の態度に…

76・開演30分前

公演間近周りの子達は浮き足立っていた
会場内に着いた私達

お客さんの声がざわざわと様々な音を奏でる

彼方君から貰ったチケットは一般席だった

それは私を考慮してなのか

偶然このチケットなのか分からない

だけど、この席でよかったって思ってる

私を特別扱いして優待席とかだったら

彼方君を少し軽蔑してたかもしれない

だって私がここにくる以上私と彼方君はアーティストとファン

それ以外に何も無い

というかそうであって欲しい

何でも無い自分は素直にライブを楽しんで彼方君は夢を見せて

この場ではそんな関係でありたい

きっと彼方君もそれを望んでいる

私が心底楽しめないと踏んで

まだライブ始まっていない

会場は室内なのに白く曇っていた

空調のせいなのかなんなのか

だってなんだか湿気が多いような気がして

「広いね」

素直にそんな言葉が口から出てきた

「そんな初めて来たみたいなの発言しちゃって…」

マコが人並みを掻き分けながら私に近づいてくる

「だって今までそれどころじゃなかったもん…」

「あ それもそうか」

小声で答えたからなのか

罰が悪そうに言葉を濁すマコ

別に気になんかしてないのに

「あれ？そついえば奈津美は？」

不意に気になり辺りを見渡す

そこにはどう捜してもあの姿はない

「ああ、奈津美はファンクラブ入ってるから下…下っ」

そついつてマコの指差すほうへと視線を移す

それは紛れもなく一階をアリーナを指していた

あ、そうか…

チケット別々だもんね

一階かあ…後ろは嫌だけど前のほうだったら行きたいなあ

だって後ろだとあまりステージ見えなそうなんだもん

いくら一階だからって得な所と損な所あるんだ

そんなことを思いながらも

無謀にも奈津美の姿を捜そうと試みる私

「おー！いつ！！何してんだよ満春」

「……」

「おいってば！！席ごと」

マコの呼びかけに振り向くと

どこまで目で追っていたのか分からなくなってしまうた

仕方なく断念するとマコの待つ席まで歩く

「ほらっ…わりと見やすいポジションだと思わね？」

本当だ…一階ほどじゃないけど

全体的にステージが見渡せる場所かも！

「見やすいね」

ここに来て初めてワクワクが実感に変わったかも
だってここからだどんなことが起きるのか想像が出来る
あそこで彼方君が歌つてとかあそこでファンの子仰いでとか
そんなことするんじゃないのかなあ…って
そう考える私の頬はいつの間にか緩んでいた
ふつと辺りを見るとそんな話している人がちらほらいる

『今日は絶対あの曲は歌うんだよ』

『新曲出たからきつと歌うよ』

『早く始まらないかな…この時間が長いんだよねえ』

落ち着いて聞いていると色んな声が聞こえる
そんな楽しみもあるんだろうな
始まる前の楽しみ

友達と共感しあつてどんどん盛り上がって二度の楽しみ

「ごめんなさい…通してください」

私とマコモ前を遮る人影

咄嗟に出していた足を引っ込める

「すみません…」

そういつて私の前を少し過ぎたところキョロキョロと捜す
ちらちらと見える彼女の捜している席
私の隣だった

「あの…」

「え…?」

「もしかして、この席じゃないですか?」

ちらつと彼女は番号を見る

そして恥ずかしいとばかりに笑って席につく

「ありがとうございます…」

その言葉を笑って答える

私よりいくらか年上？

友達はいない、一人？

「あまりこういうとこ慣れてなくて…ごめんなさい」

イキナリ話しかけられて言葉を失った

「私らはバリバリなれてるぜ！！」

変わりにマコが答えてくれた

私の向こう側に見えた顔に軽く微笑みかける彼女

「田舎だから私の住んでいるところ…でも」

「ライブを見たくてだよな？」

「ちよ…！！マコ」

言葉を遮るように口を出すマコに小さく注意をした

「ふふっ…：そうですね。テレビとか歌とか色々触れていくうちに

すっかり虜になって止めらんなくなっちゃって。」

「……………」

「私の地域だと会場が狭くてすぐ売り切れになってしまっんで…

初の都会進出です」

ここにまた一人

譲れない何かが見える

芯が震える

大切なものを見つけたという表情

そんな顔をまたここでも見つけてしまった

「なにもここまで来なくてもいいの…って自分でも思っただけど

…：一回チケット取れてしたらもう止まんなくなっちゃって…」

そう答える彼女の表情は満足

そんな自分に満足している

遠出の疲れなんて微塵も見当たらない

私は微笑んだ

隣を振り向くとマコも笑っていた
目があうと二人で微笑み合った

77・光交差する先へ

彼方はステージの前にいた

「もうすぐ出ます…!!」

誰に言うでもなく確認で大声で合図を取る

落ち着かない 落ち着かない

そんな落ち着かないスタッフの中

絶対に落ち着いてなきやいけない人

誰にも流されてはいけない

一人モチベーションを整えていた

彼方は一呼吸入れた

そして再び瞳を閉じる

テンションは最高潮

準備は出来ている

彼方の後ろをまた一人慌しいスタッフ駆け抜ける

緊迫しているそう思える

舞台の裏側、表側こんなにも違っていていいのか

「彼方…」

ゆっくりと速瀬は彼方に近寄る

オープニングが会場では始まっていた

客電は一気に落とされ真っ暗になる

その分客席は張り裂けんばかりの歓声

何が起きるか分からないこの状況に

いてもたってもいられない
そんな興奮がここまで届く

「……………」

少しの間沈黙が続くと色々なライトアクションがもつとテンションを高くする

赤、青、黄色、緑…次々と変わっていくライトアクション

その姿をまだ裏で隠れている彼方と速瀬を照らし出す

そこに一気に音が入る

鼓膜が破れるくらいの音にファンの誰一人乗り遅れるものはいない
会場中に響き渡る

スピーカーからの音にライトが分散する

観客をなぞるかのように二つに分かれた一筋の光が放たれる

その間ステージを照らす証明が何十もの色が交差する

そこに一発目の衝撃音が入る

これは客の声なのか最大まで加速される音響なのか判別つかない
混乱を招くくらいにザワザワと会場を揺るがす

「私は…」

その中でも別の世界にいる

彼方の耳にはこんな興奮の中速瀬の声が忠実に聞こえている

「彼方さん!!!準備お願いします…っ!!」

スタッフの声が聞こえる

一瞬そのスタッフのほうに振り向く

だが、瞬時に顔は速瀬へと戻される

「私は貴方の才能に惚れこんでいるわ」

真面目に彼方の瞳を見つめる

一時も引かなかった

「速…？」

「貴方のやりたいようにやりなさい！！」

照明が変わる中

変わる瞬間に見える速瀬の表情

赤、青：会場脇光が漏れる

紛れもなく優しく微笑んだ

夢に向かって送り出す

そう、母親のようだった

無言でうなずくと

赤や黄色に変わる世界へと

足早にステージへと姿を消す

会場がうなる中

ますますまわりのお客さんたちが盛り上がっていく

眩しいくらいの照明に言葉を失う

だけど、爆発しそうな身体には丁度いい

この張り裂けそうな音が私を繋ぎとめる

夢の中じゃないよって訴える

ぎりぎりの境界線

ただただ叫びだしたいそんな興奮

隣にいるマコはなんとどうか容赦ないけど・・・

さすがの私もそこまでいけない

遠くから来た彼女は席を立ってその状況をただ楽しんでいる

・・・案外冷静な子なのかもしれない
そして私はまた会場へと視線を向ける
私の中のどきどきが止まらない
何も考えられない
証明と歓声と音に紛れて私というものがなくなる
ライトとライトが重なるとき
バアアアアア - ツツツ
!!!!!!?

驚くほどの音で爆音が鳴った
その音が耳をつんざく
思いつきり目を瞑った
辺りがシーリーンと静まり返る
視界が真っ白になっていた
瞳孔が麻痺してるんだろう・・・
そして・・・

ポツン　ポツン　ポツン
ザワザワザワザワ・・・
アリーナの前のほうから沈黙が歓声に変わっていく
何が起きたのか分からない
それは波のように周りに伝っていき
煙が晴れそうになったとき
お馴染みの彼方君の曲が耳に入る
イントロだけで会場の全員が分かる
散らばっていた歓声が一気に一つに重なる
はつきりとした意識で見つめている私は
その一体感にビククリした
マコと自然と目が合い笑う
煙だか熱気何だか分からない中に
彼方君が現れる

一つ掛け声を上げると
瞬く間に歓声の一つ二つ
もう一つ声を張り上げると
流れている曲のまま歌に入った
ステージに出ている彼方君は
やっぱりいつもの彼方君と違って
すっかり『アーティスト』に変わっていた
その姿を不満とか不安になる自分ではなかった
この瞬間は会場の皆が一番好き
満足の何者でもなかった

78・ステージの上

会場がうなる中

ますますまわりのお客さんが盛り上がっていく
眩しいくらいの照明に言葉を失う
だけど、爆発しそうな身体には丁度いい

この張り裂けそうな音が私を繋ぎとめる
いつ夢が覚めてもおかしくない中
夢の中じゃないよって音が教えてくれる
ぎりぎりの境界線
ただただ叫びだしたいそんな興奮

隣にいるマコはなんとというか容赦ないけど…
ってかマコの叫びは何処か間違ってる
聞いてるとさっきから
イケ行け！とか…よっ！待ってましたとか
でも本人楽しそうだから何も言わないけど

さすがの私もそこまではまだ弾けてない
左隣の田舎から来たという
彼女は席を立つてその状況をただ楽しんでいる

さっきとは違い
… 案外冷静な子なのかもしれない
そして私はまた会場へと視線を向ける
私の中のドキドキが止まらない
この場所で何も考えられない
考えられるのは期待と興奮だけ

周りの歓声に紛れて私というものがなくなる

ライトとライトがステージに重なった時

バアアアアー - ンツツツ !!!!!!?

耳を塞ぎたくなるほどの爆音が鳴った

突然のことで耳が麻痺し

気が付けば目を思いつきり瞑っていた

辺りがシーシーンと静まり返る

視界が真っ白になっていた

瞳孔も麻痺してるんだらう…

そして…

ポツン ポツン ポツン

ザワザワザワザワ…

ステージに近い

アリーナの前の方から沈黙が歓声に変わっていく

何が起きたのか分からない

それは波のように辺りに広がっていき

煙が晴れそうになった時

お馴染みの彼方君の曲が耳に入る

イントロだけで会場の全員が分かる

散らばっていた歓声が一気に一つに重なる

私が先と言わんばかりに彼の姿を捜す

誰一人としてステージを見ていない者はいない

はつきりとした意識で見つめている私は

その一体感にビツクリした
マコと自然と目が合い笑う
煙だか熱気何だか分からない中に
彼方君が現れる
一つ掛け声を上げると
瞬く間に歓声の一つ二つ
もう一つ声を張り上げると
流れている曲のまま歌に入った

ステージに出ている彼方君は
いつもの彼方君と違っていて
電話でしゃべっている印象とは違っていた…
ふっと普段着てくる黒ずくめの服装を思い浮かべ笑う

…違う、違うんだ…

すっかり『アーティスト』に変わっていた
その姿を不満とか不安になる理由はない
この瞬間は会場の皆が一番好き
私もステージに上がって駆け回っている
奏汰君ではなく…彼方君が好き
満足の何者でもなかった

曲が半分くらい進んだ頃
もう会場には疲れ知らずの子達ばかり
その一人に私も位置していると思うのだけど
囁れもしない声はいつまでも彼方君を呼び続けている

私も呼ぼうか…

沸々と沸き起こる

そしたらすつきり出来るかもしれない

ちよつとマコの腕でも引つ張ってみようか

いっぱい叫んでいる二つ前の子は私より楽しそうだ

でも、ちゃんと空気を読んで

大人しめの曲では皆黙ってステージを見ていて

アップテンポは逃さないとばかりに食らいついていく

「…っ楽しんでる？」

目にしみるのか汗を飛ばすかのように左右に首を振りながら話す

その言葉に周りの子達は叫び声を上げる

まだまだついていく気満々って感じで

「ここで疲れてたらもう年だね。皆も俺も！！」

そう言うや否やまたまた聞きなれたイントロが入る

お客さんはまだまだ疲れを知らない

さっきの2倍の声が会場をうならせる

今度はこの曲なの！！？

って叫び声でなんとなく分かる

「…このおなじみ曲は！！はあ、はあ」

息が整い切れてない様子

マイクも思わず下げてしまった

途端に会場に笑いがこみ上げた

「君達も人事だと思って笑いすぎ！！」

二倍になって笑いがこみ上げる

思いっきり左右に首を振るとマイクをギュツと握った

「うっし…！！次の曲は

…」

聞き取れないうちに音は凄さを増した
気持ち良さそうに歌う彼方君
私の気持ちも最高潮に盛り上がっていた
『何があっても最後まで見ていてくれ…』
こんなに楽しく興奮している会場で
起こることなんて何も考えられなかった

ジャー————ンツツツ!!!
ババンババ　　ン!!ダントツ
思いつきり打ち付けたドラムの音が耳を貫く
もうこの音に慣れていた私
まだ私の耳にはドラムの音が反響している
辺りが次第に静寂と化してくから尚更なのかもしれない
それを近くで聞いている彼方君はどんな感じなんだろう

きつと…
きつと気持ちいいんだろな
あつという間に静かになった
次は何が始まるんだろうと期待するファンの子達
一瞬も一言も聞き逃さないぞつとステージを見つめる

ワクワクしながら一緒に来た友達と話すのが見える

全体では少しざわついた感じ

期待で会場は埋め尽くされている

キーーーーーーンッ!!

耳を劈くノイズの後、彼方君のマイクを持つ音が聞こえた

「次が最後の曲となるんだけど……」

そう言いながらゆっくりとステージがライトアップされる

一人座る彼方君の姿があった

簡単に脇から持ってきたであろうパイプ椅子

不思議そうに感じながらも

ファンは固唾を飲んでその光景を見つめていた

「その前に皆に言っておきたいことがあるんだ。」

……。

79・覚悟と制裁

皆に言っておきたいことがあるんだ…

言っておきたい、こと？

心の奥がざわついた

それは私だけじゃなかった

一気にざわめきはどよめきに変わる

会場全体が不安な場に変

「だから、少し皆座って聞いていてくれるかな？」

そんな彼方君の言葉に動揺しながらもバラバラと座る

舞台袖で見ていたスタッフはもちろんそんな話聞いていない

スタッフ全員が不安げに顔を見合わせる

会場と一緒にステージ脇もざわついていた

微動だにしない速瀬を除いてだが

「こんなの予定であつたか？誰か調べる！」

誰でもいい隣にいるスタッフに声をかける

騒然としたスタッフの傍で冷静に見つめている速瀬

ただ、不安を吹き飛ばすかのよう

ステージに気を走らせ数回息を飲む

裏で何が起きているか考慮の上

マイクの位置合わせをすると話を続ける

言葉を少し濁しながらの会話

一気にざわつきは落ち着いていく

それに反発するかのように私の心臓がバタついていく

確かに言った…

『最後まで見ていてくれっ』って

「しつとりとした感じなのが最後の曲なんて俺らしくないけど…これは俺が初めて書いた歌詞…ロコミライブ見てくれた人なら知ってると思うんだけど」

あの時のライブ…

私の記憶が戻った時の

「これにはすごい思い入れがあって俺、これがなかったらもうここにはいなかったと思う。昔はそんなに興味なかったんだ音楽なんて…ただの口実。粹がって好きな振りして繋ぎとめるだけの方法でしかなかったんだ…」

ちらほらと囁きに似た声が聞こえてくる

「ある子の笑顔を絶やしたくなくて…そして約束を守るための一つの手段」

「だから目の前にいる俺を応援してくれる皆もその過程の一つでしかない…どんなに素直に歌を聴いてくれていても感慨なんて沸いてこなかった。ずっとその子に届くようにってそれ以外浮かばなかった。皆の顔も声も」

さっきまでの歓声がなくなる

それは困惑にも似たざわめき

当然の結果だった

舞台袖で観客にこそ聞こえないが

怒鳴り声が響き渡っていた

「何を言ってるんだ…!! あいつ。あんなこといって何をやる気なんだ」

いつも指揮を取っている責任者らしい人が声を荒げる

苛立ちを隠せないのかうろつろつと歩き回る

そんなこっちの気も知らずとばかりに彼方の言葉は次々と会場に伝わっていく

「おいつ…!!」

目に付いた近くのスタッフに声をかける

「おい!! 彼方を止めて来い!!」

「で、ですが今は…」

あまりにもすごい剣幕にたじろぐスタッフ

そんな反応がもつと血を上らせた

「こんな話続けているよりマシだ!! いいから引つ張って来い!!」

「あ、あの」

「なんだ…今度は」

睨むかのようにスタッフを見つめる

「は、速瀬さんがこのままでいいと。」

会場の空気は変わらない

何を言っているのが分からない

たくさんの人の会話がここにも伝わってくるよう

私の不安をますます掻き巡らせた

分かりすぎるくらい不信な空気

何を話してるのか…その考え自体愚問

「昔、ある子と約束をしたんだ。小さい頃親の都合で会えなくなる大好きな子に歌手になるってね。そんな些細なことで始まったこの芸能生活なんだけど…」

淡々と述べていく彼方君

会場の皆のことなんて気にしない

そんな人じゃないって分かってるけど

このドームに集まっている人の中で納得して聞いている人は多分いない
マコは不安顔で私の方をちらちらと見てくる

「み、満春、これってやばくない？」

「う、うん」

そんなの言われなくても分かっているけど

私にはどうにも出来ない

緊張で言葉が出ない

「子供が乗り込んで何もかも上手くいくはずなくて挫折しそうになったときいつも彼女から連絡を受けてその元気な声で頑張ってきた。ここまで来れたのは彼女のおかげといっても過言じゃないと思うんだ。彼女なしじゃ俺はこの場に立ってないこれは確実に言える事」

な、何を言ってるの?!

これじゃこんな言葉じゃ

その時どこからか声が聞こえる

「やめて…!!!」

そう、誰も納得しない

誰の声だかわからない

瞬間…彼方君の声が止んだ

どこから声がるのか分からない

だけど「やめて」その声だけははっきりと聞こえた

その短い言葉は悲痛の叫び

その言葉を引き金に会場は嵐が巻き起こる

それは風こそ吹かないが人が巻き起こす

不信や戸惑いや…複雑な感情が吹き荒れる嵐

右から左から目の前の人から一つ二つ後ろから

目には見えないが

反感の言葉は降り注ぐ雨のようにステージに突き刺さる

だけど、私の瞳に映る彼方君は平然とした顔で言葉を続ける

「俺がこうやって頑張っている以上彼女は笑顔で迎えてくれるその事実が周りの誰の言葉より糧になった…二人の約束それだけが俺が音楽をやっている理由…他ははどうでもよかった。彼女が笑ってさえくれれば喜んでくれれば…」

パンツ!!!!!!

彼方君の死角から物が投げられる

その物音をするほうに視線を向ける

そこには席から離れ身を乗り出す見知らぬ女の子だった

放り出されたものはこのライブのパンフだった

続くように身を乗り出しパンフが投げられる

その一つが彼方の身体に当たる

力をなくしたパンフが彼方君の足元に落ちていく

ゆっくりとしゃがみこみ静かに拾う

不意に彼方と視線が重なり合った人からは涙が流れていた

その隣の女の子もきつと同じ

少し先にはパンフを投げようとばかりに握り締めている子

会場の怒りが窮地に達していた

そう、それは拒否

彼方はゆっくりと瞳を閉じると
マイクのあるほうへと向かう
パンフをパイプ椅子に静かに置く

「俺……」

いつの間にか静かになっている会場に響き渡る

速瀬は静かにその光景を眺めていた
そして静かに歩き出す

緊張感のあるそのヒールの音はさらに緊迫を煽る

コツ、コツコツ

その時速瀬に視線を向ける人影がいた

「速瀬さん……」

「速瀬さん！！いったいどういうことですか……！！」
歩いている速瀬に追いつくように小走りでくる

「貴方、こうなる事を知ってたんですか……？？！」

「ええ……」

冷やかな相槌を打つ
目的地へとたどり着く
その扉を冷静に開ける

「……っ！！貴方らしくもない。」

そこは照明音響全てを統一している場所
中にはいくつもの難しい機械がずらりと並んでいた
速瀬が入ってきたことに全員の視線が扉にそそがれる
誰一人戸惑っていないものなどいなかった

「こ、この状況どうします……？？」

難しそうな顔をして

速瀬の隣にいる男に視線が配られる

「いい。構わないわ」

「え？」

代わりに速瀬が答える

「このまま続けて…」

「そ、それは…その」

「いいから私の言う通りにして」

この場で賛成するものなどいるはずがない

だが、速瀬のその凛とした姿に誰一人口を出せるものがない
スタッフ同士顔を見合わせるしかなかった

「全て私が責任を取る。いいからこのまま続けてちょうだい」
またもや冷静に言い放つ

そう速瀬は一喝すると文句を言うものはいなかった

80・等身大の『過去』

ゆっくり拾い上げたパンフを握り締める

「俺：皆に呆れられてもしょうがないことを言ってると思う…」
どれ程の力だろう…」

遠くから見てる私になんか分かりっこない
でも気持ちは伝わる…きつと
握り締める手は強くしないと震えてしまうんだ

今のこの状況で何か出来る

…何も出来ない…

彼方君一人に任せることが黙ってみてることが
こんなにも悔しいだなんて…

歯がゆいなんて感じたことない

『最後まで見ていてくれ…』

言葉が消えかかりそうになる

ステージに顔を向けることを身体が拒否してる
そんな私をマコは静かに見つめていた

「皆には酷いこと言ってる。だけど、これは俺自身の区切りとして聞いて欲しい…『彼方』として…音楽をこの先もやっていく一人の人間としてはつきりしておきたいんだ」

言い終わる前に彼方は頭を下げた

この広い、さつきまで歓声や熱気で充満していた
軽く五万は入るこの会場

今は冷たい空気だけが辺りを包み込む

五万人の視線先にはたった一人

逃げもせず一人立つあのステージへと注がれる
そう、今注目されているのは

いつも雑誌で見ている人
さつきまでの勢いよく飛び回っていた人

こんなに小さく見える

こんなに弱く感じる

頭を下げ続ける彼方に誰の言葉もなかった

「お願いします…。どうか話を聞いてください」

幾度か言葉を繰り返す彼方君

私は見て入れなくなつて顔を伏せる

何を話しかけるでもなく複雑な顔のマコ

きつとあまりの不意打ちに言葉が出ないんだ

マコを気にかけてる余裕なんてない

これから起こることに必死に手を合わせるしかない

「お願いします！！」

何を話そうとしているのかの予想が段々ついてきてる

俯きながら頭の中はパンク状態だった

俯かないで見ていなきゃいけない…

私に出来ること

最後までこの場所にいること

ふつと考えすぎて意識が途切れる

今の状況が把握できない

私はギュッと服を握り締めた

不意にマコが私の肩を軽く叩く

「満春、見て…」

さつきまで罵声を浴びせていた子達が

潔くとは言わずしぶしぶとただ席に着き始めている

会場の雰囲気を読み取れた

まだどこからか会話が聞こえる
ファミレスで交わされるような楽しい会話じゃないって言うのは分かる

皆が皆納得して座ってるわけじゃない

けど、熱心さだけは全ての人に伝わってる

ところどころ話し声が聞こえる

内容なんて分からない

全体をステージから見渡す

雰囲気だけで探し出せる

視線で追ってその一つ一つを確認する

静かにマイクを口に近づけた

「ありがとう」

再びさつきまでいた場所パイプ椅子に腰掛ける

「さつきも言ったけど、中途半端な気持ちで伝えたくないから」

沈黙が流れた

客席の大半は何も言わずに待った

それでも常識はずれの人はいる

罵声を浴びせるファンも少なくない

これでも少なくなっただ方だが

私は気持ち嬉しくなった

けど、さつきから身体の震えが止まらない

終わったわけじゃないって知らせてくる

「俺、始めはそんなに音楽なんて好きじゃなかった。それは俺の中で割り切ってた。これは『段階』の一環であって気持ちなんかは

入ってない。売れるために成果の一部として歌を作り成果の一部としてみんなの前で歌い…一人の女の子のために日々を過ごしてた」

それは淡々とマイクを通して皆に伝わる

あまりのストレートな発言に話しているものなどいなくなっていた

「別れ際肩を震わせて笑いながら泣く寂しがり屋のその隙間を埋めてあげたくて…」

途切れた彼方君の会話の合間に愚痴をこぼす者などいなかった

客席の感情が読めない

どんな気持ちで聞いているんだろう

だけど、彼方君はあのステージでたった一人その視線を受けているんだ

この沈黙の中できつと納得しているものがない

もう熱気など当に忘れてしまった冷え切ったこの巨大ホール

それは彼方君の瞳にはどう写っているんだろう

「だけど、甘く見てた…そんな夢みたいな話上手くいくわけがなかった。幼い小さな頭で考えた日々は呆気ないほど簡単に崩れていた」

マイク越しに一息吸い込む音がする

「きつとバチが当たったんだろう。皆が俺にくれる気持ちを俺は利用なんてしたから…だから6年前彼女はある事故にあった。」

勝手に身体が脈を打った

動機が一気に激しくなる

「……っ!!!」

辺りが見えなくなる

今ここで言うことそれは

右の席からすつと暖かい感触が手の甲に伝わる
私の視線の方向には視線こそあわないがマコ

「マ、マコ」

思わず名前を呼んでしまう

「今ここで言うてしまう事がどんなことか分かってない程の馬鹿
じゃないと思うぜ」

「…マ」

言葉にならなかった…暗闇で見ているか分からなかったけど
この刺さるような視線の先に彼はいる

なら…私は

マコのいる方向に小さくうなずいた

「ここまで来るとお前の手を握って安心させてやることしかない。
悪いな女の手で…」

冗談を言っただけ笑ってるマコが悔やんでいるのが分かる
笑ってないのが分かる

私は静かに首を振った

81・等身大の『彼方』

「まだデビューしてない頃からの俺のファンが起こした傷害事件」
会場がざわめいた

「いつの事件か俺の知らない間に起きて知らない間に結末が突きつけられてた。彼女が記憶喪失ってかたちで。だけど、この事実を知らない俺はただ連絡か途絶えていたことに愕然とした。一気に空っぽになった俺の中には何も残らなくなって。誰のために歌って俺はどこにいるのかわからなくなった」

「だけど、世間では丁度売れ始めた頃で『彼方』が時間がちよつとした隙間を許してくれなかった…気持ち動かないまるで機械のように動き回る日々絶望していた時…飛び込んできたのが今、俺の目の前にいる皆だった」

真っ直ぐとステージを見る
何回目だろう

この沈黙の間をぬって彼方君が息をする
大きな緊張を押し殺す瞬間

「今まで仕事の傍ら相手にしてきたって過小評価していた皆の笑顔だった。むしろその時は気付いてもらいなかった。目の前で俺の気持ちを複写するかのように一喜一憂してくれる。今となってはかけがえのない存在になってた」

さっきとは違っ
きつと違っ

明らかにこのざわめき

「それを教えてくれたのは他でもない…記憶を失くした彼女本人だったんだ。彼女は一部のファンの子達に傷を負わされたのに記憶が戻っても尚、俺の言動には腹をたてた。彼女は偶然にも記憶がなくなっていた傍ら俺のファンになってくれていた。知ってしまったんだ。『幼馴染』のカナタと『アーティスト』としてのカナタを同時に」

辺りにはまた静けさが甦る

「だから知ってしまった…5万人の内の一人の気持ちも、小さい頃から抱いていた感情も…自分の置かれている立場にも、きつと戸惑ったんだろう。そして記憶が戻って翌日彼女は俺に別れを告げた」

心の中を見透かされたのか

私の心情を映し出すかの様に彼方君の口から綴られる
まったくその通りとはいえない

一瞬でも自分の嫌な部分が私の心の中を蝕んだこともある

他の子たちは関係ないじゃないかとか

彼方君は誰より私を必要とする…なら
私自身の気持ちのほうが一番大事とか

だけど、それを打ち消すかのように凍りついた

チケットを手に来なくて会場の外で眺めていた子達
それは無視できないほどの光景

自分が同じ立場だったら…立場だったら

一人のためにこの人たちを無視できない
マコと繋がってる掌に力を込める

表情こそは見えないけどマコは握り締めた手をドツシリと受け止めてくれている

「それから俺はやる気も何もかもなくなってしまった。音楽に対する情熱なんて左程なかつたし、他活躍してる人たちが眩しく見えるくらい…いつの間にか汚い人間になってた。己の事しか考えない醜い人間…詩も曲も浮かばなくなった。」

マイク越し一息置く

「そう、なんて彼女は偽善者だと思った。他の子たちのために自分一人が犠牲になれば良い。馬鹿馬鹿しいほど人思いの偽善者だ。それで心から喜ぶ人など誰もいない。綺麗過ぎてだけど彼女らしい答えでもあつた。周りの事ばかりで一番近くにいる俺の気持ちはどうなるだつて。」

静寂を保っている広い会場にマイクのエコー耳を劈く瞬間気持ちまでもが根こそぎもぎとられるような感覚
そのもぎ取られた隙間に彼方君の言葉が埋め込まれていく
怪我した表面にバンソーコーを貼られたみたい

「辞めようと思った…俺はこの場にいる意味がないからこのまま仕事も全部放つておけばいつか追い出されるそして全てが終わると。だけど、一目視界を変えれば見えるものは違うもので最初で最後の彼女からの電話の後、それから目は追えないくらいの心境の変化」

「不意に聞こえる皆の俺を呼ぶ声事務所で何度も聞いた。偶然街で大ファンだつて言ってくれた女の子…今日来てるかな？それまではファンの子達をいとおしいって言う気持ち、会場で俺一緒にはしゃいだり飛び回ったりしてくれる子達の表情を気にすることも嬉し

く感じることもなかった」

彼方はマイクを片手にパイプ椅子を軋ませながら腰をあげる
また一斉に彼方君に視線が集まった

「そんな勝手な感情で音楽を忘れかけたときもあつたけど…皆が
事務所に送ってくれた手紙、声すごく嬉しかった！俺の歌でこん
なにも救われてる人、人生変わった人、世界が広がった人いるなん
て思わなかった」

そう告げる彼方君の声が震えていた

「しょうもないくらい…俺は子供だったと気付かせてくれた。ず
っと前から音楽は好きだったって思った！！」

マイク越しに聞こえる声は情けなさ感謝の表れ

「……っ」

飛び出しそうな吐き出されそうな想いを無理矢理喉に押し込む
ゆっくりと頭を下げると同時に

「皆、ありがとう」

それは静かに静かに会場に響き渡った

さざ波のように一人一人の胸に伝っていく

「こんな大切なこと気付かせてくれてありがとう…！」

何度も連呼する彼方君

私の頬に涙が伝う

勝手に流れる涙なのにどうしてこんなにあふれてくるんだろう

なんだか彼方君が目の前にいるみたいな感覚
彼方君一人しか目に写らない

いつの間にかマコは私の手を離していた
その手で私は涙を拭う
気付いてないフリをするマコ
だから手を離れたんだ

周りでもところどころ鼻をすする音が聞こえる

「俺、皆が大好きだ…本当に俺、音楽やっててよかった」
エコーが最大の演出をする

「私情はさんだ活動休止だったけど自分を見直すことが出来た…
その機会を与えてくれた事務所の方、俺の前にいる俺の大切な人達
に返せないほど感謝してる…これがこのツアーの最後だけど初めて
俺はライブというライブが楽しかった。心の底から破裂しそうなく
らい痛感してる」

一つ一つ言葉をつむいでいく確実に
それは嘘偽りなく私の鼓膜に張り付いていく

一言一句逃す暇などない
ステージで曇りもなく輝くその姿を
大切にしていたかった

「でも、もしかしたらこれが最後になるかもしれない」

止めにかからないスタッフを見ていると分かる
速瀬さんが裏で動いているんだって
そう言ってる言葉に後悔の陰りが見えない

「最後かもしれないからこそ…皆に言っておきたい。」

言葉が途切れる

さっきまでまくし立てるかの様に話していた

勢いがここで途切れる

そしてその息を吸う音を私は忘れない

沈黙の時間を静かに過ぎた

「俺には好きな人がいる…。」

82・等身大の『愛』（前編）

俺には好きな人がいる

脳に響き渡る低く落ち着いた声
嘘、偽りのない瞳
から伝わり…脳で確信を得る

「昔から俺のことを見ていてくれた笑顔の耐えない彼女…」

脳に響き渡る低く落ち着いた声
嘘、偽りのない瞳
耳から伝わり…脳で確信を得る

「昔から最高の笑顔で俺を支えてくれてた人…俺が皆の前にこう
していられる理由」

脳に響き渡る低く落ち着いた声
嘘、偽りのない瞳
耳から伝わり脳で確信を得る

「認めて欲しい。」

脳で確信を得る

頬を伝った涙が行き着く場所を知っているかのように
同じ場所に零れ落ちていく

手の甲に弾け落ち広がる

次に繋がる言葉なんてない

きつと今、何か言ったら私は

「俺の中での彼女の存在を認めて欲しい…」

そう答えると再びゆっくりと頭を下げた

今度は一人の音楽を奏でる者ではなく

肩書き全部取っ払った一人の人間として

それはさっきまでの涙とは違った

辛さとか後悔とかたくさん入り混じった涙が

一瞬にして心の中心から浄化するかような涙

それはたぶん時間が経てば判明する感情

けど、今の私にはその機能は停止していた

私のために頭を下げてくれる彼方君

以降マイクからは何も流れなかった

それだけが言いたかったそう主張するかのよう

マイクは彼方君の手から離れ椅子に置かれている

そしてその身一つで許しの言葉を乞う

会場はシーンと変わらず静かだった

彼の気持ちは届いているのか

届いてないのかその意思がまったく分からない

あれだけ何分か前は盛り上がっていた会場が

見るにも無残に感情一つも交わっていない

…怖い。

広い分この静寂が怖い
承諾とも拒否とも取れない間が続く
視界に見える何段が前の子が席を立つ
そのままその私の同年代くらいの子は会場を去った
それにつられるように何処かで光が漏れる
反対の方向から静かにドアが開く音がする
顔が見れるような距離にいる2人も席を経つ

酷く失望したような顔だった
だけど、何もしゃべることなく扉を手にする
落胆は隠せなかった

綺麗に理解なんてしてくれはるはずがない
どこかで彼方君を応援し
それがいつか皆にも伝わるそう考えていたのかもしれない
そう甘くはない
溜息さえも口から出ない
都合よく考える自分に嫌気が差す
やっぱり覚悟が足りなかった

色んな感情が抑えきれないくらい溢れ出す
そう悔やんで唇を震わせている間に光は四方八方から漏れる
外の空気が入ってくる気配がする
彼女達は何を思い、この会場を後にするんだろう

「仕方ないよね……」

マコかと顔を上げる

だが、違っていた

その隣軽く話を交わしたただけ女の人が独り言のように口を出す

田舎からここまで出てきた女の人

「仕方ないんだよ。理解できなくて、出て行く人がいたって…」

独り言、なのだろう

口を挟めずにいる私

「それだけ『彼方』というアーティストを好きになってしまった」

「もしかしたら、離れていくかもしれない…一人も残らず。だけど、頭を下げた後委ねられるのは会場の皆なんだから…覚悟もしているってこと。拒否されることも理解されないことも…じゃあ、私。」

名前の知らない隣に座る女の人

見つめる先に立ち上がり出口に向かう人が目に入る

重なるように立ち上がる知らない人

覚悟が出来てる…

彼女の言うとおり

だからそう、だから彼方君は私に電話してきたんだ

本当に今日が最後になるかもしれないから

この先はこの冷たく逆転してしまった会場に任される

この人も会場を後にするのだろうか…

思わず顔を背けようとする

「…彼の言う彼女ほどじゃないけど理解出来る人の一人になりたいわ…」

「…え？」

意外な言葉に目を背けることが出来なかった
理解できる人間？

途端彼女は立ち上がって拍手を送った

83・等身大の『愛』（後編）

私は目を白黒させた

目の前の彼女が何よりも理解できない

「私は彼女に最愛の人になりたいんじゃないわ。彼の歌が純粹に好きで」

そういいながらも拍手をステージに向ける
振り返る人後ろからの視線も感じる

「歌に救われて…間近で感じてみたくて遠くから来た。それがこれからも濁りないと証明されたのなら…。なら…私は迷いなく彼を応援するわ。それが私達なんじゃない？」

たった一人での拍手を恥じもせず打ち続ける
さつきから会場がザワザワし始めてる
目立っている隣の席の子を誰もが注目する

頭の中が混乱する

こんな人っているんだ

呆然と見ていた私の肩を叩くマコ

「私らもやろうぜ…？」

そう言葉にするマコにつられて立ち上がる
さつきまで私の手を握って守ってくれたマコの表情が全快に笑っていた

「な？」

笑っているマコに私も笑う

私は力強く掌を打ち放つ

パチパチパチパチ

彼方君に届け！！

そう願って止まない

彼方君に届いて

彼方君に届いてほしい

『最後まで見ててくれ…』

私に出来ることって？

『満春の声：元気な声』

私の出来ること

彼女みたいにカッコよく割り切れなかったけど

言ってくれなきゃ分からなかった

こんな人もいるって分かってよかった

心の中で何度も彼方君を呼ぶ

マコモそんな私を見て初めて拍手に加わった

パチパチパチパチ！！

皆の注目の的気にならなかった

微かだがステージにも聞こえる

パチ・・・パチチ・・・パチパチ

彼方はその音に静かに耳を傾けた

ふっとその場所を知っていたかのように

音と場所が重なり合う

満春だと分かったのか分からなかったのか表情じゃ読み取れない

そしてただ静かにまた頭を下げる

その時どこからか把握なんて出来ないが
ここで出している音と同じ拍手の音が聞こえる
気付いて視線を向けたらもつと音が大きくなった
向けた先とは違う方向からまた拍手が重なり
それは会場全体となって響き渡り始める
会場が拍手をしているみたい
拳動不審に辺りを見渡す
気付けば皆率先して立ち上がり
言葉の代わりに拍手をステージに向ける
それはやがて会場を高く舞い地響きに似た音を上げる

知ることの出来ないことを知った

皆で拍手をするとこんなに暖かく嬉しくなるものなんだって

「マ、マコお」

反応に不安を隠せずにいる

だってこんなことになるなんて思わなかった

キヨロキヨロ見渡しながらも

思わず拍手を止めマコの顔を見る

手を叩きながら向けられた表情は嘘や冗談なんかで作られるものじ

やなかった

それが一番の証拠

今起こってる現状がなんなのか把握できる

まだ鳴り止まない心を震わせるような拍手
彼方君を認め分かうとしてくれる証

私の足から力が抜ける

「…っ」

ペタン…

椅子に脱力した腰がのしかかる

意識が保てずにいた

頭が真っ白で考えられない

ただ涙が次から次へと理解不能の域を超えようとしている

自分の意思とは関係なく流れる

「…はは、はははっ」

「み、満春!!!」

そんな私に意表をつかれたマコが拍手を止め顔をうかがってくる

涙を拭わなきゃならない両手のひらは震えが止まらない

拍手をしていた手が熱かった

顔を覆い隠すなんて無理だった

だけど恥ずかしいなんて気持ちは微塵もない

ガクガクする両手を必死に両手で制し

心臓のある胸へと持っていく

熱かった…とても熱かった

皆の拍手が私の心臓を振動させる

パチパチパチ!!!

暖かい

痛いほど暖かい

泣きながら笑うそんな奇妙なこと

私に起きるなんて思わなかった

「ああ…認めちゃったかあ」

後ろから声が聞こえる

残念といわんばかりに溜息が私の傍を通り過ぎる
私を支えていたマコが代わりに振り向く

「な、奈津美!!!」

素っ頓狂な声を上げる先に奈津美

「お前、どうしてここにいんだよ!!!」

そう、奈津美は確かここから目の前に見えるアリーナにいるはず

「いやね、寂しいし…それに」

そういつて顔を見せない私に指を指す

マコの顔を見ながら苦笑い

「こいつの泣き顔なんて天然者でしょ!!!はっはっはっ!!!」

そういつて大笑い

さすがのこの会場では奈津美の独特の足音には気付かなかつたらしい
会話が途切れたところでマコと奈津美はステージを見る

私も何とか涙を抑えステージに目を向ける

いつの間にか深々と落としていた顔を上げ

正面から私達客席側を見ていた

そして静かにマイクを手に取る

口には持つてきてるんだけど、声は聞こえなかった

それは本当に声を出していないのか

マイクの調子が悪いのか分からない

ただジーンと客席を見つめる

その一瞬がすごく長かった気がする

拍手もいつの間にか消え彼方君を待ち望んでいた

激しく歌い狂い熱くさせていた以上に

会場は暖かく輝いているように見える

「俺…」

何時間か経ったんじゃないかって時にようやく言葉にする

「皆に逢えてよかったっ！！」

その言葉は普段の余裕表情とは違い震えていた
でも今言わないと言えなくなってしまっ

そう訴えかけるように必死に言葉をつむいでいく

「ありがとう…皆、ありがとう」

また頭を下げるさつきよりも深く

左右よく把握出来ないところで疎らに手を叩く音が聞こえる

「俺、この事で事務所首になっても何処かでマイク片手に歌って
るからっ！！応援よろしく」

今度は震えることなく精一杯の笑顔を向ける

「…って言ってますけどどうなさるおつもりですか？」

速瀬は緩んだ顔を一緒にいた総責任者に向ける

もう何に溜息をついているのか分からない

そんな溜息を再び漏らし答える

「ハハッ！私にそんな権限ありませんよ」

「そうですか…」

そういいながら呆れながらも微笑む

「貴方らしくもない危ない橋渡りますな…？」

「私も意外です。」

思わず耐え切れなくなつた頬を緩ませる

「貴方も変わりましたなあ…こういってはなんですけど結構きつい
お方だと思っていた。そう噂は常々」

そういって言葉を切る

「くすくす…自分に馬鹿正直な彼方と自分に堅い仕事一筋な私ど
つちが勝つと思います?」

「……」

「正解は分かりません…だけど、あの自由な姿を見ると右なら右、
左なら左しかないって考えてる私が馬鹿馬鹿しく見えてくるんです。
なんででしょう? 私自身は間違っていないと思うのに」

そういう笑いを浮かべていた

それではと踵を返す速瀬

「忙しくなるでしょうな…これから」

ここまで響く彼方と呼ぶ声

それを感じ取るかのように速瀬の背中に声をかける

振り返りもせず変わらない緊張感を思わせるヒールをならしながら
その場を後にする

彼方君を呼ぶ歓声がピークに達したとき

静かに口した唄は

私の知らない誰も知らない

これまた今までの彼方君の曲じゃない

『俺にぴったりの曲』と笑って見せた

84・嵐の後のアラシ

まだ終わってないといわんばかりに
地響きに似た歓声が鳴り止まない
耳鳴りが止まない

まだ会場にいるような感覚がやまない
暖かい空間と化していたドーム
私は一足先に会場を跡にしていた…。

楽屋にも聞こえるくらいの歓声
彼方はライブを終え控え室にいた
規制退場もなんのその
指示を出しているのにも関わらず
アンコールがここまで鳴り響く
彼方の耳にも聞こえている

アンコール！！アンコール！！

気持ちは乗り出して行きたい気分

「いいのかよ…こんなところ来て」

ドアの向こう側で声がする

彼方は拭ききれない汗を気持ち良さそうに拭く
汗が目に見えるのか痛そうに顔を歪ませる
はて？顔の見えない拳動不審者

「さあ…いいんじゃない？」

ドンツツツツ！！！！！？

状況把握は彼女の方が早かった

というか彼方という人物の目の前できつと勝てる者はいない

「つつつて！！！！てめえ！？…っ奈津美！！！！！」

イキナリな突撃に言い返す言葉がこれしかない

まだマコの頭はクラクラしていた

腰にきた腰に…

そんな状況を彼方は言葉を出さずに見守る

というか挟む暇がないと言うか

イマイチ状況把握が出来てない彼方

満春の友達がどうしてここにいるのか

顔も知らない女の子もいる

それよりここは関係者以外立ち入り禁止のはず

「愛してます！！思った以上に！！！」

「意味不明だからその告白！！！」

「だからサインください！！！」

「繋がってないって文章が…っ」

「サインは何処がいいんですか？私、何も用意してません！！紙も鉛筆もあ、そうだ。いい事考え思いつきましたっ」

途端少し顔を赤らめる奈津美

「んだよ…モジモジと」

「ありました。サインできる取って置き場所が…」

ますます顔を赤らめる奈津美

嫌な予感がした

「私の唇にサインしてください…貴方のその音楽を奏でて止まないその唇で」

そういつて静かに目を閉じる

「あ、気にしないでください…初めてですけど、きつとサインよりに残ります」

「うぐつあああああああ！！！馬鹿か！！！！？お前…！！！」

マコの身体という身体が硬直する

途端鳥肌が立ち両腕を温める

奈津美の言葉に突っ込まずにはいられないマコ

はっ…！！

とりあえずは何故ここにいるのかを伝えなくてはならない

そんな当たり前のことがマコは忘れかけていた

誰のせいとは言わないが

「だから連れてきたくなかったんだよ…」

ペースが乱される

突然へこむマコに対応が追いつかない彼方

溜息さえ抑えられない

「さつきまで冷静だったのは嘘だったのか？私を騙すためだったのか。ただ彼方に会いたかっただけなのか？先に帰ってるってあの時無理矢理でも追い返せばよかった！！私はどこまで馬鹿なんだ」

独り言を大声で叫ぶマコ

苦悩に苦悩を上乗せしながら

そんなマコを他所に何かに取り付かれたかのように彼方に近づくと

「付き合ってください…！！！」

「え…？」

彼方はまたもや対応に追われる

「…！！…つな、奈津美…！！！」

ヨコシマなのか不明なオーラを保たせながら

突然、彼方の声が廊下に木霊する

何のことで笑っているのか分からないマコ
っというかこっちは泣きたいくらい

「いやっ…ごめんごめん」

「何だよ」

意味不明なことでも自分のことで笑われているのはわかる
少しムツとした表情を見せる

「なんだか…くくっ！いいコンビだと思って」

「ンなわけないだろ！！だいたいこんな事しに来たわけじゃな
いんだ」

ハッ！！と目を見開く

「そうだよ！！こんなことしに来たんじゃないんだよ…」

自分でも忘れていたと言わんばかりのリアクションに
彼方はまた笑いそうになった

85・それぞれの結論

とんだ騒ぎで忘れそうになったけど
なんとか気持ち切り替えすコトが出来た

「用事あるんだこれから歩きながらでいい？そういえば満春は？」

そうここには満春の姿がない

ついて来てはいないのだ

『最後まで見ていて』

この場にはいないこと不安に緊張が走る

「安心しろ！ちゃんと最後までいたさ……。」

彼方は一瞬黙り込んだ

「満春、泣いてた？」

「……」

「まあ、泣いてた。泣って言う涙全部」

「そんなに？」

自分のやったことに後悔の表情を少し見せる

「いや」

「え……？」

「よ
泣って色んな種類あるじゃん？…私は今日次ぐ次ぐそう思った」

マコは意味不明に笑う

その意味は彼方には分からない

「…後は本人に聞いてくれ」

「本人？」

本人とは満春のことである

だか、何度捜しても本人はいない

「本人からの伝言『待つてる』ってさ」

「え…？」

「待つてるって何処で？」

彼方は歩く足を止める

歩くのを止めた瞬間さっきのアンコールの音が強く聞こえる

ステージに近づいていたのだ

細かく言えば舞台袖だけど

さっきまで重ならなかった彼方の呼ぶ声が

今は一体となり地響きとなってドームを揺らしている

少し気になったマコだが話を続ける

「知らない」

「え？」

「教えてもらえなかった…知ってるんだろ？」

マコは確かめる様に彼方の顔をうかがう

思っ場所は一箇所しかなかった

「…ああ」

そう答えた彼方にマコは強気な微笑を見せる

「よっし！…じゃあ、行ってやんなよ！…」

少し強めに背中を叩く

最後の後押しとして…

「今は」

そう言い放つ彼方は笑顔だった

「今は行かない」

言葉の意味がマコには分からなかったわけじゃない

だけど気付けば聞き返していた

「なんだって？」

「今すぐは行かないよ」

もう一度同じ言葉が耳を掠める

「今は…アンコールを精一杯答えたくてウズウズしてる」

アンコール？

さっきから会場がざわついている

それは知ってたけど音が大きくなっているのは
会場に近づいているからなのか

彼方がさっき用事あるから歩きながら

と言った先…

「中途半端にしたくない…俺は満春のために5万人を捨てる気はない」

「……………」

「だけど5万人のために満春を捨てる気もない…」

それは天秤で量れない

「大事なファンだからこそ分かって欲しい…大事な人だからこそ俺は理解を要求する。それが『一緒にいる』って事だろ？」

「そうか…」

落胆したわけじゃないけど声のトーンが落ちる

「それが満春が笑顔でいられる条件だって俺は思ってる…」

「お前の結論？」

無言で頷いた

少し間が空いた後マコの口の端が上がる

「ははっ…そうか」

「……………」

「まいったなあははっ！！『明日の昼位になるかな？』ってさ…」
「え？」

「満春がドーム出る時に言った言葉…」

満春は知っていた

全てを苦しむことなく受け入れていた

こいつも見抜いていた

満春が納得してくれることを

「私はさ、『何言ってるんだよ無理にでもつれてくるよ』って強気に返したのに」

「……………」

「ごめん、ちよつと試してみた。帰っていたのは幸せそうな笑顔だけでちよつと悔しくなつたから」

読めてなかったのは自分だけ

もう満春を分かつてやるのはマコじゃないって

そう言われた訳でもないのに引導渡された罪人みたいな感覚

目の前にいる奴はもう

イキナリ学校に押しかけてくるような奴じゃない

覚悟できてたはずなのに心のどこかで否定してる自分

最高に分かつてやれて最高の笑顔にしてやれる

それは目の前にいる彼方

『今は行かない』

私も知ってたそう言ったら言い訳っぽくなるけど

どこかで外れればいいなんて満春の言葉が当たんなきゃいいって
応援してたはずなのに

…笑った

でも、満春が今何処に向かっている…彼方が何を言うかなんて私は予想だにできなかった
6年間の隙間に私は居なかったことを思い知らされる
涙が零れる

やっと荷が下りたとか
もう一番に満春のことわかってやれるのは自分じゃない
なんだか子供じみた喪失感とかいろいろ混じってる
言葉に出来なかった

「ライブ…見てくか？」
彼は何も触れない

「やだよ…今お前のライブ見たらファンになりそうだもん」
初めはどうしても彼女を変えたくて
嘘から始まった

「ようこそ…いらっしやい」
冗談で手を差し伸べる

自分で何やってんだかっていつも感じてた
似合わないウソなんかついて
でも気付いたら手当たり次第雑誌開いて集めてた
目の前の彼の情報を…

私と正反対の彼女が見せた
悲しそうな表情が忘れられなくて友達になって

「彼女名前なんていうの…？」
「彼女って…？あ、奈津美のこと？」

悲惨な事件に遭遇して

私の好きだった笑顔が失われた

会場に行くように仕組んでファンのフリして

ファンとしてこの彼方に偶然では逢ったけど満春が彼と会って

少しずつ変わって行った

今はあの笑顔が戻ってよかった

あのチケットを手に入れた時決意してよかった

必ず連れて行くと…

会場を後にする満春の笑顔は6年前に見た彼女の笑顔そのものだったから

「奈津美ちゃんっていうの…」

「…何」

「前、満春が俺に話してくれたから…ありがとって言うといて電話の前での寂しそうな彼女や

感情の行き来がない彼女にはもう戻らない

なんだかさつきまではショックだったけど

こいつに取られたって

「まあ、見て行ってよ」

そう言っただけはステージに姿を消した

その後会場にまた歓喜が沸き起こる

こいつも変わった…満春と出逢って

…割と、時間かからずにすみそう

私も奈津美と一緒にであっけらかんと納得できたらしい

恋って言うものをしてみよっかと...

ブンブンブン

頭の空想を追い払う

キャラじゃないから...

86・拍手の温かさ

帰ったの何時だか時計見てないけど暗かった
部屋のドアを静かに閉める

私は静かに荷物を下ろし
ドアを背中伝いに腰を下ろす

「はあ〜」

疲れた…

ライブって終わると滅茶苦茶疲れる

ライブ中疲れ意識してない分

外に出て一人でいると実感する

疲れてるだろうと身体とは裏腹に口元がゆがむ

自然と笑ってる…気がつくとき笑ってる

回りを気にせず自分さえ意味が分からないほどに

こんなに笑える『満春』だとは思わなかった

「はははっ!!!」

一人で笑ってるなんて馬鹿だけど

マコや奈津美みたいな豪快で正直な笑い方じゃないけど

この笑い方を知ってる

私はこんな笑い方をする子なんだ

身体に浸透していく感じ

これが本当の貴方なんですよって誰かに囁かれてるような感じ

嬉しかった

あんなに嬉しかったこと初めて

拍手があんなにも暖かいものだとは思わなかった

一時はどうなるかと思ったけど

頭の中で鳴り止まない

ステージに向けそれぞれ手を叩く

拍手の音その隙間に彼方君の笑顔が浮かぶ

会場の皆が一つになった

笑顔なんて言葉じゃちっぽけに聞こえる

何人が会場を離れてしまった事実

気持ちはもうステージから離れて行ったかもしれない

全てを手に入れようとは思わない

それほど勝手なこととはしてきた

その中で理解に徹し認めてくれたファン

情けなく移っているだろう自分の姿

それを全てとは言わない

会場の皆の拍手

それは『笑顔』では返しても返しきれないものだから

「でも…」

でも今回も、今回も私何も役に立ってない

『最後までいて欲しい…』

それだけじゃ納得いかない

『それだけでいい』

そんなの納得いかない

いつも彼方君に頼りっぱなし

行動するには力がない

私が出ること今度は私が貴方を待つ番

いつだっていつでだって
私を待っていてくれたから
6年前のあの事故からずっと
だから私が今度は待ってる番

私はゆっくり腰をあげた
持つて行くバックを変える
ライブに行くのとはまったく違う身支度をする
そんなに大げさな支度はしない
身の回りのものとお金は全部持つていく

きつと明日の昼ぐらいになる
アンコールがあっているんな人に声をかけられ打ち上げやって
それをすべて抜け出してくる彼方君なら許さない
それじゃまったく昔と変わらない
今、貴方がすべきことは私に会うことじゃない
もしこのまま玄関のチャイムが鳴るようなら
引っ叩いて叩き出して向かわせる
…ってどうかこのまま私達は会わない
逢わないほうがいい
何も変わってないから

きつとまた色々な人に迷惑をかけて
泣かせてしまう
テレビに出なくなっただときみたいに
でも自信があった
そんなこと彼方君はしないって言う自信

私の中ではいつでも大事な彼は彼方君
変わらない…小さい頃からずっと
ずっと一番近くについて
だけど、他に大事なものが出来たついでいい
それと向かい合っていていく覚悟もある

あの拍手がああ温かさが私の中で鳴り響いている限り

私は身支度を終えると

肩に軽く掛けた

「よいしょ…」

明日の昼なら何も今行くことはない
だけど、私にはやりたいことがあった

ドアを開ける前に携帯の画面を見る

21時前

ここから確か

脳の記憶を張り巡らせる

辿っていく

懐かしい記憶を

「今なら終電とか間に合うから…」
着くのは

「あつちには3時くらい?…少し歩かなきゃだから」
そっいいながらドアを開ける

「!!!?」

考えなしに開けたドアの向こう
驚く人が立っていた

「お、母さん…」

今まで何かと避けていたお母さん
お互い避けてた

久々に姿を見た気がする

87・お母さんの匂い

.....
なんて言えば.....

何かを言うキツカケがなく言葉が詰まる

「ど、どこか行くの...?」

「うん...」

何の用事かなんとなく分かってるんだろう
私と視線を合わせないようにする

「そう、気をつけてね...いつてらっしやい」

お互い何か言いたいことがある

じゃなきゃ私の部屋のドアと向かい合ってるはずが無いから
だけど、お母さんは全てを飲み込んで私にそう告げる

「あ、うん」

そういつとお母さんは私に背を向ける

このままでいい訳がない

気持ち両足を動かなくさせる

無意識に言葉にする

「私...私!!!」

階段に差し掛かるお母さんが

怯えたかのようにピタッと立ち止まる

そんなお母さんがとても小さく見えた

何を言うかなんて考えてない

「こうなつてよかつたつて思つてる…から」

「…!!」

再び大きく震える

何をしゃべればいいかなんて気に出来ない

「確かに100%よかつたとは言えない…マコから話を聞いてそれでも母親なのつて気持ちもある」

「……………」

「だけどそれよりかそんな憤りを背負つたままここまで育ててくれたんだなつて思うと感謝が勝つちゃつて…怯えて震えてるお母さん見たくないし」

本能だつた

嘘偽りない言葉

ただ自然と私が言いたかつた言葉

「母親として何をしなければならぬのか一番に分かつていた。それを貴方のお友達に指摘されて何も言えなかつたわ。そう『何が分かるの』つて 正直もうそんな素直に受け入れられるほど余裕がなかつた」

「……………」

「怖かつたの…これ以上満春を踏み込ませて悪化してしまうことが。だつたら本当の娘にはもう戻らなくてもいい…昔みたいに笑つてくれなくても、娘は娘だから。全てはお友達の言う通り身の保身ね。娘の立場には慣れなかつた…。真つ直ぐな人ね…こつちが大人なのを忘れてしまつくらい。」

「お母さん…」

「言い訳なんかしないわ…満春ごめんなさい」

そういつといつの間にか振り向いていたお母さんが

頭を下げていた

ドクンッッ!!

私の心臓が飛び跳ねた

ドクンドクン!!

違う違う…っ

私が欲しかったのはこれじゃない

頭を下げるお母さんなんて見たくない

「やめて…やめてよっ…!」

無意識に肩を掴む

お願いというか縋っていた

お母さんって言う想像上の人物に

私が描いているお母さん像に

「…謝って欲しいわけじゃない」

声のトーンが下がる

「自分の中でお母さんが霞んで見えるの…薄く霧がかかって今にも消えそう」

久しぶりに見る正面からのお母さんの瞳は

儂く消え去りそうになってる

「私の記憶の中でもお母さんは…幼い頃の『ママ』しか知らない。手を繋いだ時の暖かさとか洗濯物を干しているお母さんの背中とかもう思い出せそうにないの」

「……………」

「私がこんなななってからお母さんの笑顔とか温もりとか無くなっている気がしない?」

瞳をいつまでも見続ける

「もつと笑ってよ…これからもつと笑っていっぱいお話してこんなこともあつたねっておかしくなるほど話そう？私がお母さんに求めているのは謝罪じゃない。事実をそのまま受け止めてくれることなんだから…それ以外私は何も欲しくない」
お母さんに向き合いながら断言する

偽りのない直球の言葉

そしてそれが何よりも難しいことも知ってる
頷いて笑って欲しい
受け入れることがどれほど苦しいことか
だけどそれをお母さんと…

「それだけで幸せだよ」

積み重ねて生きたい…

そういつて私はにっこりと笑った

「……………!!」

目の前の表情が驚く

そしていつから見てないのか表情が和らぐ
今にも消え去りそうな母親が笑った

「そうね…」

「え…?」

「思い出したわ…私の娘はそんな笑い方する子だった」
そついう顔は私に負けず劣らず微笑んでいた

「ごめんなさい。そしてありがとう。満春」

こんなお母さんを許してくれて…って続きそつな気がした

何度目かのありがとくに私は背を向けた
きつといい方向に行くと思う
最後にお母さんは私の名前を呼んで笑った

そして

これから行かなきゃいけない
行きたいその場所を目指して

88・予期せぬ友達

やっとはつきりとしてきた

幼い頃見たお母さんの姿はさつき

玄関で見送ってくれた姿

私の中で甦るお母さんの面影

今ついたばかりの電車に乗り込む

夜でも会社帰りのサラリーマンや

遊びに行つてたであろう中高生くらいの男女

たくさん乗っていた

だけど急いで乗ろうとする人はいない

朝の通勤ラッシュならまだしももう帰るだけだから

安心した電車は静かにそのドアを閉めた

少しずつ思い出していく

私の霞がかった記憶

思い出したお母さんの姿

にっこりと笑う口の端、皺の少し入った笑顔

私の姿が消えるまで見つめていたその眼差し

あと幾つ

この電車に乗って

『ああ…そうだったんだ』

つて霞が晴れていく感じ幾つ待っているんだろう

気持ちが高まった

確かに記憶は確実に私の手元にある

けど、実感が欲しい…

私はそこで生まれて奏汰君というお隣さんと出会って
短い期間だったけどたくさん遊んで
お互いの親にみっちり怒られたりして
思わず家出したりとか
お互いの家に遊びに行つて…

自分の気持ちとか嘘だとか思わない
何気ないことで笑ったり泣いたり怒ったり騒いだり
でも今の私には『記憶』がそのまま掌に乗っかって
これが貴方の記憶ですよって気安く扱われてるみたいで
どこか実感っていうものが存在しない
そのための時間が欲しかった

ポケットに閉まった紙を取り出す
綺麗に折りたたまれた二つ折りの紙を広げる
そこにはお母さんの直筆で書いてある
自力で捜すつもりだった
記憶の道を辿つて
でも、そこに書いてあったのは住所だった

それはお母さんが心から納得してくれた証拠
私のこれからも続いていく彼への気持ちを

ふっと見上げるともう夜で何も見えなかった
けど何か確かにそこにあつて心をつき動かせてくれる
一つの光みたいなのがあった

何も考えてなかった

お金なんかたつぷりあった

ここできつと切符なんか軽く買えるお金の量

少し安心この中途半端な平日

何にも考えてなかった私にも新幹線に乗れるチャンスはあった

訳ありかあ？

そんな表情をしながら駅員さんは切符をくれる

それもそうだこれもまた考えてなかったことだけど

こんな夜中にどう見ても未成年の半端な子供が一人で新幹線

訳ありに見えないって言う人はいないんだろう

指定された座席を見つけると腰を落ち着かせる

「ふう〜」

その言葉以外何も出ない

ライブの後に新幹線

電車で揺られてその内乗り換え2回

さすがの現役女子高生でもこんな仕打ちを受ければ疲れる

私もふまえ今頃の子は大概体力無いけど…

一段落着いた時に私の携帯が鳴った

軽快な着信音に周りを気にしながら

急いで取り出し今は五月蠅い極まりないお気楽な音を消す

その時落ちそうになった上着を支えながら

奇妙な格好のまま携帯を確認する

「あ…」

あの女性からだ

実はあの会場に行つて一人友達になつた子がいた

それは隣にいた一番初めに拍手をしてくれた子
何だか不思議な雰囲気を放ってた
そして気付いたときには帰り際私から声をかけてメアド聞いてしま
った

こつちから連絡入れるねって言ったのに
律儀にも先にメールを送ってくれた

(『ライブ楽しかったですね…』)

なんとも挨拶って感じのメール

年上で明るく抜けてそうだけど判断を誤らない何かと

彼女を思い出しながら読み進んでいく

(『ところで彼方のお相手なんですか?』)

何かと鋭い人だと

ゴンツツツ!!?

いきなりすぎるっ!!

なんてものじゃない

全てご存知なのですか?

私の洞察力も鈍くは無い

最後私に微笑みかけてくれたのはそんな意味で

でも、私には迷うことなど何もなかった

(『そうです』)

短いメールを送る早く次のメールを見たかったから

やっぱり動揺を隠せないのか

焦ってメールばかりを気にしてしまう

周りにこんな夜中だから気にする人はいないけど

さつきからの行動変質者に見えてもおかしくない
マナーモードにしたおかげで夜に似つかわしくない音は聞こえない
私の太ももを無音で振るわせた
慌てて受信メールに目を釘付けにする

（『短い返事（笑）…だけど安心してください。私は彼方の唄が
好きなんです。だから貴方をを軽蔑したりとかマスコミに売ったり
はしないので』）

だから貴方は超能力者

って言いながらも少し苦笑した

私そんなわかり易い性格なのかって

また新たな自分発見

年上ならではの余裕の持ち主できっとずっとこの人には敬語なのだ
ろう

（『ありがとうございます…じゃあ、これからもファン仲間であ
いてくれますか？』）

ポチッ

送信した

途端顔が熱くなった感覚

なんか恥ずかしいこと送った気がする

昔はこんな私でなんとと思わなかったけど

少し心も身体も大きくなりすぎたみたい

こんな些細な意思表示がここまで私を動揺させる

今度は手に持っていたのですぐ反応に気付く

（『もちろんですよ!!とところで貴方お名前は？』）

読み終わるとすぐに返信ボタンを押す

(『名前教えてませんでしたよね？桐谷 満春です』)

信じられなかった

私が友達を作るんなんて

普通の友達じゃなくて

予期せぬ友達を

(『あ、ごめんなさいね。こっちから言っておいて私の名前は』)

香織さんっていうらしい

(『今度、ライブ一緒に行けたら良いですね…』)

私はゆっくりと携帯を窓側のテーブルに置いた

長い時間メールを交わしていた

どれくらい経ったんだろう

こんな真夜中だというのにいいのかな

って思った矢先メールは途絶えた

暗闇の中迷いもなくレールの上を突き進む電車は

まもなく目的地の半分を過ぎようとしていた

89・二人が居た場所

大きく深呼吸

室内で窮屈にだった身体を伸ばした

ここで降りたのは私と後一人二人くらい

だからこんな場所で欠伸なんてしても恥ずかしくもない

「ふあああ…」

だって周りには誰もいない
零れんばかりの涙を溜め込む
もう一度身体を伸ばした

別に田舎とかそういうわけじゃない

でも、今住んでる場所よりかはかなりの田舎だとは思っけど

「すうすうすう…」

懐かしい匂いがした

欠伸の後はまた大きく深呼吸

ラジオ体操でもないのに伸ばしたり深呼吸したりしているのは
私だけだろう…

きつとお婆ちゃんの家遊びに行った時ってこんな感じ

頭の上に持ってきていた両腕を

おもむろにポケットに手を入れた

さつき電車でもチラッと見た紙を改めて手に取る

「よっし!!」

本当は不安だった

自分一人でたどり着けるかどうか

記憶が途切れていた分覚えていたのがどれほどか
この記憶が何処まで確かなのか
昔住んでいた彼方君と遊んで暮らしてたあの日々に
この身が触れることが出来るのかどうか
家族仲良く暮らしていた懐かしの家の住所
二つに折りたたんだ紙切れには見慣れた母親の字
自然と私の足は向いている方向へと進んでいった

記憶を辿る

どんな困難なことかって思ってた
よくある展開で行ってみたら意外と覚えていた
とかそんなのありえないって!!

だけど…自然と馴染んでいる
踏み込んで行ってるのが分かる
私が歩くことにあの頃に帰っていくのが

「…くす」

それは微妙な感覚
なんでこんな大事なことを忘れてたのかとか
縁起でもないけど事故の時のフラッシュバックって
こんな感じなのかって

サク…サク

踏み込んでいく…踏みしめていく

懐かしい…

直感でもなく実感に近い感覚

まだ明け方5時前こんな早起きな人いない

と思ったらシャッターが一つ開いた

不信顔をされた気がしたけど笑顔で会釈した

きつと市場に行ったりする職業の人だろう

お魚屋さんとか八百屋さんとか？

ふつと辺りを見回す

お母さんからよく頼まれていった商店街

あっ！覚えてる

あそこの駄菓子屋で当たりが出るまで使い切ったんだっけ？

お小遣い…奏汰君が止めるのも無視して

どうしてもそこに飾ってある人形が欲しくて

でも、そこには新しいモニュメントが飾られてる

少し寂しくもあつたけど微笑ましくもなつた

確実に時は立ち止まることなく進んでる

あつ、あそこのスーパーでよく牛乳頼まれたなあ

あの頃の私には牛乳一本がやたら重くて

よく奏汰君に手伝ってもらってビニールの取っ手を片方ずつ持って

歩いた

近くのベンチに座る

意外にまだ残ってるものがあるんだな

でもスーパーの名前変わってる気がする

広場、ベンチのある現在地に目を向ける

ここで…ここで何かあつた気がする

大事な大事な約束…

ゆっくりと瞳を閉じる

一点に集中した思考は他の事に気を配れない
目の前に何かいることなんて考えてなかった

「ワンツッ!!!」

身体は脈を打った

全体が硬直する

手も足も動かなくなる

「ワン…ワン!!!」

怖さ半分うつすらと瞳を開ける

「い、犬…?」

「ワン!!!」

そうですと言いたげに目の前で吠える

「わ、私どれくらい…」

どれ位目を閉じてたんだろう

眠たいわけじゃなかったけど

考え込んだら時間は過ぎてしまっていた

時計を覗き込む6時を過ぎていた

「ワンツッ!!!」

なんか言っつて!!!

そう吠えて尻尾を無駄に振る

私はそれに答えずただしばらくそのワンちゃんの頭を撫でた

「そ、そうだ!!!犬…!!!」

思い出した！！

ここで子犬を拾って奏汰君と育てたんだ
お母さんに反対されてそれでも手放したくなくて
必死にすぎり付いていた私に奏汰君が育てようって
晩御飯お残りとかおやつとか持つてきて

だけど、何日か経ったらその子犬の姿が見えなくてすごく落ち込んだの覚えてる

それは忽然とダンボールごと無くなってて
育ててくれる人が見つかったんだって奏汰君が諭してくれた
そう…覚えてるその時付けた名前が

「ハルーーーーー！！」

そうメスなのかオスなのか分からなかったけど

「えっ…?」
現実にもう一度…私の耳を通り過ぎる

「ワンツッ！！」
目の前で尻尾を振っていたワンちゃんが走っていく

「ハル？」
あの時二人で付けた名前ハル
ダブって見え隠れするあの頃の犬と今さっきまで尻尾を振っていた
子犬

だけど、仔犬なんてありえないから
あれからだいぶ立ってる

私の姿には目もくれず抱えられた犬だけが一声挨拶をしてくれた

さよならの…言葉

消えてく姿を見て私は幸せに暮らしたんだらなって

確信もなく感傷に浸っていた

そして丸まった背中を一伸びさせると立ち上がる
気付けば商店街の半分のお店は空いていた

「……うーん」

よく聞く。商店街の朝は早い

7時前だと言つものにもう挨拶を交わしていた

商店街の子供じゃなくて心底よかった

とてもじゃないけど真似できない

少し気を失って(？)いたせいか足取りは軽かった

私の目的地はあと少し

そう遠くはないんだろう

私が完全に商店街を出る頃もう商売は始まっていた

「……は、早すぎる」

早い分だけ朝支度の主婦がちらほら顔を出していた

随分と殺風景というか

さつきまで居た場所がお店だらけだっただけあって

閑散として見える

歩いた先はいわゆる住宅街

何年ぶりだろうきつとこの真つ直ぐな道を越えて

あと少しで私のそして奏汰君が育った家

もうお母さんが渡してくれたメモは奥に閉まっております

私は私：満春としての存在を否定してない

堅苦しいことはもうやめた

この次々とあふれ出てくる感情が何よりも私だと示してくれる
押し込んでも押し切れないくらいの思い出

一歩歩くごとに甦ってくる

これは下手なアトラクションより爽快で紐が解けていく感じ

なんだか変な話

満春は私なんだなって思う

「…くす」

自然と近くの公園に足を向ける

もう理由は分かっていた

「そう、こじ…」

私と彼方君のミニ駆け落ち？

「割と近いところにあるんだな…本当大きくなってみると小さな反抗心だった」

理由は忘れちゃたけど…

お母さんに怒られるのが怖くて私が奏汰君引き連れて家出したんだけど、いつかお母さんに怒られるのが怖いじゃなくて

奏汰君といることがすごく嬉しくて

最終的にはお母さんのこと忘れてた

お互い合わせて缶ジュース一本分のお金しか持ってなくて

でもこれで1年は暮らせるような大きな気分になっちゃって

ま、まあ…

そのお金使う前に見つかっちゃったんだけど

もう怒られる理由を忘れちゃってただ泣きじゃくる私に

『満春ちゃんが悪くない!!』

ってかばってくれたんだっけ

今考えると恥ずかしい…恥さらし者だったな自分

朝日はすっかり昇りきってる

私を照らす太陽は包み隠さず生まれ育った町を同時にクリアに見せるワクワクがとまらない

はつきりと姿を現す町並みに興奮が収まらない

冒険なんて大げさなものじゃないけど

気分が最高潮だった

ここが生まれ育ったところ!!

そう叫びたくて堪らなくなっていた

90・美味しいビール

昨日：細かく言えば今日の2時くらい
今回は打ち上げは早く終わった
理由は精神的に疲れたかららしい…

彼方は苦笑いを浮かべながらその会話を交わす
でもそう言ってくれた表情は誰もが笑っていた
皆が撤退していく中

速瀬の顔がちらほらと人の合間から見える
珍しい光景を目にすることが出来た

『め、珍しいですね…』

珍しいといえはこの敬語もだ
だが敬語を思わず使ってしまう程目の前のキャラに
異変が起きまくりだった

彼方の姿に気付くと缶ビールを片手に手を振る

『はぁーい！！彼方ちゃん！！』

夢でも見ているのか…

まさしく達の悪い酔っ払いが彼方の名前を呼ぶ
思わず驚いてしまった

『か、彼方ちゃん…って』
そりゃないよ

貴方のキャラじゃない

そんな顔をして何杯飲んでしまったのか
お酒には強いはずの速瀬さんが

『今日はよかったわねえ…最高のライブだったわよ。いい子いい子…!』

『いい子いい子って…』

これで二回目…

彼女の言ってる事を繰り返すしか言葉が出てこない

そう言いながら立ち上がって俺の頭を撫でようとする

が、足に力が入らないのか

壁に身体を預けてしまう

『ははっ!こんな自分は初めてだわ…最高にいい気分』

『はあ』

決して速瀬の耳に届くことない溜息を漏らす

『今までの子はね…私があっちって言ったたらその通りしたがって全部が計算どおり行って必ずトップへと上がっていったわ…必ず貴方を頂点へと立たせてあげるそれが絶対の条件でそれが私の仕事だと思っただしやりがいがあるって思ってた』

身体を預けていた壁に手をつき正面へと身体を向ける

『まあ、それは今も変わらないつもりだけど…だけど貴方ときたら私の言ってることに泣くわわめくは…終いには勝手なこととしてくれるは、逢うは…私の話をぜんぜん聞かない大馬鹿馬鹿野郎だし』

『だし…って』

大馬鹿野郎…それはきつとこんな状況だからこそ言えるんだろう

『ふふふっ…くすくすくす』

いきなり笑い出す

『だけど、そんな困難がなきゃ…こんなにお酒がおいしいなんて
気付くことなんてなかった。貴方のおかげだと思っわ』

しゃべりながらもういっぱい煽る

『そしてその奇想天外が貴方の魅力でもあるのよ』

『…速瀬さん』

彼方は酔っ払ってる速瀬を思わず見つめる

『……………』

『…』

『ありがとう』

少しの沈黙の後静かに言葉が降ってくる

『えっ』

彼方自身が言いたかった言葉

それを先に言われるほど驚くことはない

『私、こんな性格だから辛いときに飲むお酒しか知らないのよ』

今までの速瀬が見えたような気がした

ここまで完璧に人をトップに上がらせるには

それなりの確信、直感がなきゃ出来ない

それを得るために何度挫折しそうになっただか彼方には分からないだ
ろう

その度に酔わないと分かかっていてもお酒を飲む

状況がとって分かるように脳裏に浮かんだ

『ありがとう』

『…っ何もしてないよ。俺』

それ以外何も言葉に出来なかった

こんな時にお礼も言いたくなかった

速瀬が言ったから自分も言うなんて

つられて言いますみたいに速瀬にはとって欲しくなかった

『じゃあ、俺、行ってくるよ…』

その一言だけで通じる

これから何処に行くのか

『ええ、いつてらっしやい』

目を合わせることなく片手ビールを掲げ見送ってくれる

出口は速瀬を通り過ぎて彼方の向かっている正面にある

そこに向かつて足を進める

『ありがとう…』

やっぱりどうしても言いたかった

今度は自分からお礼を言う

それはごちゃごちゃさっきまで考えていた頭でなく

とても素直な気持ちで自然に

普段の速瀬さんになってしまつとはぐらかされてしまつから…

今、一番素に近い彼女の前で言いたかった

俺は今きつと玩具を買ってもらった子供より嬉しそうな顔をしている

思い出し笑いなんて変なことしてると思うけど

新幹線で揺られているだけの彼方にはすることがなかった
だから夜中のことを思い出しているって訳でもない

それは彼方にとつて忘れられない出来事

「もしかして…」

無理矢理声を掛けられることもしばしば

「こんにちは…」

イエス、ノー返答はせず挨拶をする

「やっぱり本物だ…あ、昨日のライブ見ました。っていつかその
帰りだよね!!」

不思議と歓声を上げない落ち着いた二人
大人しいこと連れ添っているちよつと勝ち気な子
隣の子はうなずくだけ頷いている

「私、つていつかこの子もだけど応援してます!!いろんな意味
で…ああ!まあ…上手くはいえないんですけどファンなのは変わら
ないんで頑張ってください」

見て見ないフリをしていた世界が見えてくる

この大切にしていききたい気持ち

一番にあの子に伝えたい

貰った玩具を片手に嬉しそうに窓を見る彼方

そのまま新幹線は着実に生まれ育った町へと運んでくれる

9 1・確かにここにいた…

「み、見えた…」

まるで心境は山の頂上に登った気分
爽快感と入り混じっていて感動という文字が今は出てこない
達成感だけでこんなにあっさりしているもんだとは

「ここが…」

ここが私が生まれ育った家

そこはやっぱり何年か前とは違って

舗装もされているし目の前にそびえ立つ昔の家も

違う人が立派にしてくれたみたい

私の思い出の中よりずっと頑丈さが備わっている

けど、覚えてる

面影は残っている

確かにここだって思える

舗装はされても道路そのものはまったく変わってはいない
お母さんが渡してくれた住所なんてなくても確信があった

家から見た外の景色

この朝うるさいくらいに照りつける日差し

目を細めると私はガードレールから乗り出した

そしてここを乗り出すと見えてくる町全体

昔はもつと家もなくて畑が多くて閑散としてた瞳の向こうの景色
風の抵抗がないそこは少し肌寒く感じた

何もかもが変わった訳じゃないけど
着実に変わってるそれも寂しいくらいに

幼い頃に少し戻った私は
今、発展しつつあるこの町に心細さを感じた
だけど、ここで奏汰君と出会ったのは事実
ちゃんと満春は分かっている

何度も駄目だつて注意されたのに
道路に落書きしてたあの日々
少し隠れたところに

「……あっ」
ほらあつた

これはこのままだつたんだ
大きな木があつた

一緒に木登りをしてスカート破れちゃつたんだっけ
「……はあ」

昔は本当におてんばだつたんだな
怒られてばっか……

ここ大きな樹に登ると風が気持ち良くて
そよ風に吹かれながら幼稚園で習った歌を奏汰君と歌った
それでいつの間にか転寝して門限過ぎちゃって
少しお爺さんに見えるその木の幹にもたれかかる

これも、怒られたエピソード……か
いい話いい話！！

「……ふう」
今も変わらず私の知っている風が吹く
髪をすり抜けスクートを揺らし
私の育った町へと吹き抜ける

確かに私はここに居たんだ

記憶をなくしたことにずっと罪悪感を感じてた

誰にもいえなかった事

大切なこんな大切な思い出を

私にとっては忘れなくなかった思い出を

たかだか頭にシヨックを受けただけで

忘れてしまうなんて…

誰にも恨みなんてない

無理に恨むというならこんなに簡単な私自身

ずっと後ろめたさがあつて

だけどこれを皆に相談したら仕方ないとか

満春のせいじゃないとか言ってくれた

言ってくれるから誰にも相談なんて出来なかった

「……っ！」

好きって思ってしまうことさえ間違いないんじゃないかって

そう思えてしまうときもあった

私を… 6年前会えなかった私を必死に忘れようとしてた

でも忘れられなかったそう言ってくれた言葉が

そんな奏汰君の想いが重過ぎて… 痛すぎて

罪悪感で涙が止まらなくなる

「っ…く！」

私のために約束のために必死に有名になって

テレビで頑張ってる
唄を好きだつて言ったからって
自分の将来あっさり決めちゃって
今じゃ…だから歌が好きだつて思ってくれてる

「…っひつくー!」

そんな奏汰君を6年間何気なく私は見てたなんて
私って馬鹿すぎる
誰もいないその樹の根っこにしゃがみこんだ
何よりそれが悔しくて悲しくて情けなくて
もう何が何だかわかんない

「ひつく…っ!」

だけど満春は確かにここにいて
木登りしてて落書きもして
いつもいつもはしゃいで怒られてる私がい
その昔の思い出が慰めてくれてる気がする
間違ってるよって言ってくれてる
この静かなそよ風がそんな現象を起こしてるのかもしれない
私は確かにここにいた
降って湧いた想いが小さい少女と私を一体にさせた

新幹線はもう終点へとたどり着いた
長い間走り続けて疲れたのだろう
運転手はいない

新幹線はただ無心に一呼吸を入れている
だけど、満春のいる町は終点ではない

幾つ前なのかは分からない
一つ前なのか二つ前なのか
それを知っているのは満春と彼方だけ
どれ位彼方が走ったのは
それは彼方だけにしか分からない

「はあ…はあ」

息が切れていた

車とかタクシーを使えばもっと早く辿り着ける
だけど、そんな考えなんか持ち合わせていなかった
ただ夢中でがむしゃらに走り続ける
ボーっとしてるのが嫌だった

タクシーを待つてる時間運転手に任せて走らせている時間
それが彼方にはどうしてももどかしい
だったらこうやって必死に走って方が気が楽
普通に考えれば馬鹿みたいな行動
だが、心だけが先走りになってる
言えばこんな状態なんだろう

めいいっぱい泣いた後
気分はすつきりとしていた
私は約束の場所に来ていた

「…ん　っ」

不意に瞼に手を当てる

「ん　…っ」

何か難しく考えている様子

「よっし大丈夫!!」

瞼は腫れてなかった

だって格好悪いもんね
感動の再会が腫れぼったい瞼で

「がなだぐーうん!!」

なんてバリバリ鼻声です！みたいな
目を開くと何帰りなのか奥様連中がいた

今の声が聞こえたのか何か話している

「あ、…ははは」

笑ったって誤魔化せないことってあるわな
こんな時奈津美はどうしてるんだろう

……………。

気付いてなさそうだな

参考にもならない人っているもんだ
目を逸らそうとバツクに目をやると
あることに気がついた

「あ、そうだ」

おもむろにバツクを開け取り出す
ガチャガチャとワザとらしく用意すると
すばやくイヤホンを耳に取り付けた
そして歌に乗ってる振りしてハミングをする

「……………」

そう勘違いして欲しかった
自分は唄を口づさんでたんだよって

あんまり変わらないような気がするけど
主張という主張をし続ける

気がついたときには奥様連中はいなくなっていた

ホツと胸をなでおろす
情けない…こんな奈津美みたいな失態を犯すなんて
自分に恥じながらも頬を掻く

「…あ」

さつきそれとなく勢いでボタンを押した耳の奥から声が聞こえる
昨日聞いた声と同じ声

あの広い会場の中でも歌っていたこの曲
奏汰君らしいアップテンポな楽曲

思い出す繰り返される

あの盛り上がった歓声を自分の事のように
瞳を閉じるその間にも涼しい風が絶え間なく吹いていた

それは変わらず私をすり抜け

住んでいた家を通り空高く舞い上がる

「……………」

イヤホンを付けていても分かる風の音

その止まないはずの音が一瞬止まる

見晴らしのいい晴れ渡った空

決して北から吹く風は途絶えたわけではなかった

92・優しく撫でる風の中…

「この曲…」

あまりにも不意打ち過ぎて

言葉も出ない

久しぶりに聞いた私のために歌ってくれてる曲

先とは打って変わって切ないバラード調のメロディー

『私のため』なんてズルイ

あまりにも自己中心的で笑えてしまう

だけどこの瞬間は偽りない私でありたい

…私の曲

「私の…ための曲」

理由もなく吐き出した言葉

恥ずかしげもなくその気になって嬉しくなった

『君と僕の幼いメモリー』

初めの歌詞が流れる

私の意思とは関係なく奏汰君の声が流れる

そう…私達はもう終わってしまった

6年前のあの日に

罪とは言いがたい責任なんて誰に対してなのか分からない

ただ言えるのは小さい頃たった一つの私達に出来た『約束』

『共に笑ったり泣いたり怒ったり

そんな単純な感情しかなかったあ

の頃』

私が奏汰君に気付かれないように泣いて

だけど幼い私達は何かをする力がなくて

『君の大好きなメロディー口ずさんだり 手を繋いで遊歩道を歩いたりしたね 』

泣きすぎて感覚が麻痺してるはずなのに

楽しかった出来事ばかり思い出して

漠然としたお別れだけが必要に迫ってることだけが分かった

最後に私を抱きしめてくれた感覚

忘れていたことが嘘かのように甦る

必死に隠してたのにそれを見破られて

… 本当に子供だった

『 思い出が閉じ込めて置けないほど溢れて

あの場所から動けずにいるんだ… 』

淡々とだけどいつもとは違う声で

私に耳元に鳴り響く

『 僕の時計はあの日… 激しく雨の降る中壊れてしまった

大好きだった君の最高の笑顔とともに 』

6年前もつすぐ7年前になる私達は逢う約束をした

奏汰君の仕事が軌道に乗り始めて

デビュー目前だったあの日
忘れられない事が起こった
私はただただ電話越しの奏汰君じゃない奏汰君に会える
それしか考えてなかった私には衝撃的な事件
だけど…

『僕と君の止まったメモリー

それはお互いが気付かぬ間に見失って
いた』

それがなきゃ私は気付かなかった
皆一人一人それぞれに『彼方』を愛してること
命を懸けているんだって事

そしてその重みに負けた
同時にファンとしての私と幼い頃の私に直面してしまった
結局怖くなってしまった
逃げ出してしまったって言う方が事実なのかもしれない
資格とか権利とかそんなちっぽけなことに関心を押しとどめていた
思い返してみれば自己満足だったのかもしれない
今の自分に出会ってみれば

『消えない笑顔が僕の支えになっているから

今も変わらない僕がいる』

気付かなかった奏汰君の思いに
そんなに思ってくれてるって事
ファンのせいにしてたのかも

6年前裏切られたんだってそう考えてたにもかかわらず

私を尚：探してくれていたなんて
思っていてくれたなんて
ただ『ファン』が『仕事』がって本当の自分押し隠して
表立ってる6年前の事件とか記憶が戻った翌日の事件しか頭になか
った

好き

学校に奏汰君が来たときに泣きながらそう告げた
その時本当の自分がすつと身体の中に帰ってきた
私は事件のこともあったのかもしれないけど
皆に認められないかもしれない私が怖かった
記憶が戻って両想いですなんて酷い話だから

聞き入っていた

瞳をただ閉じて周りからは何をしてるんだか分からないだろう
だけど、頭の中では渦を巻いている
今までの思い出がすうっと掠めていく
だから気付かなかった

少しずつ朝の日差しを浴びながら影が伸びていくのを
遠くから微かに見えるくらいだから瞳を開けていてもまだ難しい

『もう君はすぐ傍にいる…』

何年ぶりか抱きしめられた瞬間

昔と変わらない奏汰君の匂いがした

引越しのとき不意に抱きしめられたあの時と同じ

だけど、少し成長した奏汰君の腕があった
懐かしかった

一心に張り詰めていたものが解けて
恥ずかしい位に泣いて何度も好きって言ってしまった

耳には聞こえないが髪がなびく
前髪が額にかかったりして少しくすぐったい
風が通っているのが分かる

『その似合わない仮面を剥いで僕に見せてほしい』

満春には分からない
確実に近づいている音

周りには草木なんてない
満春の周りにはある
だけどそこまで来ていなかった

「ハア：ハア：ハア」
汗だくになっているが
このとつても心地いい風がいい癒しになっている
日差しの照りつける中
手で日差しを遮る暇もないほど全力で走る

『憶えていてくれるなら…振り返ってくれるのなら』

名を呼び続ける
『
これからの真実を見据え君の

何処から走り続けているのかなんてもう誰も知りもしない
でも知らない間に確実に側に…』

最終話 遠すぎた距離：そして約束の意味

ただ早く早くと焦りだす気持ちとは裏腹に
いったつて確実にその足を地に付ける
それは歩いてる時よりも遅く見えて
彼の心を掻き立てる

「満春：っ！！」

彼は随分前に見つけていた
随分前から呼んでたのだから
声だけが彼女へと意思を伝える

耳元から流れる音が
今何よりも大事な満春には気付くはずがなかった

「満春：満春っ！！」

彼が近づくにつれはつきりと表情が現れる
彼の表情は疲れなんてなかった
ただ彼女の名前を呼び続けるだけで今は満足な顔
今はまだ気付かないでもう少し
この名前を呼んでいた
必死に、そして楽しそうな笑顔だった
そして彼の足は満春のいる原っぱへと足を踏み入れる

今度は私の番

私が奏汰君をひたすら待つ番

いつ来るかなんて分からない

もしかしたら仕事関係で今日は来れないのかもしれない

明日になるかもしれない

だけど、私はここで待っているつもり

6年前降り止まない雨の中私を待っていた奏汰君のように

あの時結局私はたどり着けなかったけど

今、ここにちゃんという

いつ来てもいいように私は絶対ここにいる

今日は9月16日

本当は…昨日

関係ないって言ったら関係あるけど…

だけど…

何回この曲を聴いたら現れるだろう…

「…えっ」

イヤホンがすつと外れた

「えっ…何」

地面に落ちたんだと思い下を向く

何処に落ちたんだろう

その線をたどっていこうとすると

もう片方に付けていたイヤホンも取れる

「あ…っ」

その線をたどっていくと

「あ
」

言葉が出なかった

ただ風が少し強まる

昨日と同じくらい汗でめちやくちやになっている姿

片手に引っ張ったイヤホンを持っていた

「やつばここ、だっただんな…」

「うん」

それ以上の返事が出来ない

まともに奏汰君を見ることが出来なかった

「か、…なたくん？」

そう名前をアーティストの彼方ではなく

幼い頃一緒にはしゃいで怒られた時の

懐かしい…

彼方君じゃない『奏汰』君を呼んだ瞬間もう涙が止まらなくなった
しゃくりあげることなく涙は伝わり落ちる

こんなにも静かな涙があっという間ものかっけくらいに

関係なく頬を伝う

落ちないと気付かないくらいの速度で

「あ、ごめん…」

「……………っ！」

「上手くないかないものだね…いろいろと考えてはいたんだけど言

いたいこと一気に何処かに流れてっちゃった」
ごまかすように笑う

「…さっきまでは笑って最初に会おうとか」

「……………っ!!」

ぼろぼろ　　ぼろぼろ

「ごめっ!! 待って、言葉にならない…っ!」

その瞬間座っていた私に奏汰君が近づくと

伸びてきた手は不意に私の身体を通り過ぎ

同時に奏汰君の唇が触れた

「あ……………」

何が起こったのかわからなかった

触れた瞬間…

私の唇に触れた瞬間理解の境界を越した

何よりも先に理解をした身体

そして頬が熱くなる

「ごめん、…」

そういつつゆっくりと私を抱き上げる

引っ張られた状態で腕の中にいる

驚く位ピタリとはまる

なんで奏汰君が謝るの？

それを言うのは私だって思ってる

だけど差し伸べられた腕に私は大人しく黙ってしまった

膝に乗っていたMDは草の上に音も立てずに落下した

「ただど止まらずになっっている今の曲は何曲目なんだろう
そんな下らない事考える

「私は今、彼方君の腕の中にいる

「…奏汰君」

「ん？」

「耳元に聞こえる声は何よりくすぐったい

「おはよう…」

「それはただの挨拶じゃない

「私達にとっては朝の挨拶じゃない

「いつも恒例で行っている挨拶とは違う

「何年間の中にこんな重要な言葉に変化していた

「おはよう…」

「沈黙があつてそう言葉にする

「すこし腕の力が強まった気がする

『幼稚園の先生が言ったよ…バイバイしたら必ずおはようって

…』

バイバイ……

それは言葉にこそしてないけど何回あったんだろう
その分お早うなんてしてこれなかった

「お帰り…奏汰君」

そういつて奏汰君から腕を離す

「…満春」

少し潤んでいる気がする奏汰君の瞳を見つめ返す
これから何回おはようって言える時が来るんだろう

「うわあ…!!」

途端奏汰君がしゃがみこんだ

思いも寄らない行動に私は啞然とした

「か、奏汰…」

「や、やられた!!…っというか身体が勝手に!!」
身体…?身体が勝手にって

咄嗟に何を言い出しているのか分からない

あ、さっきの事…

「俺が先に言うはずだったんだ…その言葉」

「え？」

「うわあ〜」

頭をかきむしる奏汰君

それを見てるしかなかった私

途端イキナリ飛び出すかのように立ち上がる

あまりのさっきの言葉に…昨日とのギャップに呆気に取られる

「だって昨日、9月15日……」

「あ、やっぱり覚えてたんだ……」

私は途端に笑顔を向ける

「つてかそれ忘れてたら俺、6年前に満春ごと忘れてた……」

「正確には昨日だけど、奏汰君が引越ししちやっただ日……約束をした日」

ちゃんと覚えてる

奏汰君と瞳があう

私はニコツと微笑んだ

「満春だな。完璧に」

「うん……」

奏汰君の手が私の頬に触れる

私は瞳を細めた

「えっ」

その手は一瞬にして遠のく

「だって満春泣くんかもんなあ……俺だって予測してなかったわけじゃないけど、いざ、好きな子が目の前で泣いてるとこ見ると心構えなんて……同然のなし崩しだよ……!」

少し逆切れモード

やっぱり変わらなかった

幼い頃の奏汰君を見せてくれる

そのはにかんだ顔

『その時君の偽りのない微笑で止まった時計は動き始めるだろう

音がないのに

私の頭で曲が鳴り響く

自然に頬は緩みこれ以上にないくらいの
笑みを私はしていたのだろう

多少の溜息を奏汰君はした後
手のひらは規則正しく私の頬に添えられ
もう一回唇を重ねた：今度は長く
私達の長く叶わなかった距離を埋めるように

最終話。遠すぎた距離…そして約束の意味（後書き）

最後まで読んでくださった皆様

ありがとうございます…

初の小説ですがここまで書いて幸せです…。

もしこんな作品でも感想など等頂けるようでしたらお願いします…

大分私のこれからの励みになるので

先、たくさんの作品を出して行こうと思います

もしよろしければまた訪ねてみてください…

それでは大変忙しい中ここまで読んでいただき誠にありがとうございます
이었습니다！！

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8816d/>

遠すぎる距離 ~ 約束の意味 ~

2010年11月4日12時38分発行